女學世界

第六巻第十二號

明治三十九年九月五日発行
毎月一回五日発行
明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可



女學世界 第六巻第拾貳號 目次

登録商標

良薬にして口に甘し

登録 商標

浅田宗伯先生直傳

浅田飴

たんせき一切

肺病の持薬

ひきかぜ

よはき人

老人の滋養薬

登録商標



十二日分 金五拾錢

一週間分 金参拾錢

四日强 金貳拾錢

二日分 金拾錢

日本全國到る處の薬店に販賣す

（郵送料壹個拾錢）

本家

東京市神田區鍛冶町

大阪北久寶寺町堺筋

（電話本局 壹壹二一番）

（電話東 三九五八番）

堀内伊太郎

凱旋紀念五二共進會階上

當店出品部にて御試用を乞ふ



日々二三分間指先にて此スキンフードの使用を怠らざれば老年に至るも皺の寄る事なきマッサージクリームにして日本婦人方の皮膚に尤も適當せる事を保證致候定價一個五十錢見本送料共郵券六十錢二個以上送料を不要

保證發賣所

東京市京橋區南傳馬町三丁目

大西白牡丹

特 電話本局 三十番

女 甲の二

最新刊の二音樂書

杉谷代水氏作歌 前田久八氏作曲

新曲 殘夢

美本全壹册定價金五拾錢郵稅四錢

夜來月明の城頭に纖手鳳管を弄せしの人、今は錦の秋の袂に包まれし薄化粧の死顏、世に美なるもの丶碎けしばかり人の心を動かすはあらじ。馬上四十年の夢一たび醒めて覺めやらぬ黑谷の庵室、金鼓の響に修羅の巷を再現して覚に轉迷開悟の門に入る、蓋し古傳說中の最も詩的なるもの今や代水氏が圓熟の筆に上り前田氏が長日月の苦心によりて最も嶄新なる歌曲となりぬ。

曲は洋樂を基とし、時に本邦箏曲の旋律を取り、或は優美或は壯大或は悲婉、極めて變化に富み特に白の如きも一々曲譜を附して初學者の便にせり、弊社の新曲は教育界音學界に於て既に許定あり、敢て趣味高雅なる家庭子女の一粲を俟つ

蜂谷健吉氏作歌 目賀田萬世吉氏作曲

獨唱 戎衣の袖

美本全一册
定價金廿五錢
郵稅金四錢

著者嚢に『獨唱廣瀨中佐』を公にせらる丶や大に江湖の好評を博し版を重ぬる事實に四回當時『新曲熊野』と相俟て我音樂界に於ける出版物の双璧となせり今や第二の作成る其內容如何は多く言はず作歌の妙と作曲の非凡なるは密に誇る所とす乞ふ試唱して其眞價を知られん事を

發行所 東京神田錦町一 大阪鰻谷中の町 修文館

女(甲の二)



發賣元 東京橋町 小川潮華園

女（甲の三）


THE GEM
ゼム
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を増進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入 十錢
百六十粒入 廿錢
四百卅粒入 五十錢
九百粒入 一圓
容器入ゼム 二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舖 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり
衛生家必携
懐中良藥

（甲の四）

立秋

日高島助氏筆



女（乙の二）

女子文壇社發行書目

東京京橋區大鋸町十二

(郵便振替口座第壹七貳九番)

▲女子のある家では必ず見て居ます為になつて一等安い女子懸賞作文の雜誌

▲懸賞作文隨一雜誌（專門大家選評）

▲二卷第十二號 九月一日發行

女子文壇

羽仁もと子女史の「學校時代の婦人に望む」は有益の文字なり、其他例に依て懸賞文豐富、誌上大に賑へり

（每月一回一日發行 外に二、五、八、十一月增刊）

壹冊大判百三十頁 石版、寫眞、木板畫入

（低廉無比）

定價 一冊金拾錢 半年分七拾六錢 一年分壹圓四拾四錢 郵送料不要

本居東宮侍講、小杉文學博士序文 下田學習院女子部長題詠 國學院學士小森松風君著

女子文學全書第一編

美文作法

（好評新刊）

大判二百三十頁 洋裝 改正定價四拾錢 郵税不要

河井醉茗君著 山中古洞君畫

詩と美文

玉蟲

（好評新刊）

製本新式 上製優雅 實價五拾錢 郵税不要

鈴木秋風君著 太田三郎君密畫入

小説美文

朝晴

（好評新刊）

最新式製本 實價四拾錢 郵税不要

中内文學士序文 名家選評

女子

懸賞文集

（好評三版）

全一冊 百廿頁 上紙精美 正價廿五錢 郵税不要

萬朝報其他好評

報知新聞記者中村木公君編纂

實地精査

女子遊學便覽

全一冊中判 女學校長寫眞版肖像入 正價參拾錢 郵税四錢

▲女子文學全書第二編

山田美妙、坪井博士序 小森松風君編

言文一致文範

印刷中近日發行

（價四拾錢）

各書の詳告は女子文壇其他の新聞雜誌に就て一覽を願ひます

（最寄書店に無くば郵便振替貯金法により直接本社へ御注文なさるべし）

（乙の三）

滋養新劑 グリコナール錠

▲本劑は佐伯矩氏が北里博士指導の下に貴重なる滋養劑グリコゲーン製法研究中發見創製せるものにして多くの醫學者より其効顯卓絕なることを認せられたる最新滋養劑なり

肺病恢復し元氣亢進す 其他衰弱せる病者は本劑の服用に由て速に其體力を

本劑說明書は御申込次第無代郵送す

消化新劑 タカヂアスターゼ

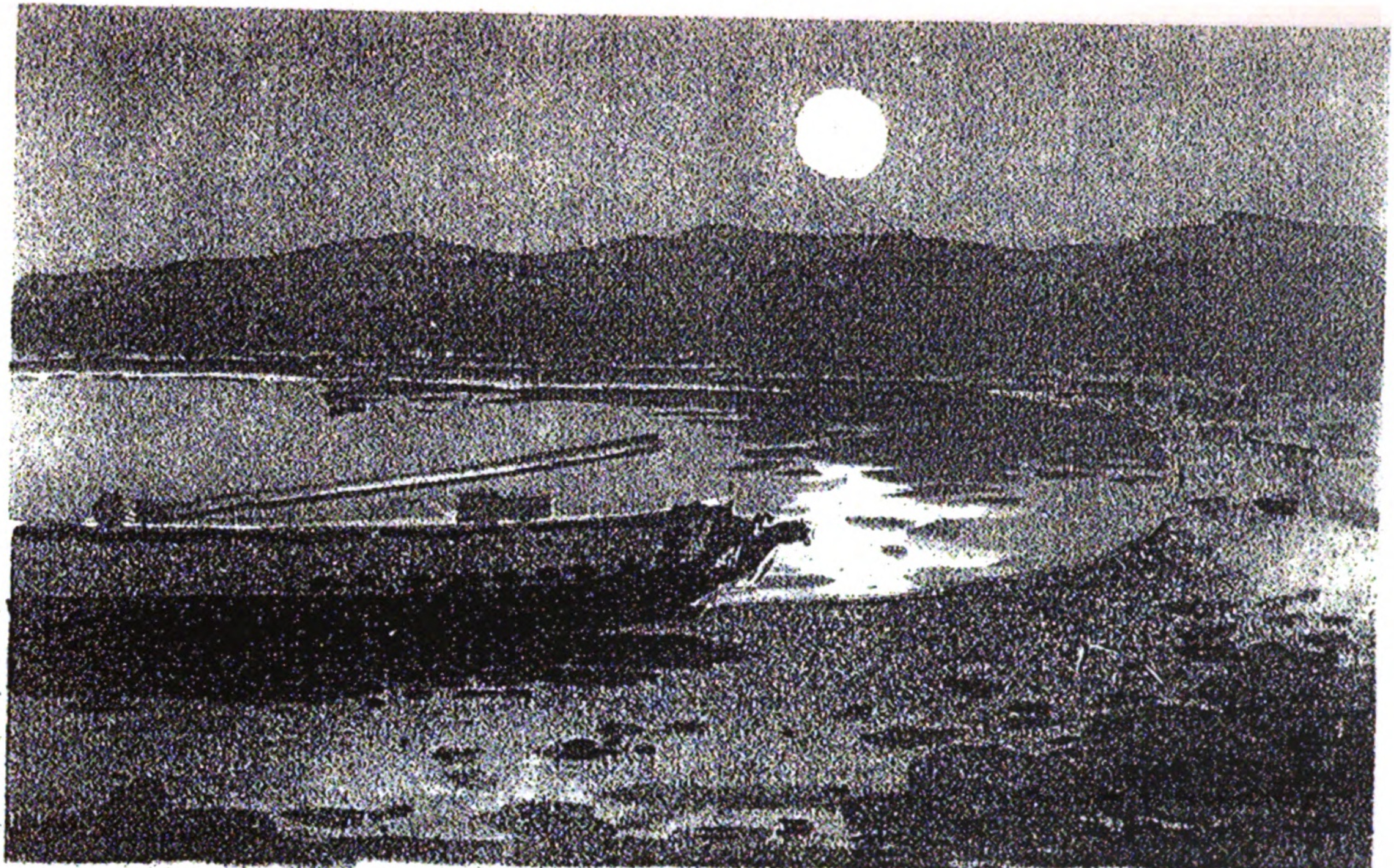
▲本劑は工學博士高峰讓吉氏が發見せし有名なる胃腸新藥なり

▲本劑の効力に就て我醫學大家が發表せし實驗報告集は御申越に從ひ無代郵送す

▲本劑は粉末錠劑各大小容器入として發賣各地藥舗にあり類似品あり必ず高峯博士のタカヂアスターゼと御指定を乞ふ

▲發賣元 東京市南茅場町二番地 三共商店藥品部

良夜



大下藤次郎筆

萩



跡見玉枝女史筆

秋の田舎



戸田玉秀女史筆

女（丙の一）

未だ本誌を讀まざる婦人ありや？

日本第一

婦人世界

實用專一

九月三日發行　每月一回　第九號　一冊拾五錢　郵税壹錢五厘　半年分郵税共九拾錢　一年分壹圓七拾五錢

口繪
◎山階宮姬宮若宮殿下尊影◎
◎花探る少女◎湖畔の絶景◎
◎名家新婚寫眞◎其他數枚◎

彩色石版　中澤弘光

繪手本　跡見花蹊

◉如何なる婦人が東郷大將を產みし乎（母たる者は讀め千古の大教訓！）
△雄々しき氣象△家庭敎育の大苦心△戰時の覺悟△平時の決心
△其慈心愛膓△思慮の周密△珍らしき婦德△其健康法

◉婦人は如何に寫眞を撮るべきか（月亭）
▲見合ひの寫眞は如何に寫すべきか
▲寫眞の註文は如何にすべきか
▲小兒の寫眞は如何に寫すべきか

◉弦齋夫人の料理談
（手輕な御馳走）
△里芋は如何に料理するか
△彼岸の御馳走は何が宜きか
△油揚は如何に料理するか
△鰯は如何に料理するか
△牛旁は如何に料理するか
△蒟煉りは如何に作るか

◉初秋に於ける育兒の注意
△寢冷えは如何に豫防すべきか
△秋口は何の病氣に罹り易きか
△食物は如何に注意すべきか
△母體は如何に注意すべきか
子を愛する母は讀め（加藤ドクトル）

◉消渴は如何に豫防すべきか（伊庭學士）
本誌愛讀者に婦人病患者なし

◉我が家の貯金實驗……秋山錦子

◉清國婦人の見たる日本人の生活……

◉男爵高木博士の家庭……

婦人の日常生活法

村井弦齋

▲衣服は如何に着換ふべきか
▲婦人は何を嗜むべきか
▲晩食は如何に用意すべきか
▲食物の分量は如何にすべきか
▲食物の性質は如何が宜きか

▲食事には何の作法があるか
▲食物は如何に消化さるゝか
▲水は如何に飲むべきか
▲菓子は如何に食すべきか
▲食後の含嗽は如何にすべきか

日本國中如何なる婦人雜誌を探しても斯くの如き大文字はありません

發行元　東京京橋南紺屋町十二番地　實業之日本社　（郵便振替貯金口座參貳六番）　賣捌全國書店

女（丙の二）

三輪田高等女學校教頭文學士 三輪田元道
東京府立第三高等女學校教頭 長尾松三郎
東京府立第一高等女學校教頭 市川源三
女子高等師範學校教諭 斯波やす子
共著

女性の疑問 第一編

口繪
- 拾二度刷彩色版 秋の七草
- 寫眞版 三輪田高等女學校第三回卒業生
- 同 日比谷公園に於ける東京府立第一高等女學校生徒の一部
- 同 東京府立第三高等女學校生徒運動會
- 同 水戸市常磐公園西側面

定價金參拾五錢
郵稅金六錢

本書は學問、社會、修身、婚姻、家庭、衞生、育兒、社交、技藝、裝飾などに關し女子に適切なる問題を掲けて女子教育に經驗深かき四氏を始め他の諸教育家が深切丁寧に明確なる解決を與へられたるものにて思想極めて穩健なれば如何なる人にも首肯されて實行し得べく廿世紀の婦人に取りては齊家のため修養のため須臾も座右に缺くべからざるの良書にして實に**女子處世上の羅針盤**と云ふべし

東京市京橋區銀座四丁目十五番地
發行所 合資會社元元堂書房
晃山堂書局
賣捌所 東京堂
合資會社北隆館書店

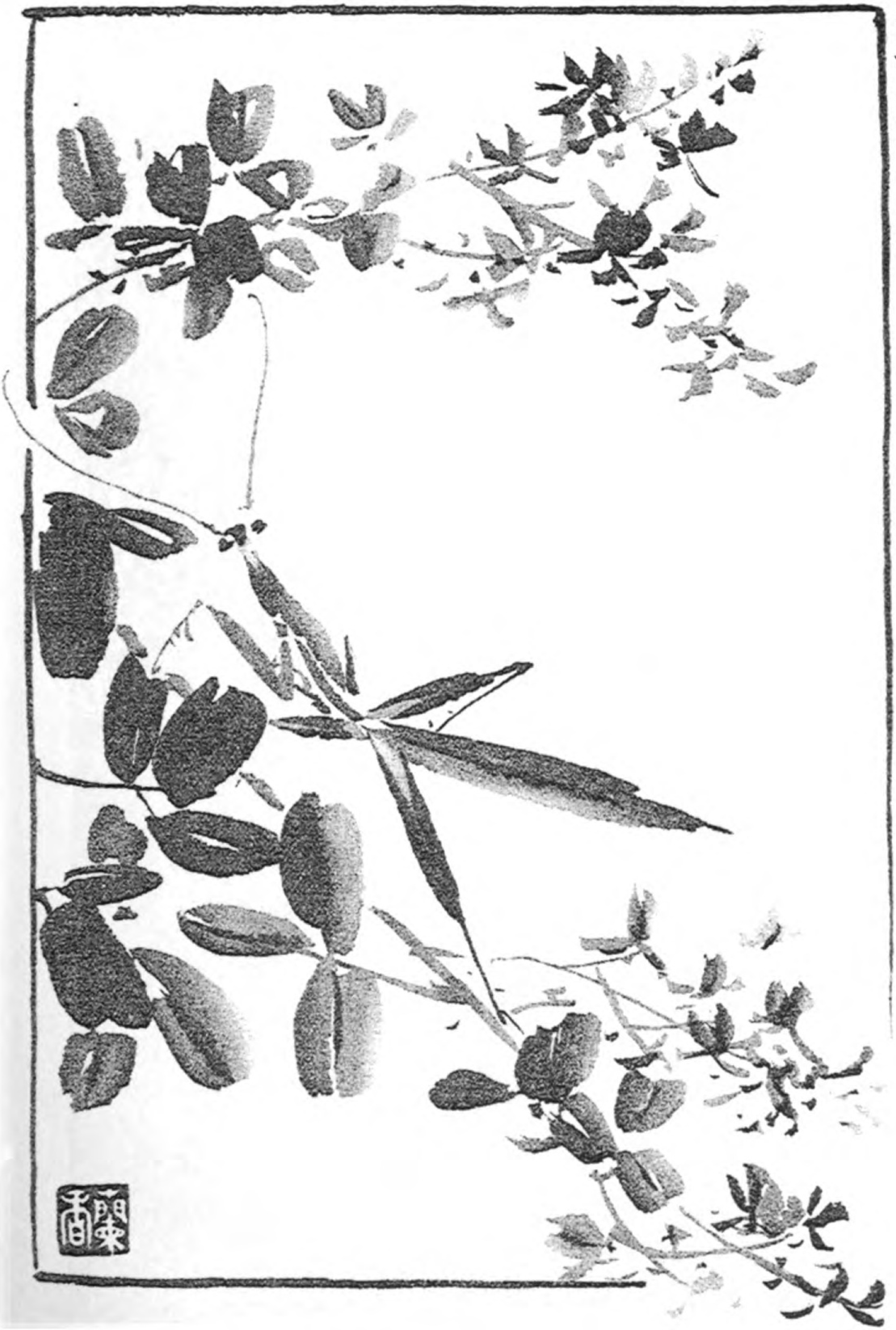
女(丙の三)

秋園



柴崎美方筆

初秋



河崎蘭香女史筆

文學博士井上哲次郎先生
文學博士元良勇次郎先生
文學博士井上圓了先生
學習院下田歌子先生
序

西山惣治先生編

口繪中村不折畫伯の三色版家庭團欒の圖挿入
洋裝四六判函入頗る美本全一册正價金一圓三十錢

製本出來



家庭末代の寶典出來

舶來上等紙摺
紙數七百餘頁

九月三十日限り

特別減價金九十錢

内地郵税十五錢（臺灣清韓三十錢也）

この書は皆さんの家庭にあつて改善、和樂、幸福、活動の道を敎へるための本です。内容見本入用の方は幾らでも送ります

娘『母さま先生が善い書が出た是非娘の子は讀んでお嫁入の道具になさいつて、早く買つて頂戴西山さんの日本家庭辭書、お料理から裁縫、洗濯、汚點拔、敎育、衞生、宗敎、道德、家政、法律、交際、遊戲、音樂、養蓄、園藝、經濟、禮式、茶の湯、生花何でもありますのよ、これが見本』

母『さう、善い御本ですこと、ではお前が一册、姉さんがお產ですから、二册注文しませう』

娘『結婚、出產、卒業、進物に好いのねえ、君子さんにも一册如何でせう。』

注意（本書の書名と類似の書既に刊行あり購讀者は編者西山先生と發行所弘道館に注意せられたし●願はくは玉石混淆せらるゝ勿れ）



女（丁の二）

發行所 東京市京橋區南大工町一 弘道館 電話本局二八四〇

發賣所 各地書店

武徳誌

毎月一回廿五日發行
一部金拾錢郵税一錢五厘
十二部以上拂込壹割五歩引

第壹號……六月廿五日發行
第貳號……七月廿五日發行
第參號……八月廿五日發行

第貳號發行迄に本誌賛成の意を表されたる朝野の名士旣に五十有餘名
本誌の眞價を知るに足らん

發賣所　京都市佛光寺通烏丸東　東枝律書房

家庭教育

定價郵税共一册拾壹錢
六册前金六拾壹錢
十二册前金一圓拾貳錢

▲第壹卷第壹號……五月二十八日地久節佳辰發行
▲第壹卷第四號……九月一日發行
▲懸賞文……毎號募集す

發行所　京都市佛光寺通烏丸東　家庭教育社
發賣所　京都市佛光寺通烏丸東　周文館

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵劵二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村　川名助次郎

開業廣告

私儀多年獨逸國留學中ノ處今般歸朝眼科專門開業仕候

神田區連雀町十八番地（郵便局前）
ドクトル　宇良田唯子

中島義弌君著
● 新撰日用女禮式

報知新聞記者中村木公君編
● 實驗問答 日本家庭節用

華族女學校學監下田歌子女史著
● 家政學

岸上操君著　彩色木版寫眞銅版挿入
● 家政案內

全一册洋並綴　正價貳拾五錢　郵税六錢
全一册洋布上綴　正價壹圓參拾錢　郵税拾貳錢
全二册和並綴　正價一册參拾錢　郵税一册六錢
全一册洋並綴　正價貳拾五錢　郵税六錢

發兌元　東京本町　博文館

婦人科　小兒科　專門

午前宅診　午後往診

東京市麴町區飯田町四丁目九番地　女醫 鷲山彌生

肺病全治秘訣

伯爵大原滋乃井兩閣下題字
醫學士常持閲
弘濟院中南著

肺病は善良の療法と藥物とに依りて根治し得るは近世學術界の公論也本書は著者全快の實驗より得たる根治的療法を叮寧に記述せし物一讀再生の効全ふすべし
●申込所●東京市芝區愛宕町二丁目十四番地●弘濟院

◉男女講習生募集

宮城縣仙臺市東三番町一五七
寫眞術講習會

女（丁ノ三）

大學目藥

『世の進むに從ひ目藥にもこんな立派な物が出來ました

登録商標



大學目藥は帝國醫科大學醫院の處方に基きし貴重の製劑也世に有觸し賣藥の類に非ず

●定價金十錢(郵稅二錢) 中瓶三十錢(郵稅四錢) 大瓶五十錢(郵稅八錢) ▲各地藥店に在

日本大阪北濱(へブリン丸元祖本家)

田口參天堂發行

(丁の四)

效能の概略

▲はやり目
▲トラホーム目
▲星目
▲のぼせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目

其外眼病一切に驚くべき奇效あり

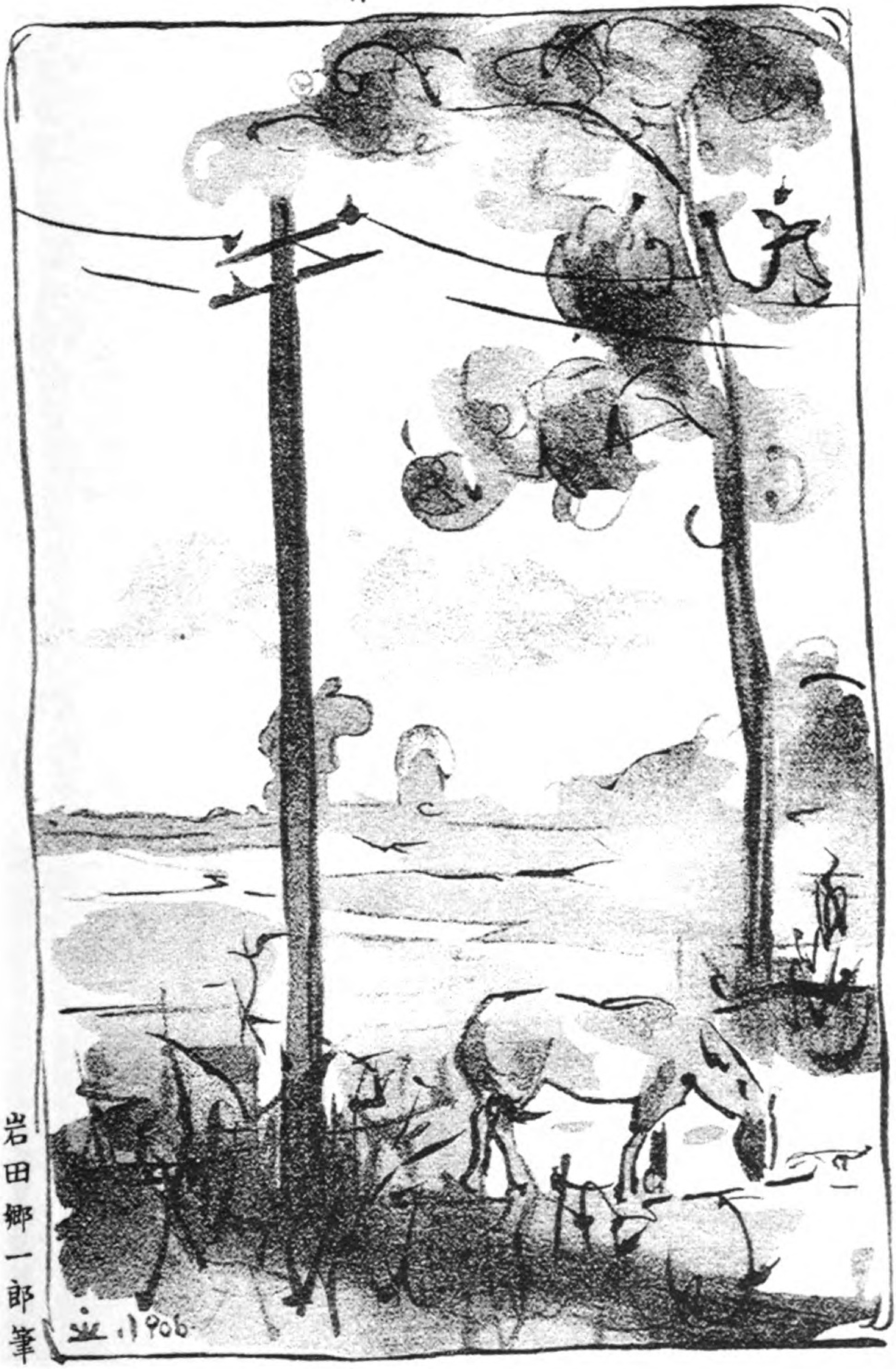
◉又この藥は目力を強くするの確效あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防するを得べし

重陽



一條成美筆

秋晴



岩田郷一郎筆


美術造花材料

空前の新藥

◎本劑によりて**黴毒患者**は**全滅**すべし

シピリス丸
一名掃毒丸

正價
三日分 金三拾錢
七日分 金六拾五錢
十四日分 金一圓廿錢

●黴毒●そう毒●りんどく等●黴毒性より來るふきでもの其他毒氣多き人服用するときは毒を大小**兩便**にとり輕きは七日分重きは十四日分服すれば**奏効**顯著健全の身となる黴毒患者は早く試み給へ

◎專賣 東京神田區錦町一丁目十四番地 **博藥館**

世界無比
最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日目に必らず美麗に除去すること

保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかすいぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥價は壹劑分壹圓參劑半分三圓六劑分五圓拾貳劑分拾圓 送料各拾錢宛必ず添送の事 郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）著金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

登錄商標

佛國天然葡萄酒古「メドック」



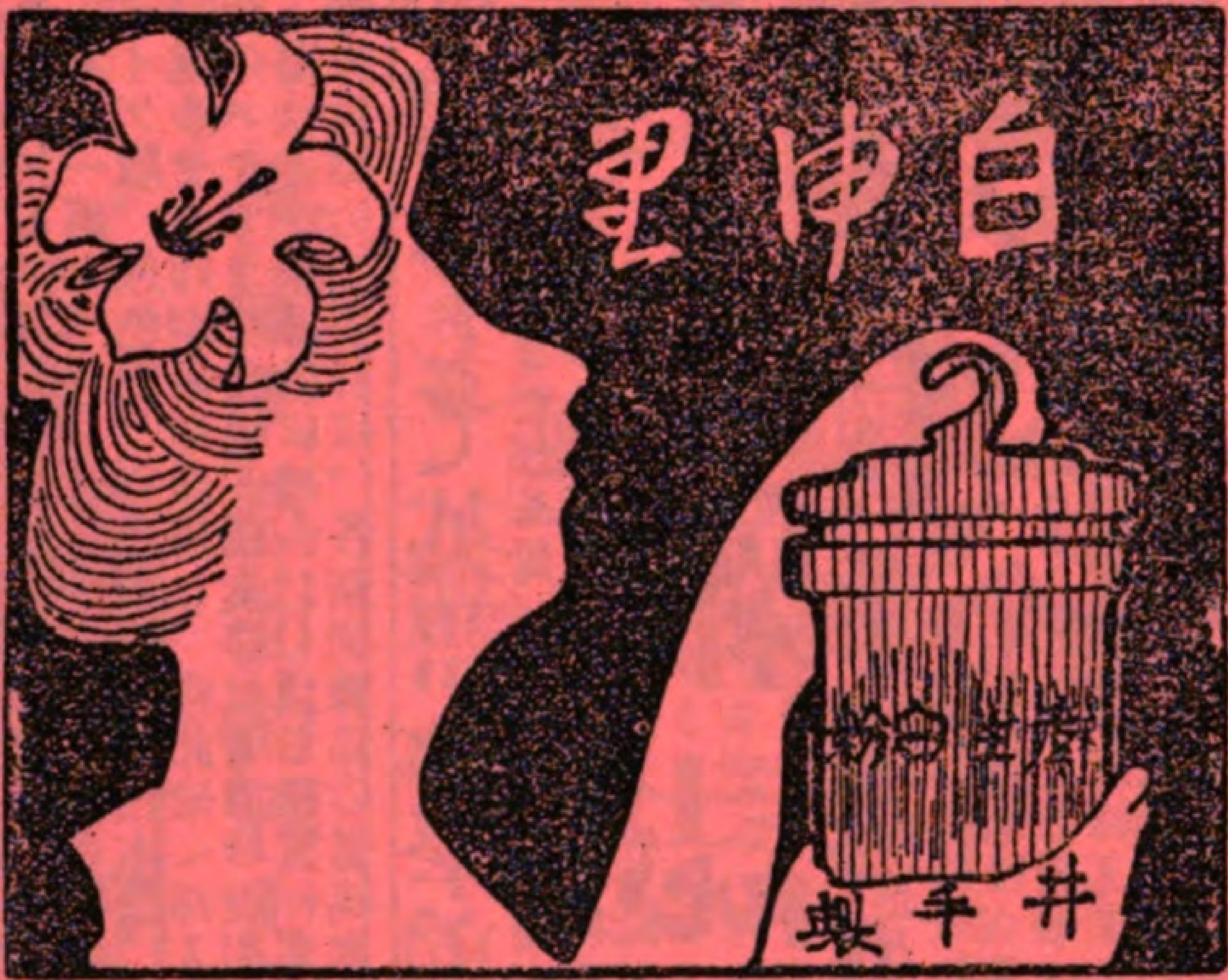
此「古メドック」は佛國產純料の天然葡萄酒にて弊店に於て十有年來一手直輸入專賣するものに御座候此葡萄酒は藥用としても常用飲料としても慥に人體に有益あるものとして諸大醫及需用者諸彥の稱讚を辱ふし古「メドック」の名稱世に知らざるものなきに至りしは誠に仕合に奉存候然るに世間往々同一の名稱の葡萄酒を賣捌くもの有之候に付弊店の「古メドック」には印の商標を印し有之候間御注意御買求被下度候●御注文之品は直ちに御屆可致候●代價表は御申越次第進呈す

海外直輸出入 洋酒食料品**商**
東京新橋竹川町
三組屋 **大塚琢造**
電話新橋七三六番

女(戊の二)

女（戊の三）

第五回勸業博覽會及内國製品共進會に於て幾多白粉を超越して賞牌受領



●**白ゆり白粉**は東京市内にて賣捌つゝある白粉舶來品共四十四種に付き内務省衛生試驗所の試驗に於て無鉛白粉として第一に表明せらる

●**白ゆり白粉**は梨園の花たる芝翫、高麗藏、羽左衛門等の常に愛用せらるゝ品なり

らい病

一ヶ月送料共三圓

毛はへ

一劑送料共八十錢

以上二劑は拙者醫科大學奉職中歐米有名**秘藥**を藥化學上ゟ研究し多年苦心の後發見したる最新奏効確著品也醫藥學的智識なき山師輩の濫造品と同視する事なく是非本劑を試み其**奇効**ある眞價を知れ●郵劵代用二割増

三河國碧海郡刈谷町
醫科大學卒業藥劑士
從七位 **中島龜之丞**
振替貯金口座番號貳參壹壹番

第三改正 日本藥局方

初版賣切
再版出來

全一冊中判並製
紙數六百頁
正價金六拾錢
郵稅拾錢

發兌元 東京日本橋區本町 **博文館**

女(戊の四)

韓山の月



武藏野の月



故兒玉大將の一族



（記事參照）

秋の海



秋の山



井口少將の家庭



前列右より（一）令息辰六氏、（二）夫人廣子、（三）五女末子、（四）母堂志保子、（五）四女光子、義姉松村あつ子、（六）三女花子、後列（一）井口少將、（二）義弟鈴木實雄氏、（三）甥松村正雄氏、

見よ●見よ

特別大附錄！
萬民の寶典！

出タリ

婦人新寶典！
家庭必備書！

皇后陛下御眞筆色紙を現寸現形の儘にて精巧なる石版刷とし特に讀者に頒つ眞に空前の偉觀!!! 加之高輪御殿兩內親王殿下の御眞筆を以てす、滿天下の淑女諸君謹んで拜戴以て家寶となせ！

九月一日發行 **婦人畫報** 第二年第十一號 定價金二十五錢 郵稅金壹錢五厘

皇后陛下の御色紙鄭重なる印刷の爲め延引五日發賣の事に相成候

淑女紳士の机上に來賓室に此優麗高尚なる美本を備へざるは恰も龍を畫ひて睛を點せざるが如し!!!

九月十日發行 **食道樂圖解** 婦人畫報秋季增刊 定價金三十五錢 郵稅金二錢

是れ和洋料理法に關する食器、原料は勿論總ての方法、一切の動作を精巧なる寫眞版とし一見して實地に應用し得るやう圖解したるもの村井弦齋氏夫妻大に努力せられ善盡し美盡されし新時代の婦人家庭に備へざるべからざる最良の書なり讀物又巨細に說明指導して遺漏なし

東京市芝區櫻田本鄉町十七番地 獨步社

女(己の二)

●圖書目錄進呈　往復葉書にて申込あれ　博文館小賣係

醫科大學藥學專攻　藥學得業士金澤浚著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き懇切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

東京市下谷區上根岸町　衛生書院

新發明

おこゑの妙なるくすり

美音錠

東京高等師範學校小出先生命名

將校軍人	定價
教師	十錢
僧侶	廿錢
演舌家	五十錢
音曲家	壹圓
謡曲家	

右は從來內藤家の製劑に有之所今回弊店に讓受候間猶引續御用命給り度此段奉希望候定價廿錢以上のものへは引續御披露のため極めて美麗なる丸藥及楊枝入を封入進呈仕度各地有名藥店に差出し有之候得共若し品切の場合には直接御註文被下度全國は無遞送料にて御郵送申上候

東京日本橋區兩國米澤町二丁目一番地

美音錠發賣所　萬稀愈丸本舖　珠堂藥局　吉田安五郎

全一冊

生殖器健全法

本書は男女生殖器を强健にし人生無上の快樂を得せしむる方法を詳記せし珍書今回十萬部を限り無代進呈す望の人は郵券封入又は往復葉書にて大阪高麗橋長命堂宛申込あれ

子宮病

自宅療法

妾儀さてより七年此方子宮病ちの道の難病をわづらひ色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安すくと健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

奈良縣宇陀郡榛原町　笹岡りん

●小兒　五かん　驚風　●蟲おさへ

登錄商標 ⑧

本方 奇應丸

小兒藥一切妙藥

定價　金五錢　金拾錢　金廿錢　（遠國送料金貳錢）

東京市京橋區銀座三丁目

發賣本舖 ⑧ 松澤商店

賣捌は全國諸々藥舖賣藥店に特約あり（電新五三三）

女（巳の三）

御料 御園白粉

畏き邊りの
御料に召させ給ふ

完全無鉛 高貴御化粧料

御料御園白粉

◎ねり製 御園の雪
◎水製 御園の月
◎粉製 御園の花
◎クリーム 御園のつぼみ
◎高貴化粧水 御園の露
◎打白粉 御園なでしこ
◎濃厚化粧水 四季の花

製造元 東京芝 胡蝶園
東京市日本橋區橘町四丁目
發賣元 特電浪花四四八番 丸見屋

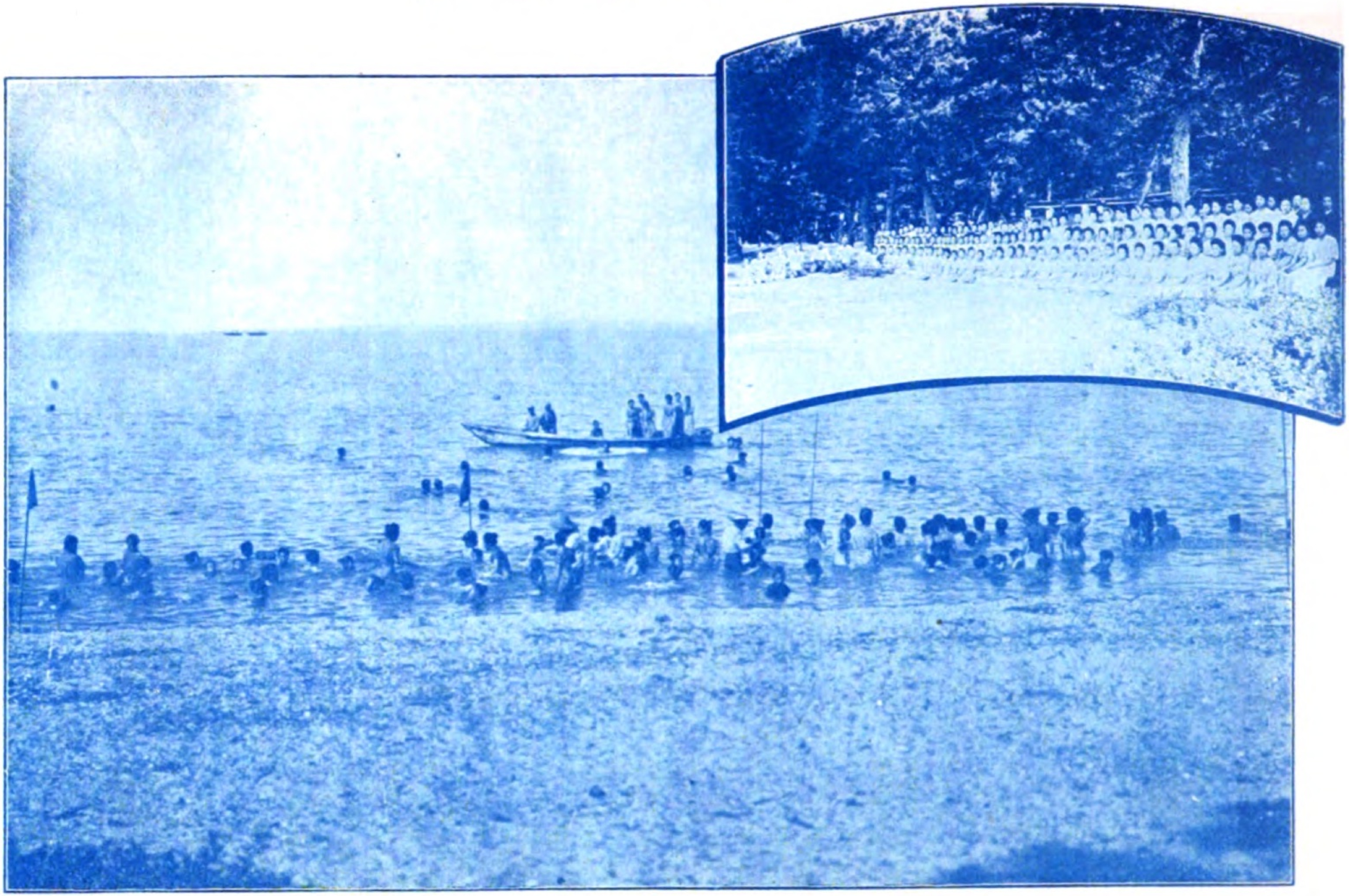
天下一品
最上醤油

釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

女(己の四)

女學生の海水浴



（淡路國洲本の海濱）



真正無毒

クイーン白粉(おしろい)
クイーン水

皮膚艶美

本品(ほんぴん)は我同盟國(わがどうめいこく)より輸入(ゆにう)せる最新(さいしん)最優(さいいう)の原料(げんりやう)に貴重(きちやう)なる芳香(かをり)を加(くは)へ精製(せいせい)したる他(ほか)に比類(ひるい)なき化粧料(けしやうれう)なり

東京日本橋新和泉町
本舗 三井花陽堂

取次販賣は到る處の化粧品小間物店にあり品切れなれば直接に



五大軍醫合議製劑

定價 五週分壹円、三週分六十五錢、二週分四十五錢、一週分二十五錢、二日半分十錢

本舗 [illegible]
山田安民

全國各藥店にて取次販賣す

▼地方の人士に警告▼

地方のお方にて東京より買物をなさるに直接本店へ御注文なさる時は割安ならんとおぼす方多けれど決して然らず地方よりの注文は直引の出來得る品も定價にて押し付け或は粗製品を代用しごまかす者なきにあらず殊に近來新聞雜誌の廣告上少しも實効の無き者を誇大に吹聽し地方の人を欺かんとする者も見ゆるを以て地方よりの注文は危險多し弊社玆に見るあり地方買入方の代理となり市内にて賣捌く商品は圖書書籍は勿論諸藥品美術品織物又は舶來品に至るまで何品にても價額の多少に拘はらず誠實と懇切とを旨とし非常に少額なる手數料にて買入れの依賴に應ずべし一たび弊社の手腕を試みられ御信用願上候

▲弊社の業務手續及び依賴方法は往復はがきにて御申越次第即時送呈す

東京本郷區湯島天神町一丁目八
信賴社
電話下谷一三六一番

女（庚の二）

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

従來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグチシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新薬にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雑多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價) 壹劑四拾貳錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵券代用貳割増し

新輸入 肉體美容料

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ケ月間滯りたる月經にてもキンーに流下す 又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不適月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢送金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)

(庚の三)

女（庚の四）

薙刀體操



（岐阜觀音寺女學校にて）

北米合衆國紐育市 シンガー裁縫機械會社

東京支店 東京銀座三丁目十二番地
大阪支店 大阪市心齋橋筋二丁目
長崎支店 長崎市大工町十六番地
東京支店名古屋監督店 名古屋市玉屋町九十六番

家庭の第一要具として全國婦人に歡迎せられつゝある

シンガーミシン

(目録定價表進呈)



ミシン裁縫專門教授

規則書進呈郵券封入申込みあれ

東京麴町區有樂町一の五 シンガーミシン裁縫女學院
大阪市東區北濱町一の六 シンガーミシン裁縫女學校

シンガー 裁縫機械

▲新學期開始 女學世界讀者に限り九月中入會金免除▼

◎會長岡部子爵 通信教授會員募集

講師は學習院下田女學部長其他女子高等師範教授等

普通科女子學術講義 毎月一回

八月一日 壹號發行

入會金十錢會費一ヶ月十八錢半年壹圓八錢一年貳圓十六錢全期參圓廿四錢

東京府教育會附屬發行の

女子の講義錄

くはしきことはきそく書にあり

高等科女子學術講義 毎月一回十五日 壹號既刊

入會金十錢一ヶ月廿錢半年壹圓廿錢一年貳圓四十錢全學期參圓六十錢

◎規則書 申込次第無代進呈

◎冗費を省きて廉價を主とす何れも讀み易く解し易すし實に女學の良講義

東京神田三河町一の十九
東京府教育會附屬
女子講學會
(電話本局二五七一)

女(辛の一)

通俗作文全書

全部二十四冊洋裝四六判
並製紙數各三百頁
正價一冊參拾五錢
郵税一冊八錢宛

第一編
大和田建樹先生著
文章組立法
既成發行

記事論説或は紀行叙事等の雄篇大作より、尺牘葉書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の狀況を見るに、百般の藝術の駸々進歩するに反し作文の技のみ獨り退歩の觀あるは詢に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を敎ふる完全なる書籍なきもの亦其一因なりといふべし。弊館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を裨補する所あらんとす。其の目は下に列記す。

續刊

- ●書簡文作法
- ●美文作法
- ●商業作文法
- ●書簡文範
- ●女子消息文範
- ●中等學生文範
- ●論説記事文範
- ●祝賀吊祭文範
- ●言文一致文範
- ●紀行文範
- ●英和商業作文
- ●雅俗はがき文範

- ●支那時文軌範
- ●英文作法
- ●才媛文集
- ●寫生文範
- ●日記文範
- ●古今名家文話
- ●明治時代文範
- ●古今名家尺牘文
- ●古今文人逸話
- ●古今名句集
- ●作文熟語類集

◎發兌元 東京日本橋區本町 博文館◎

(辛の二)

女（辛の三）

中學世界 第九卷第十一號 定期增刊

學生修養百談

▲九月二十日發行▼

全一册洋裝大判
正價貳拾錢
郵税貳錢

金風學窓に入つて燈火親むべきの時、中學世界はこゝに『修養百談』一卷を增刊して青年諸君の座右に呈せんと欲す。『修養百談』は一に空論を避けて實行を說けり。學理に亘らず、事實を載せたり。今や我國の青年社會、高遠の智識に中毒して、却つて德性壞破、意志脆弱、情操に欠くるの人天地に滿ちんとす。其煩悶や、厭世や、懼世や、墮落や、素と是れその因とする所は一にす。誰か『精神修養』を措てこれが救治策ありと云ふものぞ。此點に於て『修養百談』は時弊の一大神劑たる也。

目次概要

發兌元 東京本町 博文館

(辛の四)

横濱社交倶樂部の小集



高等女子實修學校卒業生



（赤坂檜町校長山脇女史）

根治確証

わきが

新治療薬 ラピヨン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔滌驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の雜重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

毛髮生養液 原名ベグネス

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止

めはへぎわうすき人●まゆ毛●まつげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化學製品

色の白くなる

ハンドコロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらる最新流行の秘方奇劑にして

本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

身やくをとろし

メソルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆれば

すぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

● 專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

根治確証 新治療薬

梅毒

キーネル

輕症は半劑惡症重症も二劑用ひよ奮て奏效す世間種々雜多の無效なる驅黴藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割增

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとり如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこねかんそ骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必根治す

らい病

新治療薬 ダービン

本劑は最近歐洲諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣弊館に幾多の調劑の實驗に鑑み丸藥となしたる者にて其有效確實なる本劑に優る者なし

試に一劑分丈けも用ひ見よ必ず大效あり一劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

獨逸撰方 効驗一夜に顯る

りん病

新治療藥 キーロシ

本劑は最新の文明的有力藥にして如何程頑固劇烈なる淋病しようかちも一夜に輕快を覺え膿血速に止り痛を止め輕きは一劑分重きは二劑分

如何なる惡性の頑固慢性病も特製を用ひよ忽ち根治の目的を達す本劑は内服すれば一種の化學的變化を起し強度の殺菌防腐液となりて便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を根底より驅逐し人に知られず居ながら文明的新治療を受るを得速に用て病根を斷絕し苦惱を脱せよ

藥價一劑輕症用六十五錢二劑重症用一圓廿錢特製惡性頑固症用二圓卅錢

日本一手發賣本舖

● 專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

(壬の一)

各處の名所地名に羅馬字を附記す
故に歐米人内地旅行に缺ぐべからず

●本圖の内容精確にして鐵道線路名勝古跡宿驛名邑を詳載す●

●本圖の裏面精密にして表面地圖關係の重要諸表數三十三を網羅す●

鐵道作業局長官 工學博士 平井晴二郎君
同 建設部長 工學博士 增田禮作君
遞信省鉄道局遞信技師 工學博士 野村竜太郎君
校閲 麻生鉞三君著

麻生式折本 全國鐵道線路名勝古蹟明細 旅行案内地圖

全一冊長方形折本（縱長八寸一分 横長九尺）
表面地圖銅刻
三色刷
正價四拾五錢
郵税四錢

附半球一覽圖●滿韓一覽圖●重要諸表各種 （既刊發賣）
表紙精刻帝國八千尺以上高山及著名大河湖沼實側圖入

本圖の特色一にして足らず著者茲に五星霜の苦心を累ねたる大成發明の折方地圖なれは一たび之を手にする人は其輕妙無比なるに驚き忽ち旅行必携の實用たるを自認せらるべし本圖はもと縮尺百六十萬分の一にして從來の地圖なれば少くとも紙幅四尺以上を要すべきに此發明法に依りて紙幅僅に八寸弱冗紙五分の四を節減せり況や著者は多年鉄道局に奉職して最も周到なる注意と精査とを以て縮圖し特に平井。增田。野村の三工學博士の綿密なる校閲を受けたるを以て愈よ錦上添花の觀あるものと謂ふべし江湖の諸彥請ふ刻下の大必要品として必す一本の愛購を賜らんことを

●本圖の折方は從來他に類例なき最も嶄新輕妙の折方なり●

●本圖の折方は携帶頗る至便使用展閲掌中自在の折方なり●

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（其の二）

（壬の三）

五百圓懸賞募集

（〆切延期）（總金額五百圓）（賞金現金）

繪葉書は一國文明の小代表者なり國民の美的思想を顯彰する小美術なりとの代表者この美術をして益々其の服装案圖等を珍奇清雅ならしめとの周遊者をして愈々廣く世界を旅行せしめんとするは父としての繪葉書出版者が子としての繪葉書に對する徴意の有る所に有之候

本會曩に賞を懸けて繪葉書募集の事を廣告せしも未だ以て誇りとするに足るべきもの見ずして締切期日を經過致し候は頗る遺憾に存じ候依て事情の許す限り日限を延期し廣く江湖諸君の優品傑作を歡迎致し候

あはれ藝術の母たる美術家諸君よ奮つて本會の主旨を賛せられ十一月中に開催の本會第二回の繪葉書展覧會をして第一回の如く多大の光榮あらしめんことを子給葉書と共に憫願致候其の稱類規定は下記の如くに有之候

新案繪葉書

〆切期日九月三十日限り

賞金五拾圓 一等廿圓一人二等五圓二人三等三圓三人四等一圓十一人（意匠嶄新のもの）

明治四十年の繪葉書

〆切期日九月三十日限り

賞金五拾圓（同上）（新年用のもの）

カレンダー

〆切期日九月三十日限り

賞金百五拾圓（同上）（柱暦代用のもの）

家庭娯樂カード

〆切期日拾月三十日限り

賞金百五十圓（同上）（新式家庭娯樂用トランプ形）

ポンチハガキ

〆切期日拾月三十一日限り

賞金五拾圓 一等廿圓一人二等五圓二人三等三圓三人四等一圓十一人（滑稽趣味のもの）

寫眞募集

〆切期日十二月卅一日限り

賞金壹百圓 一等廿圓一人二等十圓一人三等五圓四人四等三圓十人五等一圓廿人（何の寫眞でもよしカビ子形）

審査員芳名

（承諾順）

梶田半古　齋藤松州　武内桂舟　中村不折
巖谷小波　北澤樂天　水野年方　和田英作
三宅克己　大下藤次郎　塚本靖　中澤弘光
丸山晩霞　尾竹國觀　織田東禹　柴田常吉
岡田朝太郎　窪田空々　下村觀山　滿谷國四郎

不明の點も有之候はゝ往復葉書にて御照會下され度し

東京小石川久堅町　**日本葉書會懸賞掛**

（壬の四）

女(壬の五)

マスター、オブ、ロース
宮本桂仙君著



全一冊洋裝三六判紙數二百卅頁
正價參拾錢　郵稅六錢（既刊）

西洋人が日本服を着け支那人が洋服を着けたる者を見れば何だか不格好にして見苦しきと同じく日本人が洋服を着用する時は等しく變なものが多い樣なり、其は身體の姿勢が各々異なることが第一の原因であるけれども第二の原因は其着用法を知らざるに在り然るに身體の姿勢を急に變化せしむることは不可能の事なれば先づ洋服を着るには洋服の着用法は是非一通り心得ねばならない。洋服には日本よりも複雜なる種類が多くして時と場合によりて種類を異にするが故に少くとも禮服の種類だけでも覺えて置く必要がある、著者は歐米に學ぶと十年能く彼地の風俗に馴れ禮儀に通ず曩に男女交際法を著はし女子に必要なる事柄を叙述したるが今又た紳士の心得を公にし就中洋服に附いて晩餐會、舞蹈會等に於ける詳細の事項を我が國の紳士に紹介せんとす、新日本の紳士として社交を重ずる人一本を座右に供へ時と場合の顧問となさば其益する所蓋し大なるものあらん、加之ならず文章平易にして趣味津々たるが上に斬新の議論も所々に散見す、是れ實に紳士として缺く可らざる良書なり。

本書目次

發兌元
東京本町
博文館

巖谷小波君著



全一冊

四六判裝幀優美紙數約三百頁

正價六拾錢郵稅八錢

九夏三伏の候、休暇三旬の閑を得て、一味の凉風に、百年の齡を伸べんと欲するものは、この『笑の國』に遊ぶに如かず。『笑の國』は、文壇の笑上戸、兼ねて笑はせ上手なる例の小波山人が、輕快の筆と洒落の想とを以て新たに建設する所なり。我と笑はん人々は、疾く來つて笑へかし。夫れ天國は近づけり笑の國は開かれたり矣。（既成發行）

陸軍少佐　富山康之助君著



全一冊洋裝四六判
紙數約百二十頁
正價廿五錢稅四錢

（既成發行）

●口繪（三十三年、卅八年式軍服着用品及新舊軍服徽章比較圖十葉）

▲所載要目▼

●軍備の必要
●陸軍の編制
●陸軍軍人
●陸軍各兵種の性能
●陸軍旗章
●營內の狀況
●實戰の狀況
●陸軍出身志願者心得
●陸軍出身出願者案內
●身體檢查の要領

附錄（願書々式 旗章圖 服制圖）

東京 博文館 本町

女（王の七）

第三回新學期開始

◉會員大募集九月三十日迄の申込に限り入會金全免す、目下入會の好機◉

▲事情があつて高等女學校に入る事の出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ケ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます
▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いようにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を毎號附錄とします。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です。
▲本會講義錄は右に述べた通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都會一ケ月の遊學費で、優に全期を終はる事ができます。

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也
▲毎日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり
▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり
▲日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり
▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し
▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲規則書▼　端書にて申込あれば直に郵送す可し

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

（其の八）



女學世界

第六巻第拾貳號

九月五日發行

家庭暦

休日｛日曜　二日、九日、十六日、廿三日、卅日
　　｛秋季皇靈祭　廿四日

●行　事＝殘暑漸く去つて金風颯々、各地避暑の客去つて京に歸る九日重陽の節句〇十日頃より各女學校新學期始業十五日神田祭禮は日枝祭と隔年にて東京の二大祭典なり〇秋分の日秋季皇靈祭を行ふ〇此日より五六日間寺詣、親戚知己へ物配りなす春の彼岸の時と同じ〇此月下旬陰暦八月十五夜にて觀月の宴を張る。

●遊　覽＝萩は向島の百花園、龜井戸萩寺、笑花園、麻布仙花園、西京の眞葛ヶ原、遠洲の引馬野〇觀月は高輪、芝浦、綾瀬川、隅田川、愛宕山、洲崎〇京都鴨川、嵐山〇播州須磨明石〇江州石山寺〇蟲聽は道灌山、日暮里、廣尾、向島、關口。

●節　物＝秋蝶〇萩〇桔梗〇女郎女〇秋分〇秋月〇尾花〇桐一葉〇案山子〇新米〇初鴈〇渡り鳥〇秋海棠。

●料　理＝鯖〇ぼら〇かじき〇生鮭〇鱸〇吸物にはこちの斜ぎりと十六さゝげ〇刺身は鱸の細作りに紫蘇の穗を添へ山葵醤油〇燒物は小持鮎のいろ附燒〇飯は鱧めし〇野菜には、木耳、蓮根、菓物には、くるみ、葡萄等なり。



平易にして困難なる女子の任務

日下部三之介

一＝妻となつて其夫を補助する事

二＝母となつて子女を養育する事

三＝主婦となつて家事を整理する事

女子の任務を大別すると僅か此三つにしか過ぎぬが、さて之を實行して完全に盡すといふ段になると、中々口や筆で謂ふほど容易な業ではない。

△夫婦の愛情は程度問題

先づ夫婦間の關係から云ふと、男女が結婚をして家庭の平和を保つて行くに、是非なくてはならぬものは、深厚なる兩者の愛情であるが、併し其愛情の度が濃かすぎて盲目的に陷つた結果、遂には猛省すべき弊害が伴ふて來る事實は世間に往々見受ける處で、一口に云へば夫が妻を過信して、妻の言ふ事とあれば一も二もな

くそれを善い事として萬事妻任せにして事の理否を判斷する餘裕がなくなつて了ふことである。喩へば妻が自分の氣に入らぬ人があると、彼人は何うも不良人だと云へば、夫も爾かと其人を斥けるやうになり、彼人は善人だと云へば如何にも善人らしくなつて見えたり、又事業を企てるにも妻がそれは乾度失敗しますと云へば折角の計畫を中絶したり、今度の芝居が面白いから連れて行つて下さいと云へば財政の如何を問はずオイそれと御意に應じたり、それが嵩じると一家の權力が一切妻君の手に握られて所謂『亭主を尻に敷島の道』で立派な女房天下となつて了ふのである。それも妻が夫に勝つて賢明なる性質であればよいが要するに斯樣な妻に世の行末までも透觀されたのは尠いのである。斯の如き夫は妻に對しては誠に親切な結構人ではあるが、それが爲に世間の義理までも犧牲に供して省みぬ樣になるのは實に嘆かはしい次第で、罪は素より夫の愛情を利用して增長する妻にあるが、畢竟するに夫の心が過度の愛に盲目となつて是非の判斷を失ふことに歸するのであるから、夫婦間の愛情は夫たる者の威嚴を失はぬ程度に於て各々本分を守らねばならぬ。

△良妻の任務とは何ぞ

又人の妻として平素夫の出入に玄關まで送迎するとか、晩餐を共にして一日の勞を慰めるとか不在中の家事を整理するとかいふことは妻たる者の當然の任務であつて、單にそれだけでは良妻賢婦といふことは出來ぬ。さらば如何にせば婦人の任務を完ふし且つ良妻たるの資格を具ふるかと云ふに、第一は夫の人物性行を洞識と、第二に夫の爲しつゝある事業若くは事務を明かにする事、第三に夫の社會的戰鬪の苦心に同情して、これが鼓舞慰籍に怠らぬ事、第四は夫をして家事財政の末に憂なからしめ大膽に其信ずる方向に猛進せしむる事、以上が即ち女子内助の力と云ふもので妻たるもの丶正に務むべき最大任務である。然るに方今一般の細君なる者を見るに、内助の力どころか却て反對に、衣服を買つてくれぬとか、髮飾が舊式だとか、芝居にも連れて行かぬ

とか、種々な難題を持かけて夫を苦しませて居るのが多數である。之は主に新らしい教育を誤解した女學生上りの細君に偶々見受るところであつて、誠に遺憾千萬の次第と言はねばならぬ。

△學校三分に家庭七分の教育

既に人の母たる境遇となつても、兎角女學校出の妻君は、單に子が出來たといふ自覺があるばかりで、其他の一切の行動は全然丸髷をつけた女學生である。從つて本の上でこそ、育兒法とか教育法とか云ふ事だけ知つては居るが實際にかけては甚だ覺束ないのが多いやうである。それに比べると昔の女子は學問こそお留守であつたけれど、幼少の頃から母親の傍にあつて見やう見眞似でそれ等の事はちやんと心得て居た、が併し之は一利一害で、今日の女子が實際の事に迂遠なのは、強ち女子自身の惡いのではなく、其原因は主として學校に於ける課目が餘り多過ぎて、家庭的實習の時間がない處から來たのであらうと考へる。先づ學校から歸るや直と其日の復習に着手る、次の日の豫習をやるといふ工合に絶えず學問にのみ追廻されて居る、そこで學校卒業後はどうかと云ふに、普通高等女學校を卒へるのは彼是二十歳近くにもなるから、今度は又結婚といふ難問題に身心を勞することになるから却々落着いて家庭の實際に習熟するの遑がない。故に之を改良せんとするには先づ學校の課目を或程度に減少し、女子に時間の餘裕を與へて、今少しく家庭の仕事を執らせる必要があらうと思ふので、其大體の方針としては、學校三分に家庭七分の考を以て教育したならば、今日の如き餘弊を取除くことが出來やうと考へる。

△主婦は實行を重んぜよ

主婦として一家の經濟及び衣食住に關する智識は無論必要であるが、唯だ智識があるといふのみで、實行がそれに伴はねば何の役にも立たぬ。現に高等女學校の卒業生中で、滿足に飯を炊き得るのが百分の一位しかな

いと聞いては他は推して知る可しである。又係る教育をうけた女子の理想といふものを聞くのに、飯炊や、雑巾掛や、水汲などをやらせるやうな夫など持たぬ方が可いとか役人ならば外交官とか博士とか要するに、中流以上の生活をする人でなくば夫とするに足らぬとか、素晴らしい高望みな考を持つて居るさうであるが、これが抑々甚だしい謬誤である、縦令如何なる大家の奥方にならうとも、家事一切を心得て、隅から隅まで氣が届くやうでなければ今日の社會で到底一家を治めて行く善良なる主婦といふことは出來ぬ、のみならず人間の運命は一盛一衰で、今日ドンな贅澤な生活をして居つても明日は裸體一貫の境遇に落ちぬとも限られぬから、如何に上流の家に嫁ぐにしても女子一通りの業を實行し得るだけの手腕と忍耐と修養が必要である。之は女子自身の心懸けのみでなく、子女教育の任に當る父兄達にも一考を煩したい處である。

幼兒は如何に教育すべきか

東洋幼稚園長　岸邊福雄

▲子に對する母の眼識

『燒野の雉子夜の鶴』といふ諺の通り、世の中に子の可愛ゆくない母親は一人もなからうけれど、餘り可愛がり過ぎた結果、却て其子の一生を誤らしめた例が昔から少くないのを見ても如何に子の躾方に就て母親の任務が重く、且つ其手加減の容易ならぬとが推量られるのである、私の實驗上、母親が其愛兒を幼稚園へ入學せしむる時、教師に其子を托するに就て彼是一時間位は話をして行くが、其話振の如何によつて、子に對する母

親の平生が略察知されるのである。

子の性情を熟知し、其缺點を餘す處なく咄してそれに對する矯正法等を懇々頼んでゆく母親は最も善良の部で、此子は甘やかして育てましたからヤンチャで仕方がありませんと、少しは缺點を云ふが、其大部分はそれとなく子の自慢をして歸るのが、まづ一般に見受る處で、而も是等の母親は子を看るの眼識が鈍い者と云つてよい。

▲簡易なる格言の感化

凡て我子の長所のみを言ふ母親に限つて、過分の愛に溺れ、常に其美點はよく見えるが短所は眼に映らぬ、設令や見出したとしても、小供の常だからまア〳〵と云ふ樣な仕合でそれを矯正しやうともせぬので、遂には取返しのつかぬ我儘者と成て了ふのである。華族や上流社會の子女が他日世に立つて、我儘心ばかり強くて其癖意氣地がないのはツマリ幼時の躾方に制裁がなかつたからである。そこで母として最も注意せねばならぬとは、幼兒の缺點を發見すると共に、之を矯正する方法を講ずるので、其手段として讀本などに見ゆる古聖賢の格言を暗誦せしむるのも素より不可はないが、單に『君には忠、父母には孝』と云ふやうな抽象的の詞では小供には解り難いから、それよりもヅット簡易な言葉を以て之を諭ふるに如くはない。目下我幼稚園内で用ゐて居るのは、

一＝泣く子は弱い、強い子は泣かぬ。

二＝玩具を壞した時は、御免なさい。

三＝嘘をつく子は大將になれない。

四＝言告口をする子は意氣地がない。

等で、第一は容易に泣かぬ風を養成する、第二は仕損ひをしても隱さぬことを教へる、第三は小供の理想とする陸海軍の大將を利用して嘘言を云はしめぬ樣にする、第四は卑劣なる告口を矯正する方法で、以上の格言は單り園内に於てのみ有効なるのみならず、家庭にあつても亦た良感化を及ぼして居ることは屢々實見するところである。

▲男子は兵隊女子は看護婦の遊戯

澤山ある遊戯の中で、如何なる遊びが最も幼兒に適するかと云ふに、私は兵隊遊び、即ち戰爭ごッこが一番有益で且つ趣味が多いものと思ふ、中には粗暴にのみ流れて餘り感心せぬといふ教育家もあるけれど、先づ此遊戯特有の利益を數ふれば、第一に小供の元氣を鼓舞し且つ團體的の觀念を鼓吹し、第二に規律といふことを教ふる爲に上官の命令に服從する軍隊組織を知らしめ、第三に大將に任ずる者は威張るばかりでは部下を心服せしむることが出來ぬとのことより、人を使ふの途を覺えしめ第四に他日社會の生存競爭場裡に立つて戰鬪せねばならぬと云ふ勇氣を涵養せしめ、且つ忠君愛國の國家的志想を養成せしめる等の効がある、次に女子も亦た看護婦に扮して赤十字の帽に繃帶を手にし、男子と群を同ふして而も博愛慈善の精神を養ふことが出來る、恁の如く有益にして趣味多き遊戯なるに拘はらず世の母親や女教師などが、衣服を汚損する憂があると云つて之を避けしめるやうにするのは頗る心得ぬ次第である。

▲幼兒精神の弱强を知る法

子供の氣の强い弱いを試すには、目隱しをして二三間前にある球を拾はしめるのが最も簡便な方法である。元氣の旺なる子は球は飛越える程に前進するが、氣の弱い不活潑な兒は未だ球の位置に達せざる中に腰を屈めて手探りを初める、之は上手や巧みで手前から探るのではなく前みすぎて壁にでも頭を打つけはしまいかとの

臆病心から起るのである、室外にあつても其通りで、强いのは胸を反らし兩手を眞直に突出して勢よく進むが、元氣の足らぬ子は首垂てれ胸の邊に物があるやうに探して行く、叉木の枝などに跨がつて唱歌をやる處を見ても勇氣のない子は平氣で其歌ふ聲が冴えて聞ゆるけれど弱いのになるとそれと反對で、調子から聲から凡て危うげである、のみならず其姓名を尋問する場合にも一は勇ましく明瞭に答へ得るが、意氣地のない子は全て臆病者が警官の訊問にあつた樣な有樣である。

▲氣の弱い子を矯す方便

さて恁る意氣地のない氣の弱い子をドウしたら一番安全で且つ手早く矯正することが出來るかといふに、盛に英雄豪傑の傳記を說聞かせて精神上の勇氣を誘引せしむると共に、一方には其子供が轉んだりなどした時に、之を扶け起してやらぬと〻、一緒に外出する折にも手を曳いてやらぬ事を實行して、依賴心を取除き獨立心を起さしめる樣にするのが最も有効なる育兒法である。凡て子を躾けるに無闇に叱つたり嚴重すぎたりするのは勿論宜しくないが、さりとて可愛いさの一念で何でも彼でも子の云ふが儘に無理を通さすのは他日身を誤らす基因であるから、此點は特に母親の留意すべき所で、要するに『愛』の手加減である。醫者の匕加減と同樣、及ばざれば利目なく、過ぐれば却て身を殺すの害毒となることを忘れてはならぬ。

犯罪と婦人研究

監獄事務官法學博士　小河滋次郎

一　不公平なる法律

「女子と小人は養ひ難し」と云ひ、「男子と猛獸は近く可からず」と云つて男女互に罵倒し合ふて居るが、之は兩者共に空論にすぎぬと私は斷定する。又た「人の性は善なりや惡なりや」とのことも久しい以前からの議論であるが之も私の考では、人の性は善惡何れにも屬したものでなく、凡ての善惡良否は社會關係から生じたものであらうと信ずる、時代により境遇に因つて人は善惡孰れにも變化するものであるから必ずしも男女によつて善惡の差別があると云ふことは出來ぬ。又原始時代には男女對等であつて、或場合には寧ろ女子の權力が男子以上であつたさうな。然し婦人は間もなく生理上の競爭に敗れ、弱肉強食の天則によつて女子と小兒とは自然男子の所有物の如く思はれ、全く人格を無視さるゝに至つたのである。今日では女子の勢力も認められ稍や高等の待遇をうける樣になつたとは云ひ乍ら猶ほ昔からの習慣で、其權力は充分に發展されて居らない。のみならず法律等も男女の間に非常の不公平がある。例へば姦通罪の如き、女子にのみあつて男子には罪がないといふ、爾那不公平な事はない、其他道德にしても宗敎にしても實は强者の權を保護するやうにのみ出來て居る。

二　人類は悉く罪人

之を法律上から觀察すれば、凡て囚人といふのは、一國の定めた禁制を犯すと云ふまでのことで個人に伴ふ罪ではない、若し廣い意味を以て云へば人類のあらゆる階級を通じて不德を敢てせぬ者はないが、唯だ境遇によつて罪となるのもあればならぬのもあり、又現はれるのもあれば露はれぬのもある。佛國の某學者の言に「人は悉く眠れる罪人なり」と云つて、何人にも惡心はあるけれど、法を犯さぬ人は境遇の刺擊をうけぬから暫らく睡眠の狀態にあるので、若しその人が境遇の刺擊を受くる場合になれば忽ち法網を潛るやうになるかも知れぬ、と斷定して居る。又囚人に就て統計表の示す處によると各國共に男女の數に非常の相違があつて、我邦の

如きは男子の百人に對して女子十五人の割合にしか過ぎない。然らば女子は男子に比較して罪が少くて且つ多くの美性を有するかと云ふに、決して爾ではない、却て其實は罪深き代物であるかも知れぬが、唯だ社會生活の上で罪を犯す動機が少い、謂はゞ生活の困難を受ける度が男子よりも著るしからぬからである。

三　男子の罪は女子の身代り

二十四五年前まで東京中の監獄で十人乃至二十人を出でなかつた女囚が現今では二百人内外に增加して居るそこで罪人の少數なる過去の社會制度が良かつたかといふのに、强ち然ではなく、歸する處は女子に關する經濟上の運動が今より劇しくなかつたからである。凡て女子の違法者は分量の上に於てこそ少數であるけれど、其實質の罪は遙に男子以上であつて統計に見はれた犯人の如きはホンの或一部分にしかすぎぬので、大抵は表沙汰にならずして女子の罪は埋沒されて了ふのである。現今の法律は表面上女子に甚だ酷のやうではあるが、實は活用の上に於て意外の利益があるので、ツマリ一種の同情心を利用して大目に見免されてゐる場合が屢々ある。若し之を容赦なくやつた日には決して今日の如き少數のものではなからう。又た「犯罪の影には必ず女ありとは、實驗上爭ふべからざる眞理で、男の罪人には必ず女と酒が伴ふてゐる。女に關係のない罪人は殆んど一人もないと云つて宜い。畢竟するに男子は婦人の爲に惡事を働かせられるので、謂はゞ傀儡人形となり、女の身代となつてゐるのである。

四　女子と自然的資本

昔のお家騷動の如きも凡て婦人が原動力となつて幾多の男子に血を流さしめて居る。之は道德上社會上男子が女子を壓迫する處から女子は男子に惡事を强ひて陰に復讐をしたものである。そして男の犯罪は陽性で堂堂と行るけれど女は陰性でコソ／＼と惡い事をする。故に男子の方は比較的改悛させ易いが女子に至つては實

験上甚だ濟度しにくい。又法を犯す主なる原因が生活上から來ることは前述の如くで男子は困つて來ると自暴自棄を起すか、又は奮發して豪いことをやるのであるが、大抵の女子が困難に逢ふと墮落する一方である。尤も女子は墮落しさへすれば他に惡事を働く必要がない、何故ならば婦人は自然の生理的資本をもつて居るから生活の困難に遭つても節操を賣りさへすれば他に罪を犯さずとも濟む。これが即ち女子に犯人の少き一原因である。若し女子をして墮落せしめず罪人たらしめぬ樣にするには、之に相當の敎育と相當の職業とを授くるのが目下の最急務である。

五　年齡と犯罪の關係

茲に男女の年齡を比較して囚人の表を作つて見ると、男の方は二十五歳より三十歳までの間が最も多く三十歳後は漸次に少數となつて行くが女子は之に反して、三十歳前に少く三十五歳から四十歳に多く四十歳より四十五歳と老ひて益々多數となつてゆく。未婚者よりも既婚者に多く、夫ある者よりも夫を失ひたるものに多くの罪人がある。之は即ち女子に獨立的職業がなく生活上の困難から遂に惡事を働くことになるので畢竟は社會の罪に歸するのである。之を矯正し改善せんとするには是非共女子の自由權利を認め、自由なる敎育を施し、而して獨立の職業を得る樣に保護してやらねばならぬ、一體從來の男子は餘り女子を見蔑りすぎて飽まで壓迫して居つた爲に女子の美點も現はれず又眞の技倆も發展されなかつたので、若し之に男子と同樣の敎育と權利とを與へたなら、必ずしも男子に劣るといふ理由はあるまい。

六　女子と新職業

現今獨逸に於て「萬國女子運動會」なるものが組織されて、盛んに女權を擴張し且つ各方面に亘つて活動しつゝある、此會の目的は女子も男子と同じく、政治、法律、哲學、實業等凡ての方面に職業を得て、敢て男子

に劣らざる活動を試みやうと云ふ主意で、既に或國では婦人の官吏、辯護士、裁判官等があつて男子に讓らぬ好成績を示して居る。之を以て觀ても女子が先天的に男子に劣るとは云はれない。我邦の如きも望むらくは、女の官吏其他辯護士裁判官等を廣く任用して婦人のことは一切婦人に捌かしめる樣にしたならば必ず社會改良の一端になるだらうと思ふ。何故婦人の事は婦人にさせよと云ふに、男子の事を女子の解せざる如く女子の事も亦た男子に解らぬ點がある。例へば婦人の病氣に就いて男子の醫者よりも女醫の方が適する如く、男子は婦人に就いて或部分まで、解つても同性でなければ其全部が解らぬ、そこで裁判官の如きも婦人の裁判は婦人をしてなさしめたならば同情もあり、且つ公平の判決を下すことが出來やうと思ふ。單り法官のみでなく、凡ての方面に婦人を採用して活動範圍を廣めてやつたならば、第一人類經濟の上に非常の利益があらうと信ずる。

七　婦人の自覺

婦人問題に彼是と議論するは可として、何程名論卓説でも之を實行しなければ遂に空論である。婦人にして權利を得、自由を得んと欲する人は先づ自ら實行者たらねばならぬ、口で言ふよりも手の人となり、其信ずる處に向つて實行して見るが宜い。而して其眞技倆を示したならば社會は必ず歡迎するに相違ない。又社會に對して望ましいことは、婦人の意志を束縛せざる事、婦人の技能を發展せしむる事、法律の條文にある如く女子の不貞操を罪して男子の不節操を問はざる如き不公平を改正する事等で、凡て法則や條文にばかり拘泥せずに大なる人道の立場から人生の罪惡を觀察してやりたいものである。(文責在記者、國家醫學會所說)



現代婦人の熟讀翫味すべき警策文字

離婚は婦人の那點に原因するか

泊　子

今より凡そ二十餘年前、即ち明治十六年頃の我國離婚數の統計表に依りますと、結婚百に對する、三七、七の割合を示して居つたと申す事で御座います、處が、最近の調査にかゝる統計を見ますと、離婚は結婚百に對する十六、九と云ふ、誠に善ぶ可き現象を呈する樣になつて參りました、併しながら未だ〳〵之れを泰西諸國の狀態と比較すれば、遺憾ながら猶甚だ不健全な地位にあると云はねばなりません。

之れには種々の原因も御座いませうが、他の歐米諸國民の樣に、宗教上から神の前で夫婦の神聖を誓約する等と云ふ風習が御座いませんのと、干渉結婚の餘弊が引いて、離婚に對する相互の不信を呵責する良心を麻痺せしめたのと、隨つて離婚の形式が餘りに簡單であつたのとで、其れで斯う我國の離婚の割合が多くなつたのでありませう、云はゞ人には添うて見よ主義で、厭であらうが嫌ひであらうが、何の五十年の道連れ、馬に乘らうと牛に牽かれやうと、其時は又其の時さと

大概に高を括つて、輕卒に結婚をするから、さあいざとなつてお互に少し氣に喰はぬ事でも起こると、合せ物は離れ物と斯うなる、實に離婚の多いのも當然な事で、徒らに之れを嘆くは源既に濁れるを氣附かずして、下流の清からぬを悲しむ樣な者で、私共は其の根本の惡習からして打破しなければなるまいかと存じます、けれど、之れは以後結婚し樣と云ふ人の用意にはなりませうけれど、既に結婚した人には、所謂證文の出し後れで、轍鮒の急を救ふのにはなりませんから、兎に角既婚者は既婚者として斧を用ゐぬ中に禍根を斷つの必要があらうかと存じますので、此處に出來る丈離婚の理由を發いて應急の手段を講じませう。

乃で私は今日迄の離婚の直接の原因は、

一、新舊思想の衝突
二、夫婦間の不信
三、金錢問題

と、此の三つに歸するかと思ひます。

○新舊思想の衝突

之れには勿論所謂、

舅姑の意地惡さよりと
嫁の我がまゝよりと

の二つが御座いませうが、前者は不如歸とか想夫戀とか云ふ小說で、同情深い文士方が充分世に訴へて吳れましたから、今更ら此處で申し上げる必要はありません、よし、其必要があると致しましても、最早や人世の義務を終て餘生幾干も無き老人に、此上の反省を求むる等は、其の目的でもありませんし、又我々の立場から申せば、少し酷に失しはしますまいか、而かも新舊思想の衝突等と云ふ忌はしい原因は、却つて後者に屬する方に多い事は事實に照らして甚だ殘念ながら然りと云ふに躊躇致しませぬ、元より禍は起こるの日に起こるに非ず、其の上に種々の事情が絡まつて强ち嫁の罪ばかりとも申されぬ場合がありませうけれど、よしや、罪は良人にあらうと社會にあらうと、單に婦人と

云ふ小範圍に於て私共が私共の不注意を、觀るの必要は大にあらうかと存じます、況んや、少し注意して人の家庭を能く觀察しますると、彼れならば幾らの老人も小縮やうかと思はるゝ程、優しい良人を笠にしてと申す譯でも御座いますまいが、怎うも、老人に對して我が儘な、而して不親切で冷淡で其の上同情心の無さ過ぎるお嫁様が多い様に見受けられます。

昔のお嫁様は良人の親即ち舅姑に事へるのを、妻たる者の重んず可き責任と覺悟して、柔順しく優しく甚麼不平にも堪へて、能く一家の平和を維持して居つた様ですけれど、今のお若い方々の多くは、結婚しやうと云ふ前に、先づ舅姑の有無を確かめて、然る後取捨の判斷をせらるゝ程であるから、這麼人に舅姑を大切にせよ等と申すのは、寧ろ無理な注文かも知れ無いのであります。

今日一部の人がどれ程熱心に唱道致しましても、親子別居等と云ふ事は、我が國社會の狀態上、容易に實行出來るものではありますまいと思ひます、然うして見ますと、どの道新舊思想の衝突に起因する離婚沙汰を防ぐには、未だ〳〵怎うしても若いお嫁様の手腕と技倆とに俟たねばなりません。

○夫婦間の不信

之れは最も苦痛で最も悲慘なもので御座いまして、形骸ばかりは差し上げてもと、心は自ら通ふ昔の夢に、人無き折は忍び音の涙、見られまじと笑顏に匿す妻が苦痛。ありし花は花ながらに散りて、をぞや緣なればこそ妻とも思はぬ女を妻として、三年の戀に憧憬るゝ良人を、さりとも知らで、悲しや外に勝す花もと、妻が殊勝しき怨み言にも、斯くとは明かされぬ良人の愁嘆。疑心は暗鬼を生じ、幻は影となり影は形となりて、些細な感情の行き違ひから良人が怒れば妻は怨む、終には出て、うせう、ハイ〳〵此處ばかり太陽が輝ると云ふではなしと、さら〳〵薩張り未練の殘らねば、隨分お樂しみ遊ばせと、小褄掲げの捨臺詞、以後勝手に不貞るが宜からうと良人の毒舌、見歸りもせず見送

りもせず、斯くして平氣で他人となるのである。

併しながら之等は結婚の始めに於て、既に運命を誤つて居つたのであるから、氣の毒は氣の毒ながら當然の結果で、這麼人は寧ろ運命に潔く服從するの勇氣が必要でありますけれど、

良人の不品行と

妻の不貞操と

に原因する離婚も世には隨分多くある樣でござります。

元より妻の不貞操等は言語に絕して、善いの惡いのと云ふ迄もありませんが、昔は河原者と卑しみたれど、眉美しき俏身軀な優姿に、戀慕を焦し玉ふ貴夫人すら居らつしやると申す程で御程いますから、況して下流社會に至つては、稻妻や昨日は東今日は西、夕熊さんと差し向ひに長火鉢を圍んで居つた者が、翌朝八公を膝の上に乘せて耳垢を取つて遣る位は、夫れ程の罪とも思つては居らないのであります、けれど、這麼事は、幾らか自分の體面を重んずる樣な人にあつては極めて稀なので、法律の制裁上からも多くあり得可からざる事と思ひますが。

良人の不品行

に至つては、最も多く離婚の原因の大部分を占めて居る樣であります、で御座いますが之れには、

良人自ら多情な爲と、

妻の愛情の足らぬ爲

に良人をして不品行にして仕舞ふのと二つがあります。

良人が天性多情の爲めに不品行を働くの等は、私共は怎うして見やうもありませぬけれど、後者に至つては一に私共の罪で御座います、而かも、此種の不品行者は比較的、否不幸にして家庭の趣味を解する事が出來ないで、勢ひ他の方面に慰安を求むる人等迄入れたら、殆んど盡くと申したい位であります、けれど勿論前者に屬する者も決して今の處少ないとは、云はれ無い位なので、勿體なけれど當今の時めき玉ふ邊り、色好まざらんはとて、

あらう事が有るまい事か、好いて欲つて落籍かせた夫人に、幾夜涙の空閨の憂き目を見せ、滅多に翻すまじき英雄の涙を、唯譯もなく美しい辨天樣の前には、隨喜渇仰の涙に咽んで、居らつしやる等は、舎人等賜はる可き由々しき貴紳なりとも、何れ人間の種ならぬ狒々御前とでも申し上げ奉りませうか、這麼のは、人倫を以て到底濟度しがたき色情狂で御座いまして、社會へ害毒を流す恐るべきバチルスであります、裸體畫の風俗壞亂のと繪葉書や等に迄注意して下さる拔目無き其筋の方々が、何故此の種のバチルスと艶いて往來を歩行き廻る犬や猫等を、取締つて下さらぬのだらうと不思議に思はれるのであります。

けれど、健全な社會にあつては這麼バチルスの蔓延る筈は御座いませんから、罪の一半は慥しかに私共も負はねばなりませんが、前にも申した通り、妻の愛情の足らない爲に、若しくは妻の不注意から謹嚴なる良人をして、柳暗花明の衢に遊ばせ終には忍ぶ舟板塀の百夜の情に、家庭の平和を破る樣になるは、怎うしても妻なる人の罪は逃れられません、妻が眞情を捧げる事に躊躇したために、良人の愛を失つて悲慘な結果を殘すの等は、妻は良人に温かい優しみを吐露し無い限り、之れに向つて救濟策はありませんが、

妻の不注意の爲めに、良人の愛を失ふ等は大小 私 共が顧るの餘地があらうかと思ひます。

其れに就いて私は今思ひ出しましたが、誰やらが、日本の婦人は良人に甘つたれる事を知らぬ、其れから、良人に對する手管と云ふものを辨へて居らぬ、だから勢ひ良人は家庭外に慰籍を求める樣になつて仕舞ふのだと、仰しやつた方が御座いました。

甘つたれると云ひ、手管と云ひ、一寸考へると卑屈な賤しい樣な氣も致しますけれど、佛樣にも方便があれば、武人にも武略があると古人も申されました通り心の持ち樣では其の目的さへ誤らねば、決して恥づ可き事では無からうと思ふ、唯此の間の消息が醜業婦等によつて能く研究されてありましたので、其れで、何

となく不見識の樣ですけれど、良人に出し拔かれて泣く怨む、奥樣にはあるまじき醜體を演ずるより餘程氣が利いて居ります、況して千里の駿馬も、駄馬にしてあるからと云つて、之れを見捨つるのは、甚だ度量の狹い夫れこそ卑屈な、決して大事を成し遂ぐるの器では無からうと思ひます。

けれど佛の方便と云ふも武人の武略と云ふも婦人の手管と云ふも、極端に論ずれば公明正大とは云はれませんから、勿論切にはお勸告致しませんけれど、眞面目と云ふものは人の嫌厭を引き易く、變化は永久に新しい生命を與へるものですから、一寸御參考迄に申して置きませう。

○金錢問題

之れは近頃某伯爵家に行はれた悲慘なる離籍問題も之れで御座いませう、持參金附きの奥樣を頂戴遊ばして、良人器量惡く手を燒かるゝも之で御座いませう、月給が少ないと云つて飛び出すのも、世帶持ちが惡いと云つて去るのも、甚だしきは家が左前になつたの、貧乏したの、良人に見込が無いのと、離婚問題を擔ぎ廻るのも之れでありませう。

世の中が進んで人が黄金を崇拜すればする程、此の種の離婚も隨つて多くなつて參りませうが、一番馬鹿げた滑稽な理由の無い話しで御座います、相互に分外の野心とか虚榮心とかさへ出さず、分に安じて己を知るの明さへあれば、決して不平等の起きやう筈がなく、起ねば、決して忌はしい離婚問題等が持つ上らう筈がありません。

人事は複雜で、離婚の原因等も一々此處では申し切れませんが、要するに、表面では甚麼口實を設けやうとも、歸する處は多く此の範圍を脱する事が無からうと思ひます。

畢竟、新舊思想の衝突にしろ、夫婦間の不信及び金錢問題にしろ、全然私共が責任を逃れると云ふ事は出來ませんのですから、私共の注意の如何によつては、今後我國の離婚數の少なくも、半數以上は減少する事が出來樣かと存じます。(完)



家庭に於ける兒玉大將

婦人記者

智略勢望一世を籠罩し、濶達洒落社交の花と稱へられし故將軍にかしづき、拾三人の子女を撫育して内政を統治されし松子刀自を藥王寺前町の御邸に訪問致しましたが、未だ御取込中との事で令嗣秀雄氏代つて應接間へ導かれました、此室には滿韓の風景額三四を揭げ、左側書棚の上に書幅の箱數多積まれ、傍らの文具棚に刀劍、彈丸、尉と媼の小人形、及び兎、虎、ボンチ人形、張子の達磨なぞの玩弄品を置き、右手の小棚にはナポレオン夫妻の小さき塑像、文箱、手箱の雛道具なぞ可愛らしい物を飾られたのを拜見しますと、可憐の令息令孃が快活の父君を包圍して如何に和氣藹々と樂まれたかを想像致すと共に、憎き嵐に襲はれ給ひし花の如き御遺族の今日此頃を忍ばれて狹き胸は塞がりました折、編下げにリボンの飾りもなき拾一二の令孃が一握りの花束を花瓶へ挿んで佛間へ持ち行かれんと廊下を步まるゝ處へ、來客を送つて二階より下り來られし方の『鷄頭は臭ふなりますから』云々と指圖さるゝ御聲が何となく寂しく感ぜられました、令嗣秀雄氏も接客に御多忙の御樣子にて漸く此室へ來られ、

窓際の椅子に寄られし御風采を見上げますと、廣き額、締つた口元、炯々たる眼眸に愛嬌を含まるゝ處など故將軍の面影の髣髴たるを感せしめられました。氏は極めて快活異卒な調子で葬儀の御寫眞數葉を見せられたる上左の通り語られたのです。

▲同胞の總會

折角の御出ですが、昨日やつと法事を濟した斗りで殘りの用事がごた付いて居り、母も彼の通り客にかゝり切りでありますし、且今少しの間は父に關する談話を避けて靜養させたいと思つて居ますから……。其寫眞ですか、夫れは皆參謀本部の技手が撮つたのですが大層よく出來ました。併し今暫らくそんな物は見ない方が宜いのです。御承知の通り私共同胞は十三人の內貳人缺けて現在十一人と云ふ多勢ですが、成人してから一處に集まることは殆んど無く、一同顏を合せたのは今度が初めてなのです。ですから唯今は却つて賑かで母も幾分か紛れて居りませうが私も統監府の方が非常に忙しいから、月中頃には是非共歸らねばならず、次の弟も不日上海へ歸り、又其次の弟達も各々寄留地へ歸り妹達や小さい弟共も學校へ通ひ初める左樣なると晝間の內は母が嘸淋しい事でせうと今から思ひ遣られます。

▲故將軍の家庭趣味

親爺は御承知の通り是れまで外の事にばかりはね廻つて、家庭の暖みと云ふことは餘り味はぬ方でしたが、戰爭中暫らく荒々しい生活をやつて居た反動でもあるか、年を取つた故でもあるか、今度歸宅後はめつきり樣子が變り、役所から退いて來ると、客でもない折は子供を側へ寄せて面白相に一處に遊んだり、菓子を持つて來いの、茶を持つて來いのと左も樂しげに見えたので、是れからは母も子供も家庭の樂しみを親爺と共にする事が出來ると云ふ處でポックリ持つて行かれたから、愚癡のやうですが實に惜しくて堪らないのです。

▲一家の主宰は母君

親爺は昔から少しも家の事に構はぬ風である上に、

非常に多い來客のために家に居ても母と顔を合す事のない日がある位で、財政から萬端の切盛は皆母の手一つで致して居つたので、今日親爺が亡くなつても、此點には少しも差支へは無いのです。若し母が親爺にばかり依賴して氣樂であつたならば、親爺が遺言も出來ぬ急病で亡くなつた今日、始末を如何して宜いか狼狽するに違ひありませんが、是れは私共も大に安心して居る所なのです。其代り今日の位地になる迄の母の骨折は御話しになりません、何にしろ低い身分で十三人の子供を持ち、それ〳〵一通りの教育を施さうと云ふのは却々の事であつたらうと思ひます。併し母も子供も壯健で善く働らき得られたから、幸ひ親爺は內顧の憂もなく職務を盡し得られたと申しても宜いのでせう



▲母君の勵精は健康の基

母は別に嚴しい衞生法は講じないですが、朝から晩まで下女と一處になつて勝手元を働らき、子供の世話をすると云ふ繁忙が自然健康の基となるのでせう。唯今下女は五人居りますが、客多うではあり、子供多うの事ですから、母が先達になつて勵精しなければなりません。夫れで母は玄關と臺所との中間に陣取つて、內外の事を監督しつゝある間に始終針仕事の手は休めないのです。

▲朝起と食卓

親爺は極早起の好きな人でしたから、母始め一同朝は早く起きる代りに夜は九時になると女共まで寢かして了ひます。子供の食物ですか、私の處では餘り嚴しいことを言ひませんが、菓子を與へる時間なぞはチャンと定まつて居ます。而して三度の飯でも茶菓子でも、長い食卓で家族も雇人も一處に食ふのです。親爺だけは一二皿の副食物を多く添へる事があつても、あとの家族は雇人と平等に遣つて居ます。

▲母君の世話好き

親爺も一體人の世話を燒くのが極好きでしたが、母も亦これが道樂な方です。親爺の友達で死んだ人が澤山ありますが、母は此未亡人の世話を燒き、金錢の始末までも世話すると云ふ風ですから、可なり多勢の顧問となつて居り、此連中は始終來訪されるので、華美々々しいハイカラ客はなくても、母の客は隨分多い方です。併し誰が來られても別に御客樣扱ひをするではなし、針仕事をやりながら話して居るのです。母は前申す通り年百年中監房のやうな室に扣へ込んで家事萬端を指圖して居ますから、交際社會へ少しも顏出しせず愛國婦人會へすら出た事はありませんが、實際出られないのも無理はないのです。

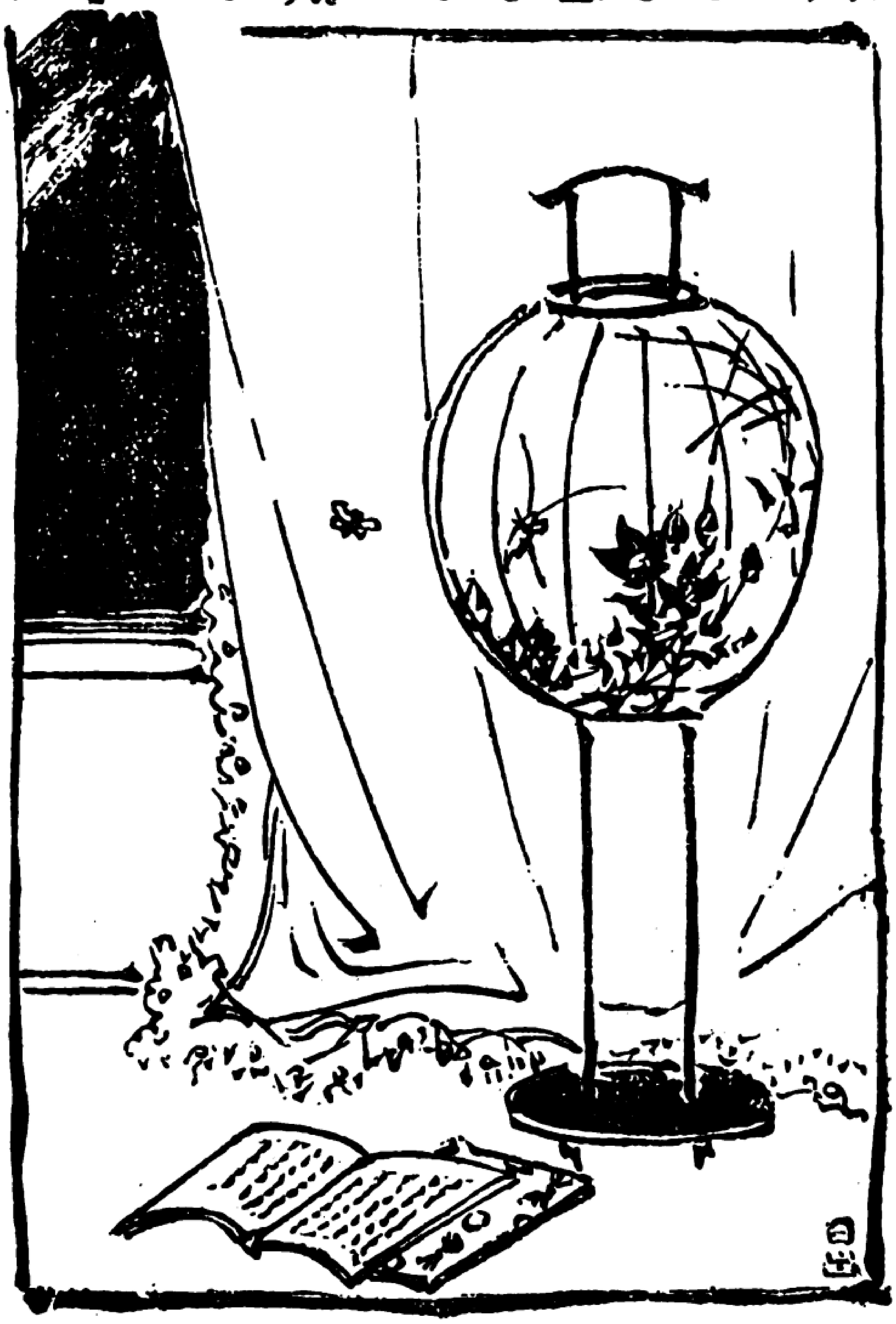
▲母君の往年

母の生家は大阪の岩永ですが、十八位の時此家へ嫁に來たので、親爺とは六つちがひです。私の家は御承知の通り維新の際正義派に與した爲め藩の俗論黨から攻擊を受け、伯父は殺害されて祿を沒收されて了ひ、一時スッテン〳〵になつたのです、維新後漸く取立てられたとは云へ、極の薄給で其上傳來の財産は少しも無し、母の嫁した頃は本當のカラケツ身上だつたのです。私の生れたのは親爺の二十五の歲即ち明治九年で、翌年は鹿兒島戰爭でしたが、母は私を連れて親爺の姉(久子氏即ち兒玉次郎彥氏の後室)と共に親爺の任地熊本から大阪へ立退きました。其後の生活は、前申す通り親爺はあんな風で家事に無頓着の上に貧乏の子澤山おまけに男ばかり五人續けさまに年子同樣に生れると

云ふ仕儀で、手一つの母の勢力は却々なものでした。何んだか餅も如何だとか云ふ正月が在つたなんて今でも一つ話にして居ます、兎に角多勢の子供にそれ相應の教育も施して今日では假令車挽同樣でも自活の道を立て得るまでにして吳れたのも、全く母の賜であると感謝して居るのです。

▲伯母君久子刀自の性行

親爺の母代りとなつて訓戒を垂れ乳呑兒の世話をして母の勢を半ば擔ひつゝ、今日まで續けた恩人は、實に親爺の姉であります。此の伯母は、



良人即ち親爺の義兄が殺害された時は十七歲の少齡でしたが、所謂兩夫に見えずと云ふ昔氣質で、其時よりズーッと今日まで此家に居て家の手助けして吳れたのです。此伯母は禪道を明らめたと云ふべき人で、喜ばず悲しまず、唯一つの樂しみは寺參りをするのだけですが、敢て宗旨を問はず、何處から何處まで寺歩きをして一日も缺かしませんから、近隣の人は大抵よく知つて居ます。此度老の柱と賴み、子と慈しんだ親爺の變に遇ふた心中の痛悼は少しも色に表さず、至極落着いて居ましたので、

後藤さんが此方の御姉様は禪學を爲された方ですかと問はれた位です。此伯母は至つて話下手でありますが、人に對する愛が深く、甥姪共は祖母の如くなつき、私の母は親の如く信頼して居るのです。伯母は私共に向つて斯う申して居ます、『弟は生前先づ悪い心も持なかつたから必ず極樂へ往くと信ずるが、却つて後に殘つたものが道心を堅固にして家名を傷けぬ心掛が肝要である』と。

▲令孃の敎育

一番上のは十九歳で、華族女學校卒業後專ら母の助手となつて臺所へ詰め切つて居り、料理もすれば洗張りもする、其暇に裁縫やら弟共の洋服の出し入れやら、其樣な事ばかりさせて置きますから、まア普通の嫁にやるには差支へない積りです。他の妹達にも自分の身仕んまく丈はさせつけて置きます。女の子には家に在る内餘程萬端に渡つて練習させて置かなけりあならんですなア、洋服の疊み方とか、名稱とかも覺さして置かないと、燕尾服を持つて來いと言付けるのにフロックを持て來たりするやうな不細工を演じないとも言へませんし、靴なぞも磨き方一とつで光澤も出るものですから斯類の熟練は女子に最とも必要で、假令相應な家に嫁して召仕にやらせるにしても眞闇暗では指圖が出來ません。いくら前髪の廂を張出したつて實際に狼狽しちやア直打はないでせう。又眼識の鋭い人は庖丁の遣ひ方を一寸見れば、其婦人の直打が直ぐ分るさうですから、却々うつかり出來ません。併しいくら臺所が肝心だと云つて身だしなみを忘れてはならんと私が八釜しく言ひますが女の天性で他を見やう見眞似に何樣か斯樣か御化粧は遣つて居ますよ。

▲秀雄氏の令閨と令孃

私の妻ですか、これは宅の母や妹と好一對で矢張り臺所の番人である事は、妻の手を御覽なさると貴女方には直ぐ御分りです。何しろ實母を失つて今の母が來るまで自分獨りで父(寺内陸相)の世話、家の用事を一切やつて居たのですからなア。左樣十七の時參つて二十二になつたでせう。子供は五歳になる女子が獨りあ

るのみですが、赴任地の朝鮮は唯今の處、家はなし、水はなし、牛乳はなしと云ふ始末で子供を置くのを祖父母が心配するから此家に預けてあります。親爺は此孫を非常に可愛がつたのでした。

●兒玉大將の義俠

故大將は極めて世話好きなりき爰に近き一例を擧げて其美德を頌せんに一昨年を以て物故せし陸軍大將山口素臣氏は不幸にも遺子なきより可惜名家の跡を空しく斷やさんこと殘念なりとて兒玉大將は深く之を嘆き陸軍次官石本新六氏と倶に謀り維新當時の志士大阪の人大岡某の遺子而も石本次官の義理ある甥工兵大尉石本祥吉氏の令弟にして大岡氏の十八男に當る近衛歩兵大尉大岡十八氏(二十九)が幼少の時より山口大將の愛撫薫陶を受けし關係あるを幸ひとして同氏を立てゝ其家を嗣がしむる事と定め一方には山口大將令兄の遺子縫子(二十)をば兒玉大將が養女に貰ひ受け充分教育を授けし上十八氏に嫁す筈にて爾後跡見花蹊女史に其教育を托せしに縫子も能く兒玉大將の恩愛に感激し拮据勉勵の末好成績をもて今春卒業するに至りしかば山口大將地下の靈を慰む可く準備を整へ改めて兒玉氏方より寺内陸軍大臣、山口氏方よりは石本同次官各媒介の勞を執り恰かも兒玉子薨去の十二日前七月十日を以て華族會館に於て新郎新婦は朝野貴顯紳士參列の前に壯んなる華燭の典を執り行はれたり當時兒玉大將は衷心より滿足の體にてあゝ是れで安心したと實子の婚儀を擧げしが如く見えたりと因に新郎新婦は目下青山北町の邸に在り理想のまゝに新家庭を作りつゝあるが故大將の恩惠を思はゞ其感想や如何ならん。

●兒玉大將死期を知る

古しより名僧智識として世に知られし諸高德には自分の死期を豫知せる人々少なからず彼の成島柳北翁、勝海舟伯、前圓覺寺管長今北洪川禪師、若くは中島湘烟女史の如き皆な之れなるが故兒玉大將にも亦た之に似寄りたる話ありとて故大將と昵近なりし大島大將の語る處を聞けば兒玉大將は今春兒玉家家扶某氏の子息が肺患に罹りて起つ事能はざるを自覺し躬から縊死を遂げし際の遺言書中に自分も元は兒玉家の緣族にて同じ士分に屬し居るものなるに男子らしく割腹せずして縊死を遂ぐるは如何にも女らしく思はるゝとならん余は死後自分の死體を解剖して醫學上に貢獻して貰ひたき望みより態と縊死を遂る旨細かに書遺たるが大將は此の遺書を見て非常に感ずる所ありしものゝ如く石黑

軍醫總監を招きて解剖の事共萬事を懇談したるとあり其後になりて石黒男は同人供養の爲めとて兒玉子及び子の家族其他と與に某所にて最とも丁重なる法要を營みたりしが其節兒玉大將は第一席に起て一場の演說を試むる樣病の局所の何れにあるかは醫學の解剖によりて明瞭なるべきも、人生觀より觀察して人の精神を解剖する事の出來得べきものなるや奈何斯は神靈上の事に屬し醫師の手に及ばざる事なれば大德知識の高僧方に其解剖を仰ぐの外なし併し人生は無常なり斯く申す兒玉源太郎も或は近き中に死せぬとも限らず云々とあり人もあるべきに洒落飄逸の大將が之等の言を爲すには滿場の人々も一時奇異の感に打たれしとの事なるが同大將は其後も數々之に類似の談話をなすとあり或る時の如きは家族に向ひ予が今の西洋館を増築したるには一つの事情あり即ち予が死したらん後には秀雄は必ず此の西洋館に棲むまじと思ふより其時は此の邸宅を此儘西洋人に貸與へん爲め西洋人向きに増築したるものに外ならずと云ひ又先達て桂大將大患の事を聞及びし際桂は大丈夫癒るべきも予は或は桂よりも先立つべし抔と語り去る七月十六日某所に於て寺內陸相大島大將及岡澤大將等と小宴を催して酌婦數名を侍らして互に懐舊談に興じつゝありし時兒玉大將は突然と某老妓に向ひ今日は盆の十六日にて昔より地獄の釜の蓋さへ開くてふ日柄なれば今日こそは貴樣等に望みの馳走を取らすべし併し來年の盆には己れが佛と爲りて貴樣達より供養を享る事になるやも知れず抔と戯むれしが神ならぬ身の誰か今日の事あるを知り得べき其時は左程にも感ぜざりしが今から思へば兒玉が彼の時に戯むれしは俗に云ふ虫が知らせたものか人生の事は實に刹那の先も眞暗なりと言ふべし云々と泫然として物語れりと。（日本新聞）

△新參謀總長の家庭

兒玉大將の椅子を襲ひて參謀總長となれる奥大將は前總長の如く磊落豪放の質でなく極めて眞面目にして寡言の性なれども其沈勇器度は前總長も一步を輸するといへば毀譽褒貶に耳を勞する底の小量人ならざるは勿論なり一槪に言へば武邊一徹昨今は好きな酒も少量に減じ僅に園藝を娯樂とし更に又凱旋後部下の將卒より依賴越したる篇額其の他の揮毫に餘念なく時に漢詩にこと寄せて想を滿洲の野にやらるゝとあり夫人茂子は舊小倉藩小笠原伯の舊臣原喜一郞氏の實妹にて是まで三男を擧げられしも長男次男とも夭折し三男保夫(二十四)氏嗣子となり近衞步兵第三聯隊附步兵少尉として軍隊生活をなし居る故大將宅は非常に淋しきものなりと。

井深花子女史の學問活用談

中村鈴子

女子教育家として錚々の譽れある井深花子女史を頃日訪問致しました。女史は舊備前天城藩士大島協悠氏の第四女として、慶應元年二月藩地に生れ、明治十六年神戸英和女學校へ入り、卒業後鳥取英和女學校教頭として英語及理科を教授されたが、在職二年去つて米國の女子大學に入り、二十八年卒業して理學士の學位を受領し、直ちに歸朝して神戸女學院理化學主任教授と爲り、三十三年東京なる井深梶之助氏に嫁せられ、爾來女子學院、麻布英和女學校等に教鞭を執つて居られます。女史は幼にして嚴格なる武士的教養を受け、長じて基督教の道德思想に感化せられたので、人格高くして且つ常識に富まれ、教育家として衆に仰がるゝのみならず、家に在つては良人を慰籍し、七人の子女を薫育せられ、學問ある婦人中で自から模範となつて居られます。女史の御話は――

▲學校と家庭の聯絡

學校教育を受けた女子が一家を持つて、案外に結果が悪いと評されますのは、一つは世間の女學生あがりの主婦に對する要求が多過ぎる故でもありませうし、二つには何樣も學校と家庭との聯絡が善く附いて居ないのに由ると存じます。唯今何處の女學校でも教ゆる家政學は、言ふまでも無く女子に必須のもので、私も益々此科目の發達を望んで居りますが、若し家庭教育がモ少し進んで居れば、家政學を特に學校で教える必要は無いのでせう。「日本では家政學を高等の學課としてあるが、一體何の必要があるのでせう」と疑を容るゝ米國女子のあるのは事實で、其樣いふ疑の起るのは道理です。彼等各々の家庭に於て、自然に教養されつゝある事が直ちに家政學の眞髓なので、學校教育と家庭と密接して居るから、わざ〳〵家政を科目に加へて時間を費すのを怪むのであります。私の居つた大學の

寄宿舍に在る女學生達も却々世帶や交際に慣れたもので、各自の室を自分の家の如く始末致し、室内の裝飾なども出來るだけ色の配合を巧みに致し、寢室書齋兼帶の一室をば應接間として寢臺を長椅子に代へ、卓の上も片付けて清潔にしますから、チヨツト立派な應接室になります。而して同寄宿生の交際の温かで、注意深いことは實に感心なものです。食堂に入るとき飲食ばかりを目的とするな、朋友を慰めるのを目的として、互に取持しつゝ飲食せよと云ふのは、平常教師が各生徒に敎へ込んで居る言葉なので、食事の際五分間談話の出來ない者は、社會に出る資格なき者と看做される位です。それで相互の親睦が深いのですが、禮儀は實に正しいもので、髮を亂し下げた時には室の外へ出ず、若し髮を亂して室の外を眺めて居る際に友達が來ると遽てゝ隱れ込む程です。豫め定めてある訪問日に友達が參つて一寸した食物を出す時でも、衣服は必らずさつぱりと着替へ各々用意してある小さな皿へ盛り分けて饗すると云ふ風で、風呂敷のまゝ御薩をかぢり合つたり、豌豆の袋へ手を突込み合つたりする無造作は、何樣な親しい間柄でも決して無いのです。其癖別に禮式作法の科目は無いのですが、家庭で母親の爲る事を自然覺えてそれが風習となつて居ります。斯樣に外容を慇懃にするから交情が疎濶かと申すに、互に心の底を語り合ひ、同情を以て慰め合ふことは實に感心なものであります。それから衣服の始末とか所持品の整理とか申す事のまめやかなのも皆家で自然と覺えるので學校と家庭と少しも差別が無いから卒業後一家を持ても差支へが無いのです。私は休暇の際歸省する親友の家へ共に參つた事がありましたが、其友達は家に着くと直ぐに母親の代りとなつて臺所に入り、私に馳走する物を用意致し、其他衣服の始末の手傳ひなど一身に引き受けて立働く樣子が如何にも巧者なので、私が「貴女は何時の間に家事を御覺えなさつたか」と尋ねましたら、友達は笑つて、斯樣こと位は高等女學校へ入るまでに慣れて了ひますと答へました。彼地では山猿のやうな壯士じみた女子でも、學校の寄宿に入つて一期

も經つとズーッと樣子がしとやかになり、二期三期とピンが一寸曲つて居ても赤面すると云ふ工合、又談話經る内追々女らしい態度になりますが、此等が一寸日本の女學生と異る點かと思ひます。併し日本では家政學が盛んになつてから女學生全體が著しく好くなりまして、唯今の處如何しても此學を置く必要がありますが、唯父母が成る可く注意を拂ふて學校敎育を實行させるやうに致したいものです。

▲男女間の禮容

序に男女間の禮儀を申しませば、米國男女の間柄は實に窮屈千萬なもので、外皮ばかりの觀察とは大違ひです。男女互に容儀を注意し、女子は男子に對する時、襟飾の張容儀を愼み、母と娘同士なら寢衣のまゝでも拘はぬ



に於ても胸から下の肉體の名稱も堅く申さぬ位です。而して公園散歩等も必らず男二人女二人の二組に限り、差し向ひで步るくなぞは斷じて致しません、但し許嫁の男女だけは二人だけで步るき、衆人もあれは許嫁であると怪しみませんけれども、土地を少しでも離れて例へば東京から橫濱とか鎌倉とかへ參る際には、雙方から必らず監督者を賴んで同行してもらひます。男女間の堅くるしいのは朋友の間ばかりで無く、一家に十三四の息子があれば、母や姉は矢

が、息子の前へは寢卷姿も見せず、素足も見せぬほどで、娘が父親に對しても此注意があります。私は或る友達の家で共に寢臺に横つて居つた處、父親の靴音がしたので友達は惚てゝ飛び起き、父が來ましたから貴女も起て下さいと騷ぎましたが、其父親は八十歳ばかりの白髮老人でした。私は洋行前に外國の男女は精神的交際で些々たる外容には頓着なく、互の志操が堅ければ同衾したつて構はないのだなぞと亂暴な話しも聞いて居りました處、實際を見て其嚴重なのに感心致しました。外國へ往かれた方は誰方も仰ることですが、外皮ばかりを輕卒に見誤つて若い男女が自由に交際することが如何にも危險でなりません。彼地の男女が手を組んで歩くことなどは女子をいたはると云ふ慣習で馬車道の側は男子が歩いて女子を保護する位ですから一般に可笑な感じは致しませんが、日本では男女手を組んで歩いたりなどしたら弊害は必らず伴ひます。假令夫婦でも、風習が違ふ目には厭な感じを與へはしませんか。而して何も手を組んで歩く必要もないと存じます。

▲學問の消化

私は本暑中休暇前に年長の生徒に向つて斯う申しました、『貴女方は暑中休暇と云ふ靜養の際に、高等女學校時代から今日まで費した學資の結算と、今日まで習讀した總ての教科書の名目と、今日まで學校に費した時間と此三つを調査して明細に書いて御覽なさい、其學費は多額に上つたのに驚くでせう、教科書の積つた割に記臆の少いのを悟るでせう、又時間の積つて莫大になつたのを知つて此間に如何に利益あることを爲したかを顧みるに違ひありません。親御を煩はした少からぬ學資に依つて習ひ得たる書物は、多いやうでも專門學者の藏書に比べては書齋の一隅へ置くにも足りない位ですが、それだけの書物でも悉く諳じて居られゝば可いが、恐らく其十分の一も諳じて居られぬでせう。是れは誰でも同じことで、私が米國女子大學に在學中美術史に頗ぶる趣味を持つて居り、日本へ歸つては參考書も乏しいし、又買ふにしては高いものですから、

成るべく調べて歸りたいと思ひ、他人が一ページ筆記する處を二ページも三ページも筆記し、手帳も永久に保存する目的で丈夫な立派なのを用ゐ熱心に抄錄したので、其際には一寸記臆もして居ましたが歸朝後他の學科や世事に追はれる內全然忘れて了ひ、時々蟲干に出した際開いて見ても何の事やら自分で書いた事が分りません、やつと有名な建築の名稱とか、彫刻師の名とかをバラリ〳〵と拾ひ出す位實に遺憾で御話しになりません。若し此手帳が灰燼になつたなら美術史と云ふ名さへ頭腦から消て了ふに違ひないの



で、先づ女の學問は斯樣な事が多いやうです。扨又時間の點を申すと學校で費やしたゞけを家に居たなら、母の手助けも充分出來たでせうし、裁縫も可なり熟練したでせう。斯う考へると高等な學校敎育は女に無用であるかと云ふに是れは學問を其儘に解釋するからで、一度學問を消化させることに心付けば益々敎育の必要を感じられます。例へば理化學を修めたによつて自然頭腦が明晰になり、幾何を修めた爲めに事を處するに緻密となり、倫理を學んだ結果は今まで母や祖母が泣いて堪へた憂苦も、笑ひて天命を樂し

むの胸懐を得られると云ふ風でありましたら、一々女子の眞價を表す素養となりませう。若し生噛の理化學を振り廻して舊智識の年長者をへこませ、倫理を主張して不如意の家庭を歎じ、僅かの煩悶に耐へ兼ねて忽ち家を飛び出すやうな事があるとすれば、數年の學問は無用の長物のみならず、却つて學問の中毒と申すべきです。學問は丁度食物と同じで、如何に滋養分ある食物でも咀嚼もせず消化もさせず、牛肉は背にくつ付き野菜は手に付て居ては身體の營養が出來ぬのと同じですから、各科の學問は何卒此注意を以て心靈の營養を取りたいものであります。』と生徒に話したのです。

「私は理化學を受け持ては居りますが、一寸した講義にも學理以外の働きを話したい方で、例へば空氣は酸素と窒素とで成つて居る事、丁度男女兩性が互に協力する如しと云ふ工合に申しますので、自然口厳しくなりますが、生徒達は厭がりもせず、先生學科外の御話しを是非願ひますなぞと樂みに致す生徒もあり、又隨分忠告を實行しつゝある者も御座います。

▲女教師の内行

私の居つた學校の數學の教師は、四十餘りの未亡人で、學位のある立派な婦人でしたが、私は二週間ほどのクリスマス休暇に此教師の家へ共に參りまして、其働き振りに感じました。教師の家には繼母と妹がありましたが、妹は少し虚弱でしたので、常に繼母の骨折を案じ、休暇の際だけでも手助しやうと心掛けて居られました。女教師は我家へ歸省した翌朝、未だ薄暗いうちに起き『貴女は草臥れて居るから、寢て居らつしやい』と私を制して臺所へ出で、市外の住居なので牛乳を配達して來ないものですから、牛乳を買ひに行かれました。丁度寒さの強い朝でしたが、私の起きた時は女教師が最早ショールを頭から被つて歸つて來られた時でした。それから女教師は家族や私に朝餐を供したり、臺所の破損を繕ふたり、絨氈を剝して大掃除をしたり、全然下女下男の役を一緒に務め、少しも身體を休めませんので、私は氣の毒で堪らなくなり、『偶々の御休暇に歸家されても、却つて學校に居らつしやる

時より勞力されますが、それでは年中休養の時が無いでせう』と申しました所、女教師は『私は母と妹の平生の骨休めをさせるのが嬉しく、且つ珍らしい家庭の働きをするのが實に愉快なので、此變つた生活が學校生活に對する休養であります』と言はれました。ソコで私は教師の婦德を歎美致した處、『女の道を教へられたのは、一に此母上の賜です』とて繼母に感謝し、繼母は『此人の母が斯樣な善い性質の娘を生んで呉れたから私の幸福です』と互に讓り合ふ美しさは、誠に敬慕に堪へなかつたのです。

此教師は休暇以前に繼母の許へ「驚の箱」と云ふのを送りましたが、これは衣服の切地とか手道具とか菓子とか、樣々な物を意匠を凝して箱へ入れて遣るので、貰つた母は開けて驚くと云ふ趣向で慰藉の贈物ですが前に送つた切地を繼母が未だ衣服に仕立てなかつた事が學校へ歸る前に判つたので、これもセッセと縫ひ、翌早朝一番汽車で立つと云ふのに夜十一時頃迄かゝつて、遂に繼母の衣服を仕立て上げました。學位まで有つて居る此婦人が家の事に忠實なこと何と感服ではありませんか。私は途中で年長けて袴を穿いて居る婦人を見る每に、彼の人は家に歸つてから父母若くは良人に善く仕へるであらうか、或は袴を脫いだ儘ごろりと横になつて旦那貌をして居るであらうかと想像致し



女壯士風の敎育家に率ひらるゝ女學生の運命は實に歎ずべきであると考へますが、これと同時に自分の服裝や擧動を觀て、種々と想像し且つ敎育上に及ぼす影響を考へる人がありはせんかと、始終深く自ら省みて居ります。

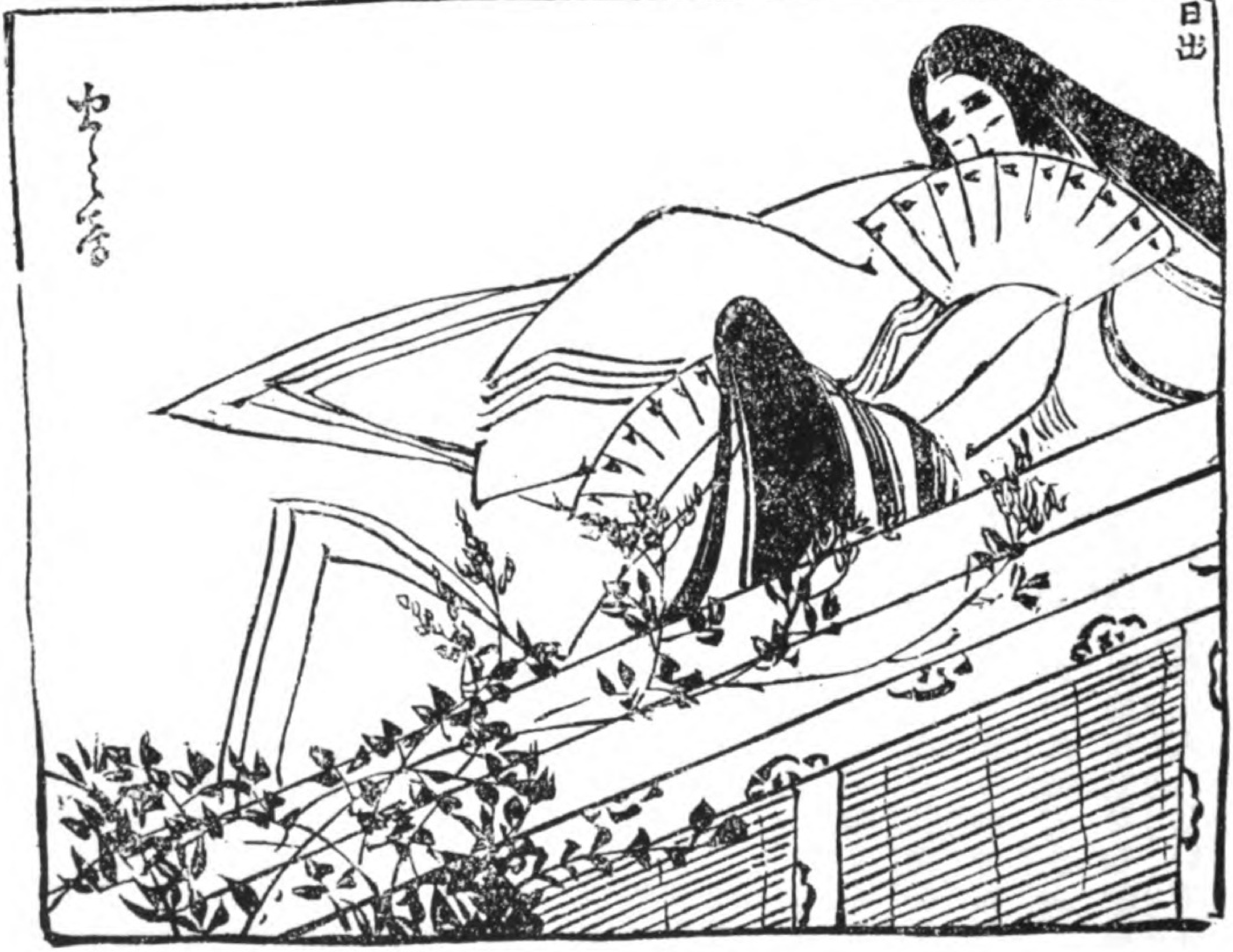
▲女子の職業と母親の權利

敎師の責任も重大ですが、母親の注意が最も肝要なのです。娘が學校で受けた敎育に敬服するの餘り、母親の權利を棄てるのは宜しくありません。例へば舊思想の母親が、雷の鳴るのは鬼神の業と思つて居る所へ娘は電氣の作用で雷の鳴ることを說き、日本海の大海戰に就ても、東鄕大將とネルソンを比較したり、弘安の時宗を評したりすれば、母親は成程々々と只管娘の學問智識に一々敬服する、斯樣な事ばかりに敬服して居る間はまだ可いが、常に一歩を讓る間に自然と位置を顚倒して、我儘まで通させるやうに意氣地が無くなります。而して其娘が又女敎師にでもなれば、大層えらひ者になつた樣に心得、歸つて來れば着物もたゝんで遣り、團扇で煽いで遣り、全然殿樣扱ひにする。先づ斯う言つたやうな母親が隨分ありますから、其娘は學校で先生々々と立てられ、家へ歸つて主人の如く敬はれる爲めに、自然と驕慢放肆に流れ、結婚後も此癖が脫けず、何樣にも始末にいけぬ婦人と爲り了るのでせう。私は停車場の切符賣る若き婦人、諸會社の女子事務員などを見る每に、其家庭に於ける母親の態度を想像するのです。全體母親と云ふものは、假令自分が無敎育であるからとて、娘に向つては決して一歩をも讓るべきでは有りません。娘が親を說き伏せ得るだけの學校敎育は誰が施した、又其敎育を受け得らるゝだけの身體に誰が育てた、親は子女等の未だ知らざる實驗を積んで居る、舅姑に對する務、世に處する術、總べて子女等の指導者であると云ふ意氣込で、常に威嚴を十分に備へて居らねばならぬ。折角娘に學問させても、其學問が娘の身を殺すものになるに過ぎません。又隨分敎育ある婦人が、學校敎育の實際の役に餘り立たぬのを慨歎して「私も永々學校で無駄な事をしたから、

娘は最早學校へ出しますまい』など丶失望さる丶方もあるさうですが、これは前に申し上げた學問の消化と云ふ事に氣付かず學問其儘を用に立てやうとする誤りから起るので、社會の進歩に連れて女子の教育は益々必要と爲り、これを消化させて常識に富める婦人を作ることは、最大急務であると存じます。

▲女史の經歷

私の父は進歩主義でして、早くから家祿を奉還して浸害地の埋立を企てたと云ふ風でしたから、



私の幼時は家計が非常に傾きましたのです。其上私の九歳の時から母は中風に罹り、私が十七歳の時に亡くなりましたので、私は小さい内から病人の看護にも慣れ、隨分世帶の苦勞も致したのです。小學校をやつと卒業してから三年間ばかりは、炊事の間に糸も紡ぎ機も織つて働いて居ましたが、半襟一つ買ふにも不自由な家計でしたから女ながらも小費を得る仕事を致して、親の助けをしたいものと始終考へて居りました內、圖らず神

戸の學校へ入る機會を得て寄宿生となりましたが、家からはホンの小費を送つて呉れるのが漸くですから、月謝や賄料は學校内で働きました。それは裁縫などの時間には出ないで、豫科の生徒を教へたり、病人があれば其介抱を致したり、其樣な役目を受持つて、學費を免して貰つたのです。私は迚も卒業は出來ないと締めて居つたのが、意外に卒業が出來、加之米國へまで參り得られる事になつて、實に望外の幸福でした。私の母は極嚴格な武士氣質で、幼い子供にも武士の娘たる道徳を教へることが深切でしたから、九歳頃までに聞いた訓誡が今以て頭腦に沁み込んで居り、聊か米國風の教育を受けた身でありながら、矢張り母の訓誡によつて心靈を益する事が少くありません。但母は餘り嚴格な氣質であつた爲めに同情とか慈愛とかは乏しかつたかとも考へますが、憎まれた近所の者が敬慕するのを見ますと、同情は確かにあつたのでせう。基督教の道徳に涵養された外國婦人になりますと、勉めて人を愉快にさせやうと云ふ積極的同情が勝つて居るかと思ひます。日本の武士氣質も基督教徒の同情も歸する所は同じ道ですが、私は何卒此武士氣質が消滅しない内に、基督教を沁み込ませたいものと考へます。宗教も國の習慣によつて多少變化を要しませうから、日本魂の美質へ基督教を混合したならば、必ず完全な日本の宗教が出來るであらうと存じます。

▲女史目今の生活と簿記

私は年を取つてから此家へ參りましたので、唯今では夫婦の外に一人の姑と五人の養子と私の生みました男子二人といふ家族で、一人の娘は最早縁付き、長男は先づ自活の道が立つて居ります。私は縁付いた後も教育事業に身を委ね、是れまでに學校の教育を受けた義務を濟まさねばならぬと云ふ素志でしたから、縁談の始まつた際に、其精神を申し込みました處、決して差支ないとの事で參つたのです。義務の點は先づ濟みさうですが、此家の生活上から申しますと、私は何時出勤が出來なくなるかも知れないから、何卒私の收入を生活費に入れないで生活を立てゝ行きたいと存じ

種々苦心しますけれども、既に私が學校へ勤める爲めに子供の守も要る。被服費も家ばかりに居るよりは要る、車代や交際費も要る、寄附金義捐金なども要る、自分が勤めて居なければ成るべく内輪に爲し得らるゝ所も、勤めて居れば時として身分不相應と思ふほどに致さねばならぬ場合も御座いますから、夫婦共稼と申すものは、決して他から見らるゝほど生活向の樂なもので無く、幾分かユックリ義理ある娘達にも着せられると申す位です。簿記で御座いますか、米國に居りました間は、一家を持つて經濟を遣る考へでも無かつたので、各自何様な式に致すか調べても見ませんでしたが、先づ家々の生活向に準じて、便宜な方式に作るが可いかと思ひます。豫算を整然と定めるのは、無論宜しいと存じますけれども、私共のやうに裕かでない家計で割合に臨時費の多いのは、或費目の内から臨時の支出を間に合せる場合が毎々で何様も巧く參りません。それで簿記は現在金と使ひ方と殘金との三通に區別し、帳簿の殘金高と現金とを一週間毎に調査致します。若し支出が細々立て込んだ際は、二日目三日目に調べるので、勘定が合はないと夜が深けても寢ないくらゐ嚴重にして居ります。主人から毎月主人の小費を引いたものを生活費として預り、自分の收



入をこれに加へて遣ひますが、私の收入は成るべく臨時費と云ふ積りに致し、帳簿を別にして何圓修繕の爲め、何圓被服の爲め、何圓公共の爲めと云ふ風に、金高と目的だけを記して置きます。

▲貯金は義務

外國人は實に貯金思想の强固なもので、『私共のやうな牧師の境遇で如何して貯金が出來るものですか』と申しますと、それは大きな心得違ひて、貯金は自己を利する爲めとばかり思ふのが誤りである、若し一朝疾病其他の不幸に遭遇した時、忽ち借金して他人の厄介となる樣では、社會に對する義務を缺くのみならず、己れが人の厄介となつて居ながら、如何して人を救ふことが出來やう、貯金は神聖な仕事と心得て、假令一個月に五十錢宛でも義務の觀念を以て積まなければならぬと、斯樣な忠告を每時受けるのです。一體外國婦人は金を費ふのが上手で、而して物を粗末にせぬ事は實に感心です。明治母の會で有名なコーツ夫人の許に同宿せる日本婦人から傳聞した話ですが、コーツ氏が着けて居る毛織の下ばきを見ると、其破れを繕ふたのが實に緻密に丹精に、裏か表か判らぬほど幾重にもからげてあるさうです。コーツ夫人が每々言はれるには『日本の婦人方が金に困る〱と宜く言はれるが、一つは遣り方が拙いからでせう。總て衣類其他の修繕といふ事が甚だ冷淡のやうに思はれます。洋服の下ばきなども、少し良い物を買ふて、繕ひを忠實にすれば實に長く持つものです。少しの破れの內を忽せにするから、大破れとなつて直に棄てたくなる、これは大なる不經濟です』と。これは傳聞ですから、或は伺ひ違ひもありませうが、兎に角、緻密で忠實な働きが、經濟の基礎であらうと思ひます。

▲衣服の始末

私は元から衣服を拵へるのが嫌ひでもあり、又た財政上出來もしませんから、自分だけの衣服は誠に簡單な積りで居ります。併し土用干の時に見ますと、何だかゴタ〱多過ぎて、如何して斯樣に無駄な物があるだらうと存じます。偖それなら何れを省かうと考へて

も、省けば事を缺くものばかりで、手の付けやうもありません。風俗習慣が違うから例に引くとも出來ませんが、米國の女學生達は實に衣服を巧者に始末するものです。私が我國を出立致した時、友人方から衣服を拵へて呉れましたので、四五着持つて參つたところ、大學の女學生がこれを見て、『貴女は何故斯樣に持つて御出でした。私共は斯う致すのです入學した初めに可なり丈夫な切地で一枚の敎會着（チヨットした晴着）を拵へ、翌年は胸や手先の飾りだけ取り換へて用ゐ、三年目には可なり古々しくなるから室着に下し、四年目には之を染め直して仕立て替へると、全然新しい物の樣になりますから、再び敎會着に用ゐ、翌年から前の順序を繰り返して之を着用致す。先づ斯う云ふ風で、學生時代の晴着は一枚で事足り、至つて儉約簡單なものです』と話しました。



▲主婦職業の得失

私の實驗上から、主婦の職業の缺點を申せば例へば私が學校で理化學の實驗を生徒に爲せますのに、何時も器械にばかり拘泥せず、日常手廻りの道具で實驗させる事を敎へたいと存じ家に歸つたら下拵へして見る積りで居ても、學校の門を出て電車に乘りますと、アッ今夕は主人が敎會へ行くのであ

つた、歸つたら直ぐ仕度をして遣らねばならぬ、左樣左樣今日は何々を買つて歸らねばならぬ、など〻考へは最早家の事にばかり走つて、教授の事は頭腦を離れて居るのです。それから家に歸りますと、何や彼や俗用に時間を奪はれて、實驗の準備も出來ず、據ろなく來週まで延すと云ふ事がありますので、實に職務に對して濟まぬと耻ぢ入り、主婦の職業は恐らく誰しも斯う云ふ缺點があらうと歎息致します。併し又た善い側から觀ますと、獨身生活の婦人は、外國婦人のやうに常識があつてさへも、年を取るに隨つて幾分か我儘に傾き易いのは、實に心理上免れ難い所です。境遇の然らしむる所ではありますが、夫を有つた婦人は、自然と獻身犧牲の精神を養はれて居りますから、生徒に對して教科書以外の教訓を吹き込むことも出來、折々は自己失敗の經驗などを交へて家政に適切な談話も出來ると存じます。

井深夫人の思慮周密にして、且つ道德思想の强靭なる、一言一語も浮虛の點なく、肉は皮裡に堅く滿ち、血は肉裡に活動して居るので、聽者はひどく動かされるのです。米國女教師の事を淚を浮べつ〻話された時の如きは、鈍き記者も非常の感に打たれました。

日本婦人の美點？

編者曰く、此一節は精細なる批評眼ある西洋婦人の談話としては、口吻あまりに輕卒にして且あまりに不常識のやうに思はるゝも、又多少の參考となるべき所あらんと思ひて、こゝに揭ぐ故に說の可否は編者之を保證せず。

SM生

一日グランド館に到り、同館滯在のメリー孃、ザツケンス夫人等と會話して、談端なく日本婦人の風俗に及ぶ。

メリー孃　日本の御婦人方の愼み深くて、何事にも默つて居らつしやるのには、私し感心して居ます。イエ言葉のみでありません、態度からして左樣ですよ。一寸途中でお見受け申しても、西洋婦人は、大股で後背にソリ返つて、胸を突出して歩くといふ風ですのに、御國の婦人方は前に傴んで、内輪に小股で歩いて居らつしや

るといふやうに、萬事が優しくて女らしいのですからお慎みが深くて、滅多に餘計な事を口にお出しなさらないのは、更に怪しむに足らないことゝ存じます。

▲日本婦人の情と涙

ヂツケンス夫人　イヤ日本の御婦人方は口數の少ない位の話では厶いません。私共の目からは、驚ろく程の沈着で、情といふことを知らないのではあるまいかと思はれる程ですよ。去年の二月頃の事と記憶へて居ますが私しの知合の少壯軍人何某さんが、出征を命せられて、滿洲へ出發せられた時、私



し新橋の停車場にお見送り致しましたが、プラットホームには、其軍人の方の花のやうな美しい若い奧樣と十五六になる妹さんとが、多數見送人の中に交つて居らつしやいましたが、言はば之が永いお訣れとなるのかも知れないのに、軍人の方は微笑を含みて、平氣らしく見送の重つた方々に一々握手されましたが、奧さんや妹さんの方へは振向きもなさらない、さうして奧さん達も、强て感情を抑へて居らつしやるのか、愈々列車が進行を始めて、萬歲の聲が處々に起つたときに

も、たゞ丁寧に頭をお下げなされた許りで、是が現世の別れとなるも知れない此の一刹那に、涙どころか、悲みの色をも顯はさないで、冷靜な風をして居らつしやるには、縦ひ愼み深いが日本婦人平素の教訓とは知りながら、何だか物足らぬやうで、私し少々腹が立つた位でムいますよ。

▲鳴蟬よりも鳴ぬ螢

ベーコン女史　それが日本婦人の日本婦人たるところで、有餘る程の感情を抑へて、涙一滴零さない胸の中に、千萬無量の情が籠つて居るのでムいませう。お國の歌に、鳴く蟬よりも、鳴かぬ螢の身を焦すとか申してあるのは、よく日本婦人の心を寫したものだと思ひます。良人が今萬里遠征打死の首出といふに、泣哀みの憐れな姿を見せては、良人に未練な情が起つて、後髪引かるゝ思がする、軍人の戰場に臨むときには、我身をも忘れねばならぬのですから、國に殘した妻や兒を思ふやうでは、何うして功名手柄を立つることが能ませう、此度の戰爭に小さい日本が大きな露西亞に勝つたのも畢竟此處等にあることで、尙武の國たる日本の御婦人は、男子に劣らぬ尙武的教訓を平生から受けて居られるのでムいませう。

記者　餘りお賞め下さつては却つて恐入ますよ、軍人の妻などはイクラかお話の通りでムいませうが、一般にお饒舌は流行るのでムいますよ。日本で有名な井戸端會議を御傍聽致しますと、山の神などの多言と來ては、イヤハヤ呆れたもので、全で雀の囀りでムいますよ、イエ井戸端會議のみではムいません、時とすると隨分………

▲心の戀愛と口の戀愛

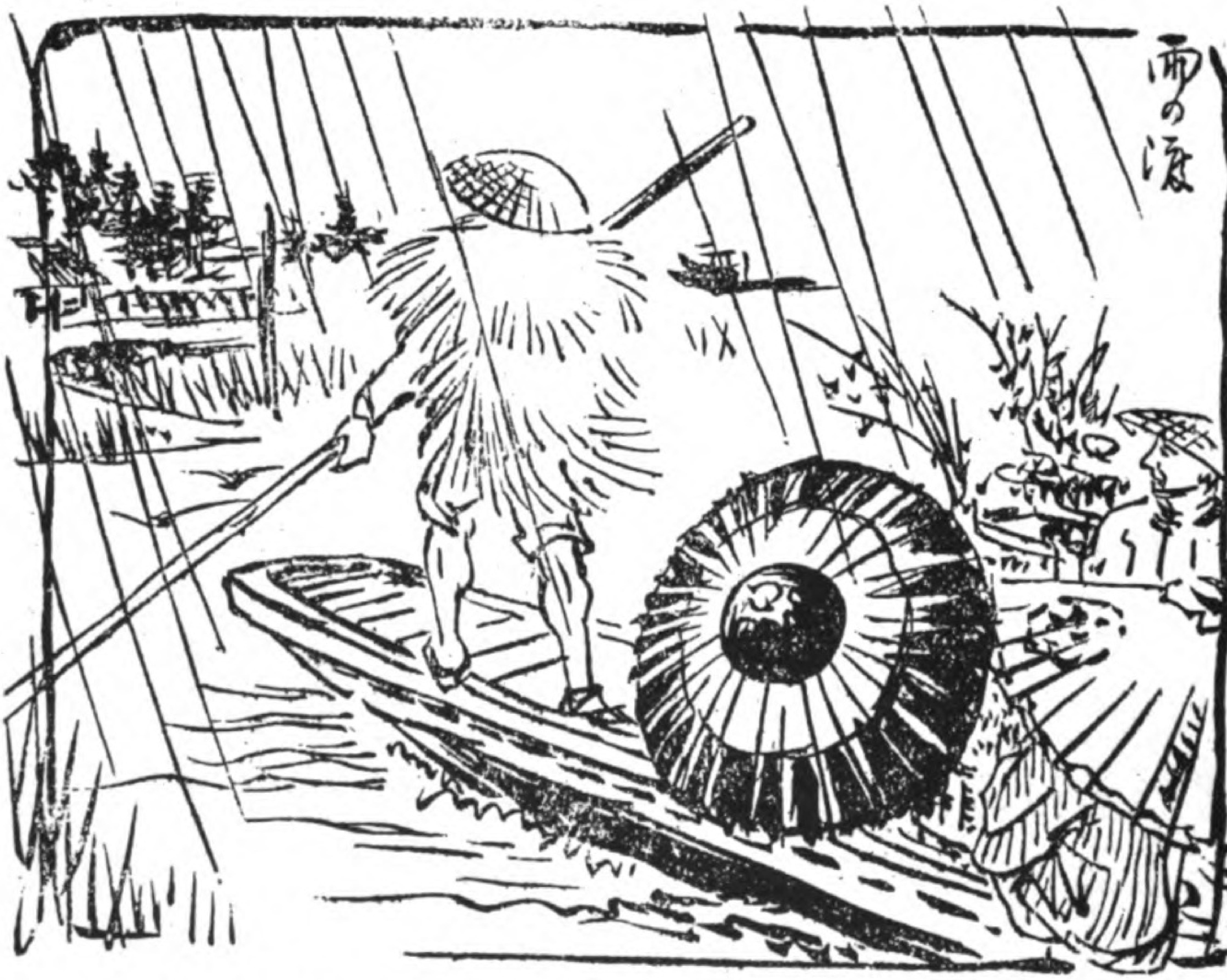
マーガレット女史　戀愛と申すと、一種の意味に於て、御國の方には、卑劣な事のやうに聞えるのでムいませうが、西洋では神聖のものとしてありますから、誰憚らず口でラブを語ります。日本の御婦人方は心でラブを語り遊ばしても、決して口にはお出しなさらないのが普通のやうに伺いますから、外見からは男女間の愛情が乏しいとしか見えませんが、熟く〳〵御國の風を拜見致すと、言はぬは言ふに彌優るとやらで、語らざる心の愛が、口にする愛よりも、如何程深いかゞ判明ま

して、奥床しい氣が致しますよ。私しは此の風を何時までも保存して頂きたいと存じて居ます。

メリー孃　日本の男子は、婦人に對して戀愛を表はすことをば、意思の薄弱な、克己心に乏しいものだと思つて居らつしやるさうですから、縱ひ御婦人の方から戀愛を表情したにしても、男子の方が容易に受附けないので、詰り雙方とも自然と互の間に、言語態度が隔つて參るのでせう。

▲男子の腕に取縋る婦人

ベーコン女史　西洋婦人が、



白晝公然男子の腕に取縋つて散歩など致すのを御覽になりますと、不思議とも奇妙とも見えるでムいませうが、之は亦西洋古來の風習で致方がムいません、併し近頃では日本の方にも大分西洋式が行はるゝかして、公園などでは手を引合つた若い男女の方が、チラホラお見えになるではありませんか。

▲戀の倫敦公園

ザツケンス夫人　まづ英國の風を御覽なさい、お國に較べますると、何位酷いか知れませんよ。日の暮れる頃になりますと、今しも一日の

働きから解放された若い男女の一對は、幾千組となつて、温き戀の夢にうかれて了ふといふ風で、娘共は輕い羅衫を着て麥稈帽子を被り、大勢群つて何處からか出て參りますと、若い男は靴音高く洋杖を揮廻してペーブメントの道をさも愉快さうに濶歩して現はれるのでムいます。始めの内こそ女は女連れ、男は男連れになつて居ますが、後には二人去り四人去りして、終には男と女の樂しい一組づゝとなつて、諸處の公園やテームス河の堤防などのベンチに腰を並べて、互の目は互の面上にのみ注がれ、殆んど外部の世界を忘るゝのでムいますから、誰が自分共の目前を通行しても少しも頓着しない。通行人の方でも少しも之を怪しまなくて、却つて同情を是等男女の上に寄せるのです、此邊の感情と申すは、日本の方には一寸御解りになりますまいが、英國では一般に行はれて居るとは、ベンチの構造によりても知られます、倫敦の公園や堤防の上に在るベンチは、二人づゝ二組、則ち都合四人の腰かけらるゝやうに出來て居ますので、このベンチに一組の男女が來て、其の位置を占めたときには、尚二人分の空席があるのですが、後から來て其の空席を占むるものは、矢張一組の男女でなければなりませぬ、男でも女でも一人では、決して之に坐するとの出來ないのが社會的規則となつて居ます。若い男女の間は、こんなものですから、偶に御國にソンナ方がありましても、蠻カラだの野蠻だのといふべき理由はありません。

記者　ヒドク西洋婦人の欠點を仰やいますが、今のお話は極々下等な勞働者達の境遇で、中以上の社會は眞逆さうでは厶いますまい。

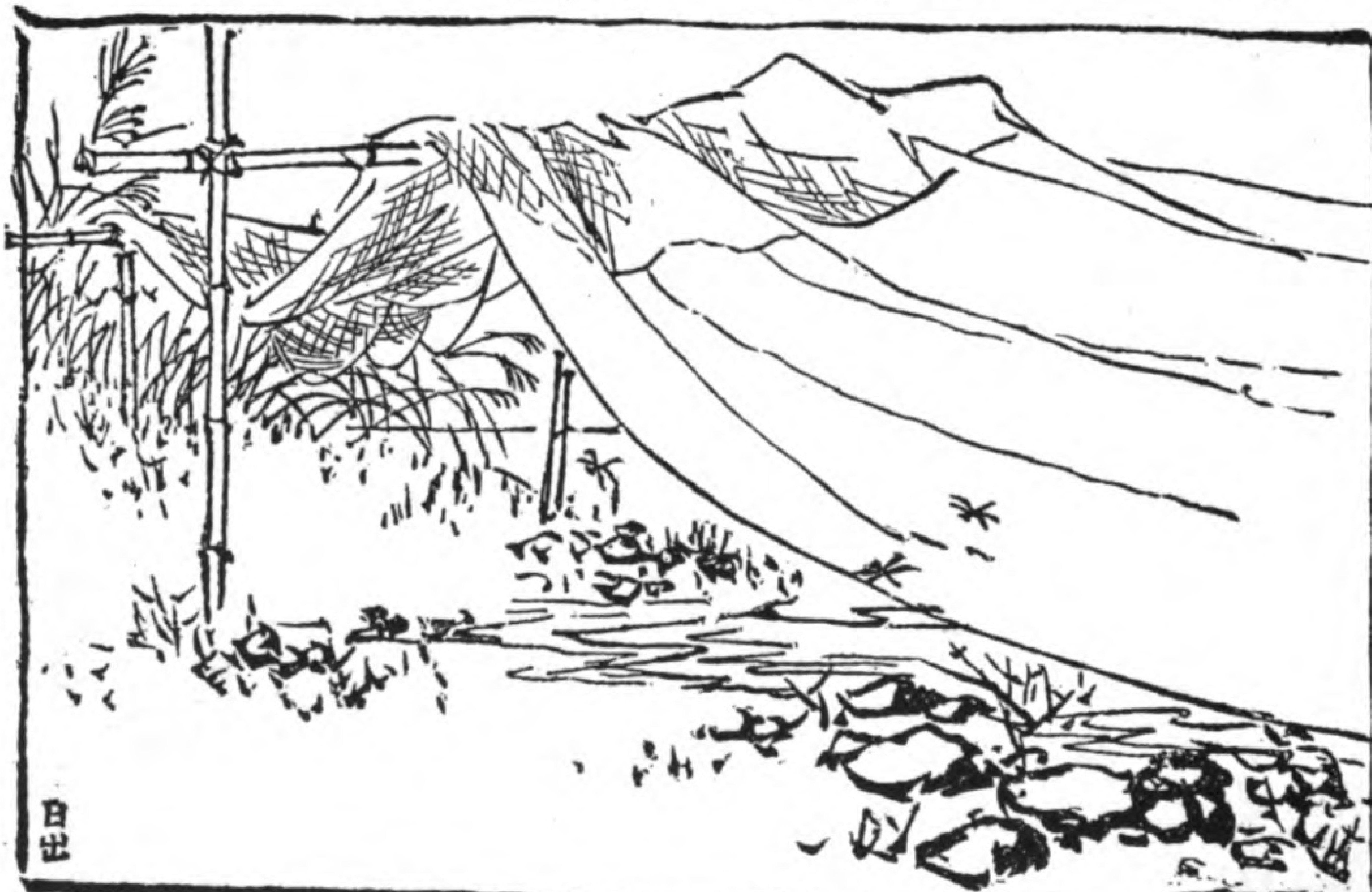
▲輝く許りの姫君

マアガレツト女史　イヽエ決して職工や勞働者のみではありません。中等社會の者も皆同樣です。イヽエ上等社會でも場處こそ違へ、少しも變りはありません。大厦高殿の二階の椽側などでは、青々と生茂つた蔦蔓の中に、燕尾服を着た公子が、マント、ドクールを纒ふた輝く許りの姫君と相並んで立て居て、公子の黑き服と、寛き胸の白きシャツの光は、其側に立つ麗はしき柳のやうな姫君の裳を覗込むといふ風に、姫君の耳に戀の

言葉が聞へますと、何と答へ給ふかは判りませんが、只姫君の嬉しさうな笑顔が見えるのです。一寸小説のやうですが、實際之が緣となつて、モーニング、ポスト新聞の人事欄に、此の一對の男女の結婚は旋て披露されるのでムいます。

▲日本女子は羊の如し

メリー孃　兎に角日本の御婦人は温厚で柔順で沈靜ですから男子に取つては此上もない仕合せです。西洋の女は悍馬の如く、日本女子は羊の如しとは、日本に參つて居る西洋男子の能く言ふことですが、事實其通りで、西洋男子が日本



婦人を娶りまして、共同生活を致しますと、一生見捨て難くなるといふことです。それは何事によらず抵抗せずに、叱つても冷評しても、ジツと辛抱して居らつしやるからで、若し西洋の女にこんな待遇を致しましたら凄まじく抵抗されて、塲合によると、靴で蹴られることもムいますよ。

▲人の前と家の内

ベーコン女史　西洋の婦人は、人の前では至極良人と中がよくて人目憚らずに馴れ親しみますが、家に歸るとよく喧嘩を始めます。日本の御夫婦は全で反對で、人前では他人行儀で、家に歸つてから睦み合ふといふでは

ムいませんか。

編者曰く是等の言甚だ輕率に思はる。

▲外國人と日本女子の結婚

サツケンス夫人　東西婦人の思想習慣は斯く違つて居ますが、西洋の男子で、日本の御婦人を妻に貰つた人は、皆幸福を感じて居ます。それは日本の御婦人の柔順な性質からでせう、私しの同國人（英國人にして某會社の技師）なども、現に教育あり品格ある日本女子を妻にして甚だ幸福に生活して居ますが、併し結婚の式には頗る弱らされたと話して居ますよ。それは斯うです。新郎が始めて新婦の家を訪問しますと、（結婚の約なりて後のことなるべし）二人の下女は忙がはしく出て來て疊に額を擦り附ける、それから新郎が靴を脱ぐと、最上等の室へ導かるゝ、小さい平たい蒲團の上に坐らされる、側らに居る女等は新郎の行儀に馴れぬのを笑つて居るらしい。さうして度々四匍になつて、疊に額を擦りつけたが、肝腎の新婚は却々出で來ない、老女が二人現はれて、同じく四匍になつて、お辭儀をして、何事か頻りに話す中に、やうやく絹の音がサラ〳〵と聞へて、屏風の隅から盛裝を凝した新婚が表はれて、是れも亦四匍のお辭儀をした。新夫は此の敬禮に對して、如何に禮を返さうかと、モヂ〳〵して居る處に、二人の老女も下女も立去つたから、始て英語で新嫁に向ひ、自分が何程新嫁を愛して居るかを熱心に述べたが、新嫁の方では、唯微笑するのみで、何とも返事をせぬから、新夫は氣が焦れて了つたとのことでムいます。

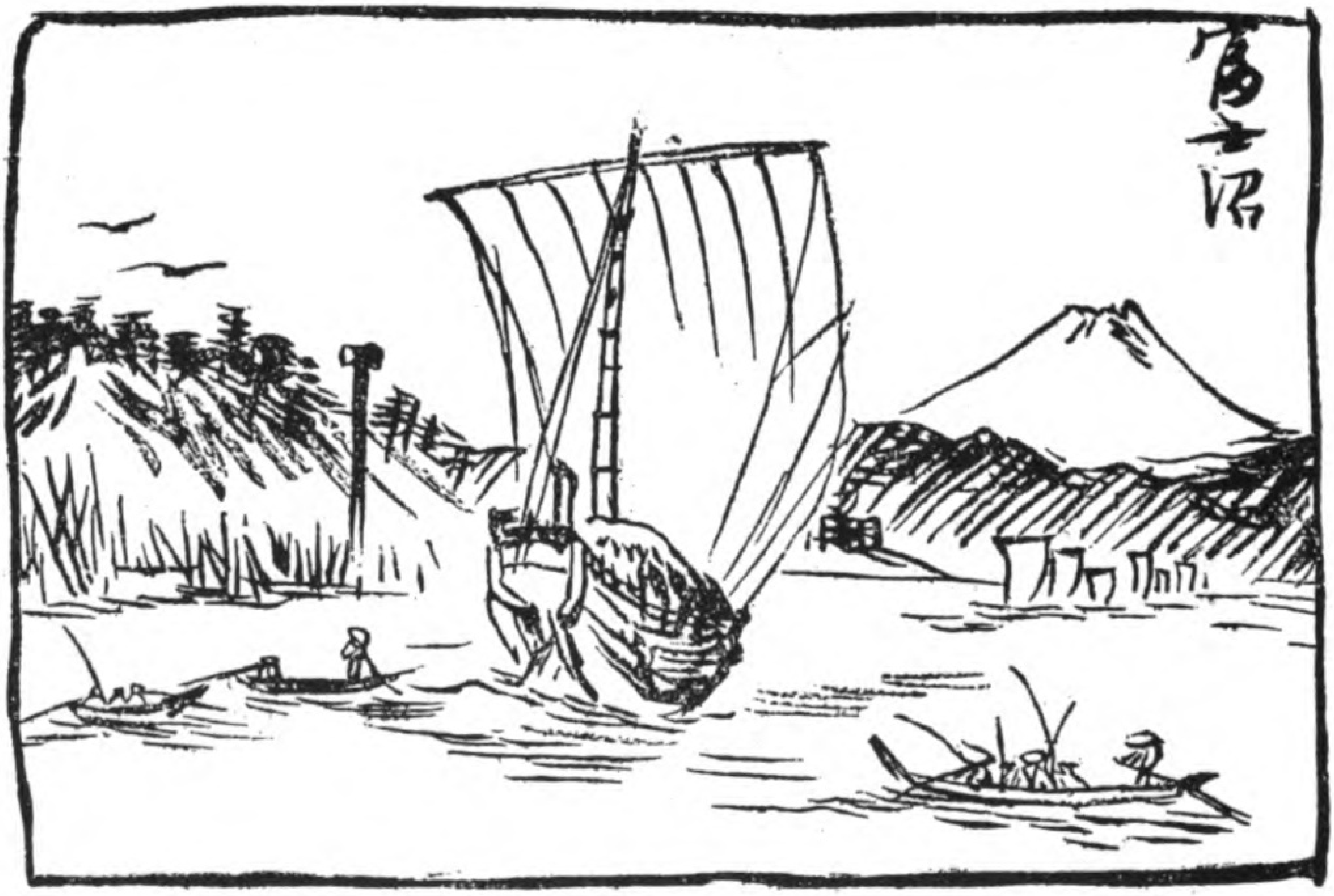
メリー嬢　日本の結婚式は賑やかではありますが、神聖といふ意味が缺けて居ると思ひます。是丈はどうか改良して頂きたいものです。近來神道本局などでは莊重で簡便な結婚式が、折々行はるゝといふではムいませんか。

記者　何事も追々歐米を眞似て參るやうになりましたから、結婚式などは勿論西洋式となるのは受合です。

▲美麗な蝶を狡猾な猿にする

ベーコン女史　西洋式といふと立派に聞へるかは存じま

せんが、御國の美風迄も西洋式にして了ひましては、殺風景でムいますよ。例へば御國の御婦人方が、美術的の髪、髪飾り、奇麗な衣裳、又これに相應した禮義などは、我々西洋人でさへ感心するのでムいますに、それを皆棄てゝお了いなされては、失禮ながら殘る處は黄色の皮膚と、壓潰れた鼻と、廂とかいふ不思議な髷だけで、丁度奇麗な蝶を狡猾な猿にして了ふのと同じいではありませんか（記者曰くこれは英人の諺で蝶の羽をむしれば殘る處は猿に似たる形體のみとなるを諷したものです）どうか御國の美術的



風俗は永く繼續されたいことゝ存じます。

▲日本美人の面影

メリー孃　左もないと我々西洋人の惚々する程の日本美人の面影は、藝者のみに殘つて、健全な社會には其跡を絶つことになりませう。藝者は男子の翫弄物で、或場合には、紳士の家庭の敵となり、又和合せる夫婦の讐ともなる一種の婦人團體ですから、この團體のみに日本國有の美風が殘つて、其他の穩健なる御婦人の間には、影を留めないことになつては、如何にも殘念ではムいませんか、體格に適はぬ西洋服などを不器用に召して居らつしやるのは、御本人は御得意

かは存じませんが、私共外國人の眼からは、何だか馬鹿らしく見えますよ、矢張りキチンと體格に適つた日本服を召して居らつしやる方が、どの位高尙で又優美だか知れません。

▲日本女子の惡口

記者　イヤ段々とのお話、大に感謝致しますが餘り日本の贔負のみをなさるので、何だか物足らぬ心地が致しますいつそ。思ひ切て日本女子の缺點を云つてお貰い申したいもので。

メリー孃　惡口の材料なら、大分集まつて居ますから、お腹をお立て遊ばさねば、思ふさま言つて上げますから、乾度近い内に入來つしやい。

編者曰く、要するに西洋淑女の言としては、口吻あまりに賤しくして、毫も辭に品位なく、且つあまりに亂暴らしく思はるゝ也。

酒井伯の家庭

園藝を以て同族間に名高き酒井伯爵の邸は小石川原町に在り同家は舊姫路藩主にして當主伯爵の家族は夫人、令孃及母堂等全體六人の少家族なるが召使人は非常に多く下女下男の數は四十餘名あり同伯の園藝の嗜好に深きことは多く人の知る處にて邸内の植物園にはあらゆる植物を栽培しあり爲めに金錢を惜まずと云ふなれば夫人も亦其の嗜好極めて淺からず、殊に最も小さき盆栽を好み松、梅、欅等高四寸に充たざる植物のみ集め居り伯の此等に要する費用は尠なくとも一ケ年約二萬五千圓に上ると猶伯は右の如く園藝に樂みを有するより別墅を設くるなどの事もなく平生の伯は萬事平民的にて召使のものまでにも荒き言葉を遣はず服裝の如きも質素を旨とするより初對面の人などは其伯爵なるや否やを見違ふ程なりと左れど伯の嗜好となれば獨り園藝のみに止まらず大弓、音樂、寫眞術皆素人の域に入るものあり殊に音樂はピアノに上達し大弓は大會を設けて太子流を學び大祭日などに大會を開きて親近の人々と技を闘はすに何時も第一等賞は伯の手に在り次に伯は旅行は全く嫌ひと云ふにはあらねども旅行として出掛くるは偶々の夏期の避暑位にて日光、箱根、鎌倉、興津より遠からず之れも長くて一週間程にて歸邸するが常なりと。

厨

日々の心得

△料理の工風

一家を治むるには、何事にも工夫なかるべからず、先づ幾許の歳入に應ずるには、何程の暮し向きをなすべきやは、家政上第一の工夫なり。小兒を敎育する上にも、其腦髓智慧を絞りて、編み出す工夫なかるべからず。時候々々の衣服の調達、やり繰りの工夫あるべし。親類隣人との交際向にも、四季折々の音物、饗應ひ等にも一通りの工夫なかるべからず。又一家團欒の樂をなすにも、老幼、男女、共々に愉快を、分ち得らるゝ樣にするには、飽かさず、盡きざる快樂を生ずべきの工夫なかるべからず。而して日々の惣菜料理は、經濟上、衛生上また快樂上より、尤も工風すべきなり。孔子は切り目正しからざれば、喰はずと仰せられしが、料理巧みならずんば、家庭の快樂は、幾分減少せらるゝなり。勿論必ずしも山海の珍味、面倒なる料理をせよとはいはじ、菜大根にても、一寸したる料理の仕鹽梅によりて、不味ともなり、旨味ともなり、これを賞美して、家族共に食を頒つの中には、尠からざる愉快の添ふものなることは、言ふまでもなし。如何に山海の珍味なりとて朝も晩も、昨日も今日も打續けては、却て菜、大根の惣菜を慕ふに至らん。ましてや日々の惣菜が、いつも〳〵同じ樣にて、いつ喰べてもあまり、甘くないといへば、など之に飽かざらんや、原料は同じき菜、大根といへども、工夫すれば、餘りの手間もかゝらずに、樣々と料理を變へ、風味を色々にして、食し得らるべきなり。假令折角の珍味とても、切り樣、煮樣が下手なれば、不味てたべられず、隨つて不愉快尠からず。さればよく〳〵日々の惣菜の上には工夫を積みて、家族の口に適せしめて倦かれざるを旨とすべし。これによりて、食時團欒の樂しみ、必ずや大に加へらるゝものあらん。敢て食前方丈酒池肉林の贅澤を要せざるなり。また其料理の工夫には、

料理法記されたるものあれば、これも一通り學びては見るべきなれども左樣の傳授は實地に行つて見て、出來にくきこと多し。然るに、親族朋友の家々には、それ〴〵何か我家のとちがひし料理の仕方もあれば、これはと思ふ御馳走などを拵らへることもあるものなれば、それ等の實際經驗上の仕方手加減を問合せなどして、我家にも試むべし。また料理屋の馳走にて、旨く味はひられしものは、其仕方を工夫して見る可し。工夫の中に愉快あり、其工夫を費やしたるものを、皆々寄り合ひて味ふときは、たとへ、それが他處にて喰べし如く、旨からずとも、他處では得られぬ愉快を覺ゆるものなり。また漬物も、季節々々の品々を、我家にて調ひ旨く出來たるものを食せんこと、之によりて得らるゝの快感は、朝に夕に漬物屋の來るのを俟つ人々の味ひ得られぬ所なり。惣菜を以て親戚朋友を饗應ふ節などには、元來饗應ふ客人の心を慰め、愉快を與ふるが主旨なれば、贅澤な品々をば要せず、たゞよろしく料理の工夫に勞する處あるべし、客人が此處の料理は上手で加減がよくて、旨いと感ずれば、彼等は尤もよき饗應を受けたるなり。之に反して、彼處の御馳走は、品は良いが、料理が下手で、加減が悪いと、感ぜしむるは、折角の饗應も、不愉快を與ふこと、尠からざるなり。

故に料理の工夫は、家人を喜ばしめ、また他人をも慰ひるの道、随つて家族の和樂を增すの一端ともなれば、主婦の注意すべき事なり。

△白米蟲除けの法

夏日は兎角に米の中に蟲の生ずることあり之を防ぐには樟の葉を米中に置けば蟲の生ずることなし豆類には銅片を入れ置くべし。

△餅を貯ふる法

餅は貯ふるに黴もすれば黴を生ずる物にて之を防ぐには貯ふる桶に酒を塗り中に餅を入れよく蓋をなして納め置くべし何時までも黴ることなし。

△飯の炊き損なひを直す法

飯を炊くことは易きに似て六ヶ敷く兎角炊き損ないの多き者にて或はこわぐ或は柔か過ぎるものなり、されど其柔かきは衛生上害なくして却つて適當なりと雖もこわきは仕方のなきものなり、そこで此炊き損ひ即ち硬き時には酒の少量を打ちて蓋をなし火の氣を少し通すべし然る時は硬き飯も程好き飯となるなり。

輕便西洋菓子の製法（一）

菊廼屋

西洋菓子の美味にして衛生に叶へる事は申すまでもなし。されど「デザートはコック泣せ」と言ふ諺のある如く、實に「デザート」即ち西洋菓子の製法は、料理に附屬して料理以外の技藝に屬する故手練のコツも往々まごつく事あり、況んや料理の心得なき方々に於てをや故に今最も單簡にして、何人にも容易に製造され得る方法數十種を撰みてこゝに記さん。

▲器具

「レンヂ」又は「ストーブ」の設備ある家にては、コックを雇ひ置かるゝならん。故に今茲には、日本流の臺所に於て、奥樣自身にてなし得らるべきに。必要の器具の名稱を列擧せん。

七輪　普通の物。

テンピ　薄き銅鐵板製の底無し箱の如きものにて、前に扉を具へ。七輪の大小に應じ、適當なものを需むべし。

パン　薄き鐵板若くは銀葉製にて、方、圓、長方形、淺、深、大、小、種々あり。「テンピ」の大さに準じて、各種需め置くを良とす。

ハツトケークパン　厚き鐵鑄製の圓板なり。牛鍋を代用してもよし。

フライパン　「ビーフステーキ」を燒く鍋と思へば、大抵了解さるべし。大小種々あり。

パイプレート　「プレート」とは、譯して皿と言ふ。「パイ」を燒くに用ふる金皿なり。大、中、小、種々あり。「テンピ」の大さに準じ、適當のもの二三枚備へて可なり。

粉篩　銀葉製にて、恰も柄杓の柄を切りたる如き形にして、底は網なり。

ローラー　饂飩屋の、饂飩を熨すに用ふる圓棍なり、擂粉木を代用するも可ならん。

熨板　飯臺、若くは机を代用してよし。

エツグビーター　針金製にて、卵を泡立たすに用ふる者なり、多くの場合に於て「ホーク」を代用し得べしと雖も、有合する針金にて單簡に作り得べし、又「スノリユウ」式のもの賣物にあり。

鍋　西洋菓子を作るに際し、土鍋、鐵鍋、等を利用し得れども瀬戸引鍋を需め置けば妙なり。

▲原料と分量

菓子をつくる重なる原料は、

粉　米利堅粉と稱するもの。

コーンミル　玉蜀黍の粉なり。

ベーキングパウダ　膨らす爲めに用ふる粉なり。俗にイスパタといふ。

ベーキングソーダ　同右。

ヘツド(ラード)　牛脂、(豚脂)の事。

砂糖　普通の白砂糖なり。

粉砂糖、(パウダーシュガー)　別に實物にあり、普通の白砂糖を絹篩にて篩いて用いて可なり。

バタ　食用「バタ」は高價なり、「コツク」用「バタ」と言いて、牛乳屋に就て需むれば廉價なるものなり。

本書、分量は左の基準に依るべし。

コツプ　普通の「コーヒーコツプ」(約一合)

小匙　コーヒーを飲む時に用ふる茶匙。

大匙　料理屋等にて「スツプ」に用ふる匙。

▲一般の心得

牛乳を沸す時は、緩火にてすべし、然らざれば直ちに鍋底に焦付くべし。

粉を篩ふ時は、篩の中に定量の粉と、定量の「ベーキングパウダー」とを入れ、回轉軸を回轉すべし、又使用の後は必ず能く粉をハタキ落し、「ベーキングパウダー」が他の粉に混入せざる樣注意すべし。

卵の白味を「エツグビーター」にて泡立たする時は、器物も、手も、一切水氣を含まざる事に注意するを要す、一滴にても水分ある時は、遂に完全に泡とならず。

又、白味と黄味と一所にして泡となす事は困難なり、斯る時は別々に泡となし、後に混せる可し。

「チンピ」を使用する時は、先づ七輪に充分に炭火を起し、七輪には僅かの火氣を殘し、其他を悉く「チンピ」の上に緣に沿ふて消えざる樣に並べ、「チンピ」を充分に熱すべし、而して後燒くべき菓子を入れ、其後は殊に火力の平均を保つ事に注意すべし。然れども熱灰を「チンピ」の上に載する事は却て熱度を減ずる故宜しからず。

「チンピ」の扉を屢々開閉して見るは失策の原因なり之れ膨れかゝりたる菓子が冷氣に遇へば直ちに凋み、再び膨れ上らざる可ければなり。

▲マッシ

最初、鍋に湯を沸し、其沸騰したる時に、杓子又は大匙にて攪き混ぜ乍ら、押割麥を少しづゝ入れ、十分間程粥の固さ位に煮る。

注意。一度に澤山入るゝ時は繼子を生ず、又火力強過る時は中途にて一時非常に泡立ちて溢るゝ事あり、然る時は暫く遠火にて煮るべし。

之を食ふには、牛乳と砂糖を好みにより加へて食す。

押割麥には、「オートミル」と稱し、「マッシ」と稱し、其種類數多あれども、何れにても可なり、又「ジャーミア」と稱し粟の如きものもあり。

西洋人は、大概朝食の第一に此「マッシ」を食す、然れども餘り多量に食する時は、漸々腹が「ビール」樽の如くなる由。

▲ビスケット

普通菓子屋にある「ビスケット」と異なる。

(一)パウダービスケット

分量

粉	コップ	二杯
ベーキングパウダー	小匙	二杯
バタ	大匙山盛	二杯
鹽		一摘
牛乳		

始め、粉と「ベーキングパウダー」とを篩ひ、「バタ」、鹽を加へ、兩手にて能く揉み混ぜ、「バタ」の姿の失せる迄粉に混ぜ、粉山を作り、其頂上に穴を穿ち、其れへ牛乳を注ぎ、手にて輕く練り混ぜる。但し無暗にこれる可らず。凡て「ビスケット」に限らず、菓子を作るには、粉に牛乳を加へたる時、強く練る事嚴禁なり、之れ「ベーキングパウダー」は、水分を含みたる後押し付けらるれば氣が抜ける故なり。

次に、熨板の上に少し粉を振り撒き、其上に取り出して其上に又粉を少し振り掛け、「ローラー」にて五分位の厚さに熨し、(此時も押し付けて延すべからず、)中徑一寸位の圓筒にて切り拔き、「パン」の中に並べ、「テンピ」にて十五分間に燒き上ぐ。

「パン」の中に並べる時互に密接せしむるを良とす、然る時は互に押し合ひて高く膨れ上り見事なり、又「テンピ」に入るゝ前に、表面に牛乳、又は牛乳と卵の黄味とを混ぜたる汁を塗りて燒く時は、綺麗に色付くなり。

二十分以上に及びて、猶燒けざる時は火力弱きなり、定時間より長く掛りて燒きたる「ビスケット」は、固くして味美らず。

「ビスケット」は、朝「コーヒー」と共に食す、其熱き間に「バタ」をつけて食すれば味し、冷めたる時は水を振り掛け、五分間「テンピ」にて暖むべし。
分量中「バタ」の分量を示したれども、「バタ」は多き程美味なり又牛乳の代りに水、又は牛乳と水を半々に用ふるも可なれども、味良からざる事は言を待たず。

(二)ピーナッツビスケット

分量

粉	コップ	二杯
ベーキングパウダー	小匙	二杯
バタ	大匙山盛	二杯
砂糖	コップ	一杯
卵		二個
南京豆の粉	コップ	一杯

始め、砂糖と「バタ」を手にて能く混ぜ、卵を一個割りて加へ、少なくも五分間位練り混ぜ、又卵一個を加へ能く／＼練り混ぜ、（凡て菓子は、此砂糖と「バタ」と、卵とを練る程良く出來るなり、）之れに南京豆の粉を加へ一度混ぜ、次に粉と「ベーキングパウダー」とを篩ひ入れ、同時に牛乳を少し注ぎ、輕くざつと混ぜ、以後は(一)と同法に依る。

(三)砂糖を入れたるビスケット

分量

粉	コップ	二杯
ベーキングパウダー	小匙	二杯
バタ	大匙山盛	二杯
砂糖	コップ	一杯
牛乳		
香水（レモン汁又はワニラ液）		

始め砂糖と「バタ」を練り、次に粉と「ベーキングパウダー」とを篩ひ、牛乳を適量に注ぎ、同時に香水二三滴を落し、輕く混ぜ、以後前法に同じ。

(四)ジンジャービスケット

分量

粉	コップ	二杯
ベーキングパウダー	小匙	二杯
バタ	大匙	二杯
卵		一個
セルプ（洋蜜）	大匙	二杯
砂糖	大匙	二杯

生姜の粉	小匙	二杯

始め粉と「ベーキングパウダー」とを篩ひ、「バタ」を加へ両手にて揉み混ぜ、砂糖と生姜の粉とを加へ又揉み混ぜ、最後にセルプと卵とを加へ軽く攪き混ぜるなり、若し水分少なき時は、牛乳若くは水を少々加ふ可し、以後前法に同じ。

▲ハットケーク

分量

粉	コップ	一杯
ベーキングパウダー	小匙	一杯
塩		一摘
卵（入れざるも可）		一個
牛乳		

右の割合にて牛乳を多量に加へ、今川焼を焼く時の如くどろ〳〵に攪き混ぜる。

若し腐敗牛乳を用ふる時は、腐敗牛乳コップ一杯に「ベーキングパウダー」の代りに「ベーキングソーダ」小匙に軽く一杯、の割合に加ふべし、然る時は腐敗牛乳と雖も少しも害とならず。

七輪に火を起し、「ハットケーキパン」を充分熱し、多量に「ヘット」を塗り、右の調合したる濃汁を酒盃に一杯位つゝたらし圓く作る、而して二三分の後、表面にぶつ〳〵孔の出來たる頃金篦にて裏返して又焼く。

「バタ」又はセルプ」を掛けて食す、熱き中に食はれば美味ならず。

セルプは實物にあれども、氷砂糖若くは砂糖を煮つめて布にて漉して用ひ得べし。

▲ワップル

分量「ハットケーキ」に同じ。

ワップルを焼く道具實物にあり、格子形に焼くものなり、先づ七輪に充分火を起し、之を充分熱くし、多量の「ヘット」を塗り調合したる濃汁をたらし込み、蓋を締め、適宜に表裏回轉して焼く「ハットケーキ」と同じくして食ふ。

▲マッフン

分量

粉	コップ	一杯
ベーキングパウダー	小匙	一杯
砂糖	コップ	半杯
卵		二個
牛乳		

前四品を一所にし、牛乳を加へ乍ら「ホーク」にて攪き回し、小し固き位のどろ〳〵になし、今川焼の型にたらし込み、「テンピ」にて二十

分間に焼き上ぐ。

▲コーンマツフン

前の分量中、粉と「コーンミル」とを半々とし、「ベーキングパウダー」を小匙に半杯增す、其他凡て調法に同じ。

▲ドーナツツ

分量

粉	コツプ	二杯
ベーキングパウダー	小匙	二杯
砂糖	コツプ	半杯
バタ	大匙	一杯
玉子		一個
シンナモン	小匙	半杯
牛乳		

粉、「ベーキングパウダー」、砂糖、「バタシンナモン」を一所にし手にて揉み混ぜ、卵を割りて加へ、牛乳を注ぎ、「ビスケツト」を作る時の位に練り、熨板の上に取り出し、三分位の厚さに熨し、「ドーナツツ切り」にて切り抜き、「ヘツド」を溶かして沸したる油の中に入れ、狐色に揚げるなり、油より取り上げたる時は、直ちに其に砂糖を振り掛けるを良とす。

「ドーナツツ切り」は鐵葉製にて、中空に輪を突き拔く型なり。

附。カリンボ

粉と卵と砂糖を水にて練り、熨板の上にて薄く熨し、庖丁にて千切大根の如く切り、沸したる油の中に投じ狐色に揚げるなり。

油揚用として灰篩を一個備ふるを良とす。

▲スチーキ

分量「ドウナツツ」に同じ、唯熨板の上に二分位の厚さに熨し、表面に無花果ジヤムを塗り、「カレンズ」（干山葡萄）を斑らに散き、巻ずしを作る如く巻き、庖丁にて三分位づゝの厚さに截り、各々は蛇が渦巻きて居る形に形どるなり、之を淺き「パン」に並べ、牛乳若くは牛乳と卵の黄味とを攪き混ぜたる汁を塗り、「テンピ」にて二十分間に焼上ぐ。

▲コーンブレツド

分量

コーンミル	コツプ	一杯
粉	コツプ	一杯
ベーキングパウダー	小匙	二杯半
卵		二個
バタ	大匙	二杯

砂糖　　コツプ　一杯
牛乳　　コツプ　一杯

最初、砂糖と「バタ」とを練り混ぜ、卵を一個づゝ割りて加へ能く攪き混ぜ、粉と「ベーキングパウダー」とを篩ひ入れ「コーンミル」を加へ、牛乳を注ぎ攪き回し、餘り固き時は牛乳を少し増し柔かになし、「パン」に入れ「テンピ」にて三十分間に焼き上ぐ。

若し、卵を用ひざる時は、粉、「コーンミル」、「ベーキングパウダー」、「バタ」、砂糖、を一度に手にて揉み混ぜ、牛乳にて延ばし、「パン」に入れ、「テンピ」にて三十分間に焼き上ぐ。

之を食するには、唯食するも宜けれども、「バタ」、又はセルプを付けて食すれば美味なり。

以上單簡なるもの十二種の製法を述べたり。此等は多く朝食に食するものにして、「マツシ」を除き其他は「コーヒー」と共に用ふるものとす。

來月はソース、プツデング、セレージナム等の製法を掲げん。

露帝の厨房

露帝の宮殿は護衛嚴重なるが故に外界の人は更に其内部を知るに由なく帝の膳部を調理する厨房の如き全く秘密を以て蔽はれたり此程有名なる冬宮に久しくコツクを務め居たる某が都合ありて解雇されたる後下の如き談話をなせりと即ち露帝の數多の宮殿に使役され居るコツクは數百に上り殊に此冬宮の厨房は其大本營とも稱せらるべき者にして其料理長は隱然世界切つてのコツク貴族たるの觀あり年俸五萬弗を受くるのみならず陸海軍將官相當の待遇を受け、各宮の厨房を二ケ月毎に巡視する時の如き恰も堂々たる列國の大使の旅行を見るが如く其職務の内皇室の厨務を總轄すると恰も他の内閣大臣が國政を總轄すると毫も差異なきも只決してその下役の手に委任する能はず、是非に自ら手を下さゞる可らざるは即ち獻立の事にして如何にせば露帝の口に適ふべきやと其私室に於て絶えず思ひを潜め、再三再四試みたる後、露帝に薦むるを常としその調理法は酷く秘せらる、又露帝は非常なる美食家にて且つ食膳に上れるものを品隲するに稀なる智識を有し、殊に其晩餐に至ては毎日その獻立に容喙するが常なりその他の食事は別に意に介せざるが如し譬へば朝食の如きは常に午前八時にして僅かに茶、珈琲、チヨコレート、卵その他帝の好める少量の鮮魚のみ、夫より三時間後に至てソープ、冷肉及びサラダ、氷及び菓子を喫するのみ、もし夫れ午後五時の晩餐に至つては、露帝の注文と、厨房主が畢生の心血を絞りて案出せる所謂膏粱の滋味を取るなりといふ。

女學生の富士登山

在明石　藤堂梅軒

抑々女子の團體が一萬二千尺の絶頂を極めんとすることは聞くさへ其の大膽無謀を驚かざるを得ません。少數の仲間ならば大した困難もなからうが何分にも二十三十の人數となりては色々込入つたことが起り易いものだから之れを決行しようには充分の覺悟と準備とがいります、鳥渡ぐらゐ之れを見た人は非常に其の冒險否其の横着さに呆れて了つて或は之れを惡口凌辱するに至るかも知れない。果然々々余の此の擧に於ては正しく此の様な目に出逢つたのである。總じて萬衆の視線を惹くような事業には毀譽褒貶交々至るもので企劃者は初から此の邊の覺悟がなければなりません。余の今回の企は世之れを壯擧と目して嘖々喧傳して呉れたかと見る間に早頭ごなしに叩き潰さうとする者もありました。本誌女學世界は嘗て余が親んだ間柄であるが、余の登山を了へて明石に歸り着くと既に余を待ち設けて其の實況を聞かせと迫つて居るのである。余は充分の暇も得ないから不本意ながら未だ其の乞に應じかねて居つた所へ今度此の擧の攻撃を加へらるゝに至つたものだから、態と筆を執ることも見合せて居つた。スルト又もや本誌女學世界よりは「隨分の御困難の事も御座候ひしと存候兎に角女學校の企としては破天荒の事業と存じ健羨の至りに候云々」とて是非にと勸められては余は默々としては居られずイデ一筆を呵し事の實相を詳記して黒白を世の眼ある人に訴へ見ん。又これによりて世の女子の團體が今後意氣銷沈し一片の攻撃に痛く懲りて斯る壯圖を斷念するようなことあらんを未然の中に防がんこそよけれと思ふのである。

準備一

偖てこれから本題に入らうとする。それには先づ余が此の登山を決行するまでに如何なる覺悟準備をしたかを記さねばならぬ。有體にいへば多數の女子團體が此の様なことを突然決行するはどうし

ても大膽無謀冒險突飛といはれても仕方がない。余は不肖とはいへ此れしきのことは知らぬではないから此の大擧をなすに就いては平素之等の女子がどれ程にまで足や體の鍛錬がしてあるかに注意した。其の點に於ては先づ可なりに成績があると信ずる。何故ならば常に學校内では相當に運動を奬勵し居り又近傍の山といふ山は大抵登らせてありそれに何れも體格に於ては十人並以上の者ばかりであるからこれならば略々成功するであらうと思はれた。併しいくらそれでも何分の大事業であるから出來るだけの用心は執らねばならぬと思ふたから出發前には一應醫師の診斷を受けさせたのである。

準備　二

モー一ツ婦人方の注意を乞ふことは富士登山は決して旅行を趁うてすべきものではない。前段に述べた通り平生にそれだけの鍛錬がしてなければ亦それだけの自信がなければ決して行ふべきことではない。若しもそうでなければ彼の輕佻者流としてそれこそ眞正に世の物笑となるであらう。次に又右の條件が具つて居つて充分の自信があるとしていよ〳〵といふ場合には天倖なり事情なり萬事愼重に考慮してかゝらねばならぬ。我が一行は素と上京の往途にすべかりしも數日間暴らしのあつた後で果して平穩なるべきや計り難く充分に念を入れて靜岡の警察や興津蒲原等の驛の人に就いても出來るだけの調査を遂げ其の天候の不得要領なりしに斷念したのである。それから東京よりの歸路には既に數日以來の好天氣であるに登り口なる大宮町で降雨に出逢ひて又もや登山を斷念したのである。實に用心の上にも用心が肝要であると思ふ。漸くそれも一時のことで一天頓に晴れ渡り追々山脚より其の姿を現して來たからそれに又



大宮町一般の人の意見をも確めて登山に決したのである。そこで一行二十八名之れに和歌山縣の女學校の女教師渡邊氏東京の女學校の女教師鈴木氏外に猶一名の婦人を加へて總計三十一名の團體其の中二名のみは余と他の一名の男職員で即ち二十九名の女姓に對する男姓二名のみである。いづれも洋傘を携帶するを總て禁じた。其は山上で暴風雨に逢つたら全く邪魔物になるばかりであるから。それで別に銘々に菅笠と筵とを購はせ之に金剛杖をつかせたのである。袴は常よりも數寸高く穿かせ一枚の衣更へと二食分の麵包と二食分の握飯と外に寶丹、ゼム、千金丹、固腸丸等諸種の藥品と氷砂糖と生卵子とを各自に用意させた。卵子は破れ易いから之を藁包にして腰に下げるやうにした。いづれも揃ひの浴衣地の筒袖に古代紫の袴を裾短かに穿ち長靴下に足袋と草鞋とで固めた、生徒は一同顏見合せて噴き出だし始めて此のやうな扮裝をしたのであるから何となくうら耻かしく思はれたとのことであつた。それも暫くの間で登山にかゝると何とも感じなくて結句此の方が善いやうに思つて居つた。強力三名を雇ふたが一人每に定規の通りとて金一圓づゝの賃錢で外に食事は總べて此方で引受けてやるのである。そこで強力に右の握飯などを持たせて生徒は出來るだけ身輕にさせた。それで丁度圖のやうな姿になつたのである。

登山の第一段

本來登山は出來るだけ早朝よりせねばならぬと聞いて居つたから八月の二日には出來るだけ早く横須賀鎌倉を切り上げて鈴川にまで來たが既に夜の八時半であつた。それから三里半の道程を鐵道馬車に倚りて大宮に來て一泊すべき心算であつたに既に馬車は如何に交涉しても出て呉れない已むを得ず鈴川に一泊して翌朝三時起床五時に發車し程經て大宮に着いたが雨の降つたために前述の通り登山が漸く午前九時より開始された。此の様に遲いようでは裾野三里間を往く中にずんばり日に照らされて早や始の中に疲れて了ふのである。幸にも日は雲に沒したり現はれたりして一行は甚しく困らなかつた彼是二里を上りてカケスバタといふ所に着き一店で休憩し此處で晝食を

濟ませた。それから一里强の道を往つて一合目といふ所に着き此處で又休息した。實に登山の始が大切で決して急ぐべきものでない男子二人は先頭と後殿とに立ち一行の最足遲なる一女職員を眞先になし其の前後に强力三人を適當に配置し徐々と登り出したのである。裾野とても決して侮ることは出來ない處々に險阻なる坂もあつた。しかし薄原で全く趣美もないから一行中には二日以來の睡眠不足の爲に睡りつゝ歩んだものが多數あつた。それだけ歩調が緩くあつたことも證せられる。之れが登山中一行の甚しき疲勞を免れしめた原因の一であるといつてもよい。一合目に休んで居る間に登山新道路修築の有志金を出せと勸められて辭する術もなく少々を投じ帳面に書入れた。此の新道といふは本年始めて開けたといふから我々は御殿場より昇降すべかりしを更めて之に轉じたのである。今までの裾野の中で道路は何とも感ぜなかつたが此より森林へ入り込むにより今後の道路如何と氣遣はれた。二時に一合目を發し漸く森林に入つた、欅、樅、楓、みやまはんのき等深々として生茂り行程二里半ばかりの間晝も猶闇い程である。其の間の道路の惡きこと實に言語に絕し泥濘脛を沒するとは此の事をいふのでもあらう。それがため一行の中少しづゝ足を疲らしたものがある。前に先頭たりし女職員は今や殿後に來りやゝともすれば一行より離れんとした。余は初より後殿の任なりしかば其の人の背に添ひ切りに勵ましつゝ又こんなやうでは頂上までは



覺束なし今夜の處にて落伍し充分に靜養せよと再三再四勸告したりしも聽かず妾は箱根跋渉の際にありし如く遲いではあるが脚の力は決して人よりは引けを取らぬ積りであるからどうか心配してくれるなと余は猶之を危ぶみつゝ一里二十町ばかり往きたる二合目に着き一行此處に休憩した。此處には清冷なる泉水があつて貸に一行を慰めた。やがて半時間休みたる後又出發せんとするに方り一生徒は全く寸步も叶はぬとて此處に止まつた。よりて舍主に慇懃に乞ひ猶此の邊に工夫の數多く居るを氣遣ひ今夜此の舍主の家族の間に泊め與れんことを托して出發した。行くこと數丁又一名の生徒が頭の痛みて步行が出來なくなつたを發見したから之を諭して今の宿舍に共に合泊せよと命じ强力をして引返し送らしめた。一行な益々前進すると森林はいつの程にか變はりて燒林となりて白く立枯れたる樹木が一面に林立し約二十丁程もあらうと思はる。道の泥は漸くになくなつたが今度は勾配甚しくて之れに枯枝が前後左右に落ち散りありて是れ又た多少の妨害となつた。やがて林を通り拔けて間もなく四合目に差しかゝつた。此の宿舍は空家で明日から開けるといふことである。丁度月は前面に懸りて皎々雲海を照らし其の光景得も云はれざるに一行連呼して激賞措かず俄に唱歌軍歌を唱へて勇氣百倍し殘る一里五合目に至るまでは全く夢中に進行した。かくて其の宿舍に着いた頃は既に八時半頃であつた。無殘や先頭に立つ强力は大聲疾呼して「駄目だ今夜は此處に泊めてくれない」と。一行は落膽したが兎に角に飯を食はねばならぬ。强力に命じて茶や其の他の周旋をさせて月光に照らして石室外で辨當を使つた。其の間に余は石室に入り滿室の客に向かひ「何分女子のことであるから諸君の同情を得て少々の席を讓られたい」と乞ふた。すると滿室動搖めき渉りて幾分の場所が出來た。それで僅に一行が室內に入いることは出來た、有り難いことには來合せ居りし大宮町の醫師靑木氏といふ人が一行のために施藥施療せらるゝといふから二三名は其の恩典を受けたものがある。兎に角一行は揃つて室內に這入つたが十二三

疊敷ばかりの室に七八十名も這入つて居るから、すべて横はることが出來ないぐらゐである。從つて安眠が出來なくてそれに酢飯のように詰まつてゐるから山上の寒さを覺ゆる所か寧ろ暑苦しいほどである。

登山の第二段

一行は長くも眠て居られず夜半過ぎ一時といふ頃强力が一同を喚び起こして出發を促したそれで室内の客は殆んど皆起き上つて支度をとゝのへ顏を洗つた。顏を洗ふとて石室の側にある水溜の底に殘れる水を少しばかり柄杓で受けて眼を洗ひ口を嗽ぐに過ぎない。それから朝飯る濟ませ漸くに三時半といふ頃に出發した。勿論他の團體も殆んど同時に發足したのである。殘月西天に名殘りの光をとゞめてくれたから山路は先づ可なり



に照らされて居つた。例の通り余は殿後で他の男職員が先頭である。僅に數十歩を進みて二人までの落伍者を生じた。しかも屈强な生徒である。是は昨夜の睡眠不足の爲であつただらう。又六合目に往つて一人の落伍者を生じた。其れ〱宿舍に置いて休息させて一行は猶も前進をつゞけた。さあ七合目八合目まで上ると大きな雪の河がある。アルプス高峯の氷河もかくやとばかり思はれて皚〱たる壯觀に一同暫しは立留まつた。中には七八人バラ〱と崖を下りて雪を攫んで來たものさへあつた。頂までに此の氷河が二條もあつた。それから九合目を過ぎてや〻登るといはゆる胸突八丁といふにかゝつた。胸突かんばかりに實に坂が鉛直で只々彼方の岩此方の岩に攀ぢて行くのである一行は十歩進みては一休み五分進み

ては十分休むといふように進むよりも休む時間が多いばかりである。それに空氣が著しく稀薄になつて居るものだから苦しくなるも一層甚いのであらうと思はれる。此處で體力が確かに試驗される一行の半數は强力の後について少しも休まないで登り行くもあれば後の半數は右のように氣息奄々たる樣である。其の勇進一團は往々他の男子登山者を驚かせた。頂上に着くと直に岩に腰かけて下を見下しながら手帳や端書に何かを認めて居つて後れて上つて來た男子一行をして其の平氣な樣に舌を巻かせた程である。他の殘りは或は二十分或は三四十分遲れ辛うじて頂上に達した。しかし女職員は到底其の登るべからざるを斷念して絶頂に上るを止めた旨を傳へた。生徒の中で空氣の稀薄に中つたものいはゆる山氣に犯されたものが三名ばかりもあつたがしかし其れでも一行と共に登拜のスタンプを淺間神社で貰ふことに忙しいようである。淺間神社といへばどんな立派な祠であらうかと思はれるが只々石室の低いもので禮拜者は殆んど匍つくばつて居るやうなものである。しかし熱心に禮拜祈禱する樣はさすがに高山を登つて來ただけの價がある。祭神なる木花咲耶姫命もさぞ御滿足であらうと拜察し得られる。これから登山者はいはゆるお釜の周りをなすのであるが羊腸崎嶇として極めて險呑な所を一里以上上下するのであるから一行には之を斷念させ只强力に命じて銀明水の所まで案内させてお釜即ち噴火口の內景や其の周圍の劍ヶ峰等を遠望させ銀の如き氷の如き明水を味はせてそれで石室に歸らせた。余は昔し一度登山したとは違つて何故か今度は痛く山氣に犯され一行がお釜見に行く間も居溜らず石室に横はりて惛々として氣が遠くなり居つた。又寒さが非常で手足が痲痺して力も拔けた。しかし生徒一同の元氣よきには中々見上げらしこ。軈て勢を揃へ下山せんとする頃に突然女職員は登り來て矢張殘念さに堪えないから登つたとて一同に顏を下から突き出した。一同は其の健氣に愕くのみである。余は折角のことだから一同の下山を見合はせるように命じ急ぎ女職員を苦しいながら銀明水にまで案内し一通りの滿足を與へ然る後他校の職員三名に分れ（此の人等は御殿場へ下るとのこと）一行全員二十八名打ち揃ひ下山の途に就いた。（次號完結）

季節衛生

糸左近

暑い〳〵と喞つけれど何と言つても九月は九月朝夕は幾分冷氣を覺えて來ますから、晩餐後椽側に凉んで居れば、身體は有ち易くなつて、四方山の話も夫から夫と花が咲き『女學世界の「ものはづくし」を今度は何うなすつて』『妾なんぞは何時だつて沒書ですは』御謙遜ばかり遊ばすこと』など〻言つてる中に『ハクショー』斯ういふやうに此月は感冐に罹り易いのである、何となれば日中の暑さは盛夏と異ならぬのに、日暮からは大いに温度が低くなるゆゑ、これに應じて其の準備をせぬと、感冐は喜んで空氣温の不順なる時を狙ふのである。

次に此月より十月にかけて多くなる病は下痢である下痢も同じく氣候の不順、土地の變換、飲食物の不攝生などが原因となるもので、殊に日暮からガブ〳〵冷飲をすると、凉しい爲に發汗すること少ないから、翌日はザーと下るのだ、されば殘暑の候は尚々衛生に御注意ありたいものである、併し注意してゐても襲はれた場合には感冐なら早速温脚浴をして、夜具を重襲し發汗しながら熟睡すれば輕きは明朝になると治るものである、温脚浴の方法は盥に温湯を盛り、これに足を入れ、油紙を以て被ひ、其上に夜具を着、十五分時間も經てば足を拭ひ、眠りに就くのである。我が國人は兎角病には藥で無くては承知せぬ風あれど、感冐の藥も矢張り發汗の目的なれば藥用せずとも發汗の方法さへ宜しくば寧ろそれを實行すべきである。

下痢には腹部を温め、固形食物を禁じ粥牛乳、葛湯の類を用ゐて居れば輕きはそれで治る、治つても二三日は通常食物を取らずして、脂肪の少き流動物を撰ばねばなりませぬ。

それから朝夕凉しくなるに伴れ、弱き人や逆せ性の人や又老人などは寢床に入つてから、足が冷ゆるといふは、血液が下部に循環の惡しきより起ることなれば

それが爲に種々の病を招くのみならず、安眠の妨害になるものである、故に斯の如き人は足袋を穿いて寢るとか或は「湯たんぽ」でも入れて眠るが宜い。

盛夏は何人も攝生に注意するけれど、暑さの衰ふると共に次第に油斷勝になるものなるが、眞の衞生家は尙々飮食物より家の內外を淸潔にすることなど怠らぬものである、淸潔といふことで思ひ出したが、一つ掃除の仕方に就いて少し言つて見ませう。何でも無いやうな事なれど、大いに參考になる節も多からうと信ず殊に女扁の箒の傍は「婦」の字して見ると婦人の方は掃除をする役目があると見ゆる。

掃除二十則

(一)箒は眞直に持つて掃かねばならぬ、斜に倒して掃くと箒に其癖が就いて塵が除れ難くなる。

(二)暗き所より明るき所に掃いて行かねばならぬ、何となれば明るい所を見てゐた揚句に暗い所に向ふと、塵の見落しがあるからである。

(三)障子の棧の塵を掃ふには塵掃を紙に向つて眞直に當てぬやう、即ち斜に掃ふやうにしなさい、障子の紙の傷まぬのみならず塵も能く除れる。

(四)雜巾は堅く搾らねばならぬ、ビショ〳〵では却て汚なくなるものである。

(五)疊を湯で拭く人があるけれど、これは水で拭く方が宜い、何となれば湯だと疊の色が赤くなるからだ。

(六)これに反して板の上は熱湯を灌いで拭くが宜い、凡ての汚い物の消毒にもなる。

(七)疊は望むらくは一月に一度位戶外に出して、パタ〳〵叩いて貰ひたいものだ、考へて見れば不潔なものですからね。

(八)便所の箒や雜巾は別なのを用ゐねばならぬ、これは說明せずとも了るでせう。

(九)糞壺へは五十倍の石炭酸水なりアルボースなりを撒いておきたいものだ、仲には夫等の香は糞の香よりも厭だと云ふ人もある、其樣な方は桐の葉或は杉の葉又は無花果の葉を入れなさい、それも厭なら仕方が無い。

(十)手桶や瓶に水の汲溜をなさるな、目に視えぬ汚物が澤山出來ますからね、殊に夏はさうですぞ。

(十一)庖刀に錆の生えぬやう、成可は毎日磨いて貰ひたいものだ、折角山吹色の澤庵も錆が少し附いてゐたらば何んな感覺が起るでせう。

(十二)流し板の上で直に野菜物や魚類を切りなさるのは眞平御免です、流板の上程黴菌の出來る所はありませぬ、又把稿をかけて度々板の上を磨きなさい。

(十三)硝子障子を拭くには軟かい布片を濕さずに使ふが可い、若しも汚物の除れ難い場合にはアルコール又は石油を塗けて拭きなさい、奇麗になること妙です。

(十四)古器を愛する人は其の潤澤が宜いとて、態々手垢を着けたり鼻の脂を塗つたりして、更に拭かぬけれど、斯の如き人は到底文明の人とは云へぬ、拭いても洗ふても古色の有る所が價値の有る所だのに。

(十五)拭巾は重曹水で能々洗ひ、然る後又湯で洗ひなさい、鼠色になつてるので拭くなら一層拭かぬが増しです。

(十六)爼は時々日光に曝して乾すことを忘れて下さるな、水をかけた後手を拭ふなどはイヤハヤ。

(十七)塵桶には千倍の昇汞水なり五十倍の石炭酸水を灌いで下さい、蠅蟲などがわいて實に不潔ですからなア。

(十八)庭を掃くには少し許り打水をしてからにし、さうして掃いた後は又水を打つが宜い、これは砂埃を立てぬためです。

(十九)押入戸棚なども奇麗に掃除し時々火鉢を入れて其中を乾しなさい、何となれば暗くて濕り易い所であるからです。

(二十)天井などの煤蜘蛛の巣は見落すものであるが、これも毎日高箒で掃はねばなりませぬ、この理由は說明せずもがな。

來月は季節衛生の附錄として「臥方の研究」を報告致します、仰に臥て可からうか、横に臥て可からうか北枕か西枕か當てゝ御覽なさい。

衛生顧問

先月の十一日より今月十日までにかけて質問の葉書は千三百六十三通、之を百分比例に種類別して見ると、「女代診」を讀めば必ず其の答のあるのが三十%七月の定期增刊にある「美人となる法」を見れば了るのが六十%、其他雜部が十%である、其の雜部も大同小異の物ばかり大い、されば其中より最も有益なる事と信じたるもの丈を精撰して、其代り一つでも詳しく答へて見ます。

(問)銅器にて湯を沸し、或は濕氣の有る物を養て之を飲食すれば健康に害ありませうか、又中毒あるものとせば如何なる病狀を呈するものに候や、(加賀百萬石の城下女)

(答)如何にも有益なる問である、余は大いに喜んで答へませう、これに就いてレーマンといふ衛生學者が大いに研究せられた結果は更に無害なるものと報告して有ります、けれど其の後名は忘れたがこれも衛生專門の或る學者はレーマンの說は素人を誤るものであると駁擊して曰く成程銅器で煮たら飲食物は害は無いけれど若し其の洗方が不充分であると銅の銹が有つて、其れが爲めに一方ならぬ急性中毒或は慢性中毒を起すものである、其の中毒の症狀は惡心、嘔吐裏急腹重、呼吸困難、血便を洩す等の重症に陷る云々されど一々能く洗ひ能く磨きて使へば差支無き譯だが、斯る危險なる物を用ゐぬ方が安心なりと余は信ずるのである。

(問)交通の不便なる所ですから一時に買ひ置かねばならぬ必要ありますが何卒牛乳を二三日貯藏する方法を敎へて下さい、(信州の淺間女)

(答)これは沸騰させて尚ほ十分時間養たる物を能く攪き混せて氷又は井の中に貯へおけば盛夏中と雖ども二日は大丈夫です、其外に工夫は有るかも知らねど藥でも入れる外は知りませぬ、藥を入るれば多少害ある事を免れませぬ。

(問)七月の定期增刊「美人となる法」中に「鷄卵にて髮を洗へば功あるけれど、併し洗ふより食べよ」と申さ

れましたが、食べれば滋養の功あることは存じて居りますれば、其の髮毛に如何なる譯で功あるか御說明を乞ふ。

(答)興味ある問である、偖て鷄卵は誰でも知つてゐらる〻通り、白身と黃身とあります、其の白身は蛋白質より成り、黃身は蛋白質と脂肪とから成つてゐる、而して蛋白質は塵を吸ひ取る作用あるし、脂肪は髮に光澤を附ける性質あるから卵を以て髮を洗へば雲脂も除れ髮の色も宜くなるといふ道理なれども毎日三四個宛費せば兎も角、時偶に一つ位使つた所が大海の笹故に余は髮に塗けるより口に御入れ遊ばせと申し上げたのである。

(問)妾は長崎の者ですが、長崎の今年の極暑は九十八度に達して、夜分蚊帳の中へ入つても暑くて容易に寢られませぬ、巳むを得ず窓を明け放して寢ましたが、別にこれといふ健康も害せぬやうですけれど、それでも冥々の中に何か害を蒙つて居りませうか。(長深きよ女)

(答)これは其の土地の風土に依ります、即ち晝夜の氣溫に非常なる大差のある所は如何に暑くても窓を鎖して寢る方が可し、例へば臺灣の如きは日中は釜中に煮らる〻やうな暑さなれども夜中になると綿入でも着ねばならぬやうな變化がある。斯る土地で宵の口が暑いからとて明放して寢ようものなら直に感冒或はマラリヤ熱などに侵さる〻が、御地長崎は氣溫に大なる變化を來さぬ土地なれば明放でも左程の害は無い、併し障子位は閉めて寢た方が矢張宜しいです、我慢し玉へ。

(問)極暑の節、裸體は衞生上害無きものに候や。(大阪作某女)

(答)唯衞生一天張から申すと空氣溫が華氏寒暖計八十五度以上であれば差支無い譯であるが、併し如何に暑くとも單衣物一枚纏はれぬことも有りますまい、肉體を表はさぬといふことが萬物の靈たる所以、殊に優美を尊ばねばならぬ婦人の身に於てをやです、若し我妻にして裸體で無くば凌がれぬと云はゞ余は斷然離緣致します。

(問)幼少の頃より學校及び敎會などにて、講話等を聽

くに始めの中は熱心に耳傾げてゐますれども、遂に眠氣を催ふし、折角の話も聞き洩すこと有之候何卒これが原因及び療法を御教へ下され度候、但し身體は健康であります。（廣島市のＦＯ女）

（答）原因は過食、過勞、奮勵心の缺乏、腦病等であるけれど一つは話す相手の下手なのもある、療法は原因に依て考ふれば自ら了るでせう。

（問）香の物は如何なる滋養の功あるものでせうか。（舘中の粗食生）

（答）滋養物と云ふよりは、寧ろ嗜好品とか或は辛香料即ち唐辛山葵の類に入れて可き物と余は思ふ、之を少量に用ゐれば食欲を興奮せしむる効あれど、多く食へば消化を害するものなること言ふまでも無い。

（問）伜十二歳は海水浴したる後は必ず濱邊の熱い砂の上に寢轉んでゐますが害になるものでは有りませぬか、（大磯の其母）

（答）砂浴とて之を習慣にしてゐる漁者の兒などには頗る宜しきことではあるが、皮膚に抵抗力の少き、而も幼少の人には餘り面白からぬことである。

今回は遠地の旅行等を致したる爲に答案甚だ少くありますが、其の埋合として來月は諸嬢の滿足を得らるゝやう、ドツプリ掲げますから御恕しあれよ。又女代診も來月からドシ／＼出しマスよ。

最近美貌術

長濱嘉子

これは米國婦人に適當なやうに書いて御座いますから、自然日本の方々には不向な處も見えます、然しいくらか御參考にはならうと存じます。果して美人になるかならぬか兎に角試して御覽になるのも一興でせう。

婦人容貌の美は各自持つて生れた外にどうとも致方の無いやうに思はれますが、決してさうとは限りませむ、持前よりよく見える様にと能く／＼研究し注意をして居ますと誰れでもかれでも屹度あゝ美しい人と思はせる丈けの資格はあるのです、これから其方法に就

て説明致しませう。

一寸したつまらない事のやうに思はれますが先第一に身體の滋養になる甘味いものを食べて、自分の周圍や體を奇麗にし、適宜の運動をし善良な空氣を吸ふて能く眠ることを忘れては決して美人になれませぬ。

皆様御存知でしよう毎日よく運動することの必要なのはきまつたことで朝衣服を着る前に極く簡單な運動を五分か十分なさると血の廻りがよくなると顔のつやがよくなります、どういふ運動かといふと女の方が朝から飛んだりはねたりは出來ませぬから首筋の處に兩手の指先をつけて頭の上からぐるりと手を廻すので、

矢の示す如く鼻目よりは外側へ頰よりは上へ額は上と外側へ



まあやつて御覧なさい、朝晩十分宛も行ると六ケ月のうちには胸のまはりが五分から一寸大きくなります。

扨てこれから容貌にうつりますがそも〳〵婦人は美しい生れつきの方もそうでない方も美しく見せるのは肝要ですから自然を失はずに健全な方法で自分の生れつきの顔立をよく見せるやう必懸けねばなりませぬ。

アルカリ分のはいつて居る石鹼で顔を洗ふてはいけません柔い皮膚がめちやめちやになりますから、水で洗ふのは日に一二度はよござんすが、あまり幾度も洗ふては不可ませぬあまりつめたい水で顔を洗ふ事も不可ませむオートミルを粉にして少しの水で掌にとかし

て石鹸の代りに一週に二三度靜かに顏をこすると非常に美しくなつて皮が柔かにびらうどのやうになります、日中又は夜、床に就く前顏を洗い度い時には洗ふことをよしてよいスキンフードで「あご」「頰」「額」の上外に向けて摩擦をするのですマッサージの規則は次の如くでこすり方はこの畵の通りです。

極く靜かに目の廻りをこする殊に目の下は靜かにして強くこすつては不可ませぬ、其れから柔かいタオル糊氣のない使いかけの手巾ではつきりと顏を拭くとさつぱりと顏は奇麗になります。

顏の油ぎつて來る方は、あまり洗はずに毎朝粉のオートミルを用うると効能があります、あまり顏を洗ふのは能くありません、淡黃い皮膚の方は乾度（淡黃は白色人種中の淡黃）ほこり、けむ、日光、土によごれて其儘にして置いたり長らく風呂に這入らずに居たり惡い石鹸を使つたりした不注意から起るのですから、よく〳〵注意せねばなりません。

強い風や寒い空氣、熱い日光或は火にあたりすぎてほてつて居る時は直ぐに顏を洗つてはいけません、直ぐ洗ふと反つて日にひどく燒けたり、肌理があれる、普通の心持になつてから靜に顏をふいて精製の米の粉を一寸ふりかけてお置きなさい、お白粉の上等も宜しい、夏やけは上皮丈ですから床にはいる前につめたいクリームをつけて寢れば直ぐ全治ります。

帶をかたくしめたり、窮屈な衣服を着たり首をつよくしめたり、靴や手袋の硬いのをはめたりすると顏付まで惡く見えます不愉快不健康が内面にあつては甚麼美人も奇麗には見えませぬ。

手を洗ふには可成粉のオートミルで洗ひ石鹸を使はぬがよろしい「爪」は深くきつても不可ませんし又ナイフで切つても不可ません。

今度は髮です髮の結ひ方取り扱ひが惡いと折角のたしなみも打破されて仕舞ます長い細顏は額へ低く毛をなびかせ横はひろく結び、やせぎすの顏は首筋に低くふとく結ぶ卵形の顏は高く結ふて顏のわきをふくらますといゝ顏立に見えます、顏付はよくても首が細長く

肩がヒヨロ〳〵して居ると誠に見苦しいもので恁ういふ方は頸と肩を高くあげる習慣をつけて夜と朝に深く呼吸して頸合の運動をすると治ります。

清水は澤山呑むが宜しう御座います、牛乳のあついのは不可ませむが温にしてなら呑む方が宜しい而してマッサージをして居れば皺や見苦しい程むく〳〵した二重あごは治ります。

今度は目と髮と服裝です。黒い青味がかつた目と鼠色で青味がゝつた目の方は晝間は藍色がよくて夕方は薄クリームか薄桃色がいゝ柄はくだけたばらか珊瑚の模樣があれば猶よし、茶褐色の毛と目の人は毛と目と同じ色の衣服がよいレースをするならば濃いクリームか褐色がよい手袋も靴も同じである、濃褐色の毛で黒目勝か褐色の目は濃青色又は稍や赤き褐色眞紅色が似合ふ。

飾帶は殆んど赤ときまつて居ますけれど黒味の人ははつきりとした青が反つて似合ふ、黄色い顔付の女は青やばらのもやうのものを着けては不可ませぬ日中一番いゝのは黒ずんだ褐色を着ると顔つきが華かになります、つやのある赤は夕方によい、色の配合はコンプルメントカラー補色(二色相合して無色となる色か)を合せることが大事です。

衣服や髮の格好、好みを撰ぶに付て注意したいのは、婦人は兎角自分の不似合を忘れますから體と顔付を考へてすべきで、決して流行だからとて其眞似をしても似合ふとは限りませむ、キリッとした立派な婦人は個人に天から授かつた形それにつり合ふ樣に考へて居ますから、無暗に最近と流行を追ふことを致しませむ。

流行は釣合ふ程度に調和さすのが肝要でせう。體の姿勢も氣をつけねばなりません。結論としてして悪いことを申せば、短かい衣物を着て、大きい帽子をかぶらず、細いかゝとの靴をはいて朝の略服を着ては不可ませぬ。ふとつた方は大きな縞の衣服を着ず細かいしまがよく、やせた方は薄い模樣の衣服を可成召さない方がよろしいです。

(そはり)

夫の不人情の致す所也。里方がこまれば、夫たる者、之を助けてやらざるべからず。然るに、夫たる者、冷酷非道なるを以て、いくら哀を乞ひても、詮なきより、かくは、ひそかに、里方にみつぐべければ、責の歸する所、夫もその一半を分たざるべからず。妻をして、かゝる行あらせたくなきもの也、それにつけても、夫たる者をして、利慾一方にのみ遍せずして、人情を解せしめたきもの也。ともかくも、盜みするは、惡事也、盜みする人とは、同捿すべくもあらず。

『多言』とは、たゞ、しやべることとには非ず。無口の女がよしとには非ず、人に對し、客に對して、挨拶をよくし、愛嬌をふりまくは、妻に必要なること也。愛嬌を振まき過ぎて、下品になりても不可なれども、當りさはりが無く、而かも趣味ある事なら、多く喋べるが、却つて好ましき也。されど、姑に對する不平を、里に洩し、夫に對する不平を隣の妻君にもらし、子供の前にても毒舌を吐き、下女下男を相手にして、人の惡口を言ひ、淺はかなる智恵を以て、輕々しく人を是非し、よろづたしなみ無く、妄りに噂を信じて、之に想像を加へて言ひふらし、妄りに中傷の言を發し、氣にくはぬことあれば、怒鳴りちらし、叱らるれば、必ず、くやしがりて、罵りかへし、いつも出しやばりて、餘計な事を云ふが、所謂多言なる也。去らざるまでも、斯る女は、紳士の妻たる資格なし。そんじよ、そこらの裏店の山の神たるべきもの也。ならうことなら、かゝる女は、妻とせざるが、夫の得策也。

『子なき妻を去る』とは、一寸聞けば、殘酷なれども、古來、東洋では、家を重んじたり。子なくして、家斷絶するは、父祖に對して、申譯なし。子を生まぬ女は、妻としての資格を缺ぎたるもの也、否、女としての資格を缺きたるもの也。動物を通じて、女性は、子を生むべき筈のもの也。下等なる動物は、唯生みさへすれば、それで子は育てど、高等なる動物に至りては、生みたる上にも、なほ乳を與へて、之を育つ。人に至りては、衣食を與ふるのみにては不可也、之を教育せざるべからず。かくて、はじめて、眞に子を生むといふ

べき也。女性の天職は、此の如くに子を生むに在り。故に女性は、身體の强壯なるが、第一の要件也。次に常識をそなへ、ひと通りの知識をそなへ、義理と禮義とをわきまへて、よく子を敎育するが、第二の要件也。今の世、子の無き妻を去るやうな不人情の人は無し。むかしとても、必ず去りたるに非ず、養子を貰ふなり、妾を置くなりしたるもの也。家族本位の國柄にありては、さもあるべきこと也。個人本位の國柄にありても、子を生まざるは、女子の天職を缺く也。單に生むのみに



ては、眞に生みたるに非ず、夫の體强きに、妻の體弱くして、虚弱なる子 [illegible] 、若しくは、子の [illegible] る。、無學無智に [illegible] 、作法も [illegible] 敎育す [illegible] 知 [illegible] る能 [illegible] り子を [illegible] 貧乏 [illegible]

空氣と衞生

△初秋の注意

一年の中に何時が一番暑いかと云ふに通常日本の暑氣は七月中旬より八月中旬迄が峠で、九月に入ると滅切り冷氣だつて參りますが、此時節が人體に取つては最も健康を損じ易い時です。何故かと申せば、身體の方は暑氣に慣れて未だ冷氣に對する用意が出來て居らぬのに、氣候の方は容赦なく冷て行くので、つい種々の病氣に冒され易い、殊に夏期中は腸胃及全身の筋肉の働きが鈍り、外界に對する抵抗力が弱くなつて居るから、寒冒だの腸胃加答兒等に罹り易く、赤痢病抔も寧ろ殘暑後に猖獗を極める例が多いです。

△空氣の利用

それ故暑中より出來得る丈けの準備を整へて初秋の冷氣に冒されぬ樣にすることが大切す。其方法は食養生、運動、冷水浴、種々ありませうが、最も簡易で然も最も必要なのは、空氣養生です、勿論空氣の必要なることは今更申す迄もないことですが、此空氣を其時と所とに應じて能く利用すれば一層身神の健康爽快を增進することが出來る。

△良空氣と惡空氣

一槪に空氣と申しても、海邊の空氣と、山國の空氣とは多少其含蓄物を異にし、田舍の空氣と、都會の空氣とは淸濁の度を異にして居て、何れも直接間接に其作用を及ぼして居る、譬へば多量に水蒸氣を含有して濕め〻〻したる空氣、又は紅塵萬丈、塵や煤烟などの汚物が混入した空氣は、單に呼吸に不快を感ずるのみならず、素質の薄弱な人は爲めに病氣を惹起す事が多い、此外に空氣には、壓力と溫度との二つの大切なる要件がある、即ち氣壓は土地の高くなるに從つて薄くなり自然壓力も減少しますが、海面に於ける標準壓力は平均七百六十粍と定めてある。避暑地を以つて有名な信州の輕井澤邊は多分七百粍以下で、二萬二千尺標高の富士山は五百粍位だそうです。氣管支及び肺などに疾患のあるものは、餘り稀薄な空氣には堪へられぬもので、醫師の話によれば頗る有害であるとのことです。

△空氣と欠伸

然し此處の空氣か汚い、濕ぽい、と言つたからとて、直ぐと場所を換へる譯にも行かない東京の空氣は不潔だからと言つて、田舍にばかり生活して居ることも出來ない、であるから單に斯かる場所を避けると云ふよりも、進んでそれに抵抗して勝を制するといふ積極的の方法を講ずるのが上策です、即ち其方法は、可成淸淨

なる空氣を多量に呼吸すると（其一）及夜間戸外の空氣を呼吸すると（其二）の二つである。

清淨なる海氣、森林中にあるオッオン（强性酸素）等を含有する空氣を多量に呼吸すれば、血液の新陳代謝が活潑になるから全身に快感を覺え、自然營養を增進せしむるとになる。殊に神經を使ふて腦に疲勞を感じたり、胸部に何んとなく壓迫を加へらるゝ如く、欠伸の續出する場合抔には、運動や深呼吸を爲し又は大聲に唱歌を歌つて多量の空氣を呼吸すれば忽ち心氣に著しき爽快を覺え精氣を恢復するものである。



△夜間も窓を開放せよ

東京あたりでは夏日蒸し暑い晩に、窓戸をピッシャリ閉めきつて汗ピッショリになつて寝て居ますが、これは甚だよろしくないこれは勿論夜盗の要慎から來た習慣でもあらうがもう少し何んとか工夫して戸外の空氣を流通させる樣にしたいものです。僅か八疊か十疊の座敷に一つ蚊帳の中に數人の家族が一所になつて眠るなどは健康を害ふものと言はねばならぬ。一概には申されぬが、外國人抔は最も

此邊に注意してゐる、元來外國人は一體にストーブを用ゐて室内を暖めますから、嚴寒中でも其室内温度は東京の四月頃と同じ樣な温度を保つてゐる、日本家屋の室内抔とは迚も較べものにはなりません、と云つて戸外の氣候はと云へば、北亞米利加の北部、加奈太抔には我國の秋田や淺間山麓邊よりもモット寒い處がありますが、其邊に住居つて居る人の中にも、夜間はチヤント窓戸を開放つて眠る人が澤山あるのです、一寸見ると如何にも亂暴なやうではあるが、段々と慣れて來ると眠るにも勉强するにも却つて心地よく又呼吸器や喉頭が、氣候の劇變に堪へ寒氣に堪へる樣に次第に强壯に成つて來るのである。

△米國婦人の實驗

現に信州邊の寒地に住居つて居る米國人中にも夜中窓戸の開放を不絶行つて居る人がありますが、其中の一婦人の如きは非常に成功したる實驗談を記者に語りました此婦人の實驗に據ると、其人は幼少の頃より蒲柳の質で殊に肺及氣管支が弱かつたのですが、今より十數年前、戸外空氣を不絶呼吸するとの有効であるといふ事を聞き直に實行を始め、爾來一日も止めた日とてはなく、今日では如何樣に酷い寒中でも、又雪の降る晩でも、殆んど全室内の窓を開放して眠るといつてゐる、同婦人が十餘年一日の如く勵行したる結果は、獨り肺の强壯になつた許りでなく、感冒に罹るとも極めて罕になつて、全身の健康が著しく良くなつたとの事です、非常に身體の弱い人又は特別に病氣のある人は兎も角も、普通の健康體の人は、氣候の暑い今頃から、此方法を實行したならば秋冷にも、寒氣にも堪へる力が餘程强くならうと思ひます。

△東京の氣候は如何

氣候の劇變といつても東京邊は寒暑共左程酷いとはない、即ち平均温度は一月が二度八(攝氏以下同じ)花の櫻の四月が十二度四、酷暑の八月が二十五度九、十二月が五度二で一年の平均温度は十三度八でありますから、極暑の月と極寒の月とは漸く二十二度六の差です、少し注意して戸外空氣の呼吸法を勵行したならば此位の氣候に打勝つ事は、容易であらうと思ひます。最寒の北海道上川邊では一月が氷點以下十度、八月が十九度七、一年の平均温度は五度ですが、西比利亞邊のチタ市なぞと比べれば、左程驚くにも足らないですからそんな時でも戸外空氣を十分に呼吸する事につとめねばなりせまん。(秋霜記)

兒童の眼病

東京眼科病院　須山肇

△眼病の種類

子供の眼病には甚だ多くの種類があつて一々枚擧に違あらざれ共、其の中重もなるものは近視、トラホーム、腦漏眼、虚弱より起るもの、先天的黴毒より起るもの外傷即ち眼球に傷を受けたるより起るもの等である。爰には右虚弱性の眼病のみに就て述べる考だが、此の眼病は動もすると子供の失明を招くの恐あるに拘らず、世人は兎角等閑に附する傾きがあるから、特に之を擇んだ次第である。以下其の症狀、原因、豫防法、治療法等を簡單に述べて見やう。

△虚弱性の眼病

此の眼病は如何なる狀態に於て現はるゝかといふに、先づ第一に起る症狀は、眼球の奥底に或物を生じ、爲めに子供は鳥目に罹り、同時に白球にも亦一種の病氣を惹起すので、之れに罹れる子供は、黄昏時に物を取らうとして手探りをするやうになる、物に躓き易くなる、或は夜中提灯を持ちながらも不思議な歩き振りをするなど、親達が少しく注意を拂へば必ず之を察するヿが出來る。此際はまだ左程病氣は進んで居らず、故に之を見附けて早く治療を施せば十分に癒すヿが出來るのである。

若し之を放任して病を募らせると、第二の症狀として今度は黒球に星が出來始めるので、第一症狀に於て眼が一見清く輝けるヿは異り、此の場合には何人にも容易に之を認むるヿが出來る。で此時に及んで治療を施して尚ほ全治するヿもあれど、多くは多少の星痕を遺して視力の障害は到底免れないから、能く注意して第二症狀にならぬ前に施術するのが肝要である。

更に病勢を進めて第三症狀に入るときは、黒球は漸々に破壞せられて膿の如きものを出すやうになり、遂には全く視力を失ふて所謂る全盲の狀態に陷るので、事此に及んでは如何なる名醫も最早奈何ともすべから

ず、哀れむべし其の子は終生天日を拜し得ざる不幸の身と爲らねばならぬのである。

△發病の原因

此の眼病は體質の虛弱が原因であるが、第一は嬰兒の下痢寒冒の如き輕微なる病氣よりして之を誘致するヿあり、第二は母乳の不足に氣附かずして子供を育つとき、又は母乳の乏しき爲め牛乳或は貰乳を以て育つとき之を起すヿがあり、第三體質虛弱なる者が眼の過勞に因りて之を起すヿあり。此の過勞の爲めに眼病となるは大人に於ても多く見受くるので、彼の織物會社の女工、貧民窟、監獄等に眼病者の多きは其の好例である。其他日光のやうな強い光線に眼を洒し、白壁や或は棉の如き白色の物を絶えず取扱ふなども眼病の原因と爲る事が多いのである。

△其の豫防法

之れが豫防の法は即ち專ら右の原因を排除するに在りて、營養を充分にして兒童の健康を計るヿが最も主眼である。故に子供の下痢、寒冒等、縱令輕微なる病氣でも、之を忽せにするのは甚だ宜くない、又飲食物特に母乳に就ての注意は最も大切である。初めて子を持つ人は兎角此邊の注意を缺き易いので、自分の乳の惡質少量等に氣附かずして、不知不識の間に子供の健康を害することは往々見受くる所である。牛乳で哺育する人の如きも其の分量或は年齡に應ずる加減等は最も注意すべき事である。其他光線に就ても亦然り、戶外に於て子供のお守をするには、反射の強き白壁造りの附近に於てするを避け、又光輝の強い玩具の如きも宜しく之を排斥しなければならぬ。

△治療と養生

治療は手療治にてもよひが、危險が多いから成るべく專門醫に就くのが安全である。其の養生法は、第一身體を安靜にして眼の疲勞を休むるヿ、次に此の眼病は脂肪分の缺乏より起るとの說がある程なれば、成るべく多量の脂肪質の食物を取るが肝要である。脂肪には植物性のものと動物性のものとありて、孰れも滋養に適すれ共、人體に入りて最も脂肪に成り易いのは魚類の脂肪である、昔から鳥目に鰻の肝は大妙藥とて大に珍重せらるゝのは、即ち此の脂肪分の多量なるが爲で、脂肪分にさへ富めば何にても宜しく、彼の雞の肝臟の如きも之を眼病に用ゐて大に効能があるのであります。

東京の臺所

（魚市場の觀察）

▲魚類の河岸送り

「三崎の押送船」と言へば昔は魚河岸の一名物となつたもので、腕自慢の壯丁が八挺艪に力をこめ、掛聲勇ましく、三浦岬から波濤を切つて飛ぶやうな魚を河岸へ漕ぎ寄せたものだが、今は此の風も衰へて總、房、豆、相、或は駿、遠等の浦々より送り來る魚類は、多くは快速なる汽車、汽船の便に依つて居る。されば魚類を濱へ引揚げてより之を河岸へ寄越す迄には、近き神奈川邊ならば僅かに二三時、稍遠き大磯や小田原邊でも五時間位もかゝれば十分であるとか。そこで魚河岸へは毎夜九時十時の頃からそろ〱諸方より着荷があり、深更の間少時は船の通路途絶ゆれど、東雲近つく頃ともなりて日本橋上の瓦斯燈も淋しげに瞬たく午前三四時頃には、魚荷を送り來る馬車は轣轆寂寞を破つて橋上に轟き、總房地方の漁船が棧橋に蝟集するもの漸く多く、軈て荷を送る者買出しに來る者東西南北より雲霞の如く群集して乍ち一大熱鬧の巷を現出するのである。

▲「朝河岸」と「夕河岸」

東天漸く白く、四方より集まる人次第に增せば、橋畔の川岸通は喰違の目隱塀にて劃されて、こゝに魚市は開かれるのである。大庖丁を振つて鮪を斷截る者、手鉤を以つて鯛を吊る者、潑溂盤臺を飛出す魚を捉ふる者、小魚を盛つて聲を嗄らす者、罵る者市場の塵影と其の喧囂の有樣は今更めて言ふを須ひず、千差萬態お祭典に荒神輿を擔ぐ血氣の壯丁が素手で騷ぐに異らぬ。正午頃になれば人漸く散じ、彼方此方におでん燗酒、鮨屋、天麩羅屋が現はれて場内さながら大風の跡のやう寂然となる。午後になれば房州より一番二番の着荷があつて、三時頃より五時半頃迄また夕河岸を開く、夕河岸の魚は槪れ鮨屋、天麩羅屋、大道店向の下物小魚類が多いのである。

▲魚の相場

魚類が河岸へ着けば問屋では之れは大槪幾何で賣れると先づ大體の見當は着かうが、然かも賣人獨りで魚類の相場は立つものでない。勿論一日の中にも幾度か相場の狂ひは有るが、通例の相場立はまづこうである、十枚の鯛が朝問屋につくと、問屋は此の鯛は時日のよりは少し品は落ちるが今日は着荷が少いから矢張り昨日と同價（二圓）に賣らなければならぬ、考へて客の來るを待つ、軈て買人が來て直を問ふ問屋は二圓五十錢と打ち出す、二圓五十錢は無論掛値があるので、相場の定まらぬ間は最初二三人の客には無駄する積りで、相手の氣合を探ぐるが彼等の常套手段である。すると買人にも亦夫れ〱の考があつて品拂底ではあるが今日は天氣は暖かで保持も惡いからまづ一圓七八十錢が値であると。懷ろ算用を言つて見るが、問屋は却々卸さない。次の客は八十錢と言ふ、まづ賣らぬ。其の次の客は六十錢と言ふ、問屋は

聊か閉口の體で更に客を待つ。兎角する中に又客が來る今度は八十錢で買はうと云ふ、そこで問屋は先刻來の客の氣合に鑑みて、先づ此の邊が賣所であらうと見切をつけて賣る。彼方にも此方にも然んな順序で運つてる間に自然と河岸を通じた相場が出來るのである。

▲素人客の買出し

魚河岸へ買出しに來る客は市中大小の料理店を始として全市の魚商が最も多數である、下つては所々の兵營病院や學校寄宿舍などの買出しも亦可なりにある。就中買出高の一手で多きものを言へば、各所の兵營であらう。是等の商人や團體を外にして素人の買出客は旅人宿、大商店、下宿屋などで、是等は大抵臺所番が乘込んで買ひに行く、今魚河岸通の話を聞くに「普通の者で二三度行けば樣子も分り買ひ被る憂ひも無ければ、十人前以上の料理をする積りならば少し遠方でも買出に行くが好い、秋刀魚三十本位買はうとならば矢張り河岸迄行くが經濟で、汽車賃や電車賃は何でもないと」言つて居る。

▲魚類調進所

宮内省へ魚類を納めるには、河岸に魚類調進所と云ふものが置かれてある。現今は問屋の伏梅が一手で納めて居るが、若し調進所に於て不足を感ずる時は、更に他の問屋より買ひ足して宮内省へ納める次に一般上流向の臺所へは多く山の手邊の魚商が納めるのであるが切通の岩崎家へは大平といふのが納めて居る、かやうに問屋の手から直接に納めるのも亦尠なくはない。又會社組織の處になると三越などで遣つてゐるやうに「炊出し」と云ふ工合で恰度辨當屋の類の氣の利いたやうなもので、問屋にあらず魚商にあらず別の商人が、そこの臺所を月々五十圓なり六十圓なりの借賃を拂つて借り受け、其處へ魚類や野菜物を持込み、辨當を拵へて其の店員に供すると云ふやうな仕組になつてゐる。

▲魚河岸の夏と冬

夏季は魚類が拂底なる上に又不漁である。尚ほ其の上に腐敗し易いと來てゐるから河岸に取つては最も困難の季節であるから問屋も此の季節は一才休業のやうなわけで、殊に大きい料理屋相手の問屋になると盛夏四五十日間は全く營業を止めて居るが、之に反して活物問屋は夏季が最も繁忙の時で、例年春の彼岸頃から活飼を始め、舊暦八月一ぱいを其の營業の期節として居る。活物納屋は深川、佃島、芝金杉等に設けてあるが、まづ深河を第一とし、其の納屋の生洲に活きながら貯へてある魚類を毎朝艀子が魚河岸迄運び出す、其の忙しさは亦尋常でない。夏過ぎて追々涼風立そめると生魚の手當も樂になる。頓て鰯が來る、秋刀魚が來る、就中秋刀魚は初鰹魚にも劣らぬ人氣魚で、之れが盛んに寄る時は他の魚類は殆んど其方退といふ有樣、で河岸中寄つて秋刀魚に取つてかゝる。

▲活飼の秘法

活飼にする魚類は鯛、鯒、鱸、中鱸、小鱸、鰈、蝦、鯔、鮎魚女、

穴子等で、之れは重に洗肉の材料になる。固より何魚でも活飼にならぬ事はないが、下等な魚類は手數をかけても經濟上引合はぬ。活飼の法は、海邊に大きな湯風呂のやうな生洲を拵らえ、之に海水を入れて魚類を泳がせ、倚ほ其の上に海水の瀧を作つて魚類を斷えず之れに打たせて置く。此の瀧は是非共必要なので、瀧さへあれば魚は何時迄も活きてゐるが、瀧を取り去れば魚は忽ち死ぬのである。市中の魚商などが店に魚類を活かして置くには、水一斗に鹽二合位の割で鹽水を作り之れへ放つて矢張り同じ水の瀧を落して置くが、瀧にさへして置けば同じ水を幾度呑み返へさせても三日や七日は大丈夫だと彼等は言つて居る。

▲魚類と期節

◎春の魚　二月下旬になると三月三日の雛祭を當込に各地の濱から榮螺の荷を續々送つて來るから河岸は鳴渡賑はふ。二月から三月へかけて河岸の人氣魚は彼の鰆で、何人も知る鰆の照燒、これが花見時の料理屋向で頗る需用が多い。三月末から入梅へかけて鰯が隨分還入つて來るが、丁度この頃の鰯は子を持つてゐて最も不味い時である。

◎夏の魚　「眼に青葉山ほとゝぎす初鰹」、四月に入りて初めて河岸へ着いたのを初鰹魚と稱して賞美するは人の知る所、其れより秋の土用迄が此の魚の盛であるが、鰹魚節にするには矢張り四五月頃のものに限ると云ふ。大な魚では入梅から土用へかけてメバチ鮪が却々美味い、此の鮪は紅梅鼠と言つたやうな色で、何程經つても色が變らぬから大道の鮨店などでは非常に之を歡ぶ。夏の土用から秋の土用へかけてキハダ鮪が漁れる、色は紅梅色で、鮪の中の王と稱はるゝ程に味が美いので他と比較たら値段は殆んど倍額に當たるが、併かし魚の格好も同じく大さも又同じければ他と區別するとは素人には一寸困難であらう、商買人ですらも十人に三四人は其の鑑別に苦しむのである。一年中間斷なく漁れる鮪は、カヂキ鮪である、鰺は殆んどキハダに匹敵し、會席などでは能く用ゐるが、色が淡紅色で見榮のせぬ故か素人向には餘り歡ばれない。夏の小魚類には鱚、鰺、鷄魚、鯒、鰈、鮑、赤貝、車海老、芝海老など云ふものがあつて魚河岸を賑はすのである。

◎秋冬の魚　秋風さむく雁鳴き渡つて所謂金風玉露の頃ともなれば鰯はそろ〳〵味を有つて來る、鯖が來る、秋鮪が來る、十月は例の惠比壽講で大小の鯛に羽が生へて飛ぶ勢ひ、又牡蠣、蛤、大バカが出る、秋の土用十月前程から冬至へかけて秋刀魚が續く、鮭が出る冬になると白魚が現はれる、冬から春へかけては鮟鱇、鰤、鰆、比目魚、と却々應接に遑がない。

斯くの如く四時折り〳〵に變り行く魚の内でも緣喜魚と云ふものがあつて、所謂江戸兒氣質の人は一衣を質に入れても喰と云ふ有樣で彼の初鰹の如きはその一であります、鯛、鯔、海老は時節知らずで味も變らす至極緣喜のよいものだとして御目出度時に使ひ、秋の鯖は大層味宜しけれども兒を持たないと云ふ御幣かつぎから、嫁にくれるなと云ふて居る。黑鯛も子を食べると臨月の胎兒も流產すると云ふて喰べません其外調べたら種々の事がありませふが先づ此の位と致しませう。

婦女雜觀

婦人七去の說（上）

大町桂月

世に、婦人の七去といふ事あり。それは、如何なる事ぞといふに、女大學に說明して曰く、『婦人に、七去とて、惡き事、七つあり。一には、舅姑に順はざる女は、去るべし。二には、子なき女は、去るべし。これ妻を娶るは、子孫相續の爲めなればなり。然れども、婦人の心正しく、行儀よくして、妬心なくば、去らずとも、同姓の子を養ふべし。或は妾に子あらば、妻に子なくとも、去るに及ばず。三には、淫亂なれば去る。四には、悋氣深ければ、去る。五には、癩病などの惡き疾あれば、去る。六には、多言にて、愼なく、物言ひ過すは、親類とも中惡くなり、家亂るゝものなれば、去るべし。七には、物を盜む心あるは、去る』と。この七去の出處は、小學に在り。それを直譯して見んに、『婦に七去あり。父母に順はざれば去る。子なければ去る。淫なれば去る。嫉妬なれば去る。惡疾あれば去る。多言なれば去る。竊盜すれば去る』、これ也。

この七去のみを見れば、如何にも、男の方のみが得手勝手にして、女があまりかはいさうなるが、女大學はもと、女のみの敎也。故に女の方の事のみ云ひて、男の方の事を云はず。小學は、男女に通ずる敎なれば、男の方の事をも云へり。即ち七去について、直に三不去を說けり。一に曰く、取る所ありて、歸る所なければ去らず。二に曰く、共に三年の喪を更へたるは去らず。三に曰く、前に貧賤にして、後に富貴なれば去らず。これ男を戒めたる也。されど、去る、去らぬは、枝葉の問題也。根本の問題は、その始をつゝしむに在り。『凡そこれ聖人が男女の際を順にし、婚姻の始を重んずる所以なり』と說きて、一章を結びたるは、聖人の敎、さすがに拔かり無き哉。男子が七去を橫にとりて、三不去を犯すも非なれば、女子が三不去を楯にとり

て、七去を犯すも、亦非也。

小學は、支那のむかしの教也。女大學は、日本の封建時代の教也。然れども、その教の精神は、之を今の世の夫婦の道に應用して、毫も無理なることあらず。

先づ三不去の理由を説明せんに、第一の『取る所ありて、歸る所なし』とは、妻を貰ふ時には、妻の家が立ち居りて、後につぶれたる也、つぶれずとも、生活にこまり居る也。そのやうな中へ、妻をかへすは、人情の忍びざる所なれば、憐んで去らざる也。第二の『共に三年の喪を更ふ』とは、



三年間、親の喪にこもりたる也、まことに、喪にこもるなら、金魚は生まぬ筈也、金魚とは、も（喪、藻）の中に生れたる子といふこと也。かくまで、親の爲めにつくして呉れたる妻なれば人情、之を去るに忍びざる也。第三の『前に貧賤にして、後に富貴なり』とは、妻を貰ふ時、我身が貧賤にして、のちに出生して、富貴になりたる也。貧賤の中をこぎあげて來りたる妻なれば、若い盛りに憂き身をやつし、芝居も見ず、寄席へも行かず、よその妻君は、こ綺麗な着物を着れども、そ

の身は、きたなき着物のみを着て、夫の爲めに、せつせと働き、借金の言ひわけもすれば、質屋へもゆき、苦しい思のみせしなるべし。されど、男は、うはき也。金が出來れば、もそつと、よき妻をとの心もぎざすべし。「糟糠の妻は、堂より下さず」とは、頂門の一針也。さらでだに、人情、新しきを喜ぶ。如何なる美人も、常に見ては、さまで美ならず。殊に多年の貧苦に、身はやつれ、水仕事に、手があらくなり、その上にも、子を生み、年をとれば、若き時の美は、全くうせはつべし。それがいや也、目ざはり也、女房と疊とは、新しきに限るといふやうな考を起すは、夫としての不德義也。とかく人は、金まはりがよくなれば、うつり氣がするものなるが、それでは、妻たる者は、やる瀬なし。むかしの事を忘るなと、いたく男を戒めたる也。

三不去の敎は、女に對して、同情を表したる也。否、人情ある夫は、誰もかくあるべき筈のもの也。夫たる者は、三不去の精神を、腹から了解して居らざるべからず。

七去の方は、おもに女を戒しめたる也。男に向つて、去れと、そゝのかしたるに非ず、去らるゝことがある故、身をつゝしめと、ころばぬさきの杖、去られぬやうにせよとて、うはへば、女に向つて殘酷なるやうなるも、實は矢張り女に同情を寄せたる也。

七去の字面にのみ拘泥して、その中の一箇條の缺點あるものを去るは、あまり常識なきわざ也、七去のやうな行をなすなと、女を戒めたるものと解釋すべき也。七去と云はずして七失と云ひても可也。

茲に少し七去に脚註を付して見むに、「惡疾」とは、女大學に說明したる如く、癩病などの事也。現に癩病にかゝり居れば、誰も貰ひ手なし。されど、嫁して、癩病になれば、夫を苦しめ、その一家をなやまし、之を其子に遺傳す。人情の忍びざる所也、人道を解する者は、癩病の遺傳ありと知らば、男は妻をもらはぬやうにし、女は嫁せぬ覺悟すべし。それをつゝみかくして、婚禮するは、人道をわきまへぬわざ也。中には、本人は、それと知らずして、あとであらはるゝことあ

り。かゝる時は、天運とあきらめざるべからず。遺傳といふものは、恐しきものにて、子をさしおいて、孫に及ぼすことあり。妻は一生健全なりとも、生める子が遺傳をうけてはかはいさう也、惡疾ある者を妻にせぬとは、人情さもあるべきこと也。日本にて結婚するに血筋をやかましく云ふも、尤もなる事也、それが一地方ならば、わかり易けれど、各地方の人の集まり來れる大都會にありては、容易に詮索がつかず、されど、皮膚色澤などを吟味すれば、癩病の血筋なりや、否やは、大抵見當がつくべし。貰つて去るは、おそし。もらはぬ前に、十分に詮索し、吟味すべき也。



次に『盜みをするものを妻にせぬ』ことも、何人も異議なかるべし。されど、里方が生活に苦めば、妻がこそ〳〵里方に貢ぐためし、世に少なからず。その行は、非なれども、その心情は察してやらざるべからず。妻をしてかゝる、非行をなさしむるは、つまり

夫の不人情の致す所也。里方がこまれば、夫たる者、之を助けてやらざるべからず。然るに、夫たる者、冷酷非道なるを以て、いくら哀を乞ひても、詮なきより、かくは、ひそかに、里方にみつぐべければ、責の歸する所、夫もその一半を分たざるべからず。妻をして、かゝる行ひあらせたくなきもの也、それにつけても、夫たる者をして、利慾一方にのみ遍せずして、人情を解せしめたきもの也。ともかくも、盗みするは、惡事也、盗みする人とは、同棲すべくもあらず。

『多言』とは、たゞ、しやべることには非ず。無口の女がよしとには非ず、人に對し、客に對して、挨拶をよくし、愛嬌をふりまくは、妻に必要なること也。愛嬌を振まき過ぎて、下品になりても不可なれども、當りさはりが無く、而かも趣味ある事なら、多く喋べるが、却つて好ましき也。されど、姑に對する不平を、里に洩し、夫に對する不平を隣の妻君にもらし、子供の前にても毒舌を吐き、下女下男を相手にして、人の惡口を言ひ、淺はかなる智恵を以て、輕々しく人を是非し、よろづたしなみ無く、妄りに噂を信じて、之に想像を加へて言ひふらし、妄りに中傷の言を發し、氣にくはぬことあれば、怒鳴りちらし、叱らるれば、必ず、くやしがりて、罵りかへし、いつも出しやばりて、餘計な事を云ふが、所謂多言なる也。去らざるまでも、斯る女は、紳士の妻たる資格なし。そんじよ、そこらの裏店の山の神たるべきもの也。ならうことなら、かゝる女は、妻とせざるが、夫の得策也。

『子なき妻を去る』とは、一寸聞けば、殘酷なれども、古來、東洋では、家を重んじたり。子なくして、家斷絶するは、父祖に對して、申譯なし。子を生まぬ女は、妻としての資格を缺ぎたるもの也、否、女としての資格を缺きたるもの也。動物を通じて、女性は、子を生むべき筈のもの也。下等なる動物は、唯生みさへすれば、それで子は育てど、高等なる動物に至りては、生みたる上にも、なほ乳を與へて、之を育つ。人に至りては、衣食を與ふるのみにては不可也、之を教育せざるべからず。かくて、眞に子を生むといふ

べき也。女性の天職は、此の如くに子を生むに在り。故に女性は、身體の强壯なるが、第一の要件也。次に常識をそなへ、ひと通りの知識をそなへ、義理と禮義とをわきまへて、よく子を敎育するが、第二の要件也。今の世、子の無き妻を去るやうな不人情の人は無し。むかしとても、必ず去りたるに非ず、養子を貰ふなり、妾を置くなりしたるもの也。家族本位の國柄にありては、さもあるべきこと也。個人本位の國柄にありても、子を生まざるは、女子の天職を缺く也。單に生むのみに



ては、眞に生みたるに非ず、夫の體强きに、妻の體弱くして、虛弱なる子を生み、若しくは、子の體つよきも、無學無智にして、常識なく、作法も知らずして、子を敎育する能はざるものは、やはり子を生まざるもの也。子は、おもに母の感化をうく、賢人の母は、必ず賢母也、妻を貰ふ時は、おもに、その容貌のみが目につけども、子をもちたる後は、も少しわけの分りたる者を貰ひたらばと思ふもの多かるべし。貧乏所帶をふりまはし、

晴れの衣裳を着て人に見せびらかしたき頃は、子の無きが、結局氣樂と思ふ女もあるべけれど、老いてのちは、子が多ければ多き程、心配もあるべけれど、また多くの慰籍を得るもの也、子は澤山生んでおくべきもの也、親に心配かけるやうな子は、わが教育の足らぬ故とあきらむべき也。

「父母に順はざるものは去る」とは、家族本位の國柄にありて、尤も千萬の事也。殊に武家時代にありては、なほ更の事也。祖先以來、大名に事へて、その身も年久しく事へたる事なれば、武士の心得作法は斯くぞと頭にしみ込み、その家庭に於けることも、ほゞ一定し居れり。若き夫婦は經驗未だ足らず、よろづ親に順はざるべからず。何事も家風に從へば、それで妻の道が立つ也。然るに、人情、君に忠なるよりは、家に忠になり易く、親孝行よりは、女房孝行になり易きもの也。武士にして、愛に溺れて、父母に順はざるやうな、たしなみの無き妻を置くは、よほどの無分別者也、忠孝は、日本の道德の粹也。かくて、大義、親を滅する、高尙なる域にも進み得る也。今の世にありては、家祿を相續することやまりて、いろ〳〵適する職業にて身を立てざるべからず。父が醫者だからとて、醫者に適せざる子を無理に醫者にするは非也。子が實業家となり居るに、親が一槪に武士氣質を以て、之を律するも非也。殊に西洋より種々の主義も風俗も入り來りたれば、徹頭徹尾、武士風をふり廻さむとすべきに非ず。かくて、舊思想と新思想と衝突し、姑と嫁と仲が惡き例、世に多し。武士風の敎育をうけたる女が町家にゆくか、町人の娘が武士風の殘れる家に嫁ぐかすれば、よろづに感情の衝突あるべし。こは、今の如き過渡時代に免るべからざる所也。時代が進みて、武士のかはりに、紳士といふ階級起らば、自然に衝突も無くなるべけれど、妻たる者、毫もしつけなく、氣隨氣儘のものにては、夫の親を厄介視して、家庭の和樂を缺く。かゝる妻は、紳士の妻たる資格を缺くもの也。われは、將來、親たらむものにすゝむ、子をそだてあげて、一人前の人にすれば、それで、親の役目はすみたるもの

也、その上は、餘り干涉せざるやうにすべし。されど、子たる者とその子の妻たる者とにすゝむ、孝の觀念は、あくまでも失ふべからず。日本にて、孝の事をやかましく云ふは、これ西洋の道德よりも、日本の道德が進み居る所也。父母に順はざる妻は、今の世にても、私利利欲のみ強くして、氣隨我儘なる女也。去らざるまでも、紳士の妻たるべき品性なき女也。

『淫なれば去る』は、姦通の場合と解すべし。淫なるは、生れつき也。夫も好色なれば、似たもの夫婦にてよきやうなれど、淫婦では、長き留守は守りかねるべく、夫もし弱ければ、早世させるべく、弊害百出す。されど、分別ありて、克己心に富めば、



さまでの害は無し。淫婦か否かを、判別するに、古來いろ〳〵なる言傳へあり、或は曰く、目尻のさがれるものは、淫亂なり。或は曰く、髮の毛のちゞれたるものは、淫亂なり。或は曰く、上下の目ぶた、ふくれて、はれぼつたき目のものは、淫亂なり。これらは、たゞ言ひ傳へ也。必ずしも、あてにはならず。かゝる相を有するものは、たとひ、淫亂ならずとも、好き相には非ず。又、淫亂といふ中にも、色は、さまで好まずして、唯、男を好む女もあり。又、意志弱きが爲めに、誘惑を拒む能はずして、淫亂らしく見ゆるものあり。すべて、女の尻輕きものは、厄介なもの也。

人情哲學

飛燕

◎一夜山上の月下に立つ、清光水の如く流れて滿目夢よりも淡如たり、時に人あつて我を手招くに似たれば往いて迎へんとするに忽ち消え去つて、唯だ朧影虹の如き美痕の遠ざかるを覩るのみ、即ち以思く、之『理想』の幼影にあらざるなき乎、凝視久ふする間に再び物あつて我肩を打つに遭ふ、驚き顧みれば『過去』と囁き居る、而して理想と過去とは兩極に環を描き、地平線上に握手して漸く目路を消え去らんとす。嗚呼理想は逝き、過去は杳かなり、人誰か這の境地にあつて一種の弔意を催さゞらんや。

◎秋は來れり、我世の戰鬪に疲れたる子は去つて山林の秋景を觀よ、露の散るところ、蟲の啼く處、將又江河の滾々として白雲逆さに映りて流るゝの邊、其處に自然の聖書あり、其處に永遠の默示あり、其處に天意の慰安あり、何ぞ必ずしも人爲詩の哲學に依て慰藉を求むるの要あらんや。

◎我等の浮世には泣かんと欲して笑の禁じ得ざる事あり、笑はんと欲して涙の禁じ得ざるあり、苦中に光明を認むるは尚ほ盛夏一杯の氷によつて身心の熱氣を攘ふが如し、哀愁の裡に滑稽を解するの餘裕あつて始めて人生の眞意義を語るに足らん乎

◎一方に動物虐待防止會あれば一方に鬪牛會なるものゝ流行するは歐洲に於ける現時の事實なり、文明とはそれ嬰兒の手を捩り乍らお菓子を與ふるか如きものなる乎。

◎束髪を丸髷に結び替る時は、花の將に散らんとするそれにも似て、嬉しい中にも何となく哀感の催さるゝものぞかし。

◎日本一と稱さるゝ富豪岩崎の、飼犬に要する一年間の費用は七千圓に上るといふ是れ豈優に貧窮兒千人を救ひ得るの財にあらずや。

◎梅干を想像して口に酸氣を催すは、人間が到底動物

以上に進化し能はざの唯一の證據也。

◎咲損ねたる朝顔に息を吹かけて開花せしめ得るは、われの實驗せしところ也、失戀せる人にも恁の術を施さば必ず奇効を奏すべし。

◎昆蟲類は凡て其體軀に幾十倍するの筋力を有す、例へば蚤が我身長に數百倍する距離を飛躍し、又蟻が其體量に十倍する重量を曳き行くが如し、若し人類にして之と同比例の飛躍力と力量とを有せんには正に凌雲閣を飛び超ゆべく正に仁王様を擔ぎ得べし。

◎滑稽學者の言に曰く『女子は蜂の進化したるもの也』と、案ずるに口に蜜あり、尻に刺あり、而して細腰なるが故ならんか。

◎青き昆蟲に青葉の保護色ある如く、跳ね廻る式部に海老茶の保護色あり、これ又造物主の妙工か。

◎空想と自惚とを有する女子は勇氣あり、又活氣あり

◎醜き女の學問に依て豪いものにならんと志すは古今東西其軌を一にす。

◎再婚三婚を耻づる人は百物の利用厚生てふ事を知らざる不經濟の徒なり。

◎女子は直線美を解すれど曲線美を解せず表面を解すれど、裏面を解せず。

◎女怜ふして牛を賣損ねる、とは伊太利の女傑クレオパトラを評したる語なり。

◎舌を吐くを以て會見の禮とする國あり、叩頭するを以て常禮とする國あり、されど兩者の可否は未だ遽に判ずべきにあらず、世の中の議論の多くは此可否を決せんとする各自の主觀に外ならず。

◎『愛する』の語は强者弱者に對して用ふる言なり、力士と小兒とは愚鈍にして無邪氣なるが故に多く人より愛さる婦人の或る者も又この如し。

◎人に愛せられんと惟はゞ力めて無邪氣を裝ふべし、力めて愚人を眞似るべし、即ち處世上の秘訣なり。

◎博愛主義の基督は世界中の人間を小供扱ひにしたる善意の無禮者なり。

◎女子に愛せられんことを希ふ男子は奴隷根性の立派に發達したるもの也。

◎婦人と婦人とが途中に擦違ひたる時の其瞬間の眼眸を見よ、美しきは誇慢の閃光に充ち、劣れるは羨嫉の餘炎々として凄光を放つ。

◎眞人的生活は寂寞生活なり、孤島生活なり、燈臺生活なり、我之をアラビーパシャの晩年に見る。

◎力に限りあり、倨傲尊大、徒に『人間の精力』をのみ頼みとする人をして病の洗禮をうけしめよ、病むこと七日、即ち自覺の第一門を認むべし、驚愕の火に接すべし、正岡子規高山樗牛の輩若し病まざれば凡骨の徒なりしか。

◎酒、煙草、亞片、荒淫等は一種の自殺器也。多感にして多涙なる現時代の青年子女は、正しく如上の凶器を以て慢性に自殺を企てつゝあり。現世の矛盾と心肉の苦悶とは、彼等正直なる徒をして自殺せしむるまでに殘酷也。

◎浦島の玉手匣、不思議をして唯あらしめよ、不思議の解決されたる時は人生の大團圓なり、宇宙の終局也解けぬ中こそ花なれ、謎もとけては屁の如きもの也。



貧と冷たき家庭

ある人は假令如何に貧乏をなすとも一家打つどいて健全に樂しく暮さば世の榮譽榮華何物ぞと之未だ一を知りて二を知らざるものと云ふべし此言の如きは物の道理を明にし少なくも肉體の慾を離れたる人の云ふべき事にして之以下の人には到底味ふべき事に有らざるなりその聖言にも衣食足りて後禮節を知ると云はれし如く辛じて三度の食事を整へ冬の夜寒僅に煎餅蒲團の中に打慄へつゝ過す貧乏に何の禮儀ありや何の愉快ありや世の中に四百四病の苦しみより貧程辛いものはないとは單に貧しき人の愚痴ならずしてよく穿ち得たりと云ふべし三度の食事をも漸くの事に整へらるゝ程なれば勿論教育などのある筈なく他の人々の豐に暮すを見ては今の境遇の恨めしく夫の意氣地なきを喞ち夫は又常に面白からぬ妻の顔見ては終日苦役に飢え勞れたる身心を其家族に慰むる事を得ず所謂自暴自棄して僅に得たる賃錢も自棄酒に消費し或は道ならぬ處へも足ふみ入れて一夜の遊興に使ひ果て貧は昨日より一層甚だしく終には夫婦親子相離散し相反目するの悲境に陷るもの敢て尠からず又最愛の子供或は夫が一朝病魔に犯れたる時は如何日々辛ふじて暮す彼等には醫藥を施すに用ふる程の餘裕なきは當然の事なりさすれば充分に手當を施せば平癒する病氣も醫藥の不充分なる爲貴重なる生命にも關する事なるべく心行く限りの看護もなし得ず好める食物も與ふる能はずして本意なく此世を終らしむる事あるべし實に之等は無慘と云はむか人世の悲慘之より大なるは無らんかゝる悲慘の存する家庭に何の春風の吹くあらんや世は花盛りの陽氣なる時に於ても此家のみはさびしき木枯の吹き荒びて袖にしぐるゝ涙のいや冷たきをかこつなるべし。或は其夫僅に賃錢を取りて生活する家の夫其職に離れて生活の道もとだへ妻が僅かの賃仕事に辛ふじて粥をすゝりつゝ死せざるを得る如き場合に立ち至れば如何に辛抱強き和しき妻と雖も手を束ねて空しく坐せる夫を見ては轉興もさめ果てゝ嫌惡の念禁じ難く愛想も盡き果てゝ家庭の風波は日に荒きを加へ行くなるべし之其原因を尋せば皆貧故に來るなり要するに貧と家庭の不和とは常に共なものにして而も之は自己の我儘より起るに有らず肉體上の必要と無教育なるとは彼等をして止むを得ざるの行がゝりに立ち至らしむるなり實に之等の境遇に居る人々の内實を尋さば思ひ半に過ぐる事あらむ局外者の思ひ及ばざる苦しみの暗に存するなり。

いくら貧乏をなすともこんな苦しみをなすよりましなとはよく人の云ふ事なれども之まだ貧の如何なるものかを知らざる故なり貧すれば決して心平和なる能はず一家圓滿なる能はず幸福なる能はず。

社會

處女の求婚運動

某公使夫人談
秋霜生筆記

支那の詩人の句に緑髪誰が爲めに梳るとあり、妙齡の婦人か自分の容姿を整へるのは、之は婦人の嗜ばかりでなく、又一方に於ては少しでも好く自分の容貌を見せかけ、而して成るべく多くの男子の注意を惹き、少しでも好き配偶者を求むるが爲めです、此の情に於いては、西洋も東洋も大なる差違はありません。

日本でも、近頃多少自由結婚が行はれ自分で自分の良人を選擇するやうになりましたが併し大體に於ては矢張り、昔からの習慣で女子が配偶者を選定する權利は、一に親權者たる者の掌中にあるのですから女子が自分で自分の配偶者を選定する爲めに、努力すると云ふやうなことは、積極的には殆んどないと云つて宜しい程でせう、其處へ行くと、西洋殊に英國は大した差違です、自分の配偶者を得るが爲めには如何なる艱難苦勞をも少しも意とせず、夫れは非常の努力非常の苦心です、決して日本のやうに單に自分の容姿を整へて男子の注意を惹かうなどと云ふ、手緩い事ではありません、斯樣の次第ですから、西洋の婚姻を調べて見ると少しも苦心せずに單に或る偶然の機會で自分の良人を見つけ出したと云ふような者は、十分の一もないのです、九分九厘までは、自分の良人は取りも直さず非

常に努力した結果に得たる勝利の榮冠であります、私が倫敦に居りました時、常に出入し居た倶樂部があります、其倶樂部の會員は、大抵全國の紳士、淑女ですが、其多數の淑女は、皆良縁を得たい爲めに此の倶樂部に出入して居るのです、然れば之等の淑女の心底を叩いて見ると『今日の紅顏明日の白頭、美貌は恰も電光石火の如しで妙齡の女は一日も早く良縁を得ねばならぬ、而して之を得る爲めには、如何なる困難も辭する所にあらず』と實際歐米の婦人が良縁を得る爲めに骨折る事は迚も我々日本人想像の出來るものではありません、又實際骨折らずには良縁は得られないのです、だから呑氣にして居る婦人は、何時も後に取殘されて不遇を嘆じて居ります。是れは實に生活上の生存競爭よりも激烈で、學校の卒業生が早く月給に有つきたいと獵職運動するの比でない歐米の處女が良縁を得る爲めに苦心することは、到底日本の娘達の夢想する事は出來ません、そして其手段も中々巧妙で無躾に婚姻を申し込むなどと云ふことは決してありません、永い年月の間辛抱強く其意中の人の心を得るように勉むるのです、而して何時の間にか、相手の男子に自分を愛しない譯には行かないように仕掛けて男子の方から結婚を申し込ませるのです、其苦心談には色々面白いのがあります。



私の識つて居る良家の處女ですが、此人は或る金持ちで而も美貌で而して非常に鮭漁好きの一紳士に戀して居りました、で何うしても此紳士を自分の物にしやうと思ひましたが此紳士に接近して其の意を得るには、何うしても鮭漁に熟達する必要があるので、大金をかけて漁船は勿論、漁具一切を用意し、漁師を雇い入れ、柔弱き女の身を

以て、瑞典から諾威の海岸を乗り廻し、半年もかゝつて充分鮭漁に熟達し、紳士と腕比べが出來る程となり其處で始めて鮭漁にかこつけて、紳士に交際を求め、其腕前で紳士を感服させて終に其戀を成功させましたが、既に結婚して間もなく、紳士が自分の細君に向ひ諾威へ鮭獵に行かぬかと勸めました、所が細君が一向に應ずる氣色がないから紳士が不思議に思ひまして卿は前には如彼に鮭漁が好きであつたが、何故急に嫌ひになつたと聞きましたら、細君は拔からぬ顏で私は決して鮭漁が好きなのではありません、只だ良人が好きであつたからと、目的さい達して仕舞へば鮭漁などに行く必要はないと云はぬばかりでありましたから、紳士はサテは一杯食はされたなと笑つたと云ふ珍談があります、次に之も又私の識つて居る婦人ですが、此の婦人は矢張一人の立派な紳士に深く思ひ込んで居りましたが、それにも拘はらず此の紳士は何故か非常に此の婦人を嫌つて居つた、併し婦人は嫌はれたとて、決して日本の婦人のように落膽して失戀に陷るなどと云ふことはありません、何うしても目的を達せずには置くまいと種々苦心しましたが、此の紳士は酷く乘馬が好であると云ふ事を聞き、或る日紳士が獵を催した時其仲間に這入りて、男子でさい、怖る悍馬に跨りて盛んに乘り廻はした、而して紳士の獵犬が猪と格鬪して既に危く見えたのを、助けたので其紳士は非常に感服して、前には痛く嫌つて居た此の婦人の切なる思ひを容れて、伉儷を結んだといふ事でした、此の婦人は元來馬になど乘つたことはないのですが、目的を達する爲めに全く命懸けの仕事をしたのです。日本人の眼から見ると無鐵砲な話ですが總じて西洋の婦人は自己に適當の配偶者を得る爲めには、こんな事までして骨を折るのですが、併し互に意中を明し合つて愛し愛される仲になりましても、社會の制裁も嚴重であるし、且つ精神修養を積んで居りますから、よく〳〵の下等社會ならばいざ知らず、決して戀に狂ふたり、青春の血の躍るに任せて軌道を踏みはずしたりして一身の方向を誤るやうなことは御座いません、先づ永い間交際

して見て此の人ならば自分の配偶者として適當であると思ひますれば、互に意中を明し合ひ、それから父母の許可を得て約婚をします、約婚さしても式を擧ぐるまでは父母の監督の下に清潔なる交際を續け居ります決して我國の野合的自由結婚のようなものではありません。日本では、古來の習慣で媒介人と云ふ者があつて、見ず知らずの男女二人を配して夫婦にするのであつて男女交際と云ふものが行はれないから、男子にしても女子にしても、自分の配偶者を求むる爲めに活動する範圍が、極く狹まいのですが、夫れでも概して云へば、男子の方が女子よりもより多く求婚の爲めに憂身を窶す樣ですが、歐米では男女交際が自由ですから、男子でも女子でも配偶者を求むが爲めの活動は目覺しい程ですが夫れでも男女何れが求婚の爲めに骨を折るかと云へば



夫れは勿論女子です之はつまり女は早く容色の衰へると云ふことが重なる理由でせう。日本には娘一人に聟八人と云ふ諺がありますが、英國などでは之と反對に聟一人に娘八人と云ふやうな塲合が甚だ多い、斯う云ふ次第ですから、一人の男子が十人も二十人も婦人を繞なして居る事實は決して尠くありません、利のある所は即ち弊の伴ふ處ろで中には斯る婦人の熱心なる求婚心を利用して婦人から金を絞り取ると云ふやうな惡策をする者も隨分尠くありません殊に米國の富豪の令孃などでは、好く此の惡策に懸るのです。

昨今の音樂界

音樂師　宮島愼三郎

△雅劇と舞蹈
△東京に於ける音樂傳習所
△樂器の種類と其購入方

二三年以來、音樂の流行は夥だしいもので、就中女學生間にあつては、苟もヴアキオリンの一曲位彈けないでは交際が出來ぬ程に心得るやうになり、趣味といふよりも寧ろ一種の流行熱に驅られて此頃では男學生などが樂器を擔ぎ廻る樣になつたのは、社會の風敎上から見て果して良い事であるかこれは聊か疑問であるが、兎に角戰爭前に比べて音樂の志望者が段々增加したとは事實である。其證據には市內各所に音樂講習所や傳習所の看板を見るに至つた、今では彼是合せて二十個所以上ある、而も洋樂の流行は、上流、中流、それから學生間にのみ止まらず、昨今では彼の賣笑婦間にも使用されて、ヴアキオリン藝妓などいふが出來た位である。

▲オペラとは如何なるもの乎

洋樂の流行につれて、追々盛になるべき兆候あるのは西洋で專ら行はれるオペラである、一體此オペラとは其麽那ものであるか專門家以外に能く其意味を知つて居る人が尠いやうである。日本では外に譯しやうがないから假に雅劇と書いてオペラと讀ませたのであるが、本統は芝居でもなければ音樂でもなく又舞蹈でもない、早く云へば、芝居の舞臺面の、科白と音樂とを搗交せて、それを夢幻的化したるもので、日本で例へたら能樂の一段進步した樣なものである。そこで舞臺面の背景を離れてオペラなく、音樂を離れてオペラなく、詞白及び仕科を離れてオペラなく、畢竟以上の三つのものが鼎のやうになつて出來たものであるから、今日の演劇即ち寫眞劇の如くに人物の活動を主とし音樂を客とすると云ふ樣な差別はない。又科白の如きも凡て韻に協つた一篇の詩であるから頗る高尙優雅なもの

で、先頃も音樂學校の生徒が、『新曲羽衣』を演つて見た處が案外の成功で、見物の外國人をして舌を捲かしめた程である。

舊演劇衰へ、新演劇未だ揮はざる時に當つて、今後最も屬目すべきはこの雅劇であらうと思はれる。

▲舞蹈流行の兆と其練習所

時勢の變遷は妙なもので、一概に西洋崇拜とばかり擯斥されて居た舞踏の如きも、漸次流行の徵を見はして、外交官や貴婦人の交際場裡に行はるゝのみならず、一般の婦人社會にも之を稽古する者が出來るやうになつた。今其練習所一二を紹介すれば▲東京體育部の長原氏が主任となつて兩國橋際の元の井生村樓を借受けて教授をして居る、目下練習生は男女合して四十人餘り、前號口繪にありし舞踏の稽古は即ちこれ也。次に之も長原氏主任で▲向島花月華壇に教へてゐる練習者は重に藝妓俳優等の藝人社會で之は却々成績良好との噂▲山本貼吉氏の主任で神田新白銀町貫誠小學校内に於て敎へて居る一體この舞踏は何の位かゝれば一人前に踊れるかと云ふに一通り覺えるのが約と一年で、速成三ヶ月位。併し上手下手は其人の才能如何にあり。



▲音樂教授所と其類別

在來の琴三味其他音曲の師匠は別として、洋樂流行以來新に興つた團體的の音樂教授所は目下東京中に二十ヶ所もあり今其重なる處を紹介して志望者の參考に供せんまづ神田區にて女子音樂學校校主山田源一郎氏を始め他に十二三名の教員あり、生徒は百六十名次は△東京音樂院校主は天谷秀氏、外に六七名の教員あり百人内外の生徒を養成す△女子音樂傳習所　之は二三の音樂家協同して教へ練習者は主に小學校の女教師三十名内外あり。次に本郷區にては二葉音樂會　石原重雄氏主任生徒三十名△天野音樂教授所　天野愛子女史獨力の經營△中央音樂會　之は中央會堂内で酒井將軍氏教授するもの重に唱歌とオルガンなり△小石川にては多梅稚氏のヴアヰオリン教授練習者二十名内外△東武學堂　本校の生徒は凡て支那人七十名音樂を主として他の學科も設けられてあり。△芝にて　濟美音樂館　前田久八氏以下五名の教員あり生徒は百人内外。△日本橋にては東京音樂會第一講習所　教員八名生徒五六十名。△麴町にては成樂舍　金次喜之進氏　主任五十人餘の生徒を養成しつゝあり。△若葉會　納所辨次郎氏の經營生徒六十人。△東京音樂園　堤正夫氏主任生徒四十人内外東京音樂學校を除き以上列擧せしもの外猶個人的に教へつゝある家少からず、今假に音樂生徒全體の數を五千人とすれば女子が四千人男子千人位の割合ならんか。

▲樂器の種類と其購入方

現今我邦で行はれて居る洋樂は、ヴアヰオリン、ピアノ、オルガンの三種なるが就中ヴアヰオリンが最も流行を極めたり。これはピアノ、オルガンに比して第一持運びに便利で且つ廉價なるを以てなり、決して樂器其物が特別に美聲を發する譯にはあらず、今樂器の種類と直段とを區別せば、

△ピアノ　には竪ピアノと平臺(一名グランドピアノ)との二種ありて、竪ピアノは普通の家庭に多く用ゐられ、グランドピアノは學校若くは公堂用に適す、最上は舶來品にて竪ピアノ三百圓以上五百圓位、グランドピアノ五百圓以上千圓位までなるが中古物を買へば三割方位廉價とのこと、之は東京で購ふよりも横濱の商館へ注文する方が格安なり、又和製には山葉製、松本製、西川製の三種ありて直段は何れも二百圓より三百圓位までなるが樂器の良否は凡て專門家に鑑て貰ふ方よ

し。

△●●●●オルガン　之も無論舶來物が最上、形は三四種あり普通形、デスク、装飾附等にて、普通形は一般の家庭に用ゐられ、デスクは實用向として學校等に多く、装飾附は其名の如く室内の装飾に具ふるものなれば直段には限りなし普通舶來の上等品にて百圓位、和製なれば十七圓位から百五六十圓位まで初學者が用ゐるには三十五六圓のもの適當なり。

△●●●●ヴアキオリン　舶來物は二十圓以上百圓位迄、和製になれば七八圓より六十圓位までなるが普通用は廿六七圓位で充分又小供用としては『四分の三形』といふのが最も適當なり。

凡てピアノなりヴアキオリンなりオルガンなり兎角新らしき物を買ひたがるは一般の人情なれども、樂器は少し使ひ馴らした中古が最も可きものなり、西洋人は態々音樂師に頼んで新らしきものを彈き古して貰ふといふ事なり尤も素人が使つて彈き損じたる古物は困るけれども然もない限りは中古を以て貴しとしてあり、又初學者にとつて音樂の難易を云へば、一番這入り易きものはオルガン、次にピアノ、それからヴアキオリンといふ順序なるが、ヴアキオリンを本統にやらうとするには、先づオルガンとピアノを半年位づゝ稽古して素養を作らざるべからず、而して何れの音樂にても五年以上かゝらねば一通り彈けると云ふ譯には行かざるなり要するに其の人の才能如何にある事と知るべし。

▲マンドリン好樂會

西洋音樂の流行日を逐ふて盛大となりしは喜ぶべき現象なるが　洋樂傳來の日尚淺きを以て　近代歐米にて行はるゝ諸樂器中マンドリンの如きは未だ汎く我國に知られざるものゝ如し　同樂器は家庭音樂として尤も適當にして又尤も簡易に修得せらるゝものゝ由、さて今これを學ばんと欲する人々の爲に同好樂會の事を紹介せん　同會は樂界の高手比留間賢八氏の主幹する處にして諸種の樂器歌曲を研究し　専らマンドリン音樂の普及發達を目的とする者にて授業時間は毎週一回、修學者の便宜によりて定め修業年限二ヶ年、授業料は甲乙により二圓と三圓麻布飯倉三丁目一番地マンドリン好樂會へ申込まるべし（挿畫は同樂の合奏なり）。

高等女子實脩學校の家族生活

（校長山脇房子女史談）

▲清洒なる校舍　赤阪檜木町一名乃木坂といふを上りつめた處に西洋作りの高く聳えた建築がある、それが山脇夫人の設立された高等女子實脩學校で、土地が高いだけに四方の展望、空氣の流通などは誠に申分なく、春秋の眺めは又格別のものであらうと思はれた。此心地よき校内に養成せられて居る生徒の總數は目下百七十人で．

▲學校經營　女史曰く最初此學校を創立したのは今より三年前の四月で、（牛込白銀町）其頃の入學生は僅に十五人何程生徒が少數だからとて一通りの教員を聘しておかればならぬので、月々の收支は全く償はず一時は支え切れぬほどの難境でしたが、當時戰爭が連勝の姿で、徐々日本國民も世界的になりゆくと共に益々女子の實際教育の必要なるを感じまして、百方諸名家の賛助を仰いで居ります間に、或特志家の同情を得て遂に今日の如き校舍を新築することが出來ましたのは、偏に大方の援助によるものと深く感謝致して居ります。

▲學課の一斑　校の修學年限は四年で學問の程度は高等女學校と大差はありませんが、更に一年間の家事科を設け、本科卒業生をして家事に關する一切、（育兒、衛生、看護法、經濟、割烹、管理法）を練習せしめ、又此外に家事專修科といつて以上の家事科目外に、交際法、婢僕使役法等實地に必要なる科目が加はり、音樂挿花を以て隨意科とし、本人の志望によつては其中の一二科乃至數科を兼修せしむる樣にしてありますが、之も矢張一年で修業することになります。現在の生徒は本科百廿五人、家事家四十五人で東京在住の者の外は凡て寄宿舍生活をして居ります、又入學年齡は十二歲よりとしてありますが、十七八歲の者が最も多く、廿五六歲の婦人も二三名はあります。素と本校の目的は、相當の學問を修めたる婦人をして之を實際に活用せしめ、主婦たる資格を養成するにあるのですから、設令晚學の女子と雖も可成家事科を習得する便宜を與へてあります。本年の三月に卒業した十二人の生徒は第一回の卒業生で、本校を出ると間もなく大方は結婚して家庭を作られたそうで、就中官吏と商人とに嫁いたのが多數です。

▲實際教育　遙々兩親の手許を離れ費用を遣つて五年七年の學問を修め乍ら、偖愈々他に嫁いて一家の主婦となつて見ると、世事には暗し實際には迂し、何か不意の出來事でも起ると殆んど途方にくれて爲す處を知らぬといふのが、今日の女學生の通弊と云つても宜しい位ですが、之は畢竟教育の方針が兎角理論的に偏するのであらうと思はれますから、之を矯正するには是非書籍以外の活學問を養成せねばならぬと存じます。本校が特に家事科を設けて專ら力をそれに注

ぎますのは畢竟以上の理由によつて、一般の生徒をして應用の才を練習せしむる目的からで厶います。そこで各科の受持を申すと、倫理は校主の受持ち、家事經濟は池田朝子、裁縫は大村歌子、國語は三宅花圃、女禮式は長尾巳代子の諸先生で、家事管理科は、秩序、內部、敎育、交際、婢僕使役の五項に分ち、交際の栞としては實地に關する時事問題を生徒に出題し、校長自ら其答案を聞くのであります。一例を申せば、一如何にして電信を發信し又は受信すべきか、一電報爲換の送受は如何、一小學校へ子女を入學せしむる手續如何等であります。

▲寄宿生の生活狀態

本校で最も注意致しますのは寄宿舍に於ける生徒の日常生活で、之は凡て家族組織にしてあります。室は一號より八號までの八つに分ち、各號共に八疊六疊、三疊二間に臺所を設け、勝手道具一切其他簞笥長火鉢等凡て一家の體裁をなし、先づ四五十圓位收入のある一家族を標準としてあります。只今は四五人宛で一家を組立てありますが定員は六人ですから未だ十五六人を收容すべき餘地はあります。又此一家の中には普通の家庭と同樣な階級が立てられてあり、半ケ月乃至一ケ月交替を以て、主婦、娘、下婢に擬へ、各々任務を全ふせんと勉めて居ります。餘所の寄宿舍では大概百人でも二百人でも同一の食室で賄人の調理したる同一のものを食ふのが普通ださうですが、此處では凡て竈や經濟を異にして居りますから、甲の家族では唐茄子汁に福神漬位の御馳走かと思へば乙の家では鯛の味噌漬に洋食のお料理が出來るといふ樣な工合でそれは中々面白いとが厶います、恁那次第で一日無駄な時間がなく而も愉快に暮して居ますから、一般に陷り易い青春時代の空想煩悶といふ樣な弊は少いやうに思ひます。そこで今お咄した主婦、娘、下婢の任務とする一日の規定を述べませう。

▲主婦の務め

定時起床、容儀を正し寢具を收め雨戶を繰る、後八疊と三疊のお掃除及び椽側廊の雜巾掛け、ランプ掃除、身嗜、一同食卓について互に挨拶するは午前七時。朝食後食器を拭き且つ室內の裝飾に注意し、新聞郵便物を家族に配布し、九時頃明日の入用品を下婢と相談したる上一切の整理をなし十時登校。十一時降校、下婢の手傳をして晝食の用意、十二時食事を了つて食器を拭くと前の如し。一時登校、三時降校、家族にお茶受を供す。適宜の運動、五時より晩餐の支度にかゝる、六時夕食を濟まして運動讀書隨意。九時半日締をなし火元を見廻り、後其日の日誌記入。十時消燈就床。

▲娘の務め

起床は凡て同じ、寢具を收めたる後火鉢及び室內家具の外に六疊三疊及び玄關土間等を掃除す。手洗鉢に水を入れ後身嗜、膳立、食事は同上。食後其日の豫習をなし始業時間十分前に登校。以下主婦と同じく凡て家事の手傳をなす。

▲下婢の務め

朝食前の務めは主婦の下働きをなす。食後食器を洗ひ且つ臺所流元庭園等を掃除して後身嗜をなす。翌日の日用品を主婦と相談して報告書を舍監に差出す。火元に注意して

十時登校、以下三時まで主婦と同じ。三時降校後火を起して茶の用意。四時舎監室より明日の日用品を受取る。適宜運動をなし五時晩餐の仕度にかゝる。食後板の間を拭き流し元を掃除す。六時主婦と共に雨戸を閉ぢて會計簿を記入し、十時就床。

▲一月の經營と一週間の獻立　一日に一度は必ず肉食をする樣にしてありますが、然し一人一ヶ月の食費六圓以内と制限して居りますから、實際の成績を見ますと普通四圓平均で、中には三圓五六十錢で濟ませた家族もムいます。又一週間の獻立と申しても家族によつて違ひますから一樣には云はれませんが、最近或一家族の示したお料理は凡そ這麼ものです。

【日曜日】朝　摘み菜の味噌汁に香の物。晝　小鯛の鹽燒に昆布煮付。香のもの。夕　ビーフステーキに香の物。

【月曜日】朝　薩摩芋の汁に香の物。晝　もみ瓜に海苔の佃煮。夕　煮肴と香の物。

【火曜日】朝　葱汁と香の物。晝　牛蒡と豆腐に煮豆。夕　卵の酢物に香の物。

【水曜日】朝　里芋汁、おろし。晝　唐茄子、香の物。夕　シチユー、香の物、果物。

【木曜日】朝　唐茄子汁に香のもの。晝　浸物に佃煮、香の物。夕　鯛の味噌漬、おろし。

【金曜日】朝　豆腐汁、おろし。晝　干魚に香の物。夕　卵燒に福神漬

【土曜日】朝　わかめ汁、香の物。晝　煮肴に生瓜もみ。夕　カツレツ、果實、香の物。

大體這麼種類ですが、季節によつて相違あるのは何れの家庭も同じ事でせう、兎に角萬事家族制度で睦まじくやつて居ますから、他日主婦となつても餘りまごつくやうなことはなからうと信じます。

○女優の敍勳

○現時歐米の演劇界に於て最も名聲の高い女優を數へれば英のキャンベル夫人、伊のオテロ夫人、米の某夫人、それから佛のサラ、ベルナルト夫人、其うちにもサラ、ベルナルト夫人は一段抜ん出て居る。

○ベルナルト夫人の敍勳の噂は久しいものだ、二十年前から、今年は今年はと世人が此夫人の敍勳を期して居るけれども當局大臣いづれも躊躇して以て今日に至つた。

○今のサリエン内閣は思ひ切つて此夫人に敍勳の名譽を與へるであらうと文學社會での評判

○アリス女王殿下

○もとのアリスルーズベルト嬢、今のロングウヲルス夫人、新婚旅行として歐洲へ渡られ七月六日巴里に無事乘込まれた、巴里の新聞紙はロングウヲルス夫人に上るに女王殿下の尊稱を以てした。

感想

家庭に於ける快樂と苦痛

元祿姉さん

四百四病の其中で貧より憂辛い物は無いと、斯う世の中の事が總べて相場が定まつて居ると致しましたら一家の快樂も苦痛も金の爲めには怎うにでもなる筈で御座いませう、けれど、昔から温飽の家は衆怨の歸する處等と申して、物質的の賤しい慾望を滿足させる以外、富が我等の心に何程の慰安も與へ無いものと見えます、況んや限りのある富にて、限りの無い慾望を滿たさうとするに於てをやだ、誰れやら昔の大福長者が、金錢を自分より目下のものと思つて使はうとするのは大間違ひだ、宜しく君の如く師の如く尊び敬ふ可しだと申した相です、斯うなつて參ると、富ありとて富無きに如かず、寧しろ富の爲めに受く苦痛は、肱を曲げて枕とし樂しみ自ら此の中にありと澄ます仲氣な貧者の、想像だも及ばぬ事かと存じます、先日、

兒玉大將の葬式

を見たと云ふ人に、嘸賑やかで御座いましたらうと伺つたら、なあにねと、極めて悲痛な詞調で、

何て事なしに淋しかつたですよ、眞實く、僕は涙が出たです、其れは勿論兒玉大將の死を心から痛ましく思つて、其れで涙が溢れたのじやありませんがね、よしや造花の五十對百對、會葬者幾千名、儀仗兵の靴音嚴めしき、馬車の轜りの高き、よしや、宏壯人目を惹くと云つた處が、一基の冷めたい墳墓、物悲しい樒の香氣、地風火水空に歸せば萬事休す、之が、名、位、富の爲めに苦闘し惡戰した、夢の五十年の報酬じやありませんか、僕は實に、嘗つて覺えた事のない程、云はれぬ寂莫を感じたですよ。

其れから見ちや、田舍で、至極平和に一生を送つた終焉美しい老婆さん等の葬式を見ると、何となしに、何處か昔懷しい而して賑やかな樣な氣がして、噫、婆

阿さんは日頃信じて居つた通り、樂しい極樂へでも行つてるであらうと、斯う淋しい中からも嬉しい樣な、終御念佛の一言も出やうと云ふ譯され、と仰つしやつた方が御座いました、成程然う聞いて見れば、

眞理は何處

にありますか、私等には迚も分り兼ねますけれど、世間の人が考へて居る程富が萬能で、金錢は我々に甚麼幸福も與へるもので無いと云ふ事丈は同感で御座います、翠帳紅閨の奧にも悲しい涙の秘めらるゝ事もあれば、九尺二間の裏店の中にも樂しい夢は結ばれる、夕、密月の香に醉ひながら、朝暁の風の冷たきを喞つ花嫁子もあれば、假令野の末山の奧、主樣の御側ならばと、傾く軒を伏屋の月に微笑む戀女房も世にはある、源氏は野心の爲め權勢の爲めに一家の離散滅亡を顧なかつたけれど、平家は、終に花の都を後にして壽永の秋の木枯と散る迄、一族の平和を破壊しなかつたのを此の上もなく名譽に思つて居つた、斯う考へて見まするど、家庭の快樂と申しますのも、勿論富では御座いますまい、さればと云つて名譽でもなく成功でもなく地位でもなく權力でもありますまい、可愛い娘に好い聟がね貰つた時や、大事の息子が名譽の金鵄勳章を戴いた時が無上の快樂とも申されません、人に依つては、理想の兄さんに抱つこして兩國の花火を見せて貰つた時や、座蒲團代りの優しい旦那を芝居の御供にした時を、一番の快樂の樣に思つて居らつしやる方も御座いませうが、其れとは又些と向きが違はうかと存じます、畢竟、夫先づ唱へて婦和するの、秩序ある、愉快な高尚な純潔な美しい夫婦の愛情から成り立つたにあると信じます。

家庭の平和

論より證據、私が此の事に就いて筆を執ります前に、幾らか私共より經驗のある方々に、家庭に於ける一番の快樂と苦痛とは何で御座いませうと伺つたら、或は密やかに或は包ましやかに或は聲高に、聞かして下されたのが殆んど吾々の意を得て居りますので、殊更だつて麁爪らしい議論よりは、卑近な實驗談の方が、勢

少なくして效多からうと存じますから、左に一つ二つ其儘御紹介に及びませう、扨て第一に

奥樣の忍音

◎成程其れはまあ何と申しましても、這麼美しい家に寢たり起きたりして、戴く物でも着る物でも外の方樣から御覽になつたら、其れやもう結構づくめ、一町の外出にも抱俥があれば半里の訪問にも美しい馬車があらうと云ふ譯、出づれば何々夫人と持て囃され入れば夫人と崇めらるゝ、婦人會に慈善會に音樂會に、雜誌の口繪に新聞に、時には虎の威を借る我れながら可笑しらしい狐の贋似も



致しますので御座いますよ、けれど何處やらの奧樣の樣に、甚麼貧乏人でも簞笥の小抽斗に一杯位は、お金があらうなんてね、其麼事は考へては居りませんですわ、居りませんですけれど、生れ落ちるから食べる事にも困らず飲む事にも苦勞せず、髮の翻れ毛の始末から着物の躾糸の解きほごし迄人手に掛けて、之れと定まつた仕事のあると申すでは無く、時折の婦人會の事務等も、眞の家に居ても所在無さの云はゞ醉興、其れ迚も先づ惡く云へば體の善い井戶側會議なんで、何處の御前が浮氣で居らつしやるの、何某の夫人の御髮が妙だのつて、終にはあらう事か誰やらの品評迄出て、

眞に大きな聲では申されませぬが、其麼、ほゝ罪の無い事を申しては居ります位で御座いますから、何の氣苦勞も心配も無い樣ですけれど、夫れだつて可笑しいじやありませんか。

◎迂詐では御座いませぬ、私は今日迄唯の一日だつて心から樂しいと思つた事はありません。

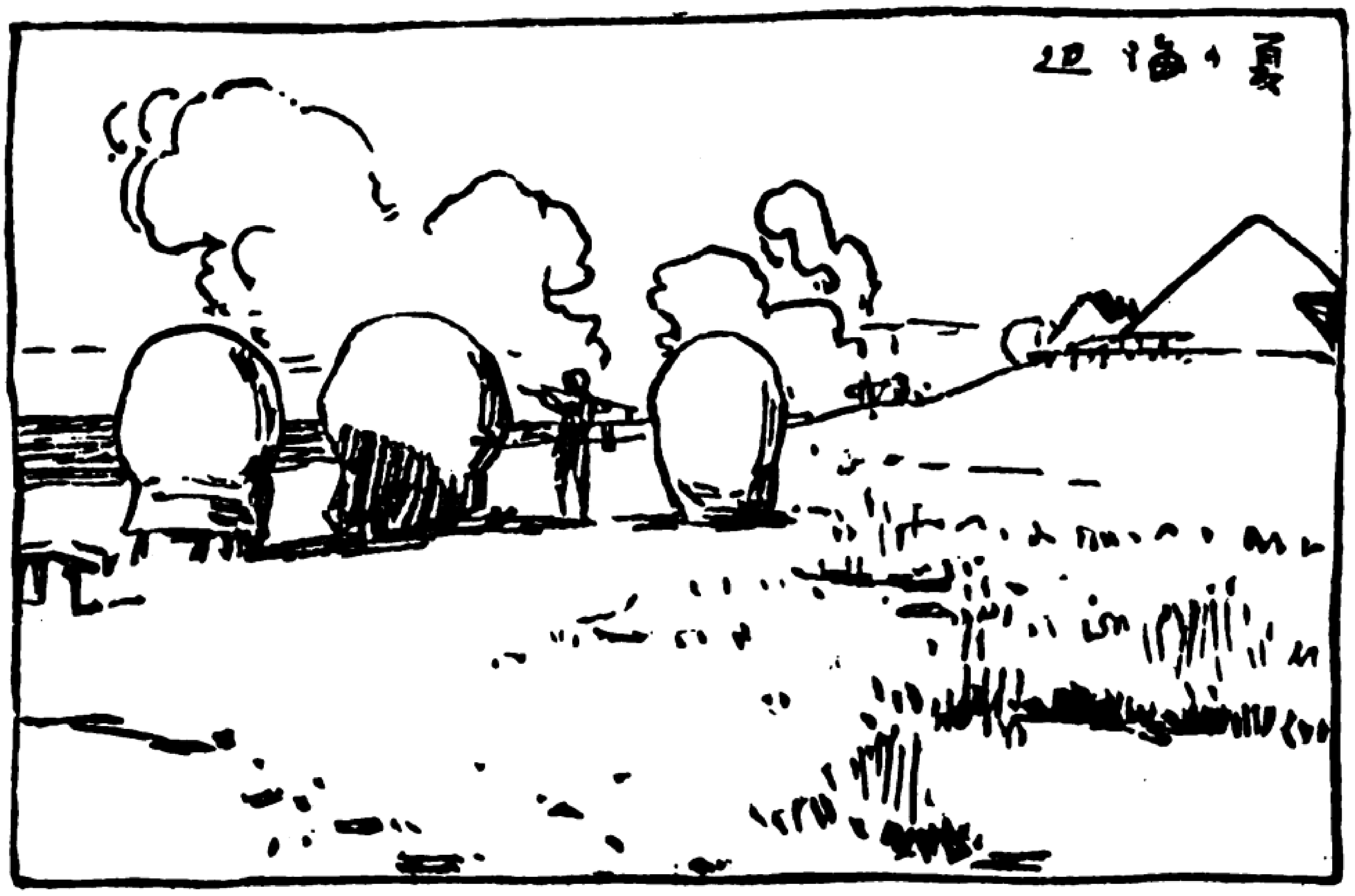
悲しいと申しますればいつぞや、馬車で九段を通りました時、多分田舍の遺族で御座いませう、其れ〳〵お婆阿さん車が危險ねえだ此方へ此方へと夫婦らしいお老爺さんが、優しうお婆阿さんの手を執りながら、路を避けて與れましたのを見て、其の時の悲しかつた事、眞箇に羨ましう御座いましたわ、見歸る富士見町の眞晝時、晴れやかに着飾つた我身と、木綿ながらも暖かさうな夫婦の後影とを見比べて、眞に人目なければ泣き出し度い位で御座いました。

◎怎うせ遺麼御家に生れたら最後、月に端近う夕顔棚の下涼みが出來ると云ふではなし、名聞とか格式とかに縛られて奥樣と云ふは名ばかり、善いにも惡しきにも恐れ入らねばならぬとしてあるのですから、先づ樂しいと云ふも嬉しいと云ふも其麼處なんでせうさ、けれど、石の御地藏樣なればこそ、何故迄も何故迄もじつとして御出遊ばしますが、凡夫が貴君、三年居て溫まらなきや其麼人だつて石にならうじやありませんかね。

細君壁訴訟

◎何ですつて、ほ！酷い事ね、其麼事を申して居りましたが、細君の優しくして與れるのは月給の下がる日と增俸の沙汰のあつた時ですつて、まあ憎らしい、何ぼ何でもねえ貴方、兒まである情合で其麼水臭い事を考へて居たら、一日だつて行き立つものじやありませんわ、貴方の前だから申しますが良人こそ何のかんのと名をつけては、しと、散々に懊惱して置いて、フーム昨晚は宜かつた、矢張り彼處いらの奴は美しいね、何と云つても御多福の米の飯よりは可いやつて、斯うじやありませんか。

◎だから私は、良人に、良人の何は私は些つとも搆ひませんけれど、小供も大きく成つた事ですし見なり聞きなりに自然と小供が惡感化を受ける樣な事があつては、誠に心配で御座いますからつて、然う、時折申すんで御座いますよ、其れでも私なんかは未だ／＼幸福なんで、私の親類で其れやもう目も當てられないのが御座いますよ、矢張り御父樣の不品行を見異似て些つとも親御の云ふ事等は聞かずに、妙な處からお嫁樣を引つ張り込んだ人があるんですよ、お嫁樣の方が餘り氣前が善くなかつたせいか隨分家の中が揉



めましてね、未だ御達者でお出での御母樣が甚麼に苦勞なさるでせう、此間一寸御母樣がお見えになりまして、もう何もかも締め切つては居りまするが、責めて息子が人並らしくなつて、私に優しい言葉の一つも掛て吳れたら、私や死んだつて搆ひませんよつて、之れと云ふも、死んだ良人が餘り無頓着で小供の教育等には注意して吳れませんでしたものですから、彼樣出來損ひが出來たんですよ、考へますと誠に面目無いやら恥かしいやら、這麽切無い事がありませうかつて、

◎御尤もですわ、銀よりも黃金よりも珠よりもと申しますけれど

夫婦心を合せずに教育の方針を誤まつたら全くね、大事の大事の兒寶を失つた時より悲しいだらうと思ひますわ、先日何處やらで女學生さん方がお集りなすつて、誰の奥樣になつたら一番嬉しからうと戯らに投票なすつたら、東郷大將と御書きになつた方は一番澤山でしたつてね、而したら、或る人が幾らの東郷夫人も、御子息の事を御考へになつたら、餘り嬉しくもあるまいと苦笑なすつたつてのよ。

全くですわ。

◎怎うせ三界家なしの女の身、樂しいの苦しいのつて良人の心一つですわ、けれど這麼事は、良人の立場から見ますと、矢張り大功は細瑾を顧みず大禮は小譲を辭せずですかね、ホヽ

山の神御託宣

◎止しても御呉れ、憚りながら斯う見えても夫婦になつて六年、未だ夫婦喧嘩の味は酸いか甘いか知らない位ですよ。

◎お隣りのなんぞは、此間も稼ぎ貯めの五圓幾らを持ち出して、さる所ろへ二日も三日も居つたとかで、どた／＼の大騒ぎさ、殺すなら殺して見ななんて、凄い言句を並べて、妻さんは湯卷一つで外へ飛び出して、續け樣に口惜しい／＼口惜しいわよつて兵衛に不體裁な泣き方をする、旦那は又旦那で出口の處へ仁王樣の樣に兀然立ちはだかつて、隣りの妻さん聞いても呉んねえなとまあ斯うさ、やれ何時の幾日にお香々の尾を嚙らしたの、此間赤い手拭を懸けたら癪に障るつてお打ちだつたの、いつぞや、宮戸座へ行きたいと云ふからやつたら、散々遊び喰つて來た上句、今日誰やらの時姫を見て來たらもう／＼御前さん等は厭になつちまつた、今戸燒きの稲助じや全く遣り切れねえよと、俺の棚下しを始めやがつたの、でも其癖妻の事を豚々つてお云ひだのつて、何だが終には夫婦でもつて滅茶苦茶に毒吐いて、滅茶苦茶に奴鳴り散して、旦那は益々腹立つ、妻さんは愈よ拗ね出す、遂々其の日は稼ぎがお休み、一日ぶつ／＼云つては呉羅／＼してました

つけ。

◎さあ然うなつて御覽、妻さんの方でも面白くねえから稼がうともし無えし、旦那の方でもつまらねえから仕事には碌々身を入れずさ、竟り誰の損でも無え、お互に襤褸を下げなきやならないんだから、斯うなつちや全く厄介なもんですよ。

◎其れから見ちや御前さん、自惚れるじや無えけれど、妾等は幸福な者さ、此の上分外の慾さへ乾かなきや稼ぐに追ひつく貧乏神は無し、此節ならまあ暑つかつたらうてんで、良人の人の歸るのを待ちうける樣にして、豆腐の冷奴位に新生姜の香氣高う、些いと一本でも氣を利かして置いて御覽、もうね貴方ぐうの音も出る事じや無え。眞によ、此れが此世の極樂とでも云ふもんだらうさ、と



此れ等は勿論社會一部の半面に過ぎませぬけれど、能く考へて見ますると、何等か同じ轍を辿つて居る事に心附きませう畢竟するに一家の、快樂や苦痛等と云ふものは物質的以外にあるものと存じます、一家に顯はれる悲慘なる出來事とか罪惡とかも、多く家庭の不和に歸すると申すに躊躇致しませぬ、御同樣之れを思ふと、家庭の趣味を高潔にし夫婦の愛情を純美にして、一家の平和を勉め、人世が享け得べき人間の快樂と幸福とを捉へ樣ではありませんか。

分娩後一週間嬰兒の手當

△産兒の身體には多少胎脂の附着し居ること故リスリン或はオリーフ油を塗り、柔かにフランネルの小布にて拭ひ去るべし。

△産兒に湯をつかはせんとならば六十度位の微温湯をよしとす、浴せしむるにはまづ臍の緒の結紮部を検ため、而して後耳の頂窩、腋窩、關節部、股間などをよく洗ふべし、少々は石鹼を用ひて妨げなし。

△出産後二十四時間中は常に右側を下にして臥せしむべし。

△出産後二十四時間内に大小便なき時はフランネルを少し熱き湯にて絞り腎臟の部を暖むべし。

△産兒の身體にたゞれを生ずることあらば、天花粉を撒布するか、或は油 藥を柔らかき布に展ばして貼くべし。

△俗にマクリと稱する毒下しは用ゆるに及ばず、直ちに母の乳をつけてよし。

△授乳せし後は硼酸水にて産兒の口内を洗ひ乳草の生ずるを豫防すべし。

△産兒の目は日光又は燈光に當てしむべからず、若し目に目脂などの生ずる事ある時は日に數回硼酸水を以て洗ふべし。眼中に何か發生物を生ぜしを發見せば直ちに醫師の診察を乞ふべし。

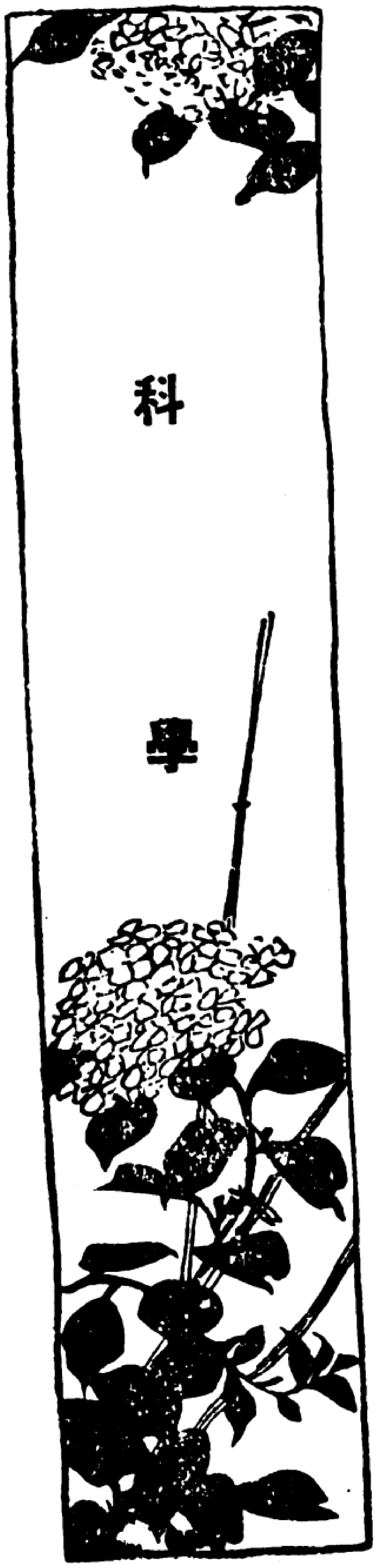
△母親は左右の乳を交々含ましむる心得ありたし、左なくては一方の乳のみとなるの恐れあり。

△乳房腫れて疼痛を覺え、且つ乳汁分泌せざる時は十五分より三十分間までフランネルの布片に熱湯を濺ぎたるものをよく絞りて其の局部に當てゝ蒸すべし。

△産兒は毎日入浴せしむべし。臍帶は入浴毎に包み替ゆべし。左なくては腐敗しこれより種々の病を生ずることあるべし。

△母親に乳の出ざる事あれば、乳母を雇ふべし年齢は二十歳より三十二三歳まで健全なる體格を有し、肺病又は遺傳病なく猶十分に望まば産兒と乳母の兒と同年齢位をよしとす。

△乳母を雇ふ便宜なき家にては牛乳にて育つべし、一週間内は湯を牛乳の三倍加へそれより日の重るにつれて段々濃くすべし。



一種の文明病

狩野病院長　狩野謙吾

▲婦人と氣病

婦人に氣の病が多いと云ふ事は昔から知られて居る又婦人は氣が小さいから氣の病にかゝり易いと云ふ樣なことも常に聞いて居るが、俗語の氣が小さいと云ふ意味は心理學上の何れに當て嵌まるやは一寸疑問である、シカシ事實は神經感動の鋭鈍を基礎とした言葉の樣に思はれる、即ち鋭く感ずる人は氣の狭い人、感じの劇しくない人は、氣の狭くない人と見てあつたに相違なさそうだ、シテ見ると感動の過敏なる人、即ち今日神經家と稱ふるものを指して昔は氣の小さい人、又は氣の弱い人と云ふたのに相違なく、又此の種の人は氣の病にかゝり易いものと昔から認められて居たのである。

▲婦人の神經質

氣が狭い又は氣が弱いと云ふ人をば、生理的心理學の方でいふ稟賦（四種に區別されたり）なるものに當て嵌めたなら何種に屬するかと云ふに、疑もなく神經質なのである、處が此の神經質と云ふヤツは從來婦人社會には大層用いられて居りて、或は上品と尊まれ、又或は奥樣風だと崇められてた、その反對に多血質など來ては、おさんどん風とまで卑められて居つた、

今多血質や膽液質の辯護がてらに四ツの稟賦に就て大略を述べて見ませう。

▲多血質

多血質の者は物事に感じ易く其の感じた事柄に就ての反動力は至極急であるが、そうかと云つて決して强くはない從つて萬事に激し易く物事に鋭く當るとは云ふものゝ多くは永く續かない傾があるから、幾分か輕擧に馳せる嫌が無いではありません、此性質は年齡から云へば少年の性質に近く國民の氣象に比較せば、佛國人などが適例で我日本人も或は此の中に數へられはしまいかと思はれる、其所で此の性質の人は何樣な體質であるかと云へば多くは上等の體質であつて脂肪が多く、肥つて居て顏の色が赤味を帶び眼球は出て居るか若くは平で鼻は尖らぬ方が多く口唇は厚く頸は太く皮膚には光澤があつて汗の出方が多く、爪甲の色は赤く髮は太くて硬くて手足は温な方であつて之を要するに皮膚粘膜が赤味勝で肥つて頸が太く、眼球が陷凹んで居ないのです、一般から云ひますと此の體質には健康者が多いものだが中に一種の體質を含んで居る、夫は卒中體質と申すもので第一頸が太いばかりではなく一體に短く肥つて居るから、甚だ不恰好で身の丈と身の幅とが頗る不平均なのである、是は其の名の通り卒中症に罹り易い性質ですから注意を缺いではなりません、此他に又樽筒狀胸廓と云つて胸の前後徑と左右徑とに餘り差違のないのがありますが是は兎角肺焮衝に罹り易いのです。

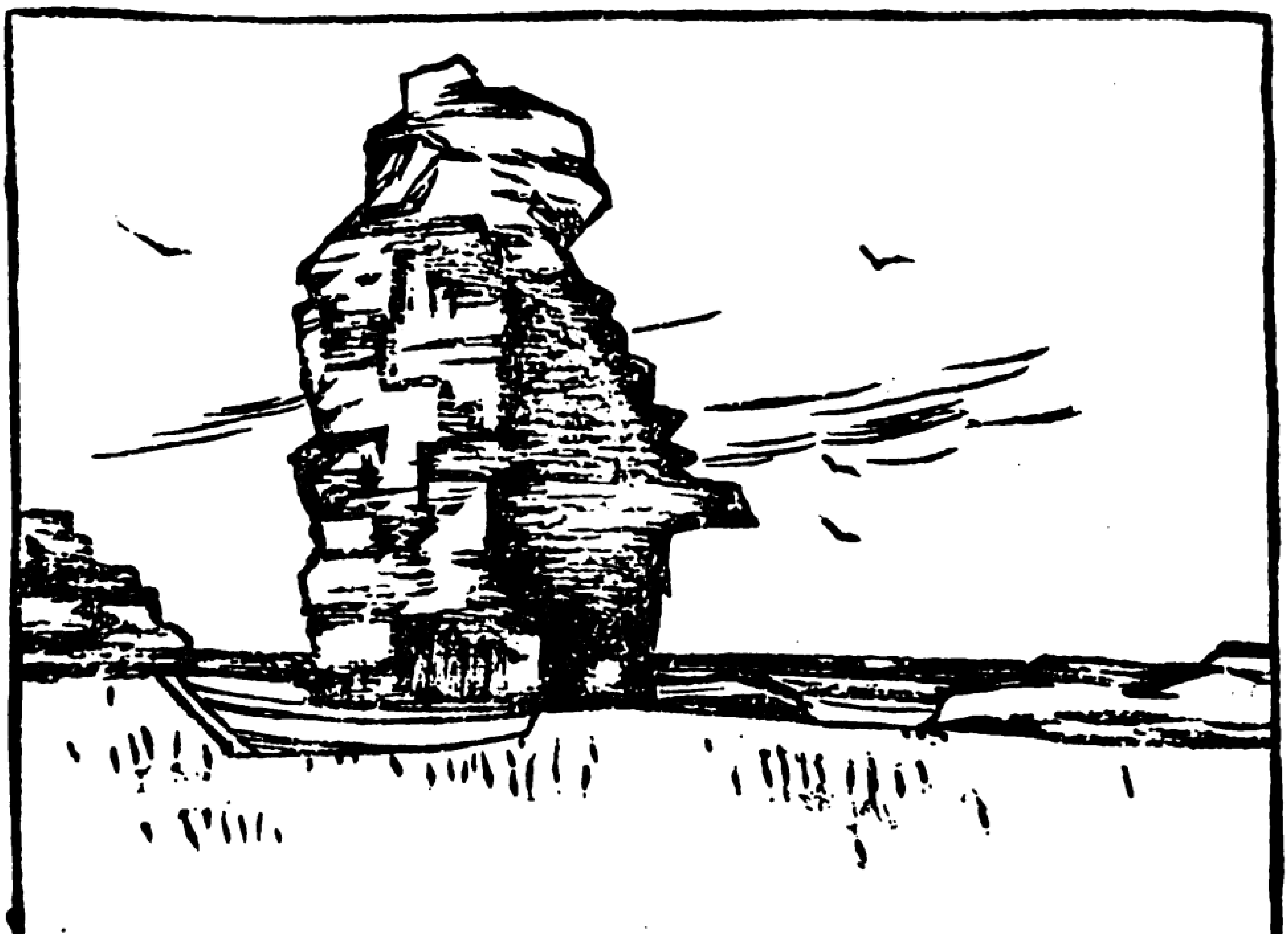
▲膽液質

膽液質の者は物事に感じ方が劇しくないから從つて心の變化が少く所謂恒の心が此質の人には割合に多いのです、夫故一旦物事を始めれば忍耐が强く必ず之を遂げると云ふ氣概を持つて居ます、併し此氣質の人には動もすれば他人を輕蔑する傾きを持つて居る樣に見受けられますので、何方かと云へば壯年者の氣質に近寄つてる點が有ります、大體上、英國人は先づ此氣質を持て居ると見て宜しいので淸國人は此膽液質と後に說く粘液質との混じたものゝ樣に見られるのです、夫

では此性質の人は何樣な體質を持つて居るかと云へば一體の體質は上等の部に屬してるが脂肪が少く、顏の色は蒼黒く眼球は陷み勝で、頸は長く皮膚の光澤が不十分で汗の出方が割合に多くない夫に指の端が太く手足が大きくて濕らぬ方で、毛髮は柔かく、全身の色は黒い方が多いので、一と口に申せば他の性質と異つてる點は色の蒼黒いのと眼の陷凹んでるのと手足の大きいのと、餘り太つて居ないのとに在る樣です。

▲神經質

神經質の者は一寸多血質の人に似寄つた氣性を持つて居



るが多血質に比べると物事に對する反動力の遲い傾が有ります、併し一旦感じた事は善そも惡そも永く忘れないで俗に云ふ執念深い處が有るのです、此氣質の人は割合に怜悧である上に何事にも粗濶がない點は執り處であるが一番神經衰弱にはかゝり易い、次に此性質の人の短所と云ふ可きは決斷する力の乏しい點で概して云へば婦人に多い性質です、體質も多くは上等の部に屬せず、羸瘦て居るのが持前で皮と骨ばかりと云ひたい程の者も少くない、身體が一體に細長く顏は長くて蒼白く中には蒼黒いのもある、眼球は

陷凹んで、光が強く鼻の峰が鋭く口唇は薄い、又頸は細長く手の指と足の趾とが細くて冷いので、全體から云ふと、膽液質の一層痩せて弱さうに見えるのが此の性質の體質です、從つて此の中には虚弱の體質を多く含んで居りますが特に、癆瘵體質と申して指の關節が太く恰度大鼓の撥子の樣に見えて肩の邊から上腮の邊にかけては柔な毛が生えて居て動もすれば咽喉が惡くなるとか鼻が惡くなるとか風邪を引き易いとか云ふ樣な體質である、是は取り分け弱い證據と見て宜しいので、結核に罹り易く、又神經衰弱にも罹り易い恐れがあります。

▲粘液質

粘液質の者は、何事に對しても感じ方が鈍く、其の感じた事柄に對する反動も從つて遲く鈍い、夫故、活氣とか熱心とか云ふ事が常に缺けて居て其の上に覺える事も鈍ければ斷判する力も弱いのを免れません、此種の體質は、一寸丈夫さうに見えますが皮膚の色は蒼白いのが多く、中には灰色を帶びた黄色のもあります、一體にブク／＼して居るが割合に赤味が乏しく、且つ皮脂の分泌が多い爲め全身がニト／＼して居て頸は太く顏を見ると腫れてるかと怪しまれる樣で上眼瞼がカブサつて鼻は卑く口唇は帶黒白色で厚く唾液の分泌が多い爲めよく涎を流し鼻汁も割合に多い、手足の運動が不活發で手掌や足蹠からは俗に云ふ膏汗が多く出るのであります、一體此の體質の人は一寸多血質に似寄た樣に見えながら其實は全く違つて居りまして其の相違して居る主なる點は赤味の少いのと緊りもなく、ブク／＼して居るのと各分泌線の分泌が盛んであるなどの處にあります。

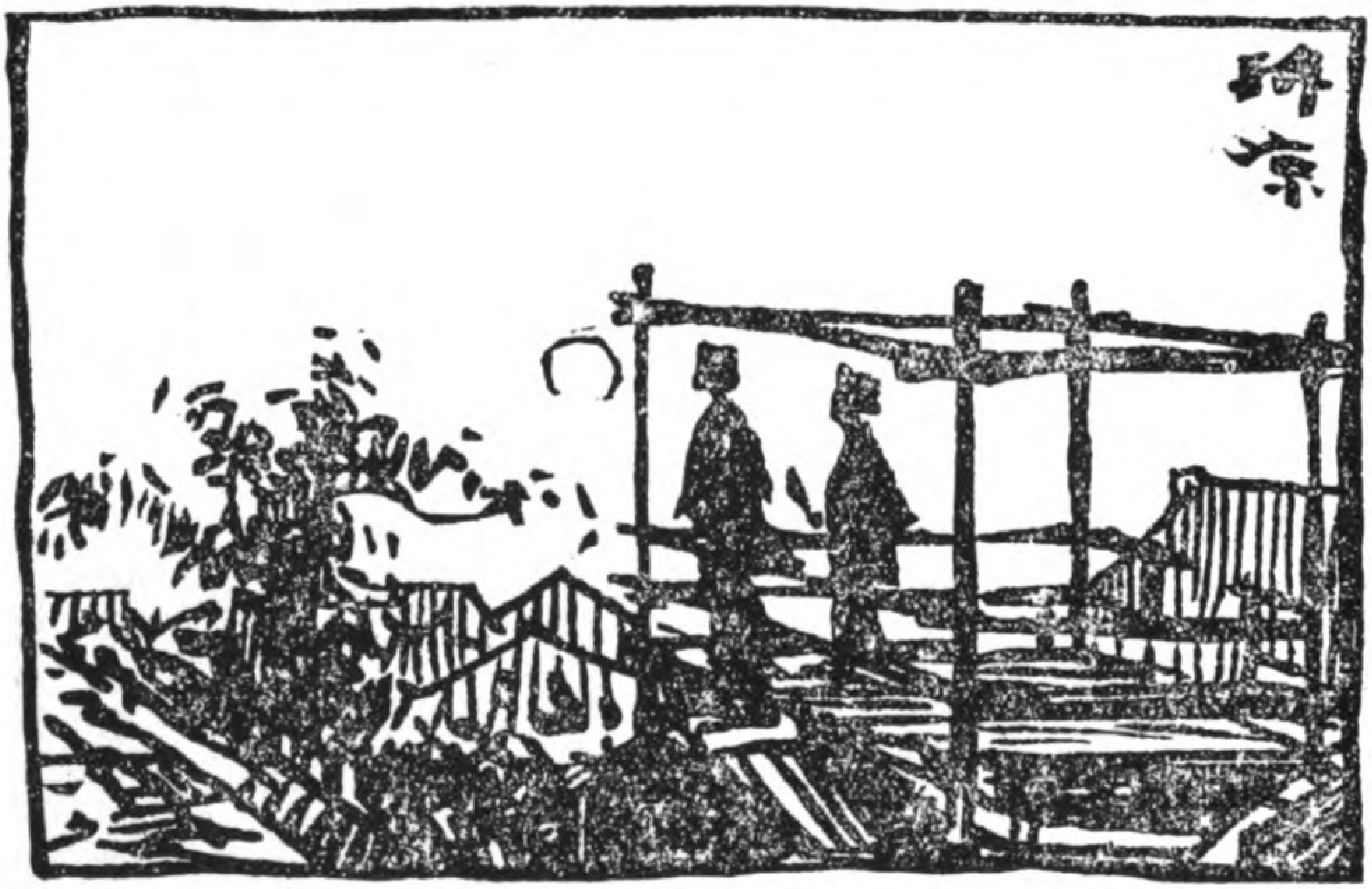
▲混同の稟賦

彼樣に區別されて居ましても膽液質と粘液質の混同して居るのもあり、多血質と膽液質と混同して居るのもあつて一樣でない、シカシ、出來る事なら、膽液質と多血質と混じた人が望ましいのである、斯く申したなら色が黒いとか赤いとか手足が大きいとか太つてるとか云ふ樣な從來婦人方の御嫌になつてる處が一番に

良好な稟賦になるのみならず神經質で顔色が蒼白く、頸が長過きて骨と皮と云ふ樣なのに比較したなら獨り衛生上ばかりでなく美學の上から評してもいくら上品であるかは云ふ迄もあるまい。

▲文明と神經質との關係

云ふまでもなく野蠻の反對は文明で文明の嫌な方もない筈であるが總ての事一利一害の原則に漏れず文明にもそれ相應の弊害を道伴れとする事は免かれぬ事實である、他方面の事は別として衛生上の觀察丈を申せば交通機關の發達に伴れて花柳病と云ふ最も忌む可き病が增加し子孫を薄弱に導きつゝあるが如き



又は結核病者の年を追ふて增加するが如き明治の文明と共に來りたる弊害に相違ないのであるシガシ是等の病は過度時代の四十年間は增加の趨勢であつたにしろ今後に於ける箇人衛生公衆衛生の改進によつては撲滅を期し能はざる迄も減退を望み得べきは素より明な事であるのです、然るに此に最も憂ふ可きは文明と殆んど直聯して漸く多きを加ふる一種の病がある それは、神經衰弱症です處が此の病は遺傳と大なる關係があつて遺傳のある人をば容易く襲ふのであるのに飜つて本邦の現狀を見ますれば人をして神經質の訓練に從事せしめつゝある樣な事柄が割合に多く前途を思へば實に戰慄す

べき事である。

▲遺傳と神經質

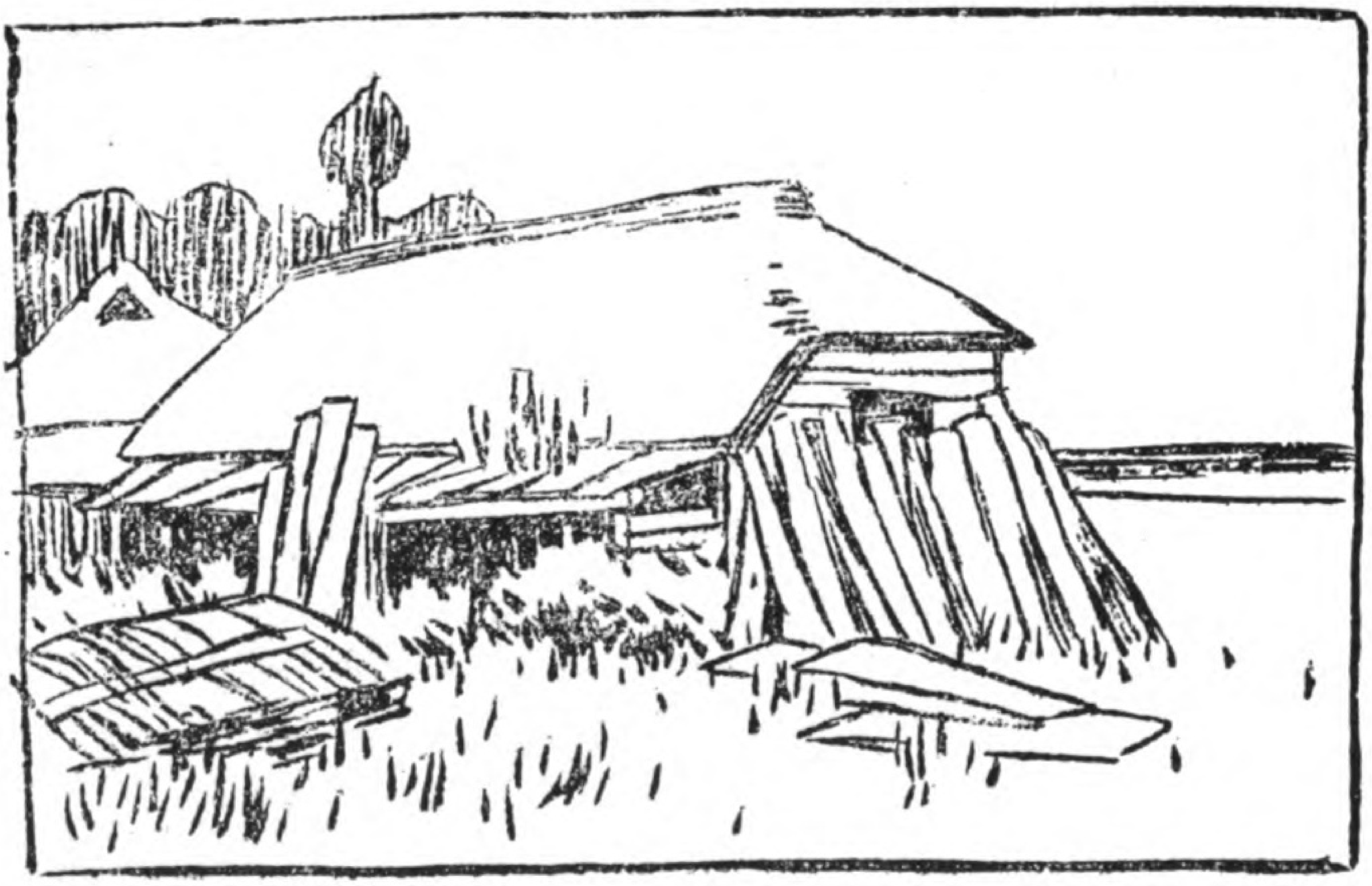
云ふまでもなく人の身體及び精神は父母の微細なる細胞が結合して發達するものであつて既に卵の時代精蟲の時代からして強弱の大體が分れて居るのである

それ故若しも卵なり精蟲なりが「アルコール」の中毒にかゝつてあつたなら成長の後神經の機能が不完全となるのは見易い道理で實際酒客の子供が癲癇にかゝり又は白痴になるのは、其證據である又父母に梅毒があれば子供に遺傳梅毒を負つて來るのも啞者の子に啞人多く六指の子に六指のあるなどは顯著なる遺傳である、彼樣に肉體の遺傳も精神の遺傳も共に確かなものには相違ないが素人は單に容貌や姿勢を始め身體の強弱即ち肉體的遺傳の方には平常注意　してゐても、無形の精神の遺傳にはあまり注意をしない一體から申せば精神遺傳の方は肉體の遺傳よりも劇しくなつて且つ大切なものである此の事に就ては最も見易くして且つ驚くべき例證を示すことが近い内に出來る積りであるが

今日は統計の材料を集めつゝあるのですから、大畧を述べて置きます夫は父母の創業時代即ち刻苦時代に擧げた子供は比較的忍耐が強く且つ才能を持つて居るが成功時代即ち安逸時代に擧げた子供は比較的忍耐も乏しく且つ無能なのが多いと云ふとなのであるシカシ從來の學者中には敎育練習に重きを置いて居る人もありますのでハッキリは致しませんが私は遺傳に重きを置くのである自分の統計がそうなるのであります、先づ賢愚才能の遺傳は此位にして氣質の遺傳を一通り述べませう通常親讓りの癇物であると云ふことは普通神經過敏な人の云ふ所であつて癇の遺傳は疾くの昔から人に認められて居つた是必竟神經質の遺傳が顯著な一例に相違ない、然らば神經質と云ふものは神經質の父母が其の素質を直接に遺傳するかと云ふに決してそればかりではない誠に微細の關係、複雜な關係から子孫をして神經質に養成するのである例へば先きに述べ

ました酒客のアルコール中毒の如き、營養不良の如き、貧血の如き、重病恢復期の如き、永く憂愁悲哀に沈める等の場合に受胎し、又胎兒の時に母體に以上の如き原因ありし場合などには所謂胎敎上の神經質も起るものである。

然るに世界列國中の一大國とまで急進したる我が國の事業上の今日はどふであるかと云ふに企業家實業家の方面は思慮工夫の爲めに常に一喜一憂して止まず政事家政客の心中は絶へず黨爭政爭に汲々する又技師や學者は業務



の成績上の競爭に日も又足らずと云ふ有樣學生は競爭試驗と學問の成績の如何とに腦を休むる暇なく、かくして一方面は生活の困難を訴へ、一方面は奢侈の滿足を知らざる狀態であれば、其の社會生活上の複雜なること且つ急潮なること四十年前と比せば恰も冷水と熱湯との比較も啻ならぬ有樣であるのみならず最近三四年の間に女子敎育の勃興を來たして女子の自營獨立を說き、男女配偶の難問題を聞く等隨分早換りの世の中となつて來たので、子孫の神經質を說く前に當つて、まづ第一

の間題は現實に女子の神經衰弱を治療せねばならぬ時となつて來たのであるから實に今日は醫學上容易ならぬ時期である。

▲神經衰弱

此の病は其の病狀が甚だ複雜で區別して簡明に說き難いものであるが素人に一番早く心附くのは、眠られないとか、本を讀むこと二三枚で頭が痛くなるとか、又は讀んだ意味がハツキリせぬとか、讀んでも讀んでも後から忘れるとか、又筆を執らうと思つても忽ち倦厭が來る、肩が凝る、僅かばかりの計算も大仕事の樣に感じて且つ違算勝となるとかまた交際上のことでは齒牙に懸けるにも足らぬ事を氣にして七面鳥も宜しくと云つた樣に顏色を變ると云ふ樣なのは神經衰弱症狀中の感動過敏の徵候であるから常日頃が不平不滿と云ふ狀態で、僅かの事にも忍耐することが出來なくなり、怒り易くもなれば、悲しみ易くもなる。

次では色情が增進するとか、物事に對して無情になるとか、沈鬱になるとか輕率になるとか云ふ樣々の症狀が起り、遂には實質に異狀がなくも氣で作つた臟腑の病を苦にし始める、是は內臟感覺の過敏なる爲めに起るのであつて、或は腦血管の破裂即ち卒中を氣配へ、或は肺病を氣配へ、或は脊髓病を氣配へ或は不妊を氣配ふなど實に數へきれぬ程である。

それが段々重くなつて來ると今日の流行とも言ひたい強迫觀念と云ふやつが現れて來る、神經衰弱に一番怖いのは此症候であつて、先頃中每日のやうに新聞の種となつてゐる靑年男女の獨り心中とも云ひたい厭世自殺である是は總て此症狀から來るのである、一體此強迫觀念の內容と云ふものは、千態萬狀であるが中で狐疑症と云ふのは一度戶締りをしても二度も三度も改めて見る、湯殿の火は一度消しても幾度も見ねば承知しない書面をみるにも一度讀んでは封に收め、再び披きて又閱み、三度も四度も讀まねば安神がならぬ等の類である次に一番に危險なのは穿鑿症と云ふので是は人は何の爲めに生きて居るか又何の爲めに動くか何故に顏が圓くあるか、手の指は何故に五本ときめたか

何故に右を働かすのか鼻を顔の中央に置いた理由はわからぬなど丶物事に穿鑿に過ぎるので、無駄に精神や知慧を使ふばかりか、知慧が足らなくなつた結果がまづ華嚴の瀧といふ事になる隨分馬鹿々々しくもあり又危險でもある、今この實例を一々申せば中々興味のある事ではあるが、大略にして置きます。

▲神經衰弱の豫防

これを一口に申せば、

第一　日常の生活及び精神の勞役に規律順序を立る事。

第二　精神の休養慰安を講ずる事。

第三　肉體上の攝生を重んずる事。



第四　遺傳性の改善及び教育上の注意。

等であるが先づ第一から云へば日常の生活を規則正しくして朝は何時に起き、食事は何時になし、服務時間は何時間で、運動及休息時間は何の位と凡そ精神勞役の時間と休養時間とを一定する睡眠時間は普通八時間を以て適度とし夜更し朝寢は如何なる塲合でも大の禁物とせねばならぬ。

第二は精神の勞役に對する一定の休息を要することで、人間の精力には豫め限りがあるのだから過度の勞役に陷らぬやう、喩へば苦味に甘味を混ずるが如く、苦樂の中和を計らねばならぬ、又精神慰安法にも人爲の慰安と、自然の慰安

との二種あつて、人爲の慰安は宗教、文學、繪畫、音樂、運動、遊戲、園藝、旅行、茶の湯、生花、等が上の部で其の他種類は何程もあるが、競爭性質の娯樂に耽つては却つて神經衰弱を招く基となるから、之は熟々種類を擇ばねばならぬ、次に自然の慰安法である、是は海陸山川の自然の風景に接するを云ふので、山の閑靜なる、海の曠大なる、以て心の塵を洗ふに足るべく、神經衰弱を防ぐはこの大自然の恩惠に浴するのが最も捷徑である。

第三は身體の營養を怠らぬやう適當の衛生を守ることで之は詳しく説明するまでもあるまい、殊に男女の青年諸君にあつて不正の情慾を愼むことが神經衰弱を防ぐ第一の要件である。

第四は遺傳性を改める方法で之は教育衛生及び意志の鍛錬に待たねばならぬのであつて細密に説かねば分り難いが餘り長くなるから何れ他日閑を得て之が治療法と共に細かにお話しすることとしやう。

エスペラントの話

萬國エスペラント協會員　長谷川二葉亭述

エスペラントの話を聽きたい、よろしい、やりませう、しかし先月の事だ、彩雲閣から世界語といふ謂はゞエスペラントの手ほどきのやうなものを出した、あの本の例言に一通り書いて置いたが、讀んで下すつたか、え、まだ讀まない、困つたねえ、おや仕方がない、少し重複になるが、由來からお話しませう、と云つて何も六かしい由來がある譯ではないが、詰り必要は發明の母ですね、エスペラントの發明されたのも畢竟必要に促されたに外ならんので、昔から世界通用語の必要は世界の人が皆感じてゐた、で、或は電信の符號のやうなものを作つて、〇と見たら英人はサンと思へ、獨逸人はゾンネと思へさ、ね、日本人なら太陽と讀めと云つたやうな説もあつたが、そんな無理な事は到底行はれんそこで、現在の各國に國語中一番弘く行はれてゐる英語とか佛語とかを採つて國際語にしたら

といふ說も出たが、これも弊が多くて困る、成程英語が國際語になつたら英人には都合が好からうがそれでは他の國民が迷惑する、佛語でも獨逸語でも其通りそれに各國人皆それ〴〵に自尊心といふものが有るから、餘所の國の言葉が國際語になつては承知せん、何でも自分の國の言葉を採用しろと主張する、到底も相談の纏まる見込はない、そこで是はどうでも何か新しい言語を作つて、それを一般に行ふより外手段はないとなつて諸國の學者は此方面でいろ〳〵工夫してゐる中に、千八百八十二年といへば明治十二年に當りますかね、其年にウオラピユックといふ新發明の國際語が出來た、かの符

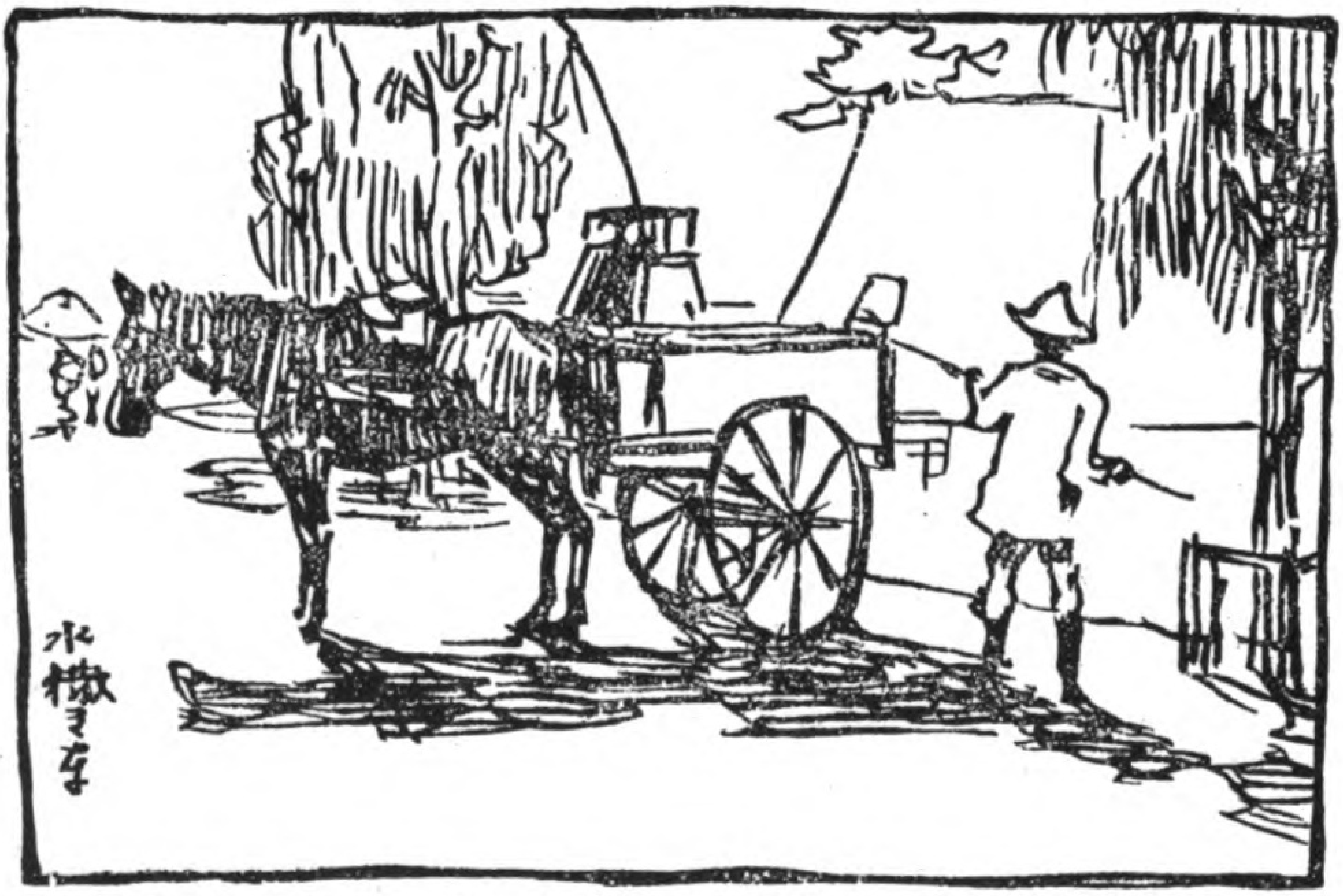


號などから視れば餘程氣が利いてゐるけれど、惜しい事には餘り人爲的で、細工に過ぎてゐて之を人情風俗の違ふ各國人の口へ掛けたら、どうやら支離滅裂になつて了ひさうで、どうも申分が多いが、外に之に代るべきものもないから、一時は相應に研究する者もあつた、我國でも讀賣新聞が其文法を飜譯して附錄にして出したことがあるから或は研究した人もあるでせう、しかし何國でも未だ弘く行はれるといふ程に行かぬ中、千八百八十七年、即ち明治十八年になりますかな、其年の末に始めて所謂エスペラントが世に公にせられた之は露國ワルソウの人だ

から詰り波蘭人だ、その波蘭人のドクトル、ザメンゴフといふ人の發明で、かのウオラピユツクなどから視ると、遙かに自然的で無理が少ないから、忽の中に非常な勢で諸國に弘まつた、今では世界中で亞細亞や阿非利加を除いては到る處にエスペラント協會が出來てゐて、其敎科書は各國語に飜譯されてある、私が始て浦潮斯德でポストニコフといふ人からエスペラント語を習つた時にも、同氏から此語が歐米で盛に研究されつゝある話を聽いたことがあつたが、當時は仔細あつて私の心は彼に在つて此に無しといふ有樣で、好加減に閑流して置いたが、其後北京へ行つて暫らく逗留してゐると、或日巴里から手紙が來た、巴里に知人はないかと怪しみながら封を切つて見ると、エスペラント語で日本に於けるエスペラント流布の狀況が聞きたいといふ意味の事が書いてある、署名は佛人の名だが一向知らない人だ、さてはエスペラント協會員だなと心附いたから、日本では一向まだ駄目だといふ返事を出して置いたが、戰爭前歸朝すると間もなく又墨西哥の未知の人から矢張エスペラント語で繪葉書の交換を申込んで來た、成程敎科書は西班牙語にも飜譯されてあるから墨西哥にエスペランチストのあるに不思議はないが、それでも其葉書を手にした時には、實は意外の感に打たれましたよ、といふものでエスペラントは今では思ひ掛けない處にまで弘まつてゐるから、エスペラントは確かに世界通用語になりつゝあるものと謂つてよろしい、安孫子君の報道でみると、倫敦の商業會議所ではエスペラントを書記の必須科目にしてゐるさうだ、又黑板博士の話では倫敦の或るステーションにはエスペラントのガイドが居ると云ふ、かれこれ思ひ合せればエスペラントは或一部の人の想像するやうなユートピヤではない、既に世界の人から國際語として存在の價値あることを認められて現に應用されつゝあるものだ。

發明後僅か二十年經つか經たぬ中に此通り弘まつたのは、一方から言へば人間の交通が益頻繁になつて世界通用語の必要が切に感ぜられることを證據立てると

同時に、一方に於てはエスペラントなるものが此需要を滿足する恰好の言語であることを證據立てるとまあいふべきでせう、まあ試みにやつて御覽、それは雜作もないものだ、文法は僅か十六則で、語根か一千語内外、それはあの「世界語」の終に載せた字書に殘らず收まつてゐるから、あの字書さへあれば、十六則の文法を便りにして、一寸本も讀めれば、會話も出來、手紙もかける、格別研究する必要もない位のものだ、論より證據かういふ私は浦潮でポストニコトといふ人から習つたと云つても唯アルファベットの讀み方を敎へて貰つたゞけの事で其外何も習つたのでない、而もアルファベット



も習ひ放しで、いろ〳〵忙がしかつたものだから、敎科書は鞄の中へ放り込んだ儘、ツイ窺いてみた事もなかつたが、北京で佛人の手紙が届いた時、字引を引き〳〵讀んでみると、雜作もなく分つた分ることは分つたが返事が書けるかしらと、何しても此時始めてエスペラント語で書いたものを讀んで見たのだから、内々危ぶみつゝ文法を讀み〳〵、字引を繰り〳〵やりてみると、手紙も亦雜作もなく書けた、尤も餘り名文でもなかつたかも知れぬが、兎に角意味の通じる程には書けた積りだ、これは私ばかりではない、誰でも然うなので現に此間も去る友人から

「世界語」を一部送つて與ろと言つて來たから送つてやると、直ぐエスペラントで小版三頁程の手紙を寄越した、尤も此友人は倫敦に永く居た人で英文に堪能である所爲もあらうが、仲々巧く書いてある、而してその言草が好いぢやないか、エスペラントの容易しいのには驚いたトかうだ、が、實際その通りで驚く程容易しい、此通誰でも研究といふ程の研究はせずとも、文法の十六則に一通り目を透しさへすれば、一寸文章も書ける、こんな容易しい言語が世の中に又と有らうと思へぬ、さう容易しくては複雜な思想は言顯せまいと思ふ人もあらふが、ところが然うでない、かの「世界語」の終りに載せた世界語既刊書目を見ても分るが、既にシークスピヤのハムレットもエスペラントの飜譯になつてゐる、ヂッケンスのクリスマス、キャロルも飜譯になつてゐる、ハイネ、ゲーテの詩も飜譯されてあるバイロンも、プーシキンも、トウストイも、シェンキェーウヰチも飜譯されてある、私が曾て苅心と署名して四日間といふガルシンのスケッチを反譯して新小説に出したことがあるが、あんなものまで最う反譯されてあるこれらは皆美文だが、哲學書にしてもライプニッツのモナドロギイが反譯になつてゐる位だから、凡そ今の人間の言語で言顯はす事は、どんな事でもエスペラントで言はれぬといふことはない、それでゐて殆ど研究といふ程の研究をせんでも分るのだから、それから推してもエスペラントの將來は實に多望だ、十年二十年と經つたら、今より數十倍應用の範圍が弘まり、五十年も經つたら、各國の小學校の必須科目になるかも知れん、現に既に必須科目にしてゐる地方もある位だからそりや然ういふことになるかも知れん、私はエスペラントの將來に就いては大のオプチミストだ。

まだ〳〵エスペラントに就いては大分言ひたい事がある、英語は今では日本にも大分弘まつてゐるやうではあるが、しかしまだ〳〵知らない人も多いだらうからさういふ譯は、外國語を習ひ後れた人には、是非エスペラントを勸めたい、それから英語なり獨逸語なり、現在の外國語になると、何程手に入つたといつても、

書いたものを直ぐ出版するといふことの出來る人は少からう、多くは是非一度英人なり獨逸人なりに筆を入れて貰はなければ、安心して出版は出來まい、ところがエスペラントは何國の言葉といふのでないから、同じ文法に依つて、同じ言葉を使ひながら、各國皆其スタイルが違ふやうだ、例へば英人は英語を、獨逸人は獨逸語を、佛人は佛語をそれ〴〵エスペラントに引直して用ゐるから、英人のエスペラントには英語の臭味があり佛人は佛語、獨逸人は獨逸語の臭味がある、だから日本のエスペラントは日本語の臭味があつたとて一向差支ないと思ふこれは、非常に都合の好い話だから、願はくは



多數の力でエスペラントの日本式スタイルを作つて、日本語の精神でエスペラントを使つて世界の人を相手にドシ〴〵著作の出來るやうにしたい此外まだ言ひたい事は澤山あるけれど、まあ、此位で止めて置かう。

（編者曰く、エスペラントの由來及び其内容に就ては別項「世界共通語」を參看せらるべし。）

目下專修學校でガントレット氏講習の下に開催して居るエスペラント講習會は百九十名あるさうだ右講習員は八日目で八品詞をしつかり覺え九日目には已に同語を以て思想を顯はす事が出來たさうな、英語が二年や三年かゝつても滿足に出來ぬのに反しドレ程同語が其學習に容易なるかゞわかる佛國ブトロンで昨年八月の銀行休暇日を利用して大會を開いた時は非常な成功で數日間は馬車の御者も酒屋の丁稚もエスペラントを話さぬはなかつたとの事エス語は決して英佛語に取つて代らうとするのではない諸種の萬國大會の爲め及學術研究の爲め獨語や佛語やたの學習する手間を省く爲に、補足語として發達を計るのであるとは磯邊彌一郎氏の談。

萬國共通語

河西璞

「日本人は語學の才に乏しき人種なり」との批評が當り居るや否や予は知らず、されど今日我國の中學校に於て、一英語の稽古に毎日一時間、即ち全教授時間の五分の一を費し、學生の下宿に於ける復習下見時間の約三分の一が之に用ひられつゝあるは確かなる事實にして、それにも拘らず、學習五年、立派に卒業したる者にても、猶且つ英米人との日常應對にまごつき、其語の新聞雜誌の少年欄さへも讀み煩ふもの少からぬなり、言ふまでも無く中學程度の學生が英語を學ぶは、これによりて英文學の美を味はんとにもあらず、又英語の組立を研究せんとにもあらず、之によりて英米人と相互の意思の疏通を圖るの方便、英人と直接に談話し、英語の著書を讀まんとするの手段に外ならず、然るに此一手段の爲大切なる學習期の四分の一を費やさゞるべからざるは、如何にも馬鹿らしき事にて、萬事便利なる今日文明の世の中に、甚だしき不便を感ずる處ろなり。

されば今後各國人種の交際いよ〳〵目覺しき勢を以て行はるべく交際すべき人種も、話す國語も漸く複雜となるべくして、此忙しき世に一々通辯も煩はしく、さればとて各國の語を學んで居る閑時日も求め得ぬといふことになれば、畢竟はどう結着すべきものかと、考へ來りし人は、決して少なからず、學術界の「オーソリチー」として一世を風靡しつゝある、ベーコン、パスカル、ライプニッツ、等の人々は何れも深く世の大勢を推究して此問題に逢着したるらしく、其解決としては、衆口一齊世界國語の統一といふことに歸着し、爾來夫々異りたる思想言語を有する世界凡ての國民を悉く滿足さすべき共通言語を創作するといふ難題に對し、大膽にも解決を試みたる勇者往々出現して奮闘力戰したりしなり、併し始めに現れたる此等の未熟物は何れも失敗に終りたり、されど失敗は成効の本とい

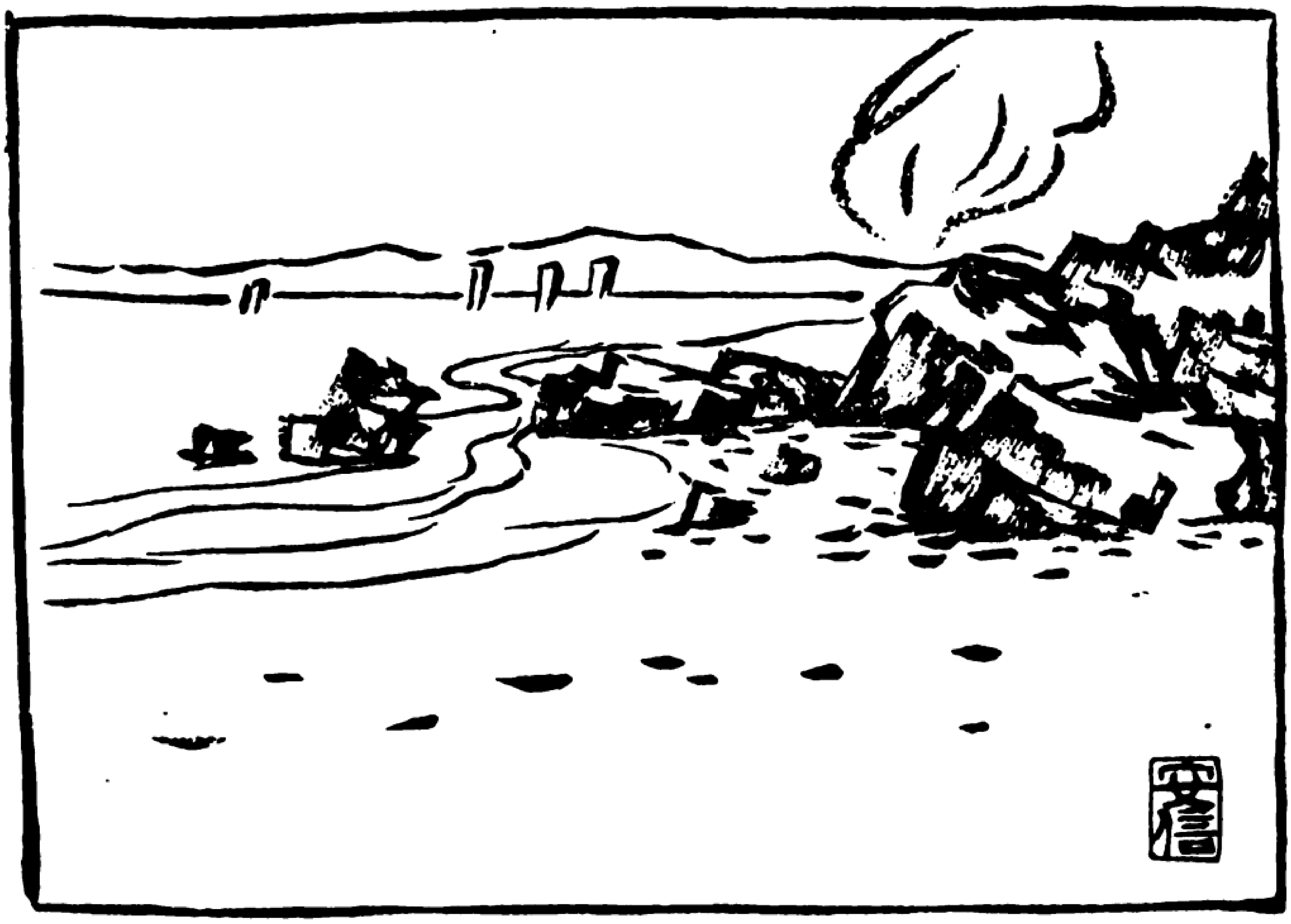
ふ格言の通り、遂に今日に至り、世人の注意を惹く程の共通語を作り出すまでに漕ぎ付けたり、即ち今日流行の兆あるエスペラント是なり。

エスペラント

抑も世界に共通すべき新言語は如何なるものたるべきか、少くとも左の條件丈は是非具有せざるべからず、即ち

一文字の發音は世界人類の何れにも發音せらるゝものにして且つ容易に出で來るものたるべく、

二音を綴りたる語に發音を缺く文字あるべからず、一つの語は一つの音にて彼此混



同の虞あるべからず、

三文法は簡明ならざるべからず、凡てに於て一つたりとも除外例あるべからず、

四單語は成るべく各國現有言語に廣く近きものたるべし。

五智識ある人にも、智識なき人にも、商賈にも、文學者にも、科學者にも、技藝家にも、凡て適當し、其思想を言ひ現すにいつも適當の しかも簡明なる語を發見するといふことならざるべからず、

例へば第一に於て英語の th の如き ü 如き、獨逸語のウムラウトの如き、日本語の

「ち」「づ」の如き「ふ」の如き、第二に於て、英語に最多き例を發見する無聲字("Knight")を"nit"と訓み、"Wednesday"を"Wensda"と訓む如き)變音字("bury"を"beri"と發音し、"pretty"を"priti"と發音する如き)及び日本語、特に淸語、英語にも屢ある同綴異音語(例へば「イシヤ」と書きて「石屋」とも「醫者」とも訓むが如き、淸語の四聲變化の如き、英語の"bow"の如き)の如き、第三に於て、別けても獨逸語の文法、語に一々性を付し、"der, des, dem, den;" "die, der, den, die"など、大抵の人は初の數頁にて早く卷を投じて大息するならんと思はるゝ七むづかしき定め、多くの字書の終りに附錄しある不規則働詞、不規則複數の如き、此等の不便が取り去られて、其上、第四第五の條件に適合するやうなる共通言語が行はるゝに至る曉、人生の福祉果して如何、目前に此の如き言語ありと知らば、天下必ず靡然として之に趨くべし始め學ぶ折こそ多少の苦みあれ、永く人類福祉の爲と思へば、辟易逡巡する卑怯者は無からん、問題は、折角學んでも無駄苦勞になりはせずや、殘るはこれ一つの解決のみ、さて「エスペラント」の實質如何、そを批評する者の言ふ所にては、よく以上の要件に適合すといふ、發音は歐米人にも、東洋人にも、黑人にも、ラプランド人にも、一樣に自然のものゝみにて、綴り方は絕對的に耳的、文法は無上簡單、文章は全く言文一致、高等小學程度の學力を有するものならば一時間にて立派に文法の卒業を見るべく、さて其單語は普通の英人ならば學ばざるに半分以上は知り居るもの、英人にして佛語、拉丁語、西語、伊語の中一つを知り居らば、新に學ぶべきものは只の二三割のみならんと、「エスペラント」單語の根本は一千の基本單語にて、之に三十の語頭語尾を添加す、此組合せにて數萬の語を組立て行く、簡單の法則を學ばゞ自由勝手に組み立て用ふるを得るなり、オーコンノル氏は此語を熟視すること半年、驚嘆してかく言へり、「ア、これ現時の大不思議、嘆美すべき奇跡にあらずして何ぞや、予は此語に接してよりこゝに六閱月、日、一日其美點の加り行くを感ずるなり、此語の普

及は今日相互意思の疏通せざるより生ずる可忌反目嫉視爭睨を地球上より除き去るに至るべく、人生唯一の目的なる極樂世界の出現時期を早むるものといふべし」と、トルストイ伯はかく言へり、『此共通語は極めて簡潔なり、其文法書と字書とを落手して僅に二時間、未だ之を以て文章を綴ることは能はざれども之を以て書ける文章を讀んで理會する丈のことは既に卒業せりといふを得」と、マツクス、ムエレル氏はかく言へり、『予は多くの世界共通語なるものを見たり、されど「エスペラント」は上乘なるものなり、予はしか斷言す」と、『馬丁も小學兒童も、如何なる無教育者も、一個月にして讀み且つ書くを得べく、三週間にして會話するに差支へざる』と稱せらるゝ此新言語「エスペランド」は、右の如き大評判を以て先づ世界の學者先達に推奬せられ、今日歐洲の主なる都邑には此語學會の開設なきは殆どなく、巴里のみに之を教ふる學校二十もあり、新陳代謝する一學級の生徒常に百を下らず、佛及典の學校には此語學を正科中に加へ置くもの多くあり、佛、獨、蘭、露、典、ブルガリア、カナダ、其他の國々に此語を以て發行する會誌十數あり、英國の如き守舊的の國柄ながら、英蘭のみにて凡十の語學會組織され、組織の相談中にあるものも隨分あり、蘇格蘭、愛蘭亦後れざらん



としつゝあり、只に歐洲のみならず、ベルー、ブラジル、モントリール、オツタワ、シベリアの果までも此思潮は汎濫し、飜譯書としては、既に成りたるもの、「ハムレツト」、「イリアツド」、バイロン作「カイン」、トルストイ及びラスキン作小篇物數種、ライブニツツ、グルーシー諸科學者の作、更に近頃ユークリツド幾何學第五卷の註釋を出し、一切にて凡二百、各方面に涉る、著作亦少からず、何れも出來は見事にて、今日の思想を現すに少しも遺憾なきを示せりと、オーコンノル氏は更に言へり、「予は過去二十五年間各種の共通語を學べり、されど一も理想に叶へるものはなかりき、予は失望せり、而して今「エスペラント」に於て宿望漸く達せり」と、

▲スポキル (SPOKIL)

「エスペラント」は人類共通語に對する最後の問題を解決すべきか、と見つゝある世界の思想家は、其後更に幾種他の提案を調査せざるを得ざりき、此等の中最新に現れ出でたるものを「スポキル」となす、此新言語は佛蘭西の醫者ニコラスといふ人の作にして、其字書及文法書は此頃巴里に發刊せられ、二百七十二頁の一冊物なり、これにつき、學術雜誌「レヴュー、シャンチフイク」は左の如く評論せり、

「スポキル」は其質よりいへば所謂語義的又理論的にして、語は何れも其意義を以て構成せられ、語即ち思想を表出す、此點に於て現今世界に行はるゝ多數言語が、何の意義もなく構成せられ、若くは他國の言語より誘導せられ、轉訛せられたるとは頗る趣を異にす、例へば「スポキル」に於て「渇」といふ語は「drava」とせらる、此語は「水」といふ意の基本語と定めたる「dra」と、「要す」といふ意の基本語と定めたる「av」と、而して名詞の語尾と定めたる「a」との組合せより成るなり、即ち「渇」なる名詞は「水要す」にて「水を要すといふ事」となるなり、同樣に、此言語にて「食物」なる語が「bra」なる基本語にて表はさるゝといふ事を學べば「brava」が「饑餓」なることは直ちに理解せらるべく、「bro」が「智

識の」義にて、形容詞の語尾が"o"なることを知らば、「奇怪なる」「不思議なる」「妙の」といふ語は、「智識即ち知ることを要する」即ち"saro"と作り出すこと何の苦もなし、猶例を以て説明せんか、「スポキル」に於ては、「大きい」「廣い」「多い」「長い」「厚い」の各語を"alpo""alko""aljo""also""alto"にて表し、而して語首の　とロとは反對の意味に用ふと規定するが故に此五語を知らば直ちに「小い」「狹い」「少い」「短い」「薄い」は"ulpo""ulko""uljo""ulso""ulto"なるを知るべし、同じく子音の"日"と"ロ"も其用に於て反對の意味を表はすと規定せらる。

此共通語の構成に於て用ひらるゝ子音は、單獨と組合せとを合して僅百二十八にして、母音はこれも單複合せて十九のみ、されど現用外國語より得來れる語亦無きにあらず。

要するに、「スポキル」は中々甘く出來て居るには違ひ無きも、之を「エスペラント」に比ぶれば、明かにより六かしと言はざるを得ずされば、簡單明瞭なる語が廣く行はるべしといふ大趨勢より見て、「スポキル」は折角生れ出ではしたるものゝ、氣の毒ながら他の多數の提案と同く將來の運命長からぬものと推斷せざるを得ず。



「レヴュー、シャンチフィック」の論これにて終る、畢竟するに、今日の處、文明世界人類の現に切望しつゝある共通語は遂に「エスペラント」を推さゞるを得ざるものゝ如く、今後遙かに之に勝りたるものゝ現出せざる限りは。(完)

秋雨日記

藤田いざな

○たちかへる故山の夏、翠の花に見て、合歡木の花に見て、やさしう、うつくしき雨ぞと歎せし日は夢と過ぎて、今武藏野の夕、野路の逍遙に折りたる秋花一つ、集小さき机によりて、窓ごしに見る旅の雨こそは、悲愁の粒、胸にわたしてみだれがき、そゞろの切なさを奥ふかうきざむもきのなれ。朝夕、小さき心にうかぶくりごと、ことごと筆せば、げに盡きずやあらむ。

○今しばしにて、はらゝ散るべき名殘をしみて、細き秋雨のしとしとと末葉にそゝぐ音、何となうものかなしき野の夕なり。見渡せば雨にくれゆく野のさびしみを、たどる人影うちたえて、鐘の音ひとりそらにまよふ。

野にさく花の姿よ、露にそぼつやつれ肩、そとかいすぼめて、かざす袖葉のうつろひに、心小さきはかゝる時、うちも消ぬべし。瑠璃あはく、雨にかすめる水亭に、はなれ難き訣別ちし友の姿、今ゆめうつゝ、ほのかにうかびて、かぎりなきさびしみの我が影によりそふ思ひ。

この雨は、一つ一つ、かの木の葉をそめて、秋姫が歸り路のよそほひ、うべや、其の音も、遠音の樂のごと自然か女神のいみじき御手にきざむ音律のながれにかよひて、世にみちわたるしらべは、これや別離の悲曲なるらむ。

○枯れのころ草にそゝぐ雨しとしとと心細き夕、まどによるに遠方の野末ほのぐれて、杜のうへ、夕ぎりなびく。風をりをり、しどろもどろに雨足みだれてに、楢の黄色葉、はらゝのまよひ、破滅のみちを土にいそぐ。故山をしのぶに、さびしさの我が旅、雨風のこの夕、むさし廣野の濃鈍色、つと胸にふたがりて、あけぬ夜の心まどひの果ては、いづれ涙とながれつべし。

○秋たけし野の夕さめ、風ほしいまゝなるひとつ家のうち、えたへぬさびれに涙ぐまむとて、東の旅をひとへにいそぎしや。山こえ川こえて四三百里、ふるさとのわびずみにのこしまゐらせし母様、この夕、のお縁にはしゐめされて、御思ひ出は、なき父上の御事か、さてはこのはかな子の旅のゆくすゑか、いづれはかなしきそれぞれに、やせさへ見ゆる御肩すぼめて、來むやの秋とひとりごち給ふらむ。やさしき弟妹、一日のものがたりやさしき口にかたりて母様の御膝による夜思へ姉は、冷き柱にもたれ、夕雲のはしるかなた西空のぞむも見えぬ里なつかしみ、ひとりなみだに、雨をみる……。

○夕によるや宿舍の窓、まへにひろごる野に秋たけて、黄葉色に落日の光、聖者臨終のさまに似て、おごそかにかつはさびしう、道ゆく人もうれひありげにいそぎゆきぬ。

ふるさとの其の日、幼きわれの面影して、里の子の二人三人、畔道をよびかはしつゝもみぢにかくれもみち出て、茱萸さく家のせどに入りぬる。

○曉のねざめの夜中のこといともしづかなる野に、百舌鳥のこたかうひゞきて、小枝にとまりしが、我が姿におどろきて、飛び立つや早や、影きえたる野ずゑのあたり、雲いでたり、くれそめぬ、時雨やするらし。

○庭のすみなる朝がほ、この秋のあはれをひとりじめがほなる面姿、明日の望みもたえにしを、山茶花は情ある花よ、そのやはらかなる花びら、すがれ葉のうへにこぼして、涙ぬぐへとの花袖のごとし。

（をはり）

秋の美——九月之巻

▲秋風——秋立つや裸體で寐たる腹の上、いつとしもなく秋風の吹き初めて、薄に露の宿らんとき、桐の一葉は土に聲あり、客なき茶席に爐の火淋しう、壁に蟋蟀の影を追ふべし、山紫に水清ければ、野に逍遙の快樂もあらん。

▲歸京——懐かしの故郷にも、別れはやがて今日明日の、再び笈を肩にして都に出づる乙女もあらん、學びの窓の忙しみに、また來ん夏を俟たんとや、よしなき道に踏迷ひて、戀しの郷を忘れ給ふな、木の實に馴染める山はあり、蓮華流せし小川もあるべし。

▲露——武藏野の千萱に置きし露はそも、今棟瓦の上に置きて、見るに綾なきさまながら、三坪の庭に植捨ての桔梗にも、玉を綴れば目覺むるばかり、しとゝに濡れし野末の草の、こゝに情けも宿ると知れかし、白露や草をこぼれて草の上、昨夜の星のころ〳〵と轉び落ちきと見るは詩人。

▲名月——舊の八月十五夜とぞ。雲なき空に月は晴れて、橋に片側列ぶ人あり。名月を大切に吹くや秋の風。そよとの風にも雲は出でゝ、人に怨みの種をや蒔くらん、座頭の妻の泣けりとぞ、疊に落つる松を踏んで、覗く隣りの濡椽に、糸竹の聲も心にくしや。

▲十六夜——いざよひや月になり行く荻の聲、濱の砂のいや黑かりしを、やがては玉の光りを見せて、沖行く船に櫓の聲涼し。出島の燈火瞬きしげく、一刷はきし雲のあなたに、鴎啼くなる洲や浮きもせん、夜更くるまでも立盡して、露に裳の重きぞ愛し。

▲芙蓉——嵐に近き頃を咲きて、嵐を俟たで散る身はかなし。花の姿のやさしければ、露もこゝには靜かに置きて、雨もさはらで降るや簷に、日に咲くものと誰か見るべき、月に咲く夜を夢に似し花。

▲鬼灯——廂髪には似合はじとよ、誠に薄き歌枕が、無聊の口に弄ばれて、出窓の陰に白粉の香を吹くとぞ。石菖の下葉に瘠蚊のとまりて、霜枯近き小路淋しき。

▲夜長——慰み深き夜長の友や、歌の書ども渉獵盡

して、故郷への繪葉書も五枚、六枚、さらでも厚き母の惠みの、袷まで縫直せば、上野の鐘の四更や告げん。學の窓に夜の長くして、友と語るも興ある事なり。

▲秋海棠＝＝秋に咲けばぞ秋海棠の、花に小雨の色も淋しき、雪洞の灯の薄零れては、やさしの人に手折られて、床に一輪の眺めとなるべし。月には淡く、雨に艶なる、そもや桔梗の紫を奪ふべき。

▲生　鮭＝＝夕餉の膳に上せとや、鮭は切身の色美くし。鱚も此頃獵れ盛りて、山に木茸の珍味もあるべし。秋腹に多くをものして、不測の病を釀しなせぞ。

▲秋茄子＝＝嫁に食はせじとぞ云へり。甘味ければか、毒あればか、實はやゝ小さくなりながらも、瑠璃の色濃く鉢に盛られて、そこに白銀の箸を添へなば、やごとなき御方も、いみじと味ひ給ふべきぞ。

▲破　扇＝＝一夏を帶の間に秘められて、そよとの風を賞でられしが、やがてぞ秋の初めとなりては、哀れ要めもはらりと零れて、捨扇のいつまでも、憂身を棚に曝さんとや、早く竈に葬られて、もとの白地の灰となれかし。

▲早　稻＝＝早稻の香や鷺も眠りをさますべう。あなたは山の麓にまで、此方は川の岸邊にまで、擴ごりたる田の畔さへ見えず、新らしき香鼻を打ちて、時に鳴子の響ぞすなる。

▲秋の蠅＝＝昔支那に蒼蠅を憎める人ありとかや。まことに蠅のうるさきは、蚊蚤のそれに勝ればなり。況んや秋を弱りながら、猶身の程を知らずして、晝を机上の書にうるさく、夜を枕邊に喞くぞ憂き、蚤より憎く、蚊よりも忌はし。

▲白　萩＝＝伏猪の床とは誰が名づけゝん。道も狹しと靡き伏して、眞白き花のちらほらと、潦に零れては、庵主も清き想ひに耽らん、萩寺に杖曳く人の、瓢もたぬも不思議にあらず、萩には詩の嚢をこそ。

▲柳　散＝＝かつては其芽を賞にし、柳の、散る葉に秋の色見えて、いさゝか夕の日も弱るとや、淋しさはまづ此散柳の、やがて野分を誘ふにあればか、常には見えぬ石地藏の、こゝに露骨の御姿あはれ！



繪畫と動植物

T H 生

繪畫といふものは、多くは美なるものであるから、目に觸れると、何となく心持が快い、また實際繪畫は何處にもあるから、目に觸れることが比較的多いのです、で物は見なれると、缺點が出て來ると同じく、繪畫にも注意して見ると、完全といふべきものは、實に尠ないのです、何にはともあれ、眞理にかなはないのが往々あります。繪畫が、たゞ美一點に止まるものなれば、まだしも宜しいが、苟も眞、即ち實物に似はせあゝこれは良く出來た、恰るで眞物の樣であると、所謂自然のまゝをも寫すのが、一要素であるとすれば、物を畫くに當り、餘程注意をはらはねばならぬ。吾々は素人であるが、聊か平素動植物の研究をして居るから、動植物と繪畫上の關係を少しく述べてみませう。

由來東洋畫は、寫生には餘り重きを置かなかつたらしい。吾々が始終見なれて居る人物を畫くにも、只管手本を摹寫するとか、或は想像をかくのであるか知らんが、概していふと、頭部と軀幹と手足とが、如何にも不釣合に出來てるのが多い、特に古代の支那人などをかくと、顏面が非常に大くて手足が小さい、壽老人的人物が多い、そうかといつて、我邦平安時代から鎌倉

時代までの人物をかくと、頭が非常に小くて、頬の部分が大概膨らんでる、抑も動物の意志觀念の宿る所は頭腦である、頭腦の大きいものは怜悧で、頭腦の小さいものは愚鈍であることは、比較上爭ふべからざる事實である、西洋人は頭部(顔にあらず)が大きいが、阿弗利加の黒人は極く小さい、日本にした所が今日英雄だの智者だのといはるゝ者の寫眞を見るに、大抵頭が大きい、然るに痴者や智慮の乏しい者になると、頭の大きい者が少い。骨相學からいふと、人間の頭顔部は倒卵形が一番佳いとしてある、美の點からいふも倒卵形の方が、見塲がよい、所が平安時代の女流姿や鎌倉時代の武者繪を見ると、多くは頭が細くて、顔が膨らんでる、所謂たゝの卵形である。古來繪畫にかゝれる紫式部や和泉式部などの肖像は、愚物の相であつて、決して緻密精巧なる思想を以て、婉麗なる文詞を綴り出すといふ楽らい人相ではないのです。それから源頼朝や大江廣元などの畫も多くは頭が小さくて、特に小さい冠を戴いてるが、頼朝の頭の大かつたことは歴史上有名である、大江の廣元も當時の參謀長であつたから、定めし頭が大かつたのであらう。故に英雄豪傑や賢者をかくには、額の廣い様にするのが、理にかなつと居るかと思はれます。

顔面に就ても、眉毛の目、鼻、口、鬚等の不自然に出來てるのが少くない。美人の畫を見ると大概口が小さくて、目よりも小さいのが多くあります、けれども勇猛なる武者など畫くときは、反對に口が分量なく廣がつてる、これは勢の然らしむる所であらうが、今少し加減して欲しい、鼻の正面を畫くのは實に六ケしい、西洋畫の様に光線の具合に寄らなければ、到底も巧くは出來ない。目は眦が多少上つてる、眦の上がてるのは、畫としては佳いが、實際眦の上つてるのは見よくない。次ぎに眉毛は動もすると、眉毛と眉毛の間が離れ過ぎて、間が拔けてる。鬚は近頃の畫には、概ね鼻下から生えてるが、昔の武者繪を見ると、八字形になつてる、昔の人は殊更八字形に作つたかは知れんが、自然に任かせると、決して八の形に生えるもの

でない、への形が當を得てる。それから女の頭髪について も、定めし缺くる所があるだらうが、吾々は女でないから髪のことは、よく分りません。

手足の形も不恰好なのが往々あります、何方かといふと手足の太くて短く、所謂づゝもくなのが多い樣です。世界の人種を觀るに、西洋人は割合に手足が長くて、まことに見よいが、野蠻人になると、胴が長くて足が短く、或は手が長過ぎたりして、體格が恰好しないのです。東洋畫の胴や手足の不釣合なのは、餘り裸體畫をかゝん故でありませう。此點については、葛飾北齋は餘程注意した、北齋の下畫は、先づ裸體であつ



て、それに衣服を着せたのであるから、實際にかなつてる、西洋人が北齋の畫を好むのは、つまり體格が相當してるのにあるといふことです。

次ぎに獸類の畫を見るに獅子は實物とは大に違つてる。此獸は印度地方と阿弗利加州に棲んでるが、日本や支那朝鮮などには、古から居らない、獅子の畫は、恐らくは支那人が印度人に聞き、後想像して畫いたのを、日本人が更に眞似してかいたのでありませう。尤も見たことのない物をかいたのであるから、相違してゐても無理はないのです。今は動物園などに飼養して、大抵の人が見て居から、

これからは彫刻や織物や、塗物などは兎に角、繪畫の上に於ては、昔の樣な獅子の體形は、自然消え失せてしまふのでありませう。

虎の畫は、多くは四足が太過ぎてる、また虎の眼は晝夜によつて、瞳孔の大さが違ふのであらうに、此點には注意しない、虎の爪は猫の爪と同じく用ゐない時は皮肉の中へ匿くしてあつて、外部へは突出てゐないのです。野猪の畫には、尾が實物と異つてるのが往々あります。鹿の毛の斑點は期節によつて變化するものであるのに、いつの鹿でも畫には變りがない。黃鼬及び北國の兎などは、夏と冬とでは、毛色に變化を來たすが、これ等には無頓着であるらしい。

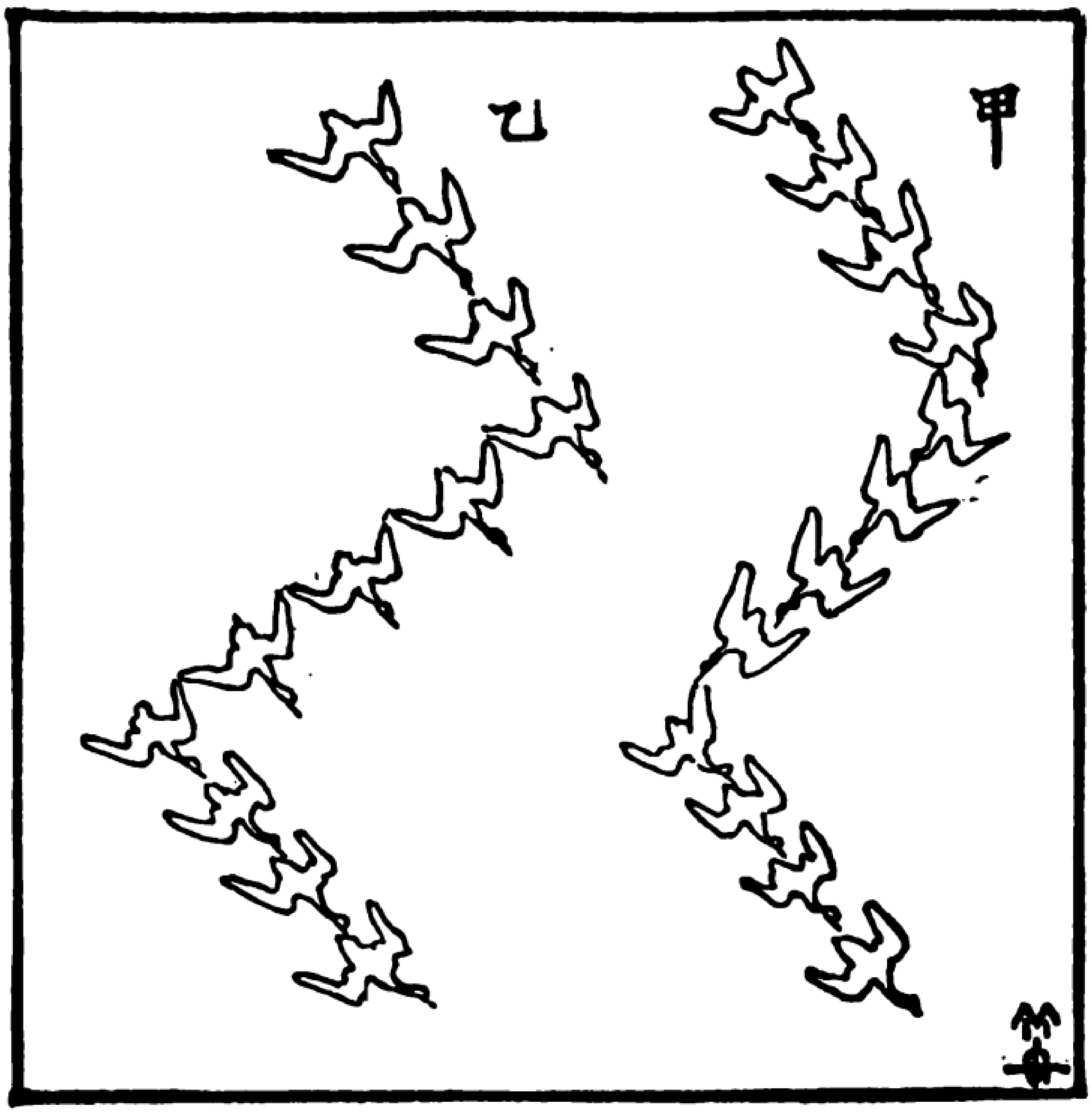
麒麟は、龍、鳳凰と共に支那人が想像して造つた動物であつて、全く此地球上にないものであるから、批評は出來ない、斯の如き想像的動物は、たゞ活動してるが如くに畫けば宜しいでせう。

猩々は、世界中、僅かスマトラとボルネヲの二島にのみ産するので、昔は勿論、今日でも我邦に飼養しあるのは少數であるから、猩々の畫は少ない。近頃動物園などに飼養されてあるから、往々繪畫にも寫されて世間へ紹介されるが、前腕の毛が逆生してるのに、氣が付かないのが往々見えます。

鳥類の中、よく畫かれるのは、鶴が第一である。鶴の中丹頂鶴が最も優美であるから、畫かれるのは大抵丹頂鶴であります、丹頂鶴は讀んで字の如く、頭の頂きが眞紅で喉部と翼の一部に當る所の羽毛が眞黑で、殘りは純白色である。で翼は長くて、飛ばない時は、其眞黑な部分が、尾の上を覆ふて居るから、恰るで尾としか思はれないのです、けれども丹頂鶴の尾羽は、眞白であるから、飛ぶ時は黑い羽は一本も見えない、所が從來の繪を見ると、飛んでる鶴の尾が、眞黑に染められてあります。これは大間違ひです、論より證據動物園へ行き、翼をひろげた所を見るがよい。鶴の次ぎに貴ばれるのは孔雀である、孔雀は繪として雄の尾羽に價値がある、尾羽は全く裝飾であッて、雌を喜ばせるには、此長大美麗なる尾羽を、傘を開くが如くに

ひろげるので、其時は實に美麗である、所が孔雀の美を描きながら、尾羽をひろげた所の繪畫に乏しいのは遺憾です。雉の雄は多くは頭部の毛を逆て、又紫冠も大くしてあるが、斯かる狀は、餘程物に激した時である、悠々閑々として地上或は樹上に在る時は、頭毛も逆たず、紫冠も縮小してるのです。鷄の繪は、槪ね地鷄であるが、今日は各種の洋鷄が傳來して、地鷄は殆んど種類を斷つた位に尠くなつたのであるから、今後はレグホーン、コーチン、ウケッコー、若くはハンバークなどの鷄を畫いたら面白いでせう。

　魚類でよく畫かれるのは鯉であります、鯉の眼は、生きてる時は、斷へず動かしてゝ、眞直に置くことはないそうです。然るに畫にかいてある鯉は、大槪正面してる所であります。それから蟲類にては蜻蛉、蝶などよく畫にかゝれて居るが、何といふ蜻蛉であるか、何といふ蝶であるか、滅茶苦茶でさッぱり譯が分らん、全く出鱈目に畫くので、此世界に生きてゐない蜻蛉や蝶が多くあります。



　植物にては、畫の習はじめに、よく春蘭をかゝせるが、字を習ふに永字八法があるやるやうに、畫では春蘭に多くの筆法が含まれて居るといふことでです。所で畫にかいてある春蘭を見るに。花は五瓣からなつてるが、實際の花は、萼が三枚、花瓣が三枚、合せて六枚から成つてゐます、單子葉植物の花は、百合でも花菖蒲でも皆三

の數から成つてる。然るに同じ單子葉植物の春蘭の花が、五枚の數から成つてるのは間違ひである。それから春蘭の葉は、勢よく、スッススッと伸長してる樣にかきますが、實物の葉は剛くて、あんなに端が尖つてゐないのです。梅の畫を見るに、花は正面が多くて裏面は殆んどない、梅の花は、右に左に前に後に、所謂己がじゝに向いてゝ、決して一面にのみ向いてるものでない、これは美としての畫であるから仕方がないとしても、今少し花や葉の裏面を見せては如何であらう。竹の畫は大概節々が高か過ぎてる、節の高い竹は、瘦地に生へるので、笊屋などにみせると、價値の極く低いものであります。樹木の畫をみると幹は勿論、梢まで判然と現はれて居るが、樹木の幹は半ば以上になると、大抵葉に蔽はれて見へないのです。

動物と植物の配合をみるに、松に鶴、竹に雀、梅に鶯、南天に鵯、芒に鶉など、當然のことでありますけれども獅子に牡丹は考へものである。獅子は東洋では印度に棲んでる。印度の山野には、野生の牡丹がいくらも生へてゝ、其所へ獅子が遊び居るといふことを支那人が聞き傳へ、それを畫工が想像してかいたのでせう。獅子は果して牡丹を好むか否やは知れないのです。それから牡丹にはよく蝶をかき添へてありますがこれ等のことは研究せんければならぬ、何んとなれば花の中には、昆虫の媒介によつて、花粉を運びて受精せしむるのが多くあります、斯樣の花は、昆蟲の目を引く爲めに赤とか黃とか白とか、種々な色を呈して美はしくみせて居ります。たゞに色彩ばかりでなく、香氣を發するのもあります、で色彩や香氣で昆虫を招きよせ、之が饗應として、或者は花蜜花といひ、甘い蜜を貯へ、或者は花粉花といひ、多くの花粉を造り置きます。蝶や花蜂、花虻などは、蜜汁のある花を訪ひ、ハナムグリの如き甲蟲は、花粉の多い花を尋ねます。そこで百合、溪蓀、櫻、藤、茶の如き花には、蜜汁を吸ふ蟲、即ち蝶や花虻、蜜蜂など來るが、牡丹、芍藥、木蘭、薔薇、罌粟、蓮の如き花には、花粉が多いから花粉を食べる甲蟲が來て、蜜を吸ふ蟲は來ない。尤も

これ等の花は、美しいから蝶なども迷ふて來るかも知れんが、蜜よりも花粉を具へてあるので、直き飛び去つてしまふ、故に牡丹、芍藥、薔薇などの花に蝶を添へるのは、理窟に合はんのです。

此他の配合にして不自然なのは、いくらもありませう。吾々が訪ふた或る家に、立派な畫幅が掛けられてありました、畫題は雁が、蓮田に飛下る所です。枯れ果てた蓮田なら宜しいが、蓮の花の咲いてる眞夏に、何うして雁が居られましやうか、雁は氷の解けはじむると共に、北國の寒い地方に飛び去つてしまふ。雁は愚か、大抵の鳥は、秋から春までに多くて夏は少ないのです、蓮の花と、雁を配合させるのは、恰も花菖蒲の咲いてる所へ、雪が降りかゝつてる樣な譯です。



それから、或る家に、雁の飛行してる繪がありましたが、其飛行してる方向が如何にも奇妙である。雁には先導者があつて、一隊の行動を司つてる、一隊は先導者の方向通りに飛翔するのであるが故、折り曲がる時などは、甲圖の如くなるのであるが、或る家にあつたのは乙圖の如くに畫いてあつたのです。軍艦には種々に正列する樣に馴練してある

が、雁にはそんな複雜なことは出來ない、若しありとすれば、それは一の變則であらうと思はれます。

多くの繪畫の中には、風の爲め人物の髮や衣は後の方に吹き流れてゐるが、草や木の枝葉は、却て前の方に靡いてるのがあります、これは恰るで正反對のことで、旋風であれば兎に角、さもなくば容易にあるべきことでないのです。

又お伽噺などに、よく動物を人間に擬した所の繪があるが、奇妙に書いたのがあります。水產動物どもが龍宮に集會せる所などでは、鯛や章魚などは、體の大半を衣に包んであるが、鰺や鰹などは、全體をあらはしてあります。特に可笑しいのは蟹である。蟹は前を向かないで、多くは背面即ち甲を向けて居ります。

日本畫には、光線を具合ひしたのは殆んどないと言つて可い位、西洋畫は光線を重んじて、陰を多くするから、胡魔化すには都合がよい、然しながら、餘り黑く染めると、寫眞の樣になつてしまふ。實際人物や草木を見るに寫眞の如くには暗黑な部分が多かないのです。それから西洋畫は、寫生を主としてるから、遠近なども寫眞に倣ふて、餘りに遠過ぎたり、近か過ぎたりしてる、山水でも草木でも、寫眞は實際目で見るよりは、遠近大小の比例が餘りに多過ぎて居ります。

人間には、男女は勿論、老人あり壯者あり、若者あり小兒あり、丈高きものあり低きものあり、肥えたる者あり、瘦せたるものあり中肉の者あり、おでこあり細眼あり、鼻ぴしげあり、鰐口ありて實に種々樣々である故に、花見とか、運動場とか、祭禮とかの如く、多くの人の集まる所では、種々樣々な體格、容貌の人物をかくことが必要であります、然るに畫工によりては肥えたる人物ばかりをかき、又は瘦せたる者ばかりをかく癖があります、特に或畫工の如きは手足の非常に膨らんでる人物ばかり書きますが、實際癩病患者かスキキに罹つてる病人でなければ、手足の滿々と肥え太つてる者は稀なのです。獸類では應擧の虎は足太く光琳の鹿は胴太く、狙仙の猿は、胴も足も肥えてゐます。尤も猿などは、瘦せたのを畫くと、見ばがわるい

が、肥え太つてるのは、可愛らしいからであるとのことであります。畫は美趣と自然といふことが最も必要でありますゝで素より寫眞ではないから、或る程度までは、縱令不自然なところがあつても、美趣といふ點を重んぜねばならぬ、花鳥でも山水でも人物でもそうであります。就中婦人などは、衣服、装飾は勿論、白粉紅脂をつけてまでも、美しくさせやうとする世情であるから、下女や子守の外は、成るべく顔貌の輪廓の整然として併かも眼鼻だちの正しいのが欲しい。いくら装飾や衣服に注意して見事に彩色しても、顔貌がよく出來ないと少つとも目立たないのです。

世間の人々は、古から美術と理科とは、甚だ緣の薄いものゝ樣に看做してるが、吾々の考へでは、美術と理科就中、博物、生理、地理、地質などは、美術とは密接の關係があることゝ思ひます。繪畫を學ばんとす人は、博物學や地理學をも修め、諸動物の體格や習性や、草木の種名や態度や構造などを辨へ、そうして百合の花の花蓋、花蕋は何枚何本あるか朝顔の花には如何なる種類の昆蟲が尋ね來るか、又は火山脈の山嶽は如何なる形狀であるか、平原の川流は、如何に曲折せるかなどを研究して置くと、圖畫をかくときに、非常によき材料となります。で是等の科學を修むると不知不識の間に觀察力が增して來るのみならず。美妙なる自然界を研究してると、思想上にも少からぬ稗益があります。

歐洲諸國の皇室を見渡すと皇帝は太抵皇后よりも背が低い例へば英國のエドワード皇帝はアレキサンドリア皇后よりも背は二三寸低く露國皇帝も皇后より背丈低い獨逸のウヰルヘルム皇帝は中肉中背の方であるが皇后は馬鹿に背が高いので一所に寫眞を撮らるゝときなどには負けるとの嫌ひの皇帝は自分が立ち皇后が腰掛けると云ふことにせれば決して一所に寫すことを承知し給はぬさうで葡萄牙皇帝はデツプリと善く肥えては居らるゝが背は矢張皇后に少し負けるのであつて新婚の西班牙皇帝も皇后の方がやゝ高く英國の皇太子妃は皇太子より四インチ程背高であらせらるゝさうだ。

時事寸言

玄溟

△好季節に入れり

三伏の暑を避けて親しく故山を見舞たる幾萬の姉妹は、今や其懐かしき田園と別れ、温き父母の家を辭して再び學窓の人たらんとす。夏痩の筋肉引締り、身心共に活氣を帯び來れる今日此頃、希はくは安息の惰性に狃れず勉學の好季節を徒費するなからんことを。

△秋の心

秋は詩なり、秋は歌なり、秋の心は爽朗なり、秋の俤は一幅の繪畫となつて、人の心に一種の印象を與ふ。以思く、月前に涙ぐむは意志弱き小人のことなり、月前に襟を正すは誠實なる哲人のことなり、更に月前に哄笑するは世態の波瀾を了し盡したる達人のことなり。

△陛下の御召物

誌し奉るも綾に畏き事ながら、聖上には何事にまれ御規律正しく在します上に、平素の御召物等も至つて質素にわたらせ玉ひ、御洋服の如きも普通のフロクッコートにて、柄は上下共無地、裁縫は縁取の古風なる御仕立方にて、縞物は更に用ゐさせ玉はず、地質も多くは内地製の羅紗に限らせ玉ふとの御事なるが、一天萬乘の大君にましましてすら斯の如く御清素にわたらせ玉ふを惟へば、我等草莽の庶民が、徒に衣服装飾の事に流行を競ふが如きは、分外の贅澤にして誠に冥利の盡きる沙汰とや謂ふべし。

△露帝の厨房

匕首、爆裂彈、毒藥等の凶器は毎に皇帝の四邊を圍繞して近侍の間に於てすら動もすれば弑虐者の現はれんとするは、露國宮庭内の痼疾ともいふべし。随つて帝の膳部を調理する厨房の如きは全く秘密を以て蔽はれたりしが、過般の内亂以來、帝は一層御食事に御心を勞せられ、其結果、目今は皇后陛下親ら厨房に入り玉ひ御手づから烹炙の勞を取りたまひ再三再四試食したる上、親しく帝に薦め參らすを常とし玉ふとか、

あはれにも亦た傷ましき御身上と他所乍ら察し參らするなり。

△米國大統領の日本女子評

近頃一邦人のルーズベルト氏に謁見したる時、大統領は徐ろに口を開いて、曰く、『日本國民の忠君愛國主義には感服の外なきも其女子教育に至つては未だ遺憾の點少なからず、依て自國の長所を失はぬ限りに於て各國の長所をも吸收して向上教育を施せば如何に』との言ありき。

△伊太利皇后の女性觀察



伊國皇后陛下は、此頃女子の職分に就て左の如く語らせられたり。曰く女子第一の務めは男子と異なる點に於て其性能を發達せしめ、貴賤貧富の如何に拘はらず其必要に應じて教育せられざる可からず、要するに當時の保守心と當世の獨立心との調合は我等の理想的婦人たるに近し云々。

△獨逸の新婦人問題

獨逸に於ける從來の婦人運動は専ら政權を目的とし男子の爲す所女子も亦斯く行はざる可からざることを主

張するにありしが今回新に開かれし獨逸婦人の新運動は從來のものと全く其方針を異にし女子をして男子を擧ばしむるは理想的に非ず、寧ろ其異なる點を基として相當なる職務を行はしむるを以て目的とし、最後に「家庭は我等が活動範圍なり、愛、結婚、育兒は之我等の世界なり」と議決せりとか、獨逸既に這の覺醒あり、女子本來の性能を稱ふに足らんか。

△誤解せられたる自由結婚

自由結婚は決して否認すべきものに非ざれど從來我邦人の多くは其意義を誤解せるものゝ如し。歐米に於ける自由結婚の如き、名は自由結婚に相違なきも、其實父母の承諾を得ざれば如何なる事情ありとも不義の結婚として社會制裁の怖るべきものあり、又丁年未滿の女子は父母の同行するに非ざれば外出する能はざる風習ありて、寧ろ我邦に比すれば一層監督の嚴重なるものあり。

△女子發疑の原因

過般目白臺談話會の席上にて、女子は必ずしも子を產み子を育つべきが天職に非ず、輿論の爲に不完全なる結婚を敢てするよりも寧ろ下劣なる男子に反抗して獨身生活をなすは尊敬すべき婦人なり、と成瀨校長は語られたり、又女子に數學物理の如き推理的學問に秀れたるものゝ少きは、女子の腦力が男子に比して單純なる證據なれば、專ら家庭を主とする敎育を要するなりとは、元良井上の兩博士の論なりき、當今の女性はこの兩端を參酌してよく自己の方針を定むべきなり。

△女子獨身說の三時期

女學生の獨身說に三時期ありとは一敎育家の語、第一期は二十歲未滿の時にして華かなる理想が結婚によりて葬らるべきを豫想して嫁には行かずと主張する時也、第二期は廿二三歲頃にして同窓の誰彼は既に嫁ぎて家庭を作るに此方は少々賣殘りの氣味にて負惜み半分の獨立主義を言ひ張る時なり、第三期は三十の聲かゝりて據ろなしのオールドミスを覺悟し一生を獻身的に捧げんかと考ふるの時なりと。

△女子敎育の發達

五六年前に於て全國二萬に滿たざりし女學生は、今や約六倍の增加を示して十二萬の多數に上れり、此の間より少數の厭世家、煩悶家、墮落者を生ずるは又止むを得ぬ次第のみ。

△自殺者の增加

明治十四年の頃四千三百人を超えざりし全國の自殺者は、昨年末に至つて一萬二千三百餘人に上れりとは統計の示す處、コハ急激なる文明進步の結果にして生存競爭の劇甚になりゆく事實なり、今之を年齡に別けて見れば、女子は二十歳より三十歳の間に多く、男子は二十歳前後と五十歳以上とに最も多しと、而してその厭世觀に基く自殺者は大概神經衰弱の患者なりと生存競爭の勢や恐るべし。



△八百圓の持逃げ

人間が二十歳まで生くるには平生麥飯のみを食し居るも尙ほ八百圓に價する物資を要す、然るに煩悶の結果遂に自殺するが如きは即ち此八百圓を持逃する泥棒に齊し。とは三輪田文學士の言。

△果して何人の罪ぞ

元良博士曰く、靑年男女の自殺に對して多くの新聞雜誌は、罪を敎育者、宗敎家等に歸すれど、新聞雜誌こそ却て其罪を負ふべきもの也、彼等は自殺者のある

毎に事々しく之を吹聽して、暗示的に死を煽動しつゝありと勿論罪は教育家にあらずと雖も新聞雜誌の吹聽に因るものとは斷言也。

△惡傾向と名家の意見

煩悶厭世の惡傾向に關し、一雜誌はこれが救治策を諸名家に徴せり、其説區々、曰く生存競爭、曰く職業の無き曰く安逸の結果、曰く失戀曰く學問の過食曰く生悟りと就中最も多數なりしは、煩悶厭世は一種の贅澤にすぎずと言ふにありき。

△女子の墮落問題

女子は自然的資本を有するが故に生活困難の場合には必ず墮落すとの小河博士の一語、よく女性の弱點を道破し得たり無教育者の墮落は、生活の必要上詮方なし、家に恒產あつて相當の教育ある女子の墮落に至つては自ら好んで魔道に陷るもの、誘惑多き都會の地に獨り放す父母の呑氣こそ心得難し。

△地方の父兄に注告す

夏季歸省中の女生東京の繁華を說いて暗に其地の友人を促がす、友人其言に誘はれて負笈の念禁じ難く飛んで火に入る夏の蟲となるこそ傷ましけれ呉れぐも父兄の注意を乞ふ。

△公園と緣日

若き男女の墮落を怖るゝ父兄は公園、演劇、郊外散步、緣日に就て子女の監督を怠る勿れ偶には教會堂にもありと聞く、もぐりの音樂學校猥褻風聞あり。

△英國婦人の好意

曾て我邦に來遊せる英國の一婦人、頃日日本に於ける女學生の爲に資金を募りて一大寄宿舍を建て理想的の教育を爲さんといふ、感謝すべき事なり。

△女子の職業

遞信屬、小學教員、家庭教師を始めとして、女子の職業追々に殖えたり、博物標本の製造、寫眞術研究又よし。

△文部省の意見

全國の小學教員は悉く女子を以て充すべしとの新意見文部省にて合議中なりと。

△婦人の經木眞田

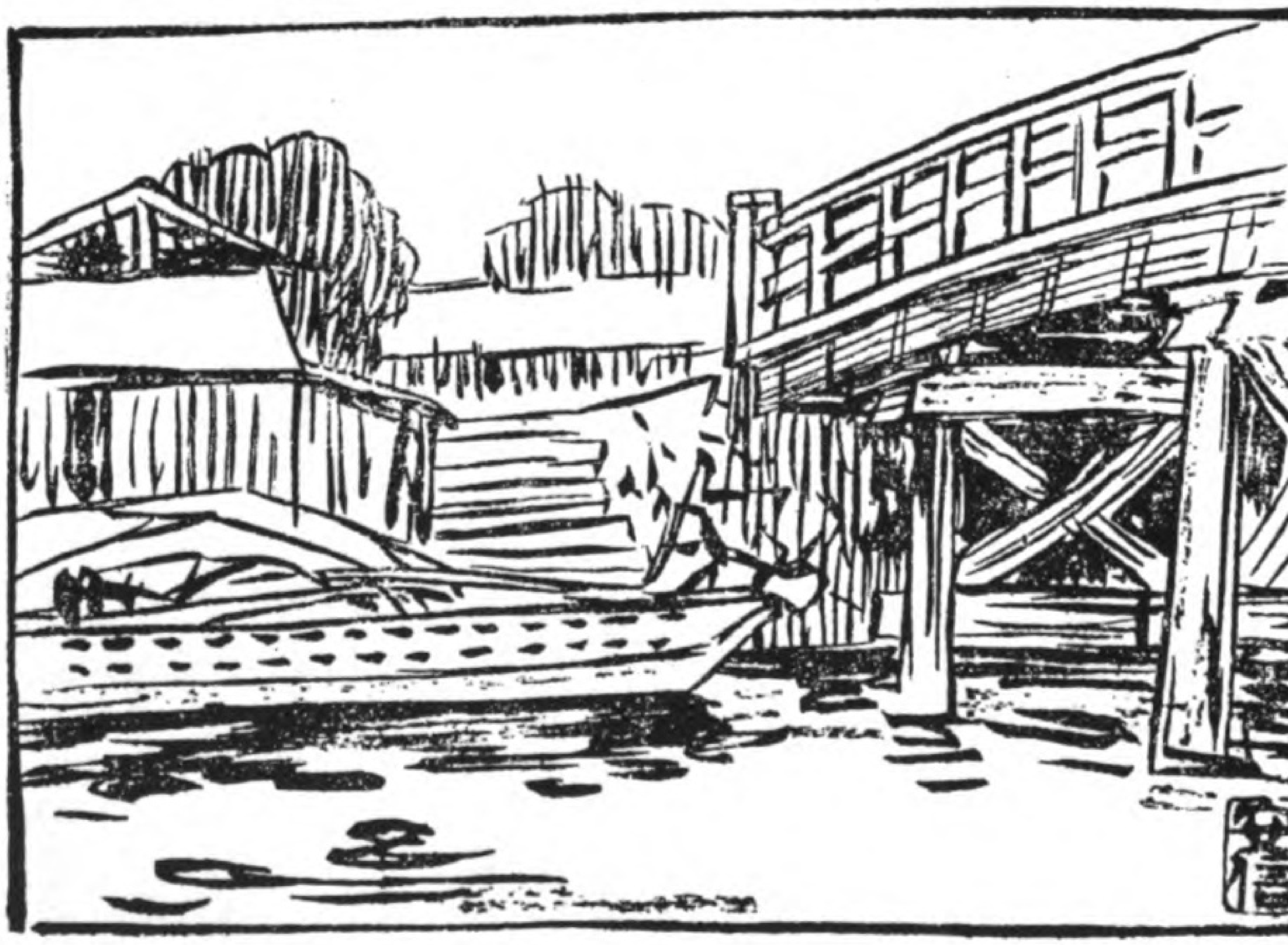
日本弘道會の婦人部は婦人奬勵團を新設して谷子爵夫人と令孃、烏丸伯爵夫人、武者小路子爵夫人等多數の婦人競ひ集まりて之が練習に餘念なしと。

△渡米女子の注意

近頃女子の渡米者漸く多きを加ふ、渡米素より可、只在米本邦人の餌たるなくんば幸也。

△清國留學生と日本婦人

清國留學生の甘言に欺かれて渡清する婦人少なからず彼等留學生の眞意を知るや否や、妻となりて行くもの多くは妾となりて歸り來るに過ぎずと猛省すべき事なり。



△神經衰弱症

日露戰役後、神經衰弱者の增加は驚くべき程なり、婦人にありては軍人遺族、商人の妻、女學生尤も多く下層の勞働社會には殆んど無し、女學生のこれに罹るものは、不規律なる勉强と前途の空想に耽るにありと。

△夏期と犯罪

一年中に最も犯罪の多きは夏期なり殊に色情に關するもの其多數を占む、とは統計の示す處なり、夏は家屋を開放すると共に外出の機會多きが故なりと。

△結婚と離婚との月別

一年に於て最も結婚の多きは三月と四月にて十二月之に亞ぎ最も少きは六月と八月なり。而

して離婚の多きは四月と三月にて、少きは六、七、八、月の三ヶ月なり。

△胃病に罹れる人

如何なる人に最も胃病患者多きや▲常に不平をいふ人▲仕事に飽き易き人▲不愉快に日を送る人▲顏色の陰欝なる人(鈴木胃腸病院長の談)

△子に溺愛る勿れ

愛に溺るゝ母は子供に恨まれる母なりと(大村仁太郎氏語る)。子女は社會の共有にして父母のみの私寶に非ざれば、偏愛に陷る勿れ、と(中島徳藏氏の談)

△果して小説の影響(?)

牛込の藝者殺し田邊某は、始め元田作之進氏に就いて基督の敎を聽き、更に釋宗演師に就いて參禪し、最後に鏡花の小説によつて女の意氣地を學びたりと。

△女學生の靴と衞生

目下女學生間に流行する細仕立の踵尖りて高きハイカラ靴は、支那婦人の纒足と齊しく、衞生上甚だ宜しからずと(三島醫學博士の談)。

△圖書館と女子閲覧者

目下婦人の閲覧者は一日平均二十人乃至三十人にて主に女學生多く、其閲覧書の種類は、小説類最も多く、次は女子に關する諸雜誌、理化學と數學とは百中一二にすぎずと。

▲冷飯はよく消化す

昨年夏期以來麥飯に就て研究を爲し其結果麥飯消化菌たる一種の細菌即ち枯草菌を發見して一時學界に盛名を馳せたる東京市衞生試驗所技師藥學士八木長恭氏は本春更に普通米飯に就て諸種の研究を試みし結果同じく消化菌たる枯草菌を發見したる由なるが其成績に就て一の面白き新發見をなしたりそは何人も炊立てのホヤ／＼飯を好むが普通なるも此の炊立の温かき飯は前記の消化菌甚だ少く漸次冷ゆるに隨つて同菌の增殖を見るべし實は米を煮れば該菌は死滅するも其產見たるスポーレンと稱する芽胞なる者强度の温熱に堪へて生存し其芽胞更に母菌となりて繁殖するなり換言すれば枯草菌の芽胞は米の飯と爲る温度に於ては死滅せざるなり故に冷へたる飯ほど(腐敗せざる程度に於て)消化菌多ければ冷飯を食せし人は消化菌の働きを受けて他の温かき飯を食せし人よりも早く空腹を感ず可しと云ふ。

文苑

夏は都にとの妹に

紫陽花

其後は如何にお渡りなされ候や、異臺の杜鵑聲無くて木隱れに飛ぶ、有繋に此處は凌ぎ難しとには無けれど追ひ〳〵と暑さ相募り候へば、都は嘸と存じ參らせ候。

お婆阿樣御老體の先頃より頻りと朝顏の世話等遊ばされて、毎朝御寺へ御參詣のお歸り懸け脊戶への廻り路しては、此頃漸々二つ三つ咲き出で候花を數へては、大分悦に入つて居らせらるゝ御容子、御運動の御身に適ひてか此の夏は暑さにも負けず、大きに身體が持ち善いと、三度のお食事にも三つに缺かし玉ふ事はなく一同喜び居り候間、御安心遊ばされ度く候。

父上樣昨日御手づから、鯛が釣れしとて、其れこそ惠比壽顏して濱から御歸りなされ、常に無き御機嫌、早速私の手料理にて、葉山椒の香氣高う例の御好物の潮煮、猪口に三つ四つお過し遊ばされて一と時夕餉の膳は賑はひ申し候、斯かる中にも母上樣は其許樣の歸省なされぬを口惜しがりなされて、春は何故に歸らぬのやら等仰せ出で給ひては、心細げにほろりと遊ばし給ふが、外に見奉りてだに御氣の毒に存じ參らせ候、一昨日新田の花江樣御歸省遊ばされしとて今朝程御見えに相成り、其許樣の御傳言の趣き能う承り申し候、お髮は何結びと云ふのに候やらむ、お前髮脹らかに大きく取りて、リボンとやらむ水色淡きがひら〳〵と輕く音輕う御歸りましゝ御後姿の何と云ふ御美しさ、其許樣も嘸かし今頃は都びて、彼樣になられしならむと、異に慾ではなけれど、一目お逢ひ申し度く候。

勉强の爲、此の夏は東京にとの事、其許樣の樣な御氣象としてはさもありなんと御道理に存じ上げ候、其れに今年は別して夏期の講習を利用して英語の御勉强とやら、一旦斯うと思ひ定めて父上も許し給ひ、母上も許し給ひ、私も蔭ながら御勸め致したる程なれば、

世にあらむ程の人は避暑の海水浴のと騒ぎ廻る中をさりとては鐵も熔くるてふ炎暑の都に、御熱心の程近頃嬉しく存じ候。

小人閑居して等は言古めかしけれど、お互に近來暑い時は何かと身體に弛緩の出來て、自省の念にも乏しく、克己の力も弱くなる者なれば、終しか、些細の事より飛むだ間違ひの生ずるは總て夏期には比較的多しとか聞き及び申し候、其れは御前樣に限つて其麽事のあらふとは夢にも存じ候はねど、田舍ならば澁茶汲む間も若葉を渡る淸風の懷中に盈なれど、釣り葱に風を待つ間の堪え難き都の暑さ、浴後の逍遙を月に歸る早稻田邊りの郊外、更け行く儘に未だうら若き身空の稻葉の露に袖そぼち候もやありなんと、世慣れぬ姉が心遣ひは、之れのみに候はず、よしや、其れ程の事はあるべき筈はなしと致し候ても、瓜田の杭の仇し事とのみ人の見流さずば如何に致し候やらむ、主無き宿の女子の獨居、夜更けては秧雞の門を叩くにてすら氣は兼ねらるゝものとやら申し候を、御如才はあるまじけれど女は其邊の注意一番肝要かと存じ候、最早や御聞きか知らねど、河合の三番目の御息子樣にて、慥しか健樣とか仰つしやる御方、昨年の暑中休暇に御歸省遊ばされぬを、親御等は御勉强の爲とのみ思召し居玉ひしに、其の頃惡しき朋友に誘はれしが病みつきとなりて、何とやら今では餘り人前で大きな聲では云はれまじき御行跡、可惜男一人を臺なしにしたとて、御兩親は甚う殘念がり居られ候とか、其れも男方の事なれば今に目の覺める時さへ來れば、二十越してよりの勉强、見む事お手習ひの神樣と迄崇められし例は昔にも之れ有り候へば、其の人の心掛け次第に依つては、隨分幾らも又盛り返しのつかぬ事も此れ有るまじく候へ共、設令迂詐にもせよ、女は一度、一丈の虛、萬丈の實と傳へられなば、もう其れで一生は捨たり者にて、到底浮ぶ瀨の無き闇黑に我と我から突き落さねばならず候。

加之勉强と申した處が高が夏期六十日、寐ると食ふと其外退つ引きならぬ事に費やさるゝ時間は何れ丈と思す、其の殘りの時間にて狹くろしき下宿屋の二階の四

疊牢にて、鉛の熔けそうなる蒸し暑き風の吹くと云はんよりは、寧しろ浴びせられての勉强、健康に障らずば知れた者に候はずや、其許樣から始め學校とし云へば、月々定めの月謝納めて、大勢机に並むで、例の紋切り形の切り賣り的な統一無き、實用には遠き先生の御講義さへ聞いて居れば、其れで學問は上達するものとばかり思し玉ふは大なる間違ひかと存じ候、隨分心掛の如何に依つては學校は旅行中にも家庭の中にも乃至湯屋でも髮結の處にでも、發見され申し候、自然の美



しき天地は、山に水に、花に青葉に、欸乃淡る、漁村の夕曉風露を拂ふ田家の朝、限り無きページを開きて無音の敎訓と智識とを我等に示し居り候に非ずや、三つ兒に淺瀬の譬喩さへあれば、何も一定の肩書き持ち玉ふ口鬚嚴めしき先生で無くとも、我等を導いて敎へて呉れる師は至る處に幾らも之れある可き筈と存じ候。

されば何れの點より見候ても此の夏を都に止まりて勉强し玉はんより、御兩親樣の膝下にて一年苦學の勞をやり給ふの利益を切にお勸め致し申候。

申すも恥かしけれど、姉とは云ひ條、這麼片田舍に人となりて山と云へば蓮華の高きより知らず、海と云へば日本海の廣きより知らず、茄子の葉のうら枯れて唐辛子紅う實れるに秋の哀れを知り候のみなれば、甲に似せて掘る穴の小さき尺度を以て、何もかも知つてお出での筈の其許樣に姉がましい忠告、定めて御立腹の事ならむと今更お恥しく候、之も心待ちに待ち焦れし歸省に逢ひたさの餘り終拗ねても見たく相成候次第必ず御氣には懸けて賜はるまじく、別して此の盂蘭盆には去年死亡り候弟の精靈歸り來るとか申し候事なれば、かたく〳〵以て一日も早く思ひ返して御歸省の程待ち居り申し候。

併し斯く申せばとて其許樣の都合もある事なれば、篤と御考の上然る可く御返事願上候萬づは御目にかゝりての上とかしこ。

蓮

麹町　さゆり

有明の月白う霧靄の森に消えむとして、朝もやながるゝ不忍池畔を逍遙す、睡れむり、醒れむり、詩人いまださめず、たゞうるはしき此の天地に、いまやほゝゑまむとする花と人、はたまた夢よりもあはし。月かげ淡く水に落ちて、瑠璃ちりばめし朝たの霊氣、念を凝して桃蕾の子を羽化せしめむとす。

亂れて浮ぶ蓮の葉の上、つゆに淡紅の色うつくしく、かたき蕾、ふくよかなる花、わづかにゆるぎて、紅蕋を泣り來る風、何とやらむ心の琴線をふるはす樣にて、惝然とたちつくす汀のほとり、想なく、罪なう、汚れなう、自然の大御手にいだかれし今朝、此のあした、心も身も大きくなりし麗しの天地に、知らず、自然や我れ、われや自然。

夢よりゆめに消えて行く上野の晩鐘池に響いて、心に消しうはれてかへれば、東天やうやう白みはたつて、池のかなた農の人、柔きすポン、消えてうすれて、うすれて消えてたどり行くかげ。

おゝ、ゆめまどやかなりし子やいがにしてぞ、あはれ、われドまつ子のある身なりしを。さらば。

さらばゆかんとして、そと、香風にかへり見れば、かのふくよかなりし紅蓮、ポツト音して緑葉の上にゑみぬ。

山里なる友のもとに返し

長崎市　松尾　ま　す

山水の響に世の塵と去り給ひし御あたりの涼けさは覚もる水の音にも蟬の聲さもいか計り興ある御事ならんと團扇持手のしのばれて暫時だに忘るゝひまなく峰の松風心ならはそよとの風の音ずれを俟へてよと思ひめくらし居候處今朝御文もて月見の御まとゐにはた時鳥の初音きかせてんと御言の葉の匂ひに岩間の清水掬ふらむ御心の猶ゆるき此身にもしみ渡りて涼風の一時に吹きくる心地していかて御いなみや申

すべきぞれなくとも此方よりなしても參るべきに昨日迄來客ありて暴ふにまかせず幸今日などはなすこともなく日々の暑さ疎じ居候御仰せの通母にも申聞候處早速の許を得候へば天にも昇る心地の致して候されば只今より御驚かし申さんとは存じ候へ共暑さに弱りはてたる身にはひたすらに道中のしのばれて勇氣の心出難くさりながら夕つ方より車をかりてましらかへに先登第一御門前おとなひ申べく候故其心して御待給ひてよ。

申上度事かず〳〵御座候へ共拙なき筆には反て御目ざわりと相ならむも計り難く候まゝ何も御目のあたりにと申殘し急ぎ御いらへまでかしこ。

日記

相模　廣守千能子

（朝）

朝つとめて床をはなれ手水おへて庭にいづ、あさ露深うして今日の天氣を證しがほなりき、姉上も露しげき芝草を踏みしだきつゝ庭の景色を眺め居たまひき、「いつに似合はぬ千能さんの早きことよ今日は必ず好天氣ならん」とたわむれ給ふもにくし。白桃の花盛なる頃より關に風に手をつくせし鉢の朝かほ今朝赤き紫の花ひらきぬ昨夕かぞへ置きしより二つおほかりきうれしとも嬉し。うら庭にまはり再び表庭にきし時はあさ露なごりなう晴れ渡りて日光は今夜の幕を開きていで玉ひぬ、まはゆき計の光線は泉水の波を金色となし白百合に宿れる露を黄金の玉と化せしめて、目もくらむ心地しぬ白き衣着て泉水の側にはちすの花もちて立ち給ふ姉上は天使のやう。おぼへき。

（晝）

學校より歸宅するや、直ちにハンモツクもちて程近き森にゆきぬ、百年餘をへたるてふ祖母君ののたまひし楓の林の心地よき樹をえらみて、それとこれとに釣床を渡して今日の歴史を復習しはじめぬ。一としきり吹きくる風は冷やかに身にしみて、梢の蟬をおどろかし一心に讀書しぬ、突然叢に何物かとび入りしにおどろきてさけばんとせし時、とび出せし物そは蛙なりき。かたへの樺の下枝にとまりてガツカと一聲なきぬ。頭をよぶかにくらしの青蛙よと見るまにしげれる雜草の中にかくれぬ、こずゑの蟬は一きは高うかしましく我の怠りがちなる讀書をあざけるか如くなき出しぬ。

（夜）

夕飯おへて風呂に入り浴衣の袂かろう凉しき風になびかせつゝ、今し山の端をはなれし月をみるべく裏庭にいでぬ、遠近の道よりは農夫の野良がへりならん、ひな歌のふしおかしう、浮世ばなしの隣の翁や太きだみ聲もまじりてきこえぬ。暫し氣付かでありし程に月は中天に淡き光をはなち居たりき。星は無數の銀砂子をまきしやうかゞやき出ぬ。月の夜は何物も美化せしむるものよ、庭におちたるガラスかけも月の光にダイヤモンドかとうたがわれぬかの野口米次郎氏の日本少女の米國日記の一節なる

我が天子樣に女は月下の外は外出すべからずと宣言していたゞきたいのですよ。の言、實にうがちたる言と思はれき。

母屋の方にあたりて、弟妹の聲きこゆるは螢がりよりかへりしならんと名殘をしき月をみすてゝ立上る時妹はかごさげて走りきぬ。夜もいたく更けたればとの母上のみ言葉にしたがひ。とらへ來りし螢な

蚊帳の中にはなち、明朝咲くべきあさがほのつぼみをかへつゝ床に入りぬ。

なき友

土佐國　倉石藤子

君去りて既に一月、思はまさる梅雨に何を光りの我身ぞや、いかに神のめし玉ひしとはいへ、み心強うもたらちれのみ親にまで別まして、情無もなう類なくろう〳〵しさみ姿を、あの冷き、冷き石に下に。雨の日風の夜淋しとおぼしたる事なきや。

才は秀で想は高く、紅筆の少さき命毛いとするどうおはせし君、友といはんも餘りにおそれあるを、まして妹などゝ、愛らしきにまかせて口によべば笑ひて答ひし其かみの戀しさ、なつかしさ、許しませ只一つの年上を頼りにさる事も打出でしを、思へば恥かしき業なりしよ。なめげなれど忘れがたき御目なざし、座には開くまじき御硯、ともすれば研墨迹ふこきまゆのほとり詩興ほのめく御傍の偲ばれて、又も御寫眞取出せば片頬に御ゑくぼのあと淡く、お召さへお好みの越路上布、さながら對面參らする思にてみまかり玉へしは夢の様にも思はれぬ。幾度か取りては眺め、置きては眺め參らせば、再び嘆きのくり返されて、げに此匂やかなるおぐし髻に結びかへ給ひし後ならんには、母上樣の御愁傷も少しは淺からんものを。たえかれてみ空仰げは、熱き涙徒らに落ちて頰を傳ふて。

秋は來ぬ

名古屋　小山かく子

秋は來ぬ。曠野霧立て澤越えて、緑の森を經廻りて、青田の中をさまよひて。

秋は來ぬ。園の葡萄に林檎、栗の肌までそとあげて、思ひのまゝに彩色て。

秋は來ぬ。緑の上衣かいやりて、木の葉の裾をさと投げて、錦の紅葉着せかけて。

秋は來ぬ。尾花苅萱おし分けて、蟲の心をそゝのかし、思ひ〳〵に歌はせて。

少女の質問

長野　神津ます子

(一) われに一人の妹あり齢は六つのちご櫻花の顔面かぐはしく月の眉の高尚きは天つ乙女の化身かもあなうるはしき花少女。

(二) 花の少女は昨日しも我袖引きて問ひけらく姉よ現世の人皆は誰が造りしぞいぶかしや敎へ玉へと問ひにけりあな無邪氣なる花少女。

(三) 神よとわれの答ふれば神はかしこに居ますかや會ひ見まほしと夕暮のり靄める空に圓々と輝く月をゆびさしぬあな可憐なる少女かな。

夏の夕

横濱　井上よし子

涼しき風にさそはれて、七里の濱の砂行けば、絶へず磯打よせて、心ありげにさゝやきつ、月もそやかに打出て、波にきら〳〵きらめきつ、沖には波のつと高く荒れて怒れど磯邊には、かく面白く歌ふかな。

夏の夕ぐれ

愛媛　珠川明子

神のしらべか玉琴の、音すゞ風にさそはれて、あくがれいでし道すがら、

野ばらの露ぞちりかゝる、秋ゆふぐれのすゞしさよ。
女神のすそかくちなしの、ゆふ日の影もかくろひて、かすゞみなせる大空に、三つよつ星のかげ見ゆる、この夕ぐれのゆかしさよ。

姉は花賣

長門　三宅良子

筧の水を手にとりて、　髪のほつれをそと撫でゝ、
白い袂に笑の顔、　かあい妾の姉様が、
露しどゝの畠畑に、　朝風清く立ち入らす。
鋏の音も冴え／＼に、　黄菊白菊菊の花、
色種々の花の束、　大束小束中の束、
露の小片を口にとり、　玉の腕〃め給ふ。
意氣につまみし裾のふり、　草鞋に碎く玉の露、
川添一里京の道、　草分けたまふ姉様が、
小唄涼しき朝月夜、　小唄涼しき朝月夜。

花うた

麻布　勳子

一、緋あほひ

眞紅にもゆる花びらの一瓣ごとに包むかな、
明しかれたる思ひをば文の代りと贈りてし。
雨をうけし窓の外にそよつと囁むや忍び音は、
雁の便りのそれならで心をあかす緋あほひの花。

二、美人草

花の王とぞ呼ばれける姿やさしき美人草、
風にたえたゞすまひあはれ床しきものぞかし。
唐の楊貴の愛でしとかきこそありなん斯の花の、
一日ばかりもすぎ行けば土にかへらん命なり。

夏季休業

埼玉　宮倉稻子

汽笛の音をきく每に、　をよびをりては數へつゝ、
學びの庭に花つめる、　いとしわが兄の夏やすみ。
かへりくるまの響きかと、　都のそらを眺めては、
嗚呼なつかしや待久し、　とくかへりませわが兄の君よ。

短文

（天）小袖

千葉　小永井穀子

お友達の誰さんも何子さんも明日觀菊會へ行き給へど私は美しき衣のなければ明日は行きませぬと又例の妹が最前聞くもつらしと心痛の末三とせ前亡き數に入り玉ひし母君がお小袖の表裡替慘憺漸くこゝに妹が明日の衣服は仕立あがりぬ折柄妹の來て見るより嬉しさうアラ姉樣何時こしらへたのと云ふたが又「これ母樣のれー」と涙ぐみぬ。

（評）人情の琴線に觸れて、こゝに微妙の聲を發す。

（地）口と心

河内　田中八須子

今日は御絶し被下との事で、母も妾も待ち焦れて、先程より二三度下女を迎に遣はしました。マア能くこそ御出くだされましたと横で庭掃く春子さんの御世辭臭には慌しく戸を開くる音、庭掃ふ音が聞へた。

（評）罵し得て痛快、頗る時弊に中るたゞ誠心もて世を渡るもの幾許無かるべし。

（人）陰德

栃木　玉野とし子

越後縞といとも大きく染め出せし風呂敷を、背に負へる行商のお方でありました、伯母が家の稲田に一群の雀が集ひ居ましたのを大聲出して追つて下すつたのは、……

（評）時間があり、曲折があり、短文中に何とも云へぬアドケ無い面白いところが存じて居ます。

花ちやんの日誌

北海道　大須賀久尾

うつくしかつたバラはもー散つてしまつた、私はどうしよーかと思つたの、そーしたら嬉しいわ、今朝私の大好きな朝顔が一ッ咲いてよ、今朝は白いのが二ッ紫が五ッ咲いた、ア、嬉しい、と今年十歳になる妹花子の日誌です、あれ、この花子もいつしか成長してこの無邪氣な日誌を戀しく思ふ時があるでせう。

（評）時間の力偉大なるかな。

影法師

島根　淑子

杉樹は黒く長く地に陰しゆるき風は何處ともなく森の香を送つてくる向ふに小さな黒い影法師が三つ四つ追ひつ追はれつ影ふみあひつつかけてゆく。空にはきれいなお月樣がニコニコして雲から出たりかくれたり。

（評）景中の清寂、斬新の意匠。

妹!!!

神奈川　廣守千能子

眞夜中頃、フト目さめぬ、側の妹はと見れば寝間より這出て、胸のあたり冷やかに……驚きて起さんとせしも、安らかにねむれるを目さまさんは……とて風など引きたらんには……夢破らんか……如何せん、顔見れば、すや／＼と心地よげに……。

緑の前途

岩代　岸野常子

朝霧の窓を開けば、青き草、緑の木、青き丘、緑の樹蔭、それらは遠く、近く、高く、低く、淡々たる夏の世界を蔽うて居る。あゝ生々した淡白な希望を示す其色―妾はそれを見るたびにそゞろ緑の前途を聯想して、云ひしらぬ感興に耽るのである。

（評）緑の前途、或は荘厳なる暗翠に赴くか、或は零落せる枯黄に歸するか。

幼兒

姫路　後閑八重子

誕生過ぎしばかりの兒のすや〳〵眠りて何夢むらむにこと笑みたる、三歳にして姉なる兒の泣く弟を賺していたはる片言、乳母に負はれて神の御前に行けば手を合してながむなど、そのめぐしさ美しさ。

（評）平凡の想なれど、イナシなき書きぶりなり。

名のみ女子の投稿者の爲に

能登　栗倉一子

男は男らしきこそ宜けれ、常に婦女風の文章にのみ耽けらば軟弱の人となる様にぞ思ふ、男子は意氣衝天即ち東湖の正氣歌的のものを讀み或は作り給わむこそよけれ。大日本帝國の未來を思ふ妾の婆心迄、かくは。

思ひ出の曲

尾張　井口とよ子

私は今靜かな夕暮の窓によつてヴアイオリンにて「夢」の一曲を奏したのである、思へば三年の昔私は月清き夕の襖に立つて兄上の吹きますハモニカを調合せたもあわれ此曲であつた、けれども其兄上は青春の齢を負ふてあゝ遂に……月は今しも雲間から美しい姿をあらはしかけて居る。

（評）宛然一幅の月下懐古の圖。

漁士の娘

大阪　加藤秀子

親一人、娘一人、何處なりけむ遠々と、霞める海を前に控へし漁舎に詫しくも暮し居りしが、その親漁業に出る時は、十二の娘は闇き夜を獨り襲つ、寂しき日を獨り暮せり、斯くて父なる人業を終へて懐しの岸に歸る夕、そこに彳む娘の姿を見て「初」と呼びつ櫓を早めて波打つ際に近けば、娘は舟に飛び入りて、無事にお歸りお父さんと、泣入るを常の如くになせりといふ、あはれ深からずや。

テニス

新潟　古澤ふさ子

一、二、三の呼聲勇ましき。こゝ我校のテニス會今度こそはと勢込んで打ち出す玉は見事味方は大勝利、折から青葉蔭もる涼風に。かざせるリボンの揚々と舞ひ上り。暫し頭上に。テフ〳〵を戰はしめぬ。

（評）讀むから勇ましく、身其境に臨みし心地こそすれ。

栗拾ひ

[illegible]　中村薫

君ちやん壽ちやん等と一所に栗を拾ひ枯葉を集めて燒いて居ると栗鼠の男の兒達が占領と呼んで攻め寄せるので妾達は堪まらず、其所を立退くと後には敵を驚かす栗の破裂三つ四つ續けさまに……

嗜!!!

愛媛　河野春子

「ボルトー」とラツケツトを振りし其刹那。友の袂より落ちし寫眞一葉―友はいそぎひらひあげきまり惡るげに微笑つ、「これ兄さんの寫眞よ。」と……妾は心の中に泣きぬ。

（評）活潑なる運動の中にも、自づからなる一片のやさしき處あり、⬤ひがたきは女なるがな。

蚯蚓のちゑ

神奈川　廣守千能子

暑い日、一疋の蚯蚓、己が住穴より出でゝ散歩しつゝありし時叔ち無數の蟻よき糧物こそと集り來りて喰ひ付き烈しく刺しぬ、刺されて蚯蚓は痛さに堪へ兼、とびはねしに畑に落ちぬ、畑の中に一の少さき穴あり、蚯蚓は叔ち脱兎の勇にて突入しぬ、見る〳〵中ば土にかくれ終りぬ、蟻は遂に敵し難くなりてか皆ちりぢりに逃げうせき。

（評）面白き叙事。

方向變換

姫路　船戸幽規子

ひるねて居る弟の顔に墨をつけ様と妹が大きな筆に墨汁をたつぷりふくませて……將にといふ一刹那南枕は西枕に變じた北に東に南に西に幾度となく危機一髪の瞬間に……かくして妹がいさゝか大ふでを持餘した時分寢て居ると思つた弟はムツクリ起き直つて「へゝゝきみちやん大分疲れたれ」……

（評）滑稽。

雨乞

石狩　尾崎雪子

ひと月前から雨が一滴も降らないので田や畑の面は見るかげもなく打しほれて居る遠くには村社の雨乞たいこが夕雲にひゞいてどんどんと聞える……此の春妻が隣りの露子さんから貰いて植えた薔薇百合の花はうらめしそーにうなだれて居る天の神よ惠の雫を……臺所から「おや向ふの山が曇つて來たよ」

（評）畫題目、新文字。

悲しき今宵

福井　しげ子

月影清く窓にさして病苦に衰へたまひし母君の御顔一層青く悲しさまさる折しも重き頭をもたげ給ひてわれ亡き後は幼き弟妹の養育頼むぞといきもたへ〴〵の給ひぬ、せきくる涙よう〳〵おさへ露御心にかけ給ひそ如何にもしてはぐゝみ申さんと答へまつりしにうれしげに細き御手をのべ妾の手をしかと握り給ひつゝねむるが如く遂に死の神の御手に今宵はじめて知る浮世の悲しみを。

華分小舟

肥前　嬉野登子

月をあびつゝ濱より歸りますいとしの夫君いで迎ふれば今更乍ら涙ぐまるゝよ、こしぎれの衣にわらの胸あて背に籠る今のみ姿、みづからやつし給ひしものとはいへ、あゝ春や昔我が嫁ぎし頃は世に名も高かりし新文士の君、今は世をすて筆を捨てがい一挺を友の漁師殿びく重たげに笑をふくみて我を見給ふは今宵のえものや多かりし、せなるおさなごは早や眠むれり、み空仰げば月は高く清くかゞやく。

和歌

（天）題知らず　越後　坪井わか子

なる神ははるかに過て夕立の名残とゞろく谷川の音

評。驟雨霽後の景見るが如し。夕立の名残霽後の雷轟くと云ふ、谷川の水かさまさりたること知るべし。

（地）渡船中にて　河内　奥　幾江

急がるゝ心もしばし舟人の棹にまかする淀の朝川

評。淀川の朝景色が得も言はれぬ様なること、言外に明か也。

（人）失題　三重縣　服部うた子

呉竹のすぐなる道をたどる身もなほうきふしは逃れざりけり

評。世を憤る言なるに似たり。殊に修辭の巧を見る。

秀逸

○○○秋のうたの中に　大阪　やす子

秋ののにおもひあまりてなくむしの心はのべの露やしるらん

雅調の妙至る。

○○○蟲　美濃　山田愛子

ねたる兒を母にわたして衣ぬふ夜寒の窓になくきり〴〵す

秋思題ふに餘りあり。

△○○蓮　鳥取　紅椎

にごりなき心を花に咲きいでゝ匂ふはちすの清くもあるかな

心をも曰ひ花にも曰ひて、語意自ら新。

△○○朝顔　みち子

さきかへてまたさきかへて朝ごとにいろます露の朝顔のはな

盛り久しきの意ながら、語自ら陳ならず。

△○○電　大阪　須磨子

夕方の天津日の神とかくれてエデンの園にかぐらみたるゝ

奇想天外より落つるもの歟。

、○○題知らず　上總　齋藤やゑ子

よもやまのはなしに暮れて呉竹にいつしか月のかけさやかなり

句法の妙を見る。

△○○失題　麻布　田中澄江

村すゞめ驚き立ちて小山田の鳴子に殘る秋の夕かぜ

嘗て歎ふて「群雀羽音せはしく立ち行きて鳴子に殘る竹の風かな」と曰ひたるものありき。意は同じと雖、修辭の妙は、此歌勝れり。

、○○立秋蟲　攝津　碧水女史

草ふかき那須野の原に秋たちて人まつむしの月になくなり

亦雅調の流麗を以て勝る。

、○○秋の歌の中に　名古屋　世鷹子

吾背子は未たかへらす小夜ふけて衣ぬふ窓を雨たゝくなり

情思自ら深きを見る。情致秋の題意確かならず。

、○○朝川　岡山　田上濱子

朝日かげ登らぬほどの朝川や夢のゆくえと白帆ながるゝ

奇想。

、○○失題　越前　島　萬壽子

すが〳〵し朝もうでするうぶすなの宮居の森のまつかさの聲

、○○折にふれて　麻布　清　泉

端居していとし子中に初戀の昔語ふ夏の夜の月

團欒の狀躍若。

、○○女郎花　福知山　佐藤けい子

たゞ見ればそれともわかぬ女郎花色めく野邊の花としもなし

如何にも然り。

、○○迯題　愛知　ますみ

思ひなやみ小窓によれば夢の如蟲の音すなり月淡き宵

哀意多し。

、○○鹿　足尾　森　照野

花づまの萩に心やひかるらむよひ〳〵さなくさをしかのこゑ

清婉。

、○○柳陰釣　香川　吉田　鋠

青柳の糸たれこめし川岸に夏をよそにと若鮎つるなり

凉味可掬。

○○失題　大和　西尾敏子

賤の男が家路の足もとまるらん夕月低う萩みだれ咲く

景趣の面白さ、賤の男さへも足を留めむとす。

況や詩情に富むの才媛をや。

、○○夏月凉　佐賀　野方常子

夏もなほ露にや秋の通ふらんすゞしくすめる夜中の月かげ

秋の空に通ふとは面白し。

○○折にふれて　姫路　後閑八重子

影ゆらぐ小萩が花を露ながらさやかに見する秋の夜の月

秋月の明知るべし。

○○水鷄　熊本　安田文子

月を見て心晴れゆく夏の夜になになくゐなの鳴きしきるらん

亦面白し。

佳調

秋風　兵庫　柳田白百合子

むしの音は身にしみ渡る心地して撫衣さす秋の初風

故鄕萩　愛知　清水操

とふからに袖ぞ露けしふるさとのむかしながらの秋萩のはな

月蟲　淺草　春江

露毎に月は宿りてさながらに玉をまろはすむしの聲哉

海邊月　京都　四辻清子

うつくしき言葉の玉もひろはなむ月すみよしのうらつたひして

かやり火　小倉　楠瀨とみ子

夕月もはやかくろいてかやり火のけむりにくるゝ道の一むら

夏花　下野　金戸貞子

賤の女が糸くるやとのやれ垣に咲くもやさしきをだまきの花

迯題　越後　菊子

のせばのる此世とぞ思ふ地球圖を繰りひろげて手のひらの上に

夏の夜　京城　久米しげ子

夏の夜はしづかに更けて水晶の月の宮居の人なつかしき

○　上總　成河きよ子

四阿やゝ寞げにはべる女藥師が黑塗な吹く八月の風

山夕立　　仙臺　渡邊作子

山の端は夕立すぎてすゞしくも見るめにかゝる虹のかげ橋

○　　大阪　田中常子

父まさば母いまさばと人のいひてわが身褒むれば涙し流る

夏の朝　　伊豆　佐藤初子

手洗へば濵ゆらぎ寄る朝川邊藻の花白く蛙浮きたる

秋蟲　　長野　松林みい

戀しきかはた嬉しきか秋の夜のくさむらになくの蟲心は

早萩　　神戸　脇屋登美子

わが庭の一本小萩笑み初めぬ秋の女神やよびさましけむ

羇旅　　伊豫　熊谷友枝

故郷は海山隔遠くつとも波風もなし夢の通ひ路

立秋　　京都　西澤まつ子

宇治川の川波白く秋立ちて隅の芝に松風ぞ吹く

○　　長野　すみれ子

さやかなる月の光に槇屋の戸をとざし寝たる秋のよはかな

題しらず　　河内　田中八須子

道つれに端なく語る縁より音つる人と今はなりにき

又ある時　　筑前　木村こま

いとし子がかたみの衣身にそへて添乳の夢をしはしむすはむ

○　　姫路　船戸ゆき子

水打ちて小庭涼しきこの夕蟬の鳴く音も聞き心地よき

折にふれて　　安藝　松坂梅子

わけゆけば蟲のれたへん鈴りとて我やなそきと君はまつらん

○　　京都　吉川淺枝

夕風に眞萩こぼるゝ山の井の井げたの下に鈴蟲のなく

父母を失ひし友をとひて　　肥前　嬉野登子

父もゆき母もいにしと泣く友をいたわりて泣く秋の夕暮

鈴蟲　　長野　松林みい

野邊になく此鈴蟲を玉くしげ箱庭にこそ入れまほしけれ

水鶏　　大阪　奥野重子

よもすがら來てはくゐなの敲くなり月のさしたる芝のいほりを

野夕立　　攝津　奥野槇子

夕立は野つかさちかくすぎゆきぬひかげを杜の松にのこして

題しらず　　伊豫　渡邊梅子

萬代とうつやつゝみの音たかくたちまふそこの豐かなるよや

○　　福岡　丹馬こう

浜よする磯松の枝に隔はれてなく音涼しき日ぐらしのこゑ

あしたの菊　　長門　三宅眞子

菊畑に露ふみ給ふよき人のびんのほつれに朝風淸き

○　　長野　一陽女子

古井戸の側板くちて柳やせてあるじなき家に秋の風ふく

海の夕　　肥前　貞方なか

たゞびろき海原遠く黃昏れて帆影徐かに靄に消え行く

洪水　　下野　高鹽かつ子

うねり〳〵八谷八山をくるひつゝ大蛇が行くと濁流ながる

朝顏　　小倉　林とみの

うれしきはうき世の事の始とやさきそはしぼむ朝顏の花

逃螢　　伊豫　渡邊梅子

この夕こゝに涼むと語らひし友や今しとまつ風の里

懷舊　備後　立神峯子

亡き姉に似るとしきけば朝毎にうつす鏡のかげも戀しき

瀑　和歌山　山縣くに子

久方の雲井にさらす布引のたきのしら糸むすびてや見ん

○　陸前　山形幸子

三層のおばしま寒き湯の宿に高根はなるゝ月仰ぎ見る

萩　横濱　杉本芳子

こゝもまた萩やみだるゝ野の小道ふれなば露の玉やこぼれて

閨中うちは　新發田　秋若葉

ねやの内にうちはの風を通はせて堪へぬ暑さをさくる夜半かな

蟲　宇都宮　松元のぶ

つまごとのしらべもたかき月かげに聲ふりそへてすゞむしのなく

折萩　神田、及部峯野

家つとに一枝はゆるせなく蟲よ母がめでつる秋はぎの花

○　麹町　よし江

花嫁は愛の香薫る絹夜着にやさ夢つゝむ梅の朝かな

月下感想　神戸　今西操子

懐しさもいとゞ増すなりさやかなる月に向ひて物思ふ身は

○　岐阜　安藤光代

あすは野の煙と消ゆる姉上の通夜する夜半よせめて長かれ

○　金澤　大町みやの

胸おどる白刃ふくみて夜の五更宮の大樹を呪にけづる

○　上野　豐田とよ

登昇る月の光りに雲かくれて露を命と蟲やなくらむ

湖上秋　岩代　岸野常子

時雨めく雲の色かなし琵琶の湖堅田のあたり雁なきおちて

夕涼風　安藝　中野ちゑ子

汗流す天女の肌をゆるう吹きて柳にからむ夏の夕風

秋夕　京橋　高宮安子

そよと吹風身にしみてつく〳〵とほかめわびしゝ秋の夕ぐれ

夕顔　牛込　影山たみ子

月くみて里の小川に米洗ふ手もとに匂ふ夕がほの花

○　麹町　さゆり

うたはむに琴柱つめたき雨の日やすゝきみだれて小萩こぼれて

折にふれて　無名女

をだまきのむかしを今にかへしつゝあはれつぐる山ほとゝぎす

○　大阪　山崎京子

十年振わが故郷の月を見て思ひに堪えぬ秋の夕ぐれ

蟲　前橋　宮内りき子

露にふす蟲の音近う聞ゆなり今年の秋の夜もふけぬらし

雨の夜中　山口縣　さと子

その昔いとれもごろにおそはりしときじく覺ゆ雨の夜中かな

夏菊花　群馬　あきの

人とはぬ荒れし山家の垣根にも一もと咲けり夏菊の花

海邊の月　信州　赤羽まつ子

こよろぎの磯への月の影ふけてしほたの衣さむくなりぬる

同窓會をことほきて　新潟　植木梅子

ことし生のわが窓もましる窓の竹今よりしろく見ゆるおひさき

當世ものはづくし

▲騒がしきもの

、、◎消燈の時を刻む音　岩代　佐藤松子

◎悲しい時の笑聲　牛込　すみ子

◎長屋の井戸端に子供集ひたる　奈良　池田たれ子

、、〇トタン屋根の夕立　紀伊　川俣たれ子

〇發車時刻のプラットホーム　大阪　きく子

〇夜店の夕　神戸　鳥屋とみ子

〇トタン張の家の雨の音　芝　新野壽枝

、、電車の値上事件　岩代　齋藤初枝

、、下手な音樂隊　信州　北澤かつら

、、〇かしましき女の集ひたる　四谷　木村美智子

、、だゞッ兒の金盥　神戸　鳥屋とみ子

、、魚市場の朝　大阪　岡崎新子

、、鷄の共鳴と猫の戀　下野　齋藤まつ子

、、夜店の金棒引　甲府　梅月女史

、、國會議員の總選擧　岩代　齋藤きみ子

、、讀書する時の蟬の聲　東京　花野露子

、、犬の喧嘩　岡山　藤原學

、、ブリキ屋の隣　近江　京極文子

、、下手な樂隊　芝　宇敷英子

、、人中に掏兒の發見　大阪　北谷みよ子

、、婦人會の旅行演習　名古屋　鈴木明子

、、學校前の電車道　西大久保　大山貞子

、下女の井戸端會議　神田　つぼみ女

、淡路の美人の話　函館　龜井綠子

、露國の革命黨　京都　渡邊郭公

、料理屋の二階　安藝　堂園幸子

、軒の高き人　常陸　中嶋あき子

、耳もとの蚊　信川　北澤かつら

、赤兒の泣聲　名古屋　仁村靜枝

、雷　埼玉　すみ江

、現今の露西亞　越中　夏野ゆう子

、田舍の芝居場　兵庫　服部蝶子

、火事場　栃木　岸けい子

、勝力士へ聲がゝり　三春　大田擧子

、繁昌な商家　秋田　琴子

▲長きもの

、、◎ゆるき樽壁に殘る一すじ　神田　桐藤秋子

、◎總領息子の嫁詮議　備前　樋口はき子

◎豫約出版を待つ間　鳥取　横山龍子

〇嫌いな學科の一時間　神戸　鳥屋とみ子

〇決斷力のなき人の思案　大阪　瀧山千代

〇小田原評定　芝　田中むら子

〇切らざるにうめん　岩代　佐藤松子

〇一人留守居の日　埼玉　小林園子

○知らぬ山路を一人旅　兵庫　服部唯子
、、未　來　名古屋　仁村靜枝
、、支那煙管　大阪　白ばら
、、入日の影法師　大阪　落合はな
、、嫁ぐ前夜　長州　一子
、、下手の手紙　富山　岩木靜嘉
、、忙しき家へ使に赴き答を俟つ　岩代　なを子
、、大阪の築港事業　大阪　中西みさ子
、、人體の大腸小腸　筑前　濱田常子
、、醉人の話　岩代　豐川しん子
、、支那服の袖　德島　椿子
、、夏の日病床に暮るゝを待つ　同　濱田あい
、、朝鮮人の煙管と法性寺入道　滋賀　藤澤きく
、、八丈島の婦人の毛髪　廣島　富井屋鈴香
、、老人の夢　兵庫　武木みち
、、ハイカラ嬢の御化粧　豐前　てる子
、シベリヤ鐵道　近江　服子
、鼠の尾　廣島　富井屋鈴香
、西洋人の結婚衣　紀伊　一少女
、道樂息子の鼻毛　麻布　秋女
、支那人の頭髪　京都　掛野歌月
、日米海底電線　甲斐　矢野千代
、日本の地形　富山　岩木靜枝
、婦人洋服の袴　越後　坪井わか
、日米間の海底電線　大阪　新保わか子

、姑の繰返したることゝと　島根　せきちく
、萬里の長城　大阪　山中園子
、書生の羽織の裾　伊豫　熊谷友枝
、待人の來ぬ間　常陸　中嶋あき
、日本國中の電線　新潟　小杉つた
、手紙の返事を待つ　韓國　南林とや子
、里見八犬傳と源氏物語　小樽　椿きみ子

▲あはれなるもの

◎自己の姓名をも書き得ぬ人　神戸　小林竹子
◎抱かれた子の喪主　岡山　土屋かをる
◎踏んで骸にした雛鳥　周防　くちば子
○老人の盲目乞食　岩代　浦田光子
○不具者の母無し子　大阪　村山政枝
○妻に姦通され自殺せし夫　麹町　黒川かほる
、、母の墓前に花捧げたる少女　兵庫　武木みち
、、癩病血統の美人　大阪　すみ子
、、朝鮮の慷慨家　同　中西みさ子
、、軍人の失明者　岩代　中瀉華子
、、財産ありて兩親無き　大阪　山内米子
、、苦學生の病に困りて落第せる　京都　なにがし
、、肌寒き夜捨子の泣聲　佐賀　橋本流子
、、男の乳貰ひ　同　橋本よしゑ
、、妻の嬰兒を殘して死せる　大阪　森英子
、、孤兒院の全燒　札幌　片岡たか子

、、年若き未亡人　岡山　桑野とし
、、波蘭人　大阪　百合子
、、殿方の自炊　川崎　みつゑ
、、霜枯し尾花が末にすがりて鳴く蟲　不詳　館路子
、、秋の夕の鐘の聲　京都　掛川歌月
、、十七歳にして貞操を守る未亡人　麻布　秋田女
、たよりなきみなしご　伊豫　熊谷友枝
、軍人家族の家督爭ひ　奥　近藤千代
、落花　廣島　富井原鈴香
、凶年の餓爭　本所　山田濱子
、親も兄弟も死にはてゝ　安藝　雪子
、ひどい姑持ちし嫁　豐前　てる子
、遺族の内幕　岩代　齋藤初江
、男子の甘言に誘惑されし女　近江　照子
、初瀬後家　芝　新野露村
、精神上の不具者　四谷　桑みち
、精神病者　京都　郭公
、ステッセルの末路　豐前　渡邊さだ外三名
、石地藏にすがる秋の蝶　鶴島　本庄笑子
、貧しき中のもてなしぶり　盛岡　高山あい子

來月の課題

▲腹の立つもの
▲小さくて侮どれぬもの
▲わけのわからぬもの

前回に「あはれなるもの」等には誤解されたる人多かりし故、今回はいづれ平易に通俗なる話題を選べり、たゞ答案は平凡ならず通常ならざるを望む。

謎々

「月見」、「南瓜」、「女子の判任官」とかけて

一等

▲女子の判任官　京都　山本貴鶴子
伊達の將校」と解く、心は「いよいよ佩劍(女権)」

二等

▲月見　本所　山田なつ子
夜店の國扇買ひ」と解く、心は「あふいでみる(仰いで見る)」

三等

▲南瓜　大阪　中西みき子
老朽の月給取」と解く、心は「蔓にぶらさがる

▲女……樺太探檢」と解く、心は「近藤(今度)が始め　四谷　島田愛子
▲南……厳島の合戦」と解く、心は「元就(本實)がよい　上越　川上あい子
▲月……辨慶と牛若」と解く、心は「橋の上で太刀(立)會ふ　堺市　蝶子
▲女……貞妻の心がけ」と解く心は「貞心(通信)に始まる　四谷　木村みち子
▲月……日本三景の一」と解く、心は「安藝(秋)になり　京都　山本貴鶴子
▲月……飲用水」と解く、心は「澄みて清きがよし　甲斐　矢野紫代
▲女……修身の講義」と解く、心は「貞信(通信)より始まる　岡山　土屋霞

▲南……「全國の蝙蝠」と解く、心は「皆臭實(南瓜)」　野邊地　長束きぬ
▲月……「妹より來た手紙」と解く、心は「故郷を思ひ出す」　京都　奥村ます子
▲月……「樂隊居」と解く、心は「苦も(雲)なくしてよし」　越後　坪井わか子
▲月……「膽掃除番」と解く、心は「雲(蜘蛛)がくればいやがる」　佐賀　橋本よしゑ
▲女……「商家の番頭」と解く、心は「忠實と經驗とで成る」　大阪　山本米子
▲南……「金ばなれのよい旦那」と解く、心は「女に好かれる」　兵庫　大竹きく
▲月……「下手な射撃」と解く、心は「打てん(雨天)かと氣遣ふ」　岡山　田中安子
▲女……「東國の國會」と解く、心は「此度が始めて」　丹波　藤井静子
▲月……「燒芋屋」と解く、心は(箸で突きみろ、)横で月見る　名古屋　加藤すゞ
▲南……「仁德天皇」と解く、心は下情(下女)見て喜ぶ　豐前　渡邊さだ
▲月……「近頃の煙草製造」と解く、心は閑靜(官製)がよい　丹波　赤見坂なみ子
▲月……「猫」と解く心は「暖國で(團子食て)見る」　韓國　桑原てる子
▲女……「儒教の祖と解く、心は「嚆矢(孔子)」　山口　奥田れい子

九月の課題

▲栗　▲新婚旅行
▲論功行賞　〆切九月十五日限り

一口ばなし

▲　東京　武久清子

おでこ「女子と小人は養がたしと昔は云つたが、今は女子でも判任官となれる事になつたからね、」ちやり子「でも判任官(半人官)だからまだ一人前にはなれんわ、」

▲　甲府　東濱

母親「アノ花屋の花は何時も高くていけない」兒「アレおつかさん、色々の事を仰つしやつてよ」母「ナゼカへ」兒「デモ先達花屋の鼻は大へん低いと仰つしやつたわ」

▲　岩代　とし子

アル町人通行の巡査に向ひ、今罪人が行きましたと云ふ、巡査「何處に町人「あの人です、」巡査「直ちに罪人の所に行き貴様は罪人かと問ふ、いや私は町人ではありません在人です。

▲早合點　京都　栗原はな子

鐵道工夫二人立噺し、あの踏切迄の(バラス)いつ敷くことにしようかと噺して居りますと、傍らに聞て居りました田舍の老爺世の中も段々開けて汽車道も(ガラス)になりますか。

▲下女の話　岐阜　酒井とみ

おたけ「此家の奥樣はぜいたくだわね」お梅「贅澤どころですか、ごくのけちんぼう、毎日小ごとばかり言ふて本當に困るわ、」おたけ「だから贅澤よ毎日膳て(怒て)ばかり入らつしやるから。

▲短氣者　堺市　平野靜子

下男この頃御近所の人が旦那樣の事を盆と正月じやと云ふて居ますぜ、主人「ソリヤ其智ぢや、盆と聞いたら正月迄の用意なちやんとしてしまうからじや、下男「イエ、餘り短氣なので中学道(中氣道)といひますのじや。

家庭科學

藤　葉

◎白水の利用

多くの家庭で我々に第一番に必要なる米に就て餘り多くの注意を拂つて居ないのは誠に不思議であります。

まづ如何なる家でも大抵日に一度は米を磨ぎますが其時に出來る白水は大抵捨てゝしまひますけれ共、之れは不經濟な話で、何でも家事經濟に重きを置くべき今の時勢には廢物利用と云ふ事が最も必要で、此白水も利用すれば色々の事が出來ます。

先づ第一に此頃の樣に洗濯を澤山しなければならない時には石鹼や、ソーダの外に此白水を用ゐますと白地の着物や、シャツの樣なものは極く適當して居て地が白くなつて、地質を痛むる事が少なくて非常に重寶で有ります。

夫れから料理用に應用すれば牛房や、筍を茹でるには米糠を少し入れると大變に早く軟かくなりますが其糠の無い時には白水が立派に役に立ちます、糠味噌を新しく拵へる時には此白水と鹽とを一所に煮立てゝさまして交せますと早く熟れる事は皆の知つて居る事であります。

又素燒にした魚を煮びたしにする時に白水で茹でますと之れも大變軟かになります。

まだ其他には追々園藝と云ふ事が盛になつて來て婦人方も自ら手を下される樣になつて來ましたが、草花にしても、野菜にしても是非肥料をやらなければなりませぬ、其度毎に下肥料を使ふ事をいやだと思ひますれば、此白水をかけてやつても上等の肥料になります

惡い牛乳屋では以前は此白水を混せて量を增したと云ふ事が隨分有りましたが、そんな惡ひ方に利用されては大變ですけれ共、前に云つた樣な事には是非利用して行かなければなりません。

◎蕃の功名

夕方になると椽の下からのそり〳〵と匍ひ出す蟇は誠に形が醜く、擧動が不活潑で、不愉快なもので有りますがよく子供が惡戯に殺したりなんかするのは誠に惡い事で、夫れを又面白そうに眺めて居るのは誠に心なき行爲であります。

只憫みの心が無いと云ふばかりでは無く、之れは甚だ有益な蟲で、彼の水中で靑苔や、水草の有るのが水中の腐敗物や、バクテリアを食べて成長する爲めに其水は却つて淸潔になると同じ事で、蟇の子がまた蝌斗の時分水の中に居る間には種々の水中の不潔有害物を捕つて食べますから其水は割合に淸潔にする事が出來ます。

夫れから大きくなると例の大きな眼をキヨロつかせて恭しく兩手をついて、庭の隅や、流しの出口にパクリパクリと音をさせながら蚊や蠅を食べる事は實に大したもので有ります、米國のある學者が試みにどの位食べるかと試驗して見たら一分間に蠅を八九匹捕つて食べたと云ふ事で有ります。

形こそは誠に醜ひもので有りますが、人間が中々一分間に五匹の蠅も取る事は困難で、其點に至つては蟇の方が餘程上手で有ります、而して外國あたりでは赤蛙の料理は大變に貴いものとしてありますが、蟇も料理にすれば中々結構であるそうです。

◎自然の食物と人體

食物には皆期節と云ふものが有りまして其食物の一番美味で有る事は勿論で有りますが此期節と人體とは自然に深い關係を持つて居るので有ります。

例へば春の頃から初夏にかけては誰でも上氣せるのが普通で、殊に若い方は上氣、頭痛などと云ふ事が屢々起ります、之れは時候の故ですが、此上氣を治するには酸味のものが非常に効能が有るので宛もよし丁度晩春から初夏に懸て酸味の最强い梅の實が熟します。と云つて梅の實をそう生のまゝで、がり〳〵と食べる事は出來ぬと云ふ方も有りましようが實際は中々然うで無いので他の野菜と同じく種々に調理する事が出來て誰にでも賞翫されるものであります。

夫れから夏の暑さがはげしい時には人の身體にも種々の變化が起つて來ます、即ち消化器が大變に弱くなるので、恐ろしい流行病が夏に一番多いのも畢竟此爲めで有ります。

其處で斯う云ふ時分の食物には何が宜いかと云ひますと少しづゝ消化器を刺戟する辛いものとか、苦いものとかゞ必要なので、其必要に應じて丁度其頃期節になつて來るものには唐辛があります。

只之ればかりではなく何でも其期節のものが一番身體に宜い事は確で有ります、而してまだ巧妙な事には食物が丁度然う云ふ風に出來て居るばかりではなく、人の身體も亦丁度其期節のものが一番口に合つて、好ましくなるので有ります、誰でも知つて居る通り人の身體の温度が非常に外に奪はれて盛に體温を拵へなければならない冬の時候には濃厚したものが食べたくなく且つ其食物の材料となるものも澤山にあります、即ち其材料には主に肉類、魚類で、夫れから澱粉質に富んだ野菜類が澤山にあります、之れ等は主に體中に入ると體温を澤山に拵へるものとなるので有ります。

之れに反して夏は内臓諸機關が弱つて來るのと、身體の周圍が暑くて體温をそんなに奪はれる事が少ない處から體温を澤山に拵へる必要もない、夫れ故自然と淡白なものが、食べたくなるので、即ち汁氣の澤山にある瓜類、果實類が此時分に盛に生熟して私共身體の需要に應じ樣として居るので有ります。

實に自然は巧みに出來て居るもので、何でも自然に從つて生活して行つたならば餘り間違は無いと思ひます其證據には東京あたりで冬になると山くぢらと云つて賣つて居る猪などは冬の食物に極く適當したものでだん／＼暖かくなると肉の中に大變有毒性の精分が増ゑると云ふ事で有ります。

野菜の中でも芋類が已に食べ頃を過ぎて新しく芽を出そうと云ふ時分には往々毒にあたる事があるそうですから注意しなければなりません。

夫れから時候や、期節と云ふ事で無くとも其日／＼人の身體は何日も同じと云ふわけには行きません、例

へば終日室内に在つて勉強して腦を使つた日と、一日中外出して居たり、遠足したりした日は、自ら身體の疲勞の仕方が違ひます。

腦を使つた時には自然身體は動かさないので體内の澱粉質類はそんなに減らないで腦に必要な處の蛋白質や胃中の鹽酸が缺乏して來るので有りますから斯う云ふ時には鹽酸に似た樣なもの、即ち酢の物の類などが適當して居ます、其上腦を使つた爲めに體内の血液は多く腦の方に集まつて胃の部分などには餘り血液が有りませんから從つて消化力も鈍くなつて居るので酢の物の樣な刺戟性のものが自然食べたくなつて來るので有ります。

終日運動した日は之れと反對で、體内の澱粉質類、換言すれば含水炭素の物質が多く缺乏して居ますから、斯う云ふ時には澱粉質を多く含んだ芋類とか、甘いものとかゞ食べたくなります、甘いものなど嫌いな人でも斯んな時には悦んで食べると云ふ樣になります、即ち筋肉の缺乏を補ふには澱粉質類や、糖分が最必要なのであります。

斯う云ふ樣に身體の狀態に依つて食物の嗜好も時々に變るもので有りますから、一家の主婦たるものは家族の身體の狀態を常に觀察して居て、よく之れに應じて行くだけの技倆が無ければなりません。

終日愉快に野山を跋渉して歸つて來た夫に胡瓜の酢の物や、鹽辛い夕飯を進めては折角の御機嫌を損じ、雨天を一日書齋に引籠つて調べものに日を送つて腦の疲勞を來たし、聊かんしやく氣味の夫に芋の煮ころがしを出し、おはぎを供する如き益々其感情を害する樣なのは一に其妻君たるものゝ技倆に依るので、實に食物の如何に依つて家庭の和樂を助ける事も亦非常に澤山なもので有ります。

◎夏の飲料

冬は熱いものを飲みたく、夏は氷を欲するは之れ誰しも望む處で有ります、何故なれば冷たいものが體内に入りますと、夫れが身體の温を奪ふ爲めに大變涼しさを感じるのであります、冬は丁度其反對で少しで

も體溫を他に奪はれたく無いと思つて居る時で有りますからなるたけ溫度の高いものを食べて體溫の放散を妨がうとするので此生理的作用は常に心に命令して丁度其時と適當したものを取らせるので有ります。

併し之れは體溫の上から云つた事で、消化器の都合から云へば氷と云ふものが決して暑い時分と適當したものと云ふ事は出來ません。世界中で日本人程氷水を澤山飲む人民は無いと云ふ事で有りますが實にそうで暑い時分には何處に行つても氷水屋の無い處は有りません、外國人も隨分冷めたいものを食べますが氷を直接に食べるのでは無くて他の飲料を氷を以て冷やすとか氷らせるとかするので決して日本人の樣な亂暴な事はしません、殊に我々の云ふ氷水と云ふのは最も惡いので胃の中を急に甚だしく冷やす爲めに胃の働きが一時止まつて食物を消化する事が出來なくなつてしまひ其間には胃中で色々に變化して惡い醱酵を起したり、腐敗したりする樣になるので有ります、夫れ故氷水を飲みたいと思つた時には氷の　塊を口に入れるのがまだ氷水より害が少ないので有ります。

だん／＼と衞生思想が發達して來た故か、他に行つても無暗に氷水を強いられる事が少なくなつたのは誠に悅ばしい事で、衞生上然うあるべき事で有ります。

氷水の代りになるものは澤山にあるので何でも果物の汁を搾つて砂糖を程よく加へて煮た汁を少しづゝ湯ざましの冷めたいのに混せて出しますと味も大變に上品で暑い時とは非常に快く感じるので有ります。

◎家屋内の濕氣

濕氣は凡て物を腐敗させたりまたは不潔にさせたりする源因となります、飯櫃に濕氣が有れば飯が早く腐ります。たわしや、さゝらが流しの隅にほり込んで有れば流しの水を吸ひ込んで早く腐つて役に立たなくなります、流し口が常に日あたり、風通しが惡くて水の乾く時が無ければ種々のバイキンが發生して早く板が腐つてしまひます。

バイキンが發生するのに濕氣と、適當の溫度が一番必要なので何でも物を腐らせない樣にするにはまづ濕

氣を早く取り去る樣にする事が最肝要で有ります。

◎秋の土用干

我々は衣服整理の一法として夏には必ず土用干と云ふ事をしますが、必ずしも土用中にしなければならないと云ふ事は有りません、暑さの烈しい時節には其熱の爲めに地から種々のものが蒸發して却つて空氣中には濕氣が澤山にあるわけですから、蒸し熱い日などには最も惡い、極く風通しのいゝ、秋の晴朗な日を撰んでするのが宜いので從つて必ず土用中にしなければならないと云ふ事は無い、其他の時候にでも天氣の宜い折を見ては時々行ふべきで有ります。

◎朝顏と早起き

明日はあの鉢のが咲く、どんな色で有うと樂しみにして寢た夜は夢圓かにて而も朝は自然と早く起きる樣になります、夏休みで自然時間の制裁も無くなつて寢坊する人々も美しい花の咲いたのを早く見樣と云ふ氣になつて人に起される迄もなく起きる樣になります、之れ等を園藝の德と云ひましようか、花の德と云ひましようか、兎に角家庭内に於ける高尚なる娛樂の一つとして宜いものは園藝で有ります。

△犬博覽會

◎博覽會の世の中なるかな、犬の博覽會と云ふ者五月中旬パリ市チユエレリ公園内で開設された、各國種の犬、ブルドックより我國のチンまで、幾十種幾百疋の犬がこゝに寄つて來た、中には隨分高價の犬がある、ブルドッグの小さいやつ(否これは失敬)はいくらもする者であるまいと思つたら、五百萬フラン(凡そ二百萬圓)と聞いて喫驚して飛び上つた、「犬に如かざるべけんや」などは古人のたはごと、「多數の犬は「人間にしかざるべけんや」と云ふ世の中になつた。

◎英國皇后陛下へ我が皇后陛下から御贈進になつたチンは歐洲の此社會で非常の評判になつて居る、隨分妙の世になつて來たではありませんか。

人事活断

運命の占

天啓堂

△山家住子女へ‖貴人の稼業に對して誇りとするは賢婦人なる貴女を娶つたのでなくて、財あり地位ある貴女と婚したと云ふのではありませんか、貴人の眼中には全然貴女の存在を認めて居ないのです、御覧の通り一方には貴人の敢てせざる所を貴女に強ひ、他方に於ては情人と審交を温めてる事實があるのでせう、貴女が日頃の苦衷は同情に餘りあり今日離婚の要請は寧ろ遲きを惜むのです、此際女々しく愛想つかしを云ふに當りません、文明國の紳士にある間じき非行は妻女を侮辱するの甚しきもの、荷も二十世紀の教育ある女性の一日も忍ぶ處でないとの一言で充分、以て貴人に男らしき處决を促しなさい、併し貴女が「婦人は家庭を出でずして奢れあり」との範圍を越えて止むを得ざる場合でありながら貴人の希望のまゝに里方より金錢を助力させられたり、又貴人の我儘を通してその進退を奔走されたなどは全く貴女の過失で、貴人の非行を募らせるに與つて力がないとは云へません、既に此の若き經驗あり將來は必ず良緣あつて開運せられます。

△中島貫女へ‖御兩親は全く家の爲に犧牲となられたのですから今更ら養父の邪見や養子の不悖に對して何ともお心を留ては居られない、娘の選擇を誤りて、濁つた血液の混じた御遺憾はさることながら、過去は追ふ可からず致し方はありません、併し御兩親が高潔なお志は空しからで他方に美はしき花が咲き出てゝ居るのです、即ち純潔なる父方の血と母方の血は端なく貴女及び令弟令妹に傳へられて纔々清く纔々鮮に貴家の正統は貴女同胞が繼紹なされたのであります、天の配劑は爭はれぬものでせう、積善の家には餘慶あり貴女等その責任を知りて益々善をお積みなさい、されば亂父義兄の行爲は怨むべきでなく寧ろ憐むべきでありますから宜しく同情を寄せてお上げなさるべし。

△長野縣女へ‖如何に姪が慕つて可愛いからとて何時までも貴女が育てられるでなし、已に繼母の出來た上は早く手離しなさる方がよし、隨て良緣あるまで他へ奉公に出やうかとのお考は最もですが、今日は其時期でないから、此處暫くお待ちなさるが吉。

△丹後の一孤母に‖三十一歳の軍人と緣組まるゝが吉、婿が養子の身分で、養父母が若く其上幼少の義弟があるので後日の紛騷が氣掛りとは一應最に聞えますが、それが却て夫婦間を親密にすることとなるのです、將來の運命は新夫婦の開拓にお任せなさい。

△肥前の細心女に‖小兒も出來ます、貴人の愛も必ず永續します、日頃の通り貴人に事ふる心掛を忘れてはならぬ、自ら神經質だと氣が附けば勉めて取越苦勞をせず、身の健康を傷けないやうに御注意なさい、東京行は今日では不明です。

△信州の愛讀女へ‖別に變つた事を考へたり行つたりするに及ばず、女子は婦道の修養が大切で即ち母たり妻たる道を心掛けて踏違へないやうにするのです、そこで闇い先が明くなるべし。

△乙女に‖女子は兎角老け易い、故に皆それを苦にして扮装を凝らして人工で若く飾るのであります、貴女がお若く見られなさるは喜ばしいとで普通の女子は羨しく見る位です、近頃は結婚が一體に晩くなりましたから廿一と云へばまだ甘ゥ急ぐともないでせう、來る十一月十二月中に緣談があるでせうから成るべくお極めなさるが吉。

△横濱某女に‖母御には多少お考があることですが、貴女も最早分別の

付く年齢ですから何にも遠慮に及ばず母上にお尋れなさるが吉、乙女心に面恥かしいなど〻控へて居らッしやるは今日の場合不得策でありませう。

△學問好の煩悶女に――よし學資に心配なくとも父兄の御同意なき以上は強て遊學なさる譯に參らんです、しかし志あるものはその道をたどらば目的は達せられます、貴女は裁縫の出來る丈けの素養があるから氣永く勉強なさるがよし、一室に閉籠りて好な讀書を廢して煩悶して居なさるは全然間違つたお考へですから宜しく御反省なさい。

△白百合女に――二十歳前後に結婚なされてよし、貴女が我儘者なりと自覺なされたから結婚の上は末永く緣を全せられます、即ち如何な場合でもその我儘を封込めて決して出すことはなりません。

△丙高己女に――段々衛生思想も普及しつ〻ある今日、將來有望でありますから矢張り經驗ある齒科醫を營業なさるがよし、當分家庭の副業として小規模の營業を營まる〻は惡しからずですが、力を入れ過ぐると大失敗を招く恐れがありますよ。

△膈腸憤慨女に――折角の御審査、二十二歳迄のことだから婚期を誤ると云ふ場合でない、進んでお試みなさるがよし、併し狹業にして兩降らざる運動ですから尋常の勉強では覺束ないことを呉々もお含みあつて然るべし。

△片田舍の心配女へ――明治七年、九年、十年、十六年生れの男子を迎へらるれば大吉、又同年ならば十月十二月中に緣談あらば進で取結ばれてよし。

△涙花の廿歳女に――貴女が今日夫婦間睦しく波風立たないので親御は此上なく喜んで居なさるのであるから、良人大事と家庭の平和に心を用ゐらるゝが何よりの孝行です、軈て遂に東京行の希望も達する日が來るのです。

△心勞生女へ――重れ〳〵の御不幸お察し申します、二十歳前後に結婚なされてよし、月給取ならば官吏、會社員、商人ならば材木商、賣藥商、酒油類商等が婿として幸福です。

△野の花女へ――園遊會や馬車の華奢を夢みず、又獨立生活などの空想も持たないと云ふ近時の流弊なく奥らしい優しい婦人らし方と見上げました、さて眞緣は來年でせう若し今年ならば九月十一月の中に、緣談あらば進で交渉なされて吉。

△山陰すみ子女へ――母御の壽命は萬歳です、古人は親の齢を知つて一たびは喜び一たびは悲しむと云つて居りますが如何にも道理ある言葉です夜を日に繼て御孝養なさるがよし、次に軍人との緣談は先づ不調です。

△東京のりつ女へ――丈けの低い位は左程氣にするに及ばんことです、第一の幸福健康ですからドシ〳〵滋養物を收容して横に高くおなりなさい、夫婦間は先づ可もなく不可もなしですから此上は貴女の心次第將來は善くも惡しくもなる茲一番考へ所です。

△望子婦△東奥女△駿河ふじ△女花子女の諸夫人へ――女代除の解けるを能く玩味して今一ヶ年計り待て御覽なさい、それで矢張功驗がなければお尋れなさるがよし、人事を盡くして後に天命を靈かる〻が順序でせう、明答はその上で。

△泉州田舍もの女へ――結婚は多少障りがあるかも知れないが成立するとは保險しませう、將來は良人が若い丈け貴女が入らざる氣苦勞して良人をいじめなさるやうです、其處さへたしなまれたら先づ平穩無事。

△石川縣の一女へ――本年中に緣付かれることは先づないやうです、初婚に取り縋りなされた處から餘り心配し過ぎて緣が遠くなるのです。

△鵜摩生へ――押付女房難緣のとは少々困難でありませう、貴下の爲には惡くはない妻君であるから此處一番男の大度量を見せて愛して御覽なさい。

△あやめ女へ――貴女が色々と注文して求婿者に滿足させない內は、何時頃緣付かるゝと云ふとも未定です、先づ貴女の心から落付かなければ駄目。

△深畑の女學生へ――理想の達せられると否とは一に貴女の耐忍と勵精にあるのです、併し空想は勿論駄目、從兄との結婚は望みなし。

△田舍の未婚女へ――廿三と云へば未だ若い、未婚のお遅れも澤山ありますからタヨ〳〵物案するにも及ばないと、産婆開業は結婚後のお都合になさるがよし、矢張り緣のある迄は病院にお務めなさるが萬全です。

△近江の無名女へ――お病氣での お困りはお察し申すが 一層衞生顧問へお尋れ其指圖通りなさい、 その上で又判じて上げます。

△商人の妻へ――夏人の私生兒をお世話なさるとの事、同柄が極くよろしいから御安心なされてよし。

△大阪の女に答ふ――家柄の 釣合ない 位で戀の成就せないわけもないがお氣の毒乍ら貴女が失戀に泣いて居らるゝ先方の坊樣は無頓着、都に上りてから二十世紀のハイカラ式や 賑やかな國の元祿振を見てはじみな地方風は疾くに忘れ果てゝしまつてるのです、如何にアコガれてもトテモ同樣するとは出來ません、そこで貴女の運性は如何であるかと云ふに水山蹇の離に當つて居るから進めば川、退けば山と云ふやうな境遇ですから動かれません、今年中は餘にオチツイて居て運命のサシヅに任せなさるより外はありません、明年立春後に於てそろ〳〵開運に向ひますから其時再びお尋れなさるべし、尙余の爲め云つておきますが、京に田舍あり田舍に京ありで山里には又都會に得られない趣味がありますから、人一倍趣を感ぜられた敏き貴女のとですから只くよ〳〵物案に塞ぎ込んで居るより田舍の趣味をあさりて身の保養をなさるが肝要でせう。

△陸前無名女に答ふ――家內が無人でお困りのに絕て遊學するにも及ばんでせう、地方で高等小學を卒業されたらば先づ十分です、その素養を活用しないやうでは其他の學校へ入つたとて駄目です、今日通信教授法も澤山あるとですから 女學講義錄など取寄せて お覽ならば居ながら學問は出來ます。

△好子女に答ふ――「去られても晴に見に行く幟かな」こゝが直の親心です、夏人とはわかぬ中なり愛兒はあり何を遠慮してお歸りなさらんですか、一片の行違ひから相方確執となつて居るものゝ元は親御は貴女の身に引けを取らすまいとの意地、先方の夏人は亭主としての意地でせう其處で貴女は女なり嫁付ては夏人に從ふが道、詫び云ふて夏人の顏立てさせても恥にはなりますまい、嫁付取つて何になさる荷物がもの云ふやうでは不吉なり、圓く治めるのに何の役に立ちませう、此處は貴女が決心するところです、貞女二夫に見えずとさへ云ふものを、又改めて三度夫を持つは女としても褒められた筈はないのです、依て親御に無斷でよし早く夏人の家へ歸りて愛兒を抱いてお歸りなさい、それが貴女の何より幸福です。

△筑紫思案女に答ふ――一筮して澤風の三爻を得ました、これでは待て居ては先方より申込んで來ないです、而も貴女に親身の力になつて相談する適當なものも見えず、そこで貴女が煩悶して居なさる所、無暗容となるのです、今日の場合此方より無理して意を通じやうとすれば吝して赤耻をかくと云ふやうなとになるのでせう、此緣あきらめてよし。

△大和の心配子に答ふ――此後どういふ事をしたらよいとのお尋れですが、二兒二歸はそれ〳〵身のオサマリが付いて居るから、末子の貴女

が身の上を親御が案じて居らるゝのですから、早く結婚して親を安心させらるゝより外に道はなし。

△山城の一少女へ――如何にも此結婚は將來の結果が面白く行きません、縱令許嫁の養子婿でも致し方はない、今がその話を持出す好時期です、若し萬止むを得なければ男に婿を迎へさせ、貴女は他へ嫁入らるゝやう御相談なさい。

△神戸の女△美濃の心配女へ――結婚前の良人の身持を探索したり、又情婦との關係を斷つた良人を何時迄も猜疑するなどは、却て貴女方のたしなみに係りませう、斯ることはお愼みなさるがよし。

△新潟のしづ子女へ――先方が音信せないのは若しや同情者へ迷惑となつてはとの遠慮である、貴女が矢張り以前の如き清き心での音信ならば惡しからず必ず以前の通り交情は復されますが、一點やましき心あらば恐るべき影響を生ずるでせう。

△横濱の苦勞女へ――兄妹助け合ふとは浪費する金を工面して貸したり借金の斷りをするのではありません、だらしなき金を遣ふやうな放埒のないように注意なさるが同胞の好である、モー年頃でもあり何處なりとも早く嫁付かれて、兄思ひの心を良人の上に捧げなされたら、今日までの苦勞も消えて將來は幸福となります。

△青山の我まゝ女へ――貴女の天稟は良人と氣が合はないで、却て姑御と性の合ふ質であります、隨て夫婦の中が冷談で、却て犬猿の如き間と相場の極て居る嫁姑の中が圓く、貴女が老ませる母のみ心安めんと思へど…………と云ふやうな難しい迷儀となるのです。且つ令嬢が父御の性を受け居られるやら家庭が面白く行かないは無理のない所、此運命を合點して家庭の圓滿をお計りなさい。

△家庭紊亂の心配女へ――良人が無教育で賴なく、養父が亂行を知らぬは養母只一人愛情が薄さて寂寥とはお氣の毒です、女房の内助で良人を男らしく世間へ出し、家庭を清潔にして健全ならしめるは所謂賢女の本です、即ち天が貴女を成功せしめんとの思召だから此處一番奮發して斷行のバチルスたる下婢の解雇から斷行なさるがよし。

△菊子女へ――貴女が不幸と云はるゝは人から見ては却つて牡丹餅で頰を擲たれる樣なものです、人一倍難儀したとはこれも飯事のやうなとでせう、併し貴女は運のある人海軍士官が理想の夫とはよし、必ず目的を達せられる見込がありますから其機を逸せないやうに御注意あるべし。

△北京の心配女へ――尊父の運命は先づ從來と變りません唯シッカリと落付て天命にお任せなさるがよし、又貴女は幸ひ中等教員の資格あるとゆゑそれを復活なさるが捷徑ですが、事情容さない場合があるとすれば現在住居の位置をお知らせなさい相當の職を見出して上げませう。但し北京とは郵便消印にて識け分けたのである。

△秋田の不幸女へ――覆水盆に還らず最早や望はありませんから他へ再嫁なさるがよし、病氣は心の結ぼれで令兄の診察通り神經のわざでせう自ら引立てゝ心を取直しなさい。

△清女へ――從兄は貴店に取て有用の人、父御の許嫁されたも其處でせう、併し爲に一人の令兄と不和を來しては將來世間狹い境遇となります貴女が令兄と從兄との間に居て調停なさるがよろしい、左もなくば伯母の勸めにより他へ嫁入らるゝが良策です、伯母より委細話して貰ひ父の同意あるやうなさるがよし、未だ獨立生活を云ふ折でありません。

△五月雨女へ――同胞がないとて左まで落膽するには及びません、兄弟は他人の始りなど申すとも一面の眞理で肉身の兄弟から迫害される不幸の方々も往々ある、隨て眞實賴みになるは良人ですから、結婚すれ

ば再び世の中の寂寞を感ずるとはありません、親御は地位ある方なれば萬事その御心に任せて居らるゝが幸福です、從妹と競爭心を出すは不可。

△山家のしづの女へ‖貴女が悔悟の至誠にもあるのでせうが、宏量なる良人を得なされたは大なる幸福です、隨て向後は良人への奉仕と子女の教育とに專念して、家庭の健全を圖るべく貢獻なさるがよし、斯くて餘暇あらば婦人相當の內職をなさるも差支なし勿論良人の同意の上です。

△旭川小丸女へ‖同情と結婚とは別問題です、御兩親始め貴女まで眞緣と信ぜられた求婚は遂に應ぜられよ決して躊躇するに及ばず、不幸の男が貴女より受けた同情を忘れず世間一と通りの交際を申し來らば、差支なし、若し貴女が兩親の同意をも經ず私に婚約し又兄妹の交際をするなどゝ親を誤魔化し置かふとするなどは不可。

△名のみかほる女へ‖貴女の結婚は先づ無難です、恒其德貞であるから婦德の氣風を忘れては將來敗れを生ずる憂ひがあります。

△青森縣の家出生へ‖相當の保護者もあり相當の學校へ入學せるものさへ、どうかすると墮落せしめられる東京へ、初心な田舍の少女で苦學せんなどゝは、薪を抱きて火に投ずるやうなもので、此上の危險はありません、第一養家へ對しても相濟まず、斯る無分別は斷じて不可。

△英子女へ‖産蓐は婦人の大厄ですから隨て一時は折角の容色も効なしとなるものです、爲に多くの男子の中に は或は妻女を顧なくなつて仕舞ふやうなともないとは限らないが、今は彼是と氣を揉む場合でない、徐に嬰兒大事と一ヶ年もお過しなさい、産後の肥立が回復すると共に容姿も整ひ、且つ無邪氣の嬰兒が片言をも云ひ出すやうにならば、打捨て置いても良人の心は直ります。

△豐後の無丹女へ‖母御の病氣全快は容易でないがしかし天壽を認めるやうなことはありません、且つ父兄の業行が修らない爲め母や嫁の氣苦勞を實見された爲め獨身生活を希望されるやうになつたのも御尤ですが、而も是れは鐵の如き決心と、頼むべき職業があつての事、貴女が既に許嫁の男子を拒絕なさつた元氣では一層よい男子を擇んで結婚し幸福をお受けなさるが吉。

△谷間の百合子女へ‖意中の男子に捨てられた爲め獨身生活せんとの御考へは動機が薄弱ですから永續の見込がない、少女が淺墓な考へで見立た婿は納りのつくものでない、故に正直に兩親の御心に從て緣付らるべし。

△西宮の心配女へ‖廿九歲と云へば最早や世間知らずの少女でありません、殊に女子一生の大事結婚に付ては旣に十分の成算も出來中々耻かしいなぞと云ふ齡ではない、よろしく進んで親御へ御話あるがよし。

△在清國の一女へ‖先夫と再婚する見込もないでもないから、今日他の男子と約婚するは宜しからず。

△晩婚心配女へ‖廿五歲と云へば丁度婚期も充分熟して居るから大抵の處なら緣付かるゝがよし、來る十月以後の緣談は取結びてよし。

△關西のいつき女へ‖病身の姉あり弟妹あり爲に結婚を斷つて居なさるとの事、併し結婚には時期のあるものですから力めて應ぜらるゝがよし、意中の方とは結婚成立する見込はありますが、此方から進んでは駄目です。

△泉州の百合子へ‖約婚が破談になつたはドウ云ふ譯もヘチマもありません、元來緣がなかつたのです、貴女の眞緣は他方面にある、先方とは親類の間柄なり無益の邪推を避して互に惡感を生ずるは愚の極です。

△熊本の病身女へ――持病があるので獨身生活が致したいとはお察し申しますが、併し發病の樣子では極輕症でもあり、且つ此病氣は結婚して全快した例しもありますら、成るべく嫁付方針をお採りなさるがよし但し獨立の覺悟で徐に良緣をお待ちなさへ。

△佐賀女へ――結婚は望み少し。

△紀伊の不幸女へ――離婚は不可、姑との間が面白くないのは貴女の心が少し高か過ぎるやうに見えますが如何、嫁は柔順にして謙ならればば惡し。

△四國の煩悶女へ――醫者との結婚が他の二口より望みあり、進んで緣談に應ぜられて宜。

△赤坂の泣娘へ――教育は何の爲に受けるのです、良妻賢母の準備最中に勝手な眞似して父母に餘計な心配をかけ、其上捨てられた男に未練ヶ間しう先方の詮索沙汰、まだ夢が醒めないと見えます、早く悔悟なさることを勸告します。

△第二の路のおだまき女へ――水山叢離の場合である、貴女の苦痛は最至極ですが、無事に解決する見込は十分ですから狼狽してはなりません、元來敵として奸を遂げさせたは貴女の不用意のみと云はれない、第一母さん令兄が敵を信用されたのも與て力あつたので今に及で如何に母兄が憤慨されても致方はないのです、さて此問題は秘密に一人で始末を付けるとは六ヶ敷併し兩家の名譽を一人で背負ふのは貴女の責任でせう、乃ち敵の云ふと爲すとは總て中傷で一も事實でないと貴女が何處までも弁說するのです、そこで以上の事を常に腹へたゝみ込んで置いて、問題の起つた時始めて一通り母上へ事實を話し自分は兩家の名譽の爲め一身を以て事に當るよしを告げ間接に援助を賴まるゝがよし、かくて大勇氣を振つて山が崩れてもヒタトモせぬ決心であつたら、その誠意が感通して他より話を纏めて來れるやうになるのです、邪は正に勝てませんから此處の順序を手落のないやうになさるが肝腎である、元來貴女の氣象は正直であるだけに、チト物に激し易い、心の落付が肝要です。

△鎌倉のおろかな女へ――貴女は誰が爲に操を立てやうとなさるのです、今日の悔恨は教師惡魔に魅はれた阿喫でせう、早く迷夢のさめたのが未だしも天の貴女を捨て給はないのですから、成可母上の御意に從つて婿を迎へ孝養を盡くされて以前の過をお償ひなされ。

△丹後の後悔女へ――自分の不心得で新婚早々良人の感情を害ひましたのは致方がないしかしヤツト破鏡の恥を免れた今日此頃、良人が戀人に心移りしたのでないかとは、未だ悔悟の誠さへ良人へ届かぬうちに早や嫉妬して居られるやうである。今の貴女の煩悶は自業自得と言はれればならぬ、斯る情ある良人に對して誠意がなければ、貴女は人の妻女たる資格のないものと思はれればならぬ大に反省なさるがよい。

△幼女の母へ――幼き男女の許嫁は萬止むを得ざる場合の事、故に早く婚定めする必用ありません、子女の將來を誤り、害あるも益なし。

△青森縣の渡米切望少女へ――貴女の現狀はお氣の毒ですが、祖母や叔父の如きアカラズヤは世間に例のある話、その淺慮は怨むべきでなく寧ろ憐むべきであります、又貴女の目的は必ず遂せられますから氣丈夫で居らしやい。

△山陽道の一女へ――結婚以前は兎も角今日では爭はない方がお爲めです、何も運命と思つて今暫く御辛抱なさい、若し今年も暮れて猶心配が增すやうなことならばその時重ねてお尋ねあれ、貴女の性分は兎角事に執着する方であるが、時としてこれが邪悶をするのである。

△伊勢のゆかり女へ――許嫁の婿を全ふせらるべし。

△悲しき無名子へ――世間の噂通り眞に父上の胤でなかつたらドウな

さる、其時は生きて居られぬと云はるゝでせうか、子で子にあらぬ貴女を今日まで大事に育て下された高恩は死して報いられますか、併し貴女は父上の種に相違ない人は何と言つてもこれは眞實ですから愚にも付かぬ心配はおよしなさい、それより貴女の身を害ふものは外にある、男子と艶葉書の交換などは甚だ以て危險千萬、タトヘ其の名目は何とあつてもこれは危險です。

△北越秋の幸子へ――孟母の三遷の敎は兒を持てる親の鑑です、殊に良人は人の子を敎育さるゝ身分なれば、决して我兒の敎養に夢おろそかのあらふ筈なき道理、現情を良人へお訴へなさるに何遠慮がありません、「人の口には戸は閉てられぬ」如何に悪樣に云ひふらされたとて男に孝、夫に貞、子に慈ならば何の憂ふる處がありませう、良人の承諾を得て進退をおきめなさい。

△月岡花子女へ――流石に賢き祖母の眼識に叶つた貴女だけある、隨て主婦としての責任も大抵でありません、又叔父上の處置、是れは生家へお預けなさるが上策始初は容易に應じないでせうが誠實を以て掛合なされたら遂に調ふべき筈です、第二叔母(叔父の後妻)は離縁と極まれば何等の關係はなくなる、その子を先方へ渡すは、後日のイザコザが面倒ですから成るべく當方へ引き取つて傭へ遣はさるゝが吉、第三叔父の嫁を看護婦とした處でそれで全く納りが付いたと云ふではないから相當の處へ縁付けなさるがよい、順序を立てゝ處置を誤らぬ樣なさるとを望む。

△秋草女へ――放縱の子女を一倍可憐に思ふは親の情です、そこで貴女が妹御を諭して先づ兩親にお詫申し、一方男子より正式に求婚の手續をさせて結婚式を擧ぐるやうにお運びなさるがよし、されば天下晴れての夫婦となりますから御兩親も滿足せらるゝと信じます、世に自由結婚とか男女交際とか云ふ事を誤解し戀愛の意志が疎通さへすれば結婚式は形式とのみ心得て顧みないものが多い、是等の徒は斷じてスイトホームを全ふすることは出來ないと信じます。

△[illegible]なる[illegible]女へ――良人の失節は郷土歸來の覺悟にあるのですから决して落膽なさるに及ばず、幸ひ衣食の不自由なきが何よりのお仕合、折角舅姑大事と留守をせられよ、良人よりの音信は十二月後に至らば消息がわかります。

△松枝雲子女へ――外國へ行くのも男子の志次第ですが、老父や頼なき姉を打遺つて已が野心のみを滿足せしむるは人の子の持つべき考へではない、苦しき内から大學まで遣つて貰つたとすれば先づ孝養の道を立てるのが順序です、貴女も又相當の處へ縁付きて人生の幸福を完ふせればならぬ、成功は急ぐべからず能く令弟と談合せらるべし。

△思案女へ――貴女は一家の主婦です今は宅を出る時でありません、良人の留守中敎育に從事せらるゝは悪くないですが若し其塲合には良人の承諾を得た上でお勸めなさるべし。

△横濱のそれがし女へ――嚴格な舊氣質の父にして年頃の娘を手放して青年と交際させらるゝとは合點行かず、又活潑なる貴女に男の意志を尋ぬる位な事の出來ない事はない筈です、又一年以上の交際に自分の好いた處計り見えて肝心な男の心が知れないといふも可笑なものです、そこで結婚は天地否の四爻であるから多少の望みがある、いつそ親父より直接交渉をして貰はれては如何。

△牛込の一老女に――樂みと云ふも心の持樣一つです、五人の子寶は成人して最早や手の掛るともなく、且つ一家水入らずの境遇、今が一番樂な時ではありませんか、娘を縁付くれば里歸りに彼是れと先方の待遇ばなしを聞かせらるればいろ〳〵と苦勞になる事もありませう。又倅に嫁

を娶らば出さずともよい姑根性を出して嫁の不足を云ふやうになるなど、君の愚痴は増す計りである只今の處が極端である、次に子供の成功は各その方面が異ふから比較は出來ませんが、皆それ相應に出身なさるから御案心なさい。

△美術的理想女へ‖繪畫は女子が獨立的技術としては有望の部分ですが、それとゝ同時に尋常一樣のとでは無論成功が出來ない、その堅志が十年續くか二十年續くか辛抱次第に在るのです、斯く迄の志し遠慮なく思ひ存分おはなしなさるがよい、併し貴女が現在の家業がお嫌ならその好な家業の處へ縁付かれては如何、之が普通の女性ならば萬全の途です。

△櫻子女へ‖母御の亡くなられた後は浮世の義理、人の道といろく\苦勞をなされたとのと、眞に貴き經驗でそれは悲しむべきとでない、嫁に父御が子供の幸福を思つて後妻を迎へられなかつたとは有難き恩みであります、さて海軍士官との縁談は、見金夫不有躬、无攸利、と云ふ卦を得たから縦令成立つても將來は苦勞が多いと判じました。

△東京八重野女へ‖結婚は成立します。

△京都喜見子女へ‖四十過ぐるまでは授胎するものですから、早く貰ふなどするに及ばす、自ら心經症とお氣が付かられたらナセ靜養をなれないのです、子の出來ない內こそ幸いノンキに遊んで持病を根切なさるがよし、授胎のないは多分其心經病が害をなして居るのかも知れません。

△市內の心配女へ‖婿にお迎へなさい。

△秋山もみぢ女へ‖女子の獨立的職業の稽古は有るに増したとはありませんが、それが間に合ふとは尋常の場合でありません、非常の節にはそれ相應の工夫の付くもの、先づ母たり妻たり主婦たる修養さへ完ければ恐るゝに及びません、女たる天職の準備が第一です、又母御が貴女の世話にならふと云ふやうな考へはよくないとです、早く云はゞ貴女は母親を背負つて嫁入なさらればならぬとゝなるでせう、そんな事オクビにも出さぬがよし。

△東海の三重女へ‖無學といふ外に何等の事情もなくして離縁を申込むとは更に其の意を得ず、母君の不承知なのも元より然るべき所です、若し眞に貴姉が無學無藝を嘆ぜらるゝならば子のなき今を幸ひ家事の閑暇に精々勉强されてよし、都合によりては相當の女學校へ入學されてもよきにあらずや、眞妻たるの資格を得るは自分の心掛一つにあり、缺點のなき眞人を捨てゝどうする御了見なるや判者は更に其の意を得ず。

△不幸女に‖御境遇には貴重にも御同情申上ます、併しもう一二年御辛棒あるべし、來年の末頃になれば或る機會生じて母御と一緒に成られる事あるべし、但し獨身生活はよろしからず、貴姉の孝心は天の御恵みによりて必らず生涯の好配偶を與へ給ふの時あるべし。

△神田多圓女へ‖決して身のふつゝかを悔むなかれ、その位な事は女の一身上に取つて何でもなし、近き內眞縁あり取遁さず結婚せらるべし少々齋を學びしとて獨身生活など志す勿れ。

△長崎稻田心配女へ‖貴女が今、日陰の身と氣が付たのは全く天が貴女に光明を與へたのです先方が言を左右に托するとは言語同斷である、チットも恐ろしい事はないから斷然と手切を請求するがよい、元來妻のある身で他人の娘を翫弄するとは不屆千萬な奴である、そんな奴に眞操とは馬鹿の骨頂と言はねばならぬ、手を切ればよい眞人が出來る。

!●●結婚道しるべ●●!

▲本誌の結婚紹介は信用確實なり▲申込者は博文館女學世界交信部宛の事▲申込者は住所姓名番地を詳記する事▲本人の寫眞を送らるれば保存して希望者に紹介す▲照會者は雙方への通信料として三錢切手三枚を送るべし▲寫眞を望む方は切手貳拾錢を送るべし▲〆切は毎月廿一日限り

行き度き方

●年廿一歳血統正實業家の處女高等女學校卒業後家庭に在て家政、音樂、挿花、茶道を學び性質温良身體健康兩親兄弟共に健在なり紳士の許に嫁ぎたし。(東京女)

▲年齡十八歳相當の教育あり紛事門學を修めんと欲する家計普通の家の女子、商船學校卒業若くは相當教育あるものにて、逆境に育ちし人と結婚したし。(寫眞あり)(東都女)

▲呼年十九歳府立高女卒業の淑女昨今家庭にありて家政を見習ひ傍ら裁縫音樂の修業中兩親健在家計中等にして嚴格なる家庭に育てらる遠近を問はず相等の眞人を求む、但し眞人の爲めに外國に行くもよし(都下の撫子)

▲年廿三歳初婚容貌普通地方裁縫女學校を卒業したる商家の娘兩親健在弟二人あれども東京某專門學校と中學校とに在學中遠近を問はず高等教育ある相當の眞人を求む(大阪子)

▲年廿六歳士族にして兩親なし地方女學校專修科卒業後遊藝一式を修む性質温順情誼確固目下家庭教師を勤む大尉若くは實業家にて他日有望の人に嫁ぎたし(高松女)

▲年二十歳初婚縣立高等女學校卒業身體健全容貌普通時價千圓以上を有する農家の娘父健在母先年死亡す醫師若くは相當の家へ嫁ぎたし後妻なりともよし(和歌山女)

▲呼年二十女子師範卒業目下教職にあり父母なく兄弟なく財產なし身體健全容貌普通品行方正なり三十歳前後意志強く謹嚴の人に嫁ぎたし(二葉)

▲年齡廿四歳血統正質温良普通教育を有し家計は中等なり容止品格申分なし然れ共一部の缺損に泣く薄命の婦人土地の遠近を問はず同情厚き人に嫁きたし(不幸女)

▲明治十九年生女子師範卒業性快活にして忍耐力に富む家計中等嚴格なる家庭の女子なり米國の成功者又は將來渡米の志ある人の許に嫁きたし(尾州壽美子)

▲年齡十九歳現今女學校在學中餘暇生花茶道料理を研究中兩親健在家計中等なり軍人又は品行方正前途有望の方に嫁きたし(秋野白菊)

▲年齡廿八歳再婚の女血統正容貌普通家計中流高等小學校卒業後琴三味線の奥義を極め活花茶湯の心得あり相當の財產を有する實業家若くは醫師銀行會社員に嫁きたし再婚者にして遺女あるも不苦寫眞あり(H8生)

▲明治六年生多年教育界に身を寄せたる人身體健全容貌普通血統正格にして持參金一千圓を有す交際應對閑雅にして申分なし係累なき軍人の許に嫁きたし都合によつては養子緣組するもよし(同居者)

貰ひ度き方

▲伜廿歲血統正身體健東京法科大學卒業後文部省留學生として三年間獨逸へ留學經濟學研究中本年十二月歸朝す將來大望あり廿歲前後にして中等教育ある資產家の淑女を求む但本年十二月迄約束の事(京都の父)

▲年廿六の男目下孤兒院設立計畫中女子師範卒業生にして血統正敎學の素養あるものにて目下敎職を取りつゝある二十歲前後の處女を求む、(無我愛生)

▲某銀行員年四十三歲にして每月百圓位の暮しをなし多少の財產あり高等敎育あり溫順にして品格ある三十歲迄の士族の女子を求む(W. lover)

▲友人年廿歲血正の初婚者當時某官衙に奉職中性質直にして實業未來の政事家を以て任ず體格健全にして志想溫良なる十七歲前後の者を求む(北海の一友)

▲年廿七歲東京某工業學校出身目下鐵道會社員月收五十圓以上十九歲より廿四歲迄にて高等小學卒業以上身元確實の女子を求む仕度を望まず(韓、某生)

▲友人年廿三歲の好男子慶應大學在學中にて確實の財產あり、卒業後實業家たらんと欲するもの十九歲以下の高等女學校卒業又は在學中のものと兩親承諾の上結婚したし(紹介生)

▲年齡廿五歲の男子目下某會社勤務中月收五十圓係累なし、容貌普通高等女學校卒業廿一歲以下の處女と結婚を望む財產技藝の有無を問はず身體堅固にして溫順なればよし(愛知縣人)

▲齡廿五歲素家の嫡子にして慶應出身巨萬の株券を有せしも商況不振の爲め今は失つて今會は不動產多數あり依て良妻を得て家運を挽回せんとす廿歲以下可成逆境に處したる相當の處女を貰ひたし(詳細面談)

▲親友血統正美男子數へ年十九歲小學校敎員家計は中等なり十八歲以下の美人にして普通敎育ある淑女を求む但し相談の上婚期は延すもよし(親交生)

▲年齡三十三初婚の男子商館勤務高等學校出身にして其筋より海外に派遣せらるゝ事二年當時月收百十圓資產なし係累は實母一人相當の淑女を求む(白鳩生)

▲寫眞技師月收廿五圓年廿三歲熊本縣士族當今宇都宮に在り模範的家庭を造り得る淑女と結婚したし兩親なし兄一人あり(捨小舟)

▲年齡二十九小學校長頗る音樂を好む、遠近を問はず廿歲前後の中等敎育を終へ正敎員の資格ある血正の令孃を求む(愛情生)

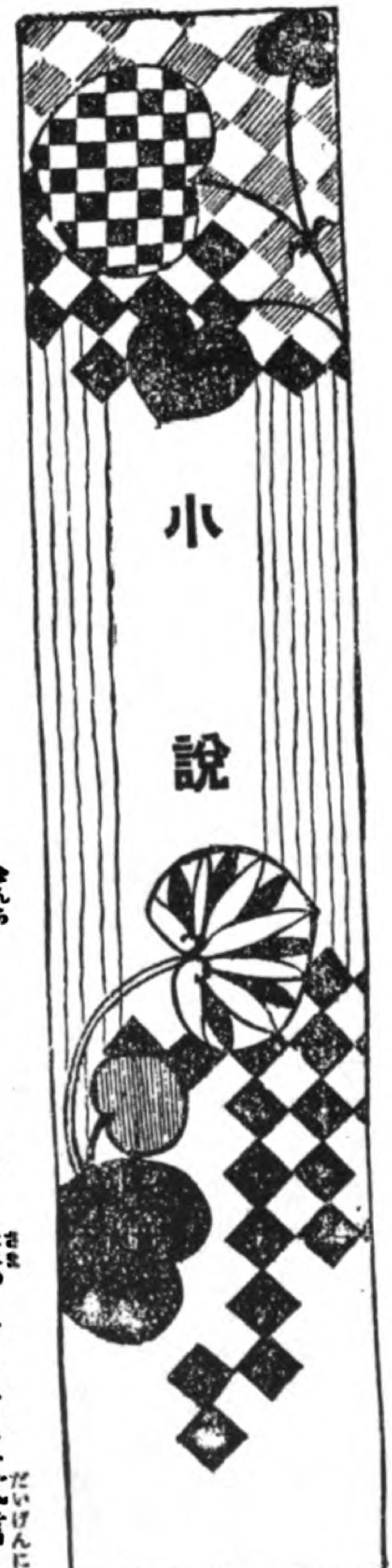
▲恩給及年金を有する初婚の豫備軍人年齡三十歲血統純正なるもの相當の配偶者を求む都合により養子となるもよし(靜岡望洋生)

▲年二十三歲血正次男目下某官廳に奉職中月收四十二圓高等小學卒業以上の敎育ある處女を望む但し相當なれば養子に行くもよし(H、S生)

▲年齡二十二歲一昨年新任の士官血統正財產係累なし高等女學校卒業或は修業中にて性快活なる處女と結婚を望む(櫻武士)

▲年齡三十歲目下某會社員嚴格なる士族の家庭に生れ性質活潑愛情に富む將來發展の光明を辿りつゝあり苦樂を共にして成功を期せんとする淑女を望む(獨探士)

▲年廿歲の陸軍步兵大尉勳章年金を有す容貌普通にして志想確實體格健全にして性質溫和ハイカラ氣質にあらざる廿歲前後にして高等女學校卒業の處女を求む(旗花武士)



家庭小說

災禍は三萬磅

折笠

二人の子供トムとジョンは學校に行き、二人の娘チリーとノラは二階で花束を造つて居、家の主ピーター、チャンスは朝飯を仕舞つて出勤の仕度をして居る、處へ彼を驚かして、トン〳〵と戸口に、

「七番地は玆ですか」と云ふ郵便配達の聲。

妻はかけて行つて、手紙を受取つて歸つて來た。

「妾の處へですよ、實に妾の所へだ、久しく妾の處へは手紙が來ませんでしたのね」

「お前の處へ、成程左樣だ、クラプトン市クイーア町七番地マリーチャンス樣、おまけに代言人の書風ぢやないか」

表書を見ながらピーターが云つた。

「代言人の書風、そんなら、ドクトルカンフイットの事ぢやないかしら」

「左樣ぢやあるまい、それなら私の處へよこす、お前の處でなく、まあ開けて見るがよからう」

「左樣ですね、開けて見て被下ましな、決度それより嫌な事でしようよ」

心細さうに言ひ捨てゝ夫人は椅子に倒れかゝつた。

ピーターは手紙を持つた儘無言に見つめて居た、そして又一度それを讀み返した時に、次の間へも聞え相な大きな聲で叫んだ。

「何です、何です、何だか妾に話して被下」

妻も叫ぶ。

「驚いちやいけない、お前の叔父樣のシメオンが、財產を殘らず、（少なく見積つても三萬磅ばかり、）お前に讓て死だとさ」

「虛僞でしよ、シメオンの叔父樣は、教會の鼠よりも貧乏で、ジヨンが生まれた翌年に來た時にも、それ、貴郎が着て居る着物殘らずでも十五シリングが物はなからうてつた位じやありませんか、忘れましたか、そして行李の中には只剃刀と櫛の折れたのと寢衣とがあつたばかりですもの、それは非道い戲謔ですよ、貴郎、あんまり嘘らしいもの」

「譬へ何でも私は信用する、代言人が戲謔を云やしまいし、嘘にもリバプールの人がお前の宛名を調べて此樣事を云つて寄越しもすまい」

「併しシメオンの叔父は貧乏でしたよ」

「左樣だ、自分でも云つて居たし、吾々も左樣思つてゐる、併し彼の人は吝嗇な生帳面な性質で、何にもなしで一週間下宿してゐた位な貧乏人だつたらう、そして彼の人は子供への土產がいつも一ペニー宛の菓子だつた、讓るんぢやあるまい、お前に預けて置うと云ふんだらう、多分そんな事だよ」

「併し預けるつて如何するんです」

妻は倘半ば疑つて尋ねた、

「私はお前が利子丈貰へると云ふ事で、併し元金には手を付けてならんと云ふ事だらう」

「左樣すると如何の位來るんでしよう」

「三萬磅の利子、四分の利として毎年千二百磅」

さすがは郵船會社の書記をして、常に勘定に敏いチヤンスである。

「毎年千二百磅として一週間に二十四磅だ」

「一週二十四磅、貴郎、それが若し眞實なら、一週間の收入で、いやな〳〵醫師の拂ひも、肉屋もパン屋も拂へますよ、そして子供達にも新しい着物が出來るし貴郎も新しいのを一組お拵へなさいましよ、何も二年に一組でなくつても」

妻は、まるで乙女のやうに自分自身に就て考へるよりもまづ愛する所の夫や子供に就て考へるのであつた。

「そしてお前も新らしい着物と帽子と、靴を拵へなくちやなるまい、其外私は何が要るか知らないが、左樣すりやア吾々も樂しい昔に返るんだ」

ピーターは有頂天になつて居たが、



「まづ、行つて來よう、時計が九時打つた、社が遲くなるといけない」

「併し貴郎旣社へ行く事はないぢやありませんか、若しそれが事實ならばおよしなさい、而してそれに就て本氣に考へ樣ぢやありませんか」

「勿論それは事實さ、併し私の處へ福が來たんぢやなし私は今迄通り社へ行て居やう、私の處へは何處からも福は來な

い、それはお前と子供達に來たのだもの」

「其樣事をお云ひなさるな、夫婦ぢやありませんか、何れが貴郎ので何れが妾のといふ區別はないぢやありませんか死んで別れ〳〵になるまでは既妾の物は貴郎の物ではありませんか」

チャンス夫人は腕を夫の首に投げかけて、目は喜びの涙にうるんだ」

「如何でも今日は行かなきやならない」

彼は云ひながら妻に接吻した。

「何何したら確な事が分るでしようね」

「リバプールへ行つて、實際代言人に逢つて見るさ」

「併し行くには金が要りますからね、何處からか這入る處はありますまいか」

「そう、不意の費用だな、會社の理事に賴むで見よう、二三日の休暇と五磅ばかり、此手紙を見せたら應じて呉れるだらう」

それからピーターは會社へ出て理事に相談したが成程ピーターの言つた通り、それを云ひ出した時には、理事は一時雷でも落ちたやうな顏色をして驚ろいたが代言人の手紙を讀むに隨つて油の如に打溶けてしまつた。　・　・

「安心して一週間ばかりお休みなさい」

と云つて、直ぐと金を貸す樣に出納掛へ話して呉れた、チャンスは大喜びで禮を述べて急いで歸つた。

歸ると夫人も大喜び、娘二人も喜むだ、二人の息子のトムとジョンは、兩親の居ない間一週間學校へも行かず、怠けて遊べる事になつたので、踊り廻つて喜び勇んでゐる、チャンス夫婦は二人の娘チリーとノラとに家を賴むで、リバプールへ向つていそ〳〵として出立した。

代言人のフオックスは愛想よく夫婦を迎へて、頻りに彼等の幸運を祝した、三萬磅は正に事實であつた、故シメオンクラブトリーは、家産を確實な鐵道に放資したのが、株金と配當と積り〳〵て、是丈の額に上つたので、若しチャンス夫人のお望みで、その一部分又は全部を現金にしたいと云ふなら、會社は最近の市價

で差上げ様と云ふのである、更めてフォックス氏は、シメオンの遺言狀を披いて。

「其家に余の在りし時、我美しきマリーチャンスが、如何に余に對して親切を極めたるかを謝する爲、茲に余の財産を讓與す。

年　月　日

シメオン、クラプトリー」

と讀み上げたのをチャンス夫人は

「あゝ乾度寢衣の事に違ひない、妾は叔父さんの寢衣を丹精して縫つてあげたから妾は多分左樣だとは思つて居た」

と小聲で云つたのをピーターが聞いて

「確に左樣だ」と合槌を打つた。

代言人は瞳を凝らして二人を打まもり乍ら

「御異存はありませんか」といふ。

「いや少しも」と二人は慌てゝ言つた。

代言人は言葉を改めて

「クラプトリー氏は非常に常規を外れた、云はゞ變人でしたから、貴女に寢衣を縫つて頂いた事が、怖ろしく氣に入つたのだと思はれます、それに多分暫くは新らしいのを買はないでも濟みましたらうからな、それで、此財産は、申惡いですが、貴女のお亡くなりの時には、貴女の子供衆の内に分配される樣にとの事です、相續分配には前以て保管人を定めて置かなければなりませんが、是は私にお命じを願ひたい、若しお子供衆でもないと云ふ場合には、財産は全部慈惠病院と養老院へ寄附される樣にと、是もシメオン氏の遺言で御座います」

「委細承知致しました」

とチャンス夫人は、鹿爪らしい代言人の言葉を難有く聞えたらしく返事をした。

此時ピーターは冷かに、

「私は叔父さんから五シルリング貸して呉れと云はれたのに、持合がなく一週間も捨てゝ置いて斷つたばかりに、今度の分配には預からないのか、ア、誠につま

らないな」
と呟いた、チャンス夫人は狼狽てゝ、
「貴郎にも貸しますよ、左樣したら同じ事ぢやありませんか」
と云ふのを、代言人は早くも聞きつけて
「それは夫人、貴女がピーター氏を受取人にして、生命保險をお附けなさるが一番宜しいです、幸ひ私の友人の保險會社は……」
とはや保險の勸誘を始めた、いや中々素早い事である。
やがて夫人は、頗る滿足なる三萬一千磅餘の價格のある財産の登錄を濟した上、良人とひそ〳〵相談して、誠に申しにくいが少しばかり現金で頂戴したいと代言人に賴むだ。フオックス氏は直に承知して
「幾何上げませう、アノ三百磅ばかり、よろしい何であげませう」
と尋ねる、夫人は良人を顧みた。
「金貨を十と、殘りを倫敦銀行當の爲替劵にしたら、一番好いだらうと思ふ」
とピーターの答を聞いて
「それを五ッ貴郎のかくしへ入れて、妾も又五ッ入れて置きませう、皆費つて仕舞つてはいけませんね」
と夫人の言葉は、嬉しさに滿ちて居た、
「では、一時間ばかりしてお待ちなさい、金貨も爲替劵もこゝへ揃へて置きますから」
フオックスの云ふ通りにして、かくしに金、心に喜を持つて、二人は代言人の家を立出でた、其時ピーターは尋ねた。
「お前は既安心したらう」
「無論、妾は受取に判を捺しましたし、貴郎は爲替劵を受取つたし、妾は金貨がかくしの中で鳴て居る樣な心持がしますよ、けれども先刻まで、實際妾は心配しずには居られませんでしたね、外に何か遺言書が見附かりはしないか、それとも何か嫌やな事が書いてありはしないか、シメオンさんの後家か子供かでも出て來はしまいかと、それが氣に懸つて仕樣がありませんで

したわ』

『馬鹿な、お前の叔父さんが、昔から獨身だつた事は誰でも知つてるぢやないか、若し又其樣な者があるとすれば、フォックスさんが、三百磅は愚か、一ペニーでも渡しはしないはね』

『妾はもう其樣事考へますまい』

とチャンス夫人はやつと安心したらしい、二人は自分子供への土産やら、自分等の差當り入り用の物などを買ひ入れた。

翌日二人は、急に以前よりも穢しく見えたクイ



ーアの自分の町へ歸つて來たが、今日からはどんな處へでも住まれる身分になつたので、急にノッテングヒルゲートの、宮殿か何ぞの樣に見えるほどの立派な家を借りて轉居した。同時に必要な問題が起つた、と云ふのは外でもないビーターは矢張り前の會社へ厄介になつて居やうか居まいかと云ふ事で、妻は迷つて居つたが、娘は、父が僅の月給取りである事が、今後地位を高むるには大なる妨げとなり、又新らしく得た體面にも

拘はると云つて、非常に反對したが、ピーター自身は長くお世話になつた會社へ怠惰てしまふ事を心苦しく思つて、兎も角も引續いて務める事にした、すると理事は突然彼を重要位置に擧げ、不足勝であつた捧給を急に一週三磅に引上げて與れた。

娘は尚々面白くなく思つた、けれどもチャンス夫人は喜むだ、夫が如何にかして皆を仕合せにしようとして、つまらぬ仕事にも骨を折つて居る事を知つたので。

家運の向直つて來た原因の一つは、娘のチリーとノラが家に居なくなつた事である、元來娘は二人とも溫柔しい質ではなかつた、操急で我儘であつた上、チリーは一層鋭い舌と强い心を持て居た、二人とも小學の課程を卒へて、怜悧な娘であつたが、尚勉强したいと兼々の望を漸くに許されて、或る寄宿學校へ這入る事が出來たのである、ピアノも彈く樣になつた、外國語まじりで話をする樣にもなつたが、それと同時に二人は、眞の家庭敎育はされなかつたが、結局兩親を輕ずる樣になつて仕舞つたのである。

二人の息子のジョンとトムも、又可成な成績で寄宿學校へ行て居たが、生意氣な姉達と彼等弟達とが爭論する度に、ジョンとトムとが云ひ負かされて、仕舞には鐵拳を持つて向ふ、これが、姉達の高慢や自尊に對して如何に有力なる制裁であつたかも、今は日曜の外見られない事になつて仕舞つた。

チャンス夫人は、又良人を受取人として、自分の亡き後、僅かなりとも、遺產を與へる樣にと、三千磅の生命保險を付け樣と思つて會社へ依賴した、けれども如何云ふ譯か、會社醫の試驗を受けると、間もなく斷られた、ピーターは非常に驚いて、早速有名な醫師に相談して、妻の診察を乞ふた、處が體質は左のみ弱いのではないが、餘程神經を痛めて居る、是は中々容易ならぬ事で、今後の注意一つで回復する事も出來ようが長生はむづかしいといつた、そこで先々心靜かに療養するが一番だと極めて、家內は漸くに樂しい生活を續ける事が出來た。

「クイーア町の時分から、心臟の惡るかつた事は妾も

知つてましたよ』

夫人の言葉にピーターは答へた。

『困難な時には何時も私よりは、お前の方が苦しむのだからね』

『隨分苦しい時もありましたね、併し妾の體が元々丈夫だつたら、此樣に惡るくもならなかつたでしようね而して貴郎も御存じでしようが、シメオン叔父の金を貰つてから、あんまり幸福はありませんね』

『降らない、吾々は其お蔭で困らずに、こうして美麗な家に住まつて居れるンぢやないか』



『美麗過るンですよ、これが第一の心配で、費へですはねえ、娘は役に立たないし、チリーの性質は、居ないから云ひますが、如何も困つたもンですね、迚も賴りにはなりますまいよ』

『左樣さ、チリーは小さい時分から觀せ物を見るのが好きであつた、今思へば、其時分から私の仕付方が惡るかつたンだな』

『貴郎がと云ふ譯はありませんよ、數へ切れない程色々な原因があるンでしようし、そして慥かに

生れ付きなンですからね、妾の保險もして與れないし妾が死んだ後で、子供より外に、殘るものは貴郎にはないんですもの、夫が心配で仕樣がありません」

「馬鹿な、死ぬ事なンか云ふな、お前は屹度私より長生するよ、おまけに私は、今でも終始お前のお蔭で此樣やつて居るンだ」

「そんな事がありますか、妾達は、何時でも貴郎にかゝらねばならないのです、けれども今の處では、妾の一年千二百磅と貴郎の一週三磅で、妾達は結構暮して行けると思ひますの」

「いけるとも、私も實に左樣思ふよ、これで子供達の學校が仕舞ひになれば、別に出る金はなくなるからな

ピーターは色々と計算した、學校は妻と二人で豫想したよりも澤山に金が掛る、僅かな新智識と少しの華美な學問とに誤られて、チリーとノラは、父母と到底折合の付かない程の思想習慣を造り上げた、彼等が學校を出た時には、輕車を驅る事と約婚する事の外には、何も親の助けを仕なかつた、母は娘の約婚に就ては躊躇した、ピーターも不同意で、二人が勝手に仕た約束を約らせてその結婚は許さなかつた、すると

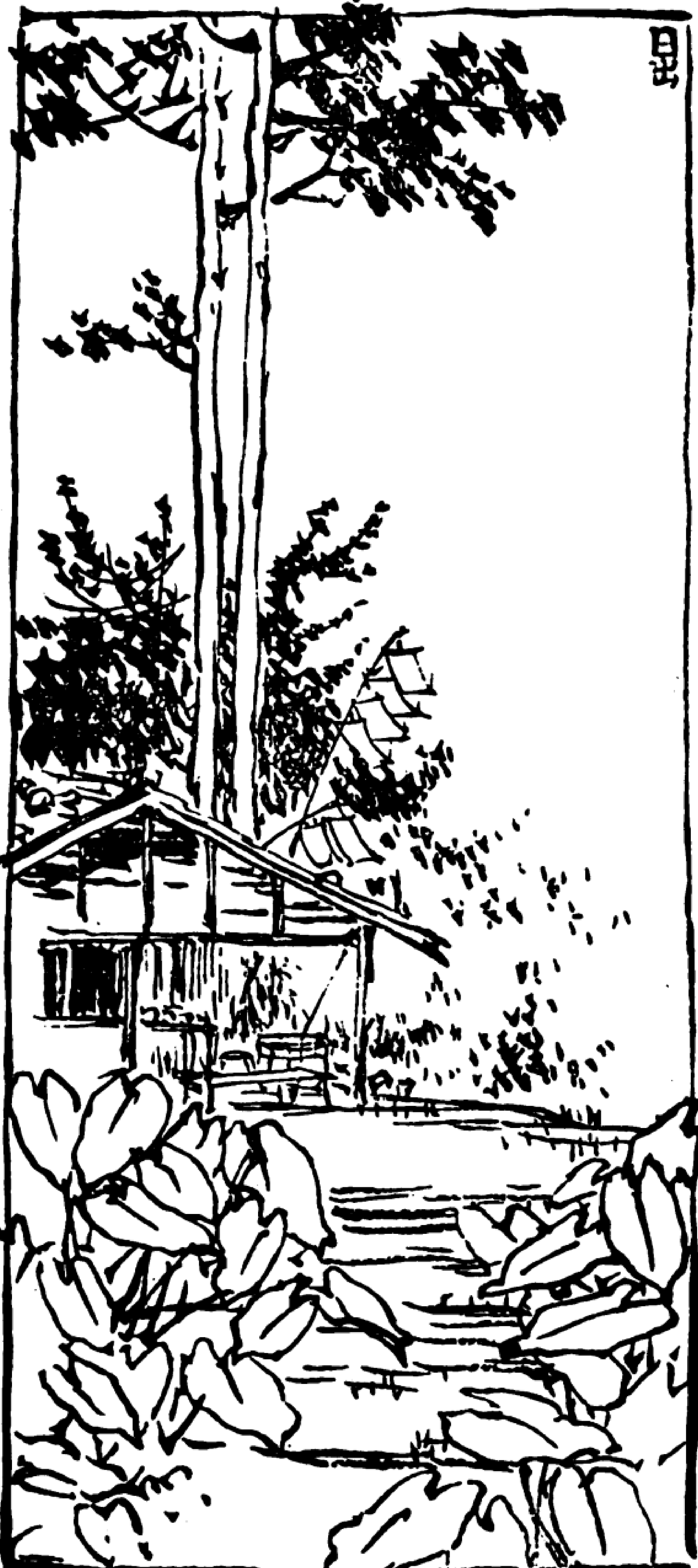
「何もお父樣の金と云ふのぢやありやしないのだ」

とチリーが鋭く呟いた、それを聞いたチャンス夫人は泣き叫んだ、嗚呼、學校へ入れた効能は、誠に父母の心配の種となる計りであると。

息子達も、姉に劣らず好い事は爲なくなつた、兩方とも母を輕蔑し父を卑しみ、其上又中々贅澤をするやうになつた、機械學をやつたジョンは、ブラックウォールの機械店の、ハイカラ紳士の樣な弟子になり、法律を學んだ、トムは町の代言人に年期を入れたがこれも少なからぬ金を費ひ出したのみならず、彼等の好きな遊びと云ふのはボートとヨットで、その鐵捍や短艇は只では出來ない、其爲にチャンス夫妻は三千磅餘を一年に送るやうな次第、其結果今日の收入では以前クイーア町に居た時とあまり違はず辛うじて收支相償ふやうな生活になつて來たそうこうする內チャンスは運の極みか、非常な災難に出逢つた、一日ジョンとトム

は端艇で出掛けた、が、やがてジョン一人歸つて來て端艇も弟も見失なつて仕舞つたといふ、初めジョンはトムを助け樣と全力を注で、働いたが、到底救ひ難いばかりか、自分も危いと思つて、只一人歸つて來たのであつたそうな。

トムの溺死に就ては兩親は非常な打擊で、其の爲め妻はどつと床についたが、娘二人は元より從順でない愛情もない、安心して看護は任されぬと云ふので、ピーターは勤を休むで、丸つきり一日の時間を妻に盡して看護しつゝ其日を過した



しかし夫人の壽命は幸に取とめた、數月の後、海岸で過す爲に、旅行する事が出來る樣になつた、ピーターは非常に喜んだ。

處が一つ善ければ又一つ他の不幸が後から頭を擡げて來た、それはジヨンと姉達との仲で、二人の姉は、一人になつた弟を始終いじめて許り居る上、ジョンがトムの死後ヨットを斷念して、多く家に引籠て居るのを、尙更邪魔にして、あらゆる手段を取つて家に居られない樣にしたのである。或る朝、初めは譯

もない事から、劇しい爭論をした揚句、出で行つた儘ジョンは歸つて來ない、で翌朝手紙が來た。

私は最早堪え難くなり候、此手紙御覽の時小子は既に遠方に可有之、日頃の御高恩にも報ゐず、不幸の段御許被下度、御安泰にお暮らしの程偏に祈上候

ジョン

父上樣

母上樣

これを見ると流石にお人好のピーターも非常に怒つた、彼の怒りの激しかつたのは、一生に一度と云ふ程で、流石のチリーとノラも其權幕に恐入て、父の前から泣きながら後退りして來たのでも知られた。

ジョンを搜がす手段は色々に盡された、某探偵が自殺したと告げたにも拘らず、あらゆる新聞紙に賞を懸けて、行方を尋ねる廣告も出して見たが、何の効もなかつた。

二人の娘がジョンを追出したのは、チャンス夫人を殺したのと同じであつた、夫人は驚いた儘再び氣を取り直す事も出來なかつた、目前に居て最負目で見る夫にさへも、早其終りの日が近づいて來たかとまで衰へ果てたのである。

『シメオン叔父の金は、妾達には有難くはありませんでしたね、貴郞』

と、夫人は言つた。

『子供は二人とも逝つちまふし、娘は居ても賴にはならぬし、若しも妾達が、あんな學校などへやらずに、工場へでもやつて置いたら、彼等にも妾達にも、餘程よかつたでしよう。

ピーターも詮方なさゝうに、

『或ひは左樣だつたかも知れない、併し吾々は、金と一所に賤しい慾深い心を呼び入れたんだ、尤もそれは、吾々には左程の害もなかつたらうが、娘達は全くそれに魅いられたんだ、金の惡魔が娘の心を奪つて仕舞つたんだ』

怒りと悲しみの混つた調子でピーターが答へた。

『そして男の子も、譬へ少しは贅澤であつても、二人

とも酒も飲まず、夜遊びも仕なかつた、そして平常妾達にも優しくして呉れましたのにね……ジョンは確に歸て來るでしせう、妾は確かに歸つて來ると思いひますよ』

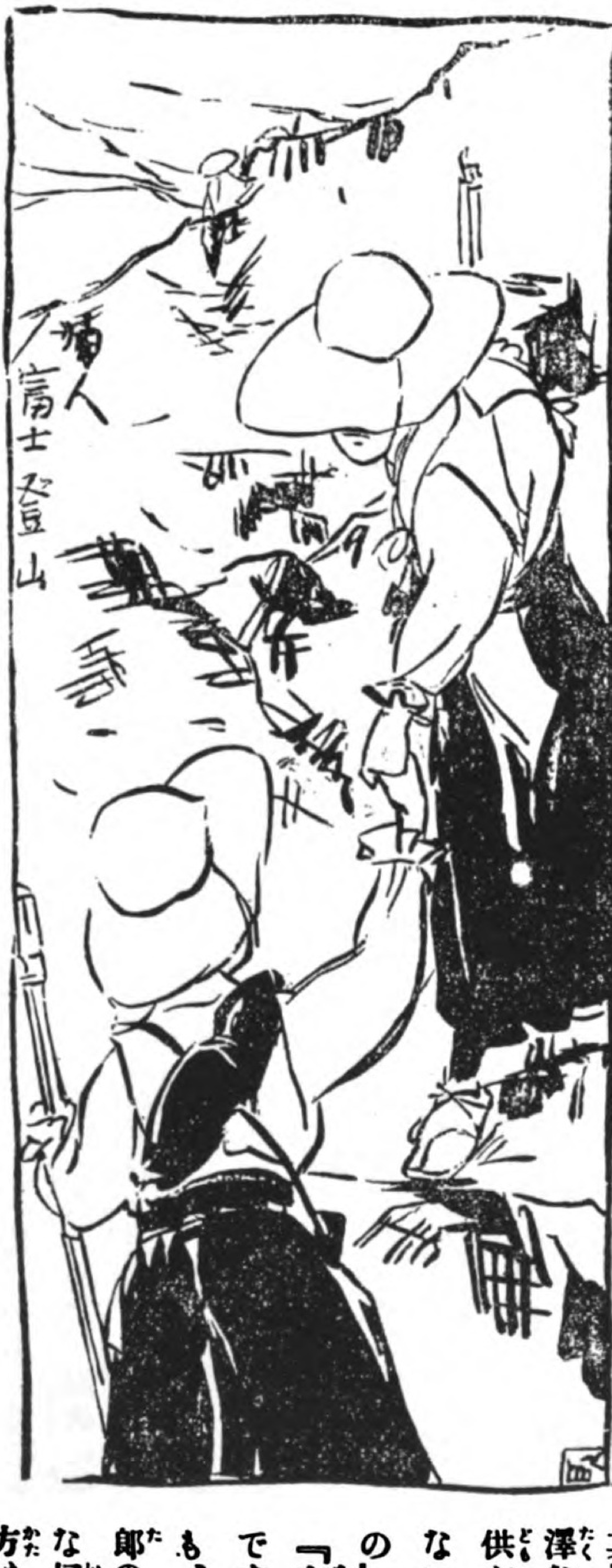
『もう考へるな』

『ジョンは自殺したつて、ア、馬鹿な事、いやそんな馬鹿な事はありません、それは只探偵の考へでしよう、屹度歸つて來ますよ、併しもう妾は此世でジョンに逢へないでしようね、ジョンやジョンや……若しも妾が死んだ時には、娘が貴郎に――』と力なく言ふをピーターは遮つて。

『イヤ私の事を心配しなくつてもよい、私は如何でもやつて行く、私一人なら幾千もかゝりはしない、私は其樣贅澤な子供ぢやないもの』

『左樣ですとも、貴郎の樣な好い方はありませんよ』

と云つて、夫人は痩せた手を柔かにピーターの膝に横たへて、ジッと其顔を熟視たばかり、言葉を續ける勇氣もなく、煖爐の上の時計の音が、病室の靜かさを



破るばかりであつた。夫婦の會話は是が終りで、優しきマリーの魂は、其形をのみ殘して去つたのである。
此取集めた不幸と、父が絶望の悲しみとは、隨分我儘邪慳であつたチリーとノラを、眞人間にする迄動かした。彼等は氣の毒な程泣いた、そして悲しげに、懺悔した樣に見えた、その容子は今までとちがつて靜かになつた、又同情も今までよりか深くなつた、ピーターの考へでは、母の死んだのが二人の性質に急激な變化を來して、眞人間になつたのかと思つた、けれども、是は全く一時の發作で、娘が父親にやさしくなつたのでは決してない其の證據には母の死後に早速書類や證文の通りに一文も殘らず母より取上げて、二人の娘は二萬磅以上の遺産を相續し、家をケンシントンに構へ、行衛不明なるジョンの分は、正當の所有者が現はるゝ迄、公證人に托す事となつて、ピーターは止むなく娘の厄介になる事になつた。

　妻の死後色々の事件を片付けて、ピーターは身に適當した職業をと捜したが、元の會社では以前の理事が死んで頼む事も出來ず、幾度も方々へ行つて見たが、何時も灰色の髪の毛が邪魔をする、人間五十の阪を過ぎてからは役に立たぬものと思はれる、彼は絶望して據なく又娘二人の當飼扶持で苦いパンを喰ふ事とあきらめてしまつた、しかし情ない事に母の死んだ當時の善に移つたかと思ふ二人の心は、漸次に變つて元通り、いや元よりは又一層、薄情なものになつた、彼等は父に食と住とを與へても、愛と尊敬をば少しも與へなかつた、剩へ、自分の財産と云ふ觀念が終には二人を驚ろくべき吝嗇なものにして仕舞つた、譬へチリーが云つた樣に、襤褸々々にはさせないまでも、只扶助すると云ふ丈で、衣類なんかには殆んど目も呉れなかつたので若し、僅に人間並のノラが、時々半クラウン宛呉れなかつたならば、ピーターは、外出するに馬車賃さへも、煙草錢さへも、如何する事も出來なかつたのである。

（次號完結）

（作者綠笠白梅氏の住所至急報道あれ。）

夏期講習會

氣賀澄子

◎松島伯舊邸の怪聞。理學化學の日に月に進み行く世に、いぶかしきことをも聞くものかな、さるにても近所合壁の噂かしましくて、記者の耳にも洩れぬ物語といふは、麹町下二番町の同邸にて、毎夜二時頃より、二階天井に疾風の如き響きと共に、細く凄げなる女の悲鳴聞ゆとかや、某署の巡査某は、二夜迄も事の眞相を知らんとて同邸に宿りしに、二夜とも同じ恐ろしき聲を聞きたりとは、愈不思議の極みなれば、いでや記者も、今日明日の中に之が探險に從事して、其昔殿樣の寵失せて切られしお部屋樣の亡靈かあらぬか、とくと見定め改めて讀者に見えんとす。



軒の青桐に蟬の聲かしましい眞晝過ぎ、ふきこんだ椽に端居しながら、此記事を讀んだ自分は、覺えず傍に麻襦袢の仕立に餘念ない伯母に、

『マー伯母さん、此樣とがほんとうにあるものでせう

かチー。
と問ひかけた、伯母は一寸針の手を止めて、
『左様、ないでもないでせう、私の實驗があるから。
『アラ實驗て……、伯母さん何か不思議な事にでも逢たとがおありなさるの、聞かして下さい。
『有りますとも、それは若い時分の事ではあるし、ほんとうに怖ろしかつたよ、併し靜さんなぞに話すと、必然お笑ひだからマーよしませうよ。
　どうせ老人の昔噺と高をくゝつた自分も、よすと言はるれば、何となく聞きたい心地がしてならぬ。
『伯母さんナニ笑ふものですかチ……、話して下さいな、丁度おやつの時刻ですから、お茶でも召上りながら、チー伯母さん……。
『ハー、それではかいつまんでチー。

其二

今から廿幾年の昔、私は其時十七で結婚したので、薄給の小學校敎員の妻となつて、東京からは山川遠く隔てた須磨の浦、それは風光の明媚なると古戰塲なるとで有名な土地とはいへ、片田舍へなつかしい兩親や兄弟、さては友をも捨てゝ行くのですもの、それに汽車はなし、まだ乙女心のたゞ淚のみ先立つのでありましたが、さて其處も住めば都とやら、殊に情深い夫のやさしい慰めには、新世帶の憂さ辛さも、知らぬ他國に知己なき淋しさも、何でもない樣に思はれました。
丁度須磨へ赴任した歲の夏でした、夫は己が恩師で、學德共に高い令聞のある、間宮先生を東京から聘して二週間の夏期講習會を開かんことを企てましたが、近邊の諸學校敎員はいふ迄もなく、隨分遠方よりも、來つて加はる方々もあり、豫定よりは非常に多數の會員を得、先生の快諾を經て、此浦の凉しさにも、猶暑さを喞たる八月の初めの日から、愈會は開かれました、先生のお宿は、無論何の風情はなくとも、此風景と夫妻の赤心とをもてなしの、我が茅屋であつたので。
　晝の間のお勞れを行水に流して、波に洗はるゝ入日の影の凉しさを、二階の欄干に寄て、心地好げに眺めらるゝ先生、五十路の坂を二ツ三ツも越されたであろ

うか、肉づき豐かな頬、柔和な眼、引締つた口元、そしてドッシリと太つた體格……、實に私は今でも思ひ出します、其床しい、いやに氣取らぬ、敎育家らしい、德行家らしい御樣子……。

夕餉の膳も、たゞ捕り立てのすゞきのあらひ一皿に舌鼓打たるゝさへあるに、不如意勝な新世帶には、之も眞心の籠つた木綿蚊帳の粗造なのも厭はるゝ色なく先生は淸んだお聲に詩など吟じながら、心地好げに臥戸に入られた後、私等も續いて下座敷で眠りに就きました。

初更も既に過ぎて、須磨寺の鐘の音かすかに枕に響く頃、不思議や、何處ともなくミシリ／＼といふ、忍び足の音に續いてバタ／＼／＼ッとけたゝましい音が聞えた、夫と私とは。一齊に起き直つた、そして無言に耳をすますうち、第二回目はまた前の如く聞かれた三回四回、猶幾回もくりかへされて……………。

賊にやと疑がつたのは全く思ひ違ひで、此物音は確かに先生のお寢間と定めた二階から來るのでありました、私は夫に梯子の昇り口迄行て、樣子を見てはと勸めましたが、夫はイヤ人には如何樣秘密があるやも計られぬに、深更人の靜まつた後、ひそかに他人の室を窺ふといふことは、まして恩師の寢間を垣間見るといふとは、良心に對して決して出來ぬと戒められ、自分も今は詮方なく、此何となく、怖ろしく且淋しい物音の凡一時間も續く間、打顫へつゝ夫の言葉に從がひ、其夜は一睡の夢も結ばず、夜を明かしたのでありました。

其　三

まだ明け切らぬ夏の晨、薄もやに眞帆片帆の見え隱れする浦の景色は、また格別で、慣れた目も、釣瓶繩くる手止めて見惚るゝうち、フト聞ゆるは唸く樣なる人の聲……、もしや近所に念佛などする人のあるかと耳傾くれば、嗚呼折角忘れんとした昨夜の怖ろしかつた記憶は、忽ち惱裡に浮んだ、そして心からにや、其怪しい斷續した唸き聲は、彼の氣味惡い二階から洩れるかの樣思はれるので、廣からぬ庭を、なすともな

く一回り回つた時、この怪しい聲の出處が發見されたそれは、二階の東表の雨戸が一枚丈くられて、そこに先生は打伏して、何か咒文を稱へて居られるので………、そして私の足音に心付かれてか、フト私を御覧なすつた時、其右手には皮表紙の小さい本を持て居られましたが、其時其本は、慌しくお隱しになつた樣でした。

私は直ぐに家に馳け込んで、夫にありしことどもを話すと、夫は私程には騷がなかつたが、然し何處かに不安の色が浮んで居ました、咒文……、魔法……、私の恐怖は、言葉に盡されぬ。

午後先生と共に會から歸つた夫に、先生の今日の御樣子はと尋ねると、非常に有益なお話許で、何の會員も敬服して居ない者はないとの事で、昨夜の事は何れ何か仔細のあることだろうと、夫は氣にもかけぬ樣子。

其日も晝の間は昨日に變らず、快活に話し、愉快に笑つて、先生と自分達夫婦は、樂しく暮しましたが、さて怖ろしい夜は來つた、そして先生は例の通り、涼風に浴されて後枕に就かれました。

私は昨夜のことの氣にかゝつて、少しも眠られず、夫の鼾聲の耳について、マジ／＼として居るうち、スワヤ、またミシリ／＼の音は起つた、夫を搖り起さうとする前に、既に夫も眼を覺して居ましたが、此夜は三十分許の後靜まり、また明方近くに一度くり返された夫は不思議の眉をひそめるのみであつたが、私は氣味惡さ恐ろしさの中にも、何となく先生の秘密を知りたい樣な氣がして、明方の例の咒文、朝飯もすんで、先生と夫とは、朝風のまだ涼しい程に家を出られた後、私は二階の掃除にと急ぎ昇つた、半ば、好奇心に驅られて……、それは彼の先生の秘密の籠つて居るらしい皮表紙の本を見たいとの念でありました。

六疊の間の片隅の机には、十幾冊といふ本が、順序よく列べられてあるが、例の小さい皮表紙の本は、遂に見當らなかつた、そして床の間の小鞄を掃除の爲め置きかへた時、其中で彼の本らしい音が　ゴト／＼と



したが、錠のかつてある鞄の中の不思議の書物……、私には鍵をはづしてまでも見る勇氣はなく、是程に深く秘めらるゝは、容易ならぬ秘密のあることゝ、まだうら若い身の、そゞろ寒い様な氣がして、茫然と考へて居る時、不意に私は卒倒せん許に驚かされた……アー私は、ほんとうによく彼の時氣絶しませんでした……、それは此刹那、足元に生々しい血痕二三點を見出したのですもの……。

深夜の怪しい物音、黎明の咒文、皮表紙の秘密書、疊の上の血痕……、此等は私の小さい胸に非常の心配を與へて、食事も喉に通らず、私はもしや、先生はもしや〳〵、惡人ではあるまいかとやうの想像も起つて

碌々仕事も手に付かず、夫の歸るを待ちかねて、委細洩れなく竊かに語りました、夫も今は決心の臍を固めたらしく、それでは今夜は、兎に角すまぬけれど先生の樣子を見、萬一先生が惡事の爲めに種々の不思議の行爲あるからには、自分の赤心でそれを諫め、また何か非常の心配ならば、命にかへても先生の苦痛を助けねばならぬ、お前も私の助け手ゆゑ、其積りで堅く決心してと、各自大決心をして、格別むし暑い夜を、二人は心配のうちに臥戸に入つた……、寢に就かれる迄は、快活に見える先生を一人二階に殘して、

其四

今宵は別けて、ミシリ〳〵の音が早く聞えたけれども、大に決心した自分達は、前の夜程には怖ろしくとも思はず、凡そ十分間も怪しい音の續いた時、夫はソットト梯子の最初の段に足をかけたが、無論粗末な普請の急にミシッと足元で音がした、先生は人の氣はいに氣づかれてか、バッタリと音が止んだ、夫は降りるにも降りられず、仁王立になつて息を殺す時、また二階ではバタ〳〵といふ音が始まつたハヅミに、夫は今一段昇つた、いふ迄もなく、梯子の音は先生の耳に入つたらしく、頓にひつそりとした……、私は、先生のお顔は今恐ろしい相を表はして、晝の柔和なお顔とは反對ではあるまいか……、若しや、切れ物などで、夫に怪我などないやうにと、胸は實に早鐘をつく樣で、夫の身にことなかれかしと、ひたすら神明の冥助を仰ぐのでありました……、俄然、またミシリ〳〵の音が始まつた時、夫は出來る丈、背伸びして二階を覗き込んだ。

「先生どうかなさいましたか。」

「ヤドーモ、お目を醒して恐縮だ、實は折角の御好意ぢやから、いふのが如何にも心苦しいので、默止つて居たが、蚊帳の脚の短かい上に、粗い目の何處からか毎夜蚊奴が侵入して、俺を攻めるので、毎晩團扇で此通りサ、イヤお構ひなくハヽヽヽヽ。」

と、先生は例の快活に笑つた、夫も私も、今迄の大決心は何處へやら、疑ひの雲晴れて、餘りのことに笑はずには居られなかつた、そして夫が、自分等夫婦の、有

り心痛の次第を逐一物語つた時、先生は非常に其厚意を謝し、また先生は、感ずる處あつて、近頃耶蘇信徒となり、曉の咒文は、神に捧げる祈禱で、黑い皮表紙の小冊子は、聖書であつたとのこと。

「靜さん、其新聞の記事も、大方こんな類ではありますまいか。」

（終り）

歐洲女新聞

これは佛國の事でもなく、米國の事でもない、アフリカの西海岸のポルチユガル領アンゴラの市場の直段であります。婦人一人は大抵七十五フラン（三拾圓）で取引されます。併し、一寸顏もよく、軀も丈夫さうで有れば九十フラン即ち三十六圓位迄であります。男兒の直段は普通ものが九十フランであります。野蠻國の社會にも男女の價値がちがつて居る所は面白いでは有ませんか。

巴里在住の婦人文學者、「サッシャ」の著者、其名をレジーヌ、マルシャル婦人と知られたる女は、煩悶の極所持のピストルを以て自殺を謀りました。マルシャル婦人が心血を注いで書き著らはした「サッシャ」一編を公表するや、かねて充分の成功と信じて、世間の好評を期して居た。然るに之に對する巴里文壇の批評は兎角面白からず。むしろ婦人の耳には、冷淡なる嘲笑を受けると聞えたので、たまらなく成つたのです。爾來失望の淵に沈んで居たところのマルシャル婦人は、其煩悶を一發の彈丸で解決しやうと心を定め、我が居間のテーブルの前で、半ば開いた一冊「サッシャ」を恨めしげに眺めつゝ轟然一發ピストルを其胸部に向けて放ちたが幸か不幸か彈丸はそれて左手を傷けたばかりにて隣りの部屋に落ちたのです。其左手の負傷も大した事でないとの事です。

十月號記事豫告

（十月五日發行）

毎月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

內｛定刊數……十二冊／增刊四回…一、四、七、十月價格同一｝

郵稅　一冊　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓 割引	四十圓
一等	五十八錢	十七圓 割引	三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢 割引	二十八圓
三等	四十二錢	十二圓 割引	二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅九年九月五日發行　第六卷第拾貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番　本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

無料注文送金便法

郵便振替貯金法

◉簡便なる注文方法◉

曩に遞信省に於て設けられたる振替貯金なる方法は爲替料をも通信料をも要せずして安全に注文と送金とを爲し得る極めて簡便なる方法に御座候へ共各地よりの注文中此便法を利用せらるゝもの少なく爲に毎回の御注文に爲替書留等の雑費を要し自然御購求の書籍高價に當る譯にて甚だ遺憾に候間爾今此振替貯金法を利用して御送金相成候はゞ御便利と存じ候左に其手續の大要申添候

○振替貯金拂込票――各地貯金取扱の郵便局に備付けあるを以て弊館へ注文せらるゝ方は郵便局に就き右用紙を（無料）申受けられたし

○右票は拂込票、拂込通知票、記帳票、受領票の三票に分かれ其の記入方左の通り

拂込票 の口座番號の欄には第二四〇番と記入されたし（是れは本館の振替貯金番號なり）

加入者住所氏名の項 には東京日本橋區本町三丁目博文館と認められたし

金額の欄 には御注文の書籍雑誌代金及び其郵送料を記載せられたし

拂込人住所氏名の欄 には注文者の住所氏名を明記されたし

拂込通知票 の記入方は都て拂込票に同じ

記帳票 此票は注文者に關係なし

受領票 此票は郵便局に於て手續きの上拂込み者に交付せらるゝ者にして弊館へ送付せられたる金額の受領證に附き保存せられたし

通信文記載欄 は拂込通知票の裏面にあり此欄には注文の書名幷に用件を普通の書面、はがき等に認めらるゝ如く記入することを得るものにして通信料を徴せらるゝことなし

○右の如く記入したる拂込票に記載したる金額を添へ各地の郵便局へ差出さるゝ時は其送金は弊館の貯金へ轉換せらるゝものにて些かの手數料をも要せずして弊館への入金となるなり

○弊館へは其地の郵便局より拂込通知票（裏面に通信文記載欄あり）を送付せらるゝを以て弊館は其裏面の通信文と表記の金高を對照し注文の書籍雑誌を發送し得る至極簡便安全なる無料注文送金方法なり

○尚ほ詳細は各地の郵便局に就き問ひ合せ相成たし唯弊館の口座番號は第二四〇番なること深く御記憶下されたく候

◉安全なる送金法◉

東京 博文館 本町

（後付の二）

理學士 山崎直方先生
理學士 佐藤傳藏先生 共編

大日本地誌

既成發賣

第五卷 北陸

全部拾册大判
洋裝背皮金字金摸様
表紙總紙數約壹萬頁

理學士大日方順三君、文學士小田倉啓君
田山錄彌君、太田健吉郎君、外數君補修

若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、

●正價貳圓五拾錢
●小包料拾五錢

▲都市彩色地圖四葉其他都邑十數葉寫眞版百六十個

大日本地誌は漸次其事業の歩武を進めて、今や既に第五卷北陸道の部を公にするを得るに至れり。編者がこの事業に全力を傾倒し、精を摘み微を穿ち或は地形に、或は地質に、或は沿革に、或は産業に、或は地方誌に精細無比なる叙述を試み、本邦地理書中の帝王たるの好評を博せしは、大方君子の遍く知悉せらるゝところなり。北陸道は其東南に日本山岳の脊梁を爲せる飛驒山脈を帶び、海岸は延長二百餘里、地形地質共に複雜にして、地理的興味に富むこと尠しとせず。加之沿革また古く、産業また盛に、越後の石油業、越前の織物業の如き、實に本邦有數の工業たり。編者これを錄するに、精確にして細緻なる記述法を以てし、苟くも目睹耳聞せしものにあらざれば輕々しくこれを記せず、勉めて眞を得んことを期せり。插畫また精巧美麗まことに地理學の一大偉觀たり。

総論

第一編 地文

▲第一章 地形◎概説◎若狭◎越前◎加賀◎能登◎越中◎越後 ▲第二章 海洋及海岸線◎若狭灣◎越前加賀の海岸◎能登中島◎富山灣並越中東北部の海岸◎越後の海岸 ▲第三章 地質◎汎論◎始原大統◎古生大統◎中生大統◎新生大統◎火成岩◎温泉 ▲第四章 氣象

第二編 人文

▲第一章 沿革◎先史時代◎大古より大化改新◎奈良朝◎平安朝◎鎌倉幕府◎南北朝◎群雄割據時代◎織豐二氏時代◎徳川幕府時代◎維新 ▲第二章 政治宗教◎行政◎司法◎軍事◎教育◎宗教◎交通 ▲第三章 産業◎農業◎工業◎林業◎水産◎鑛業◎商業

第三編 地方誌

◎福井縣◎石川縣◎富山縣◎新潟縣

既刊

第壹卷 關東
第貳卷 奥羽
第參卷 中部
第四卷 近畿
第五卷 北陸

續刊

第六卷 中國
第七卷 四國
第八卷 九州
第九卷 北海道
第拾卷 琉球及臺灣

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

（裏付ク三）

第一高等學校教授
英文學專攻文學士　畔柳都太郎先生校閲

法學士　辻宏吉君著

新式 英和日用書翰文

全一冊洋裝並製
脊クロース
近日發行

英語の流行は近時益々盛なり、然れども之れが廣く講習せらるゝ割合に比して、未だ其の運用の妙なるもの尠なきは何ぞや、其理由は一にして足らずと雖も、要するに講習の課程は俗用に遠かり、實際の運用は經驗を積まざるの致す所なり、況んや書翰文の如き特別の體裁あり一定の形式あるを以て、是れに堪能ならんと欲せば、須らく正確なる文例に付き修練せざるべからず、然れども從來此種の著作寥々たるは大に憾みとする所なりしが、曩きに「新式英語作文書取法」を著し斯界に便益を與へられたる、法學士辻宏吉君今亦た本書を大成せり、所篇別つて普通及び商業の二となす、作例饒多、說明懇篤にして、蓋し日用萬般の事項に涉り、英語書翰文を作成するに聊かの遺憾なし、實に無二の好侶伴良指導たるを疑はず、苟も外國通信を主さどるの士及び斯學の研究者は、必ず一本を供ふるの要あり。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(後付の四)

第二高等學校教授　岡澤鉦次郎先生著

新式 日本文典原理

一名、論理的日本文典

全一冊洋裝菊判上製金文字入紙數約六百頁

（九月中旬發行）

此の書は**語想相關**の原理を啓發して、言語學界**未顯の眞理**を發揚し、眞摯なる國語學研究の端を起さむとする**空前**の理論的日本文典にして、**理致周密**にして釐毫を忽にせず、**秩序整然**として小大悉く擧げ、空論に馳せずして學理の堂奥を盡す所わが國語學界の異彩として世に評されたる著者の眞面目を覗ふべく、其の體たる、外國語を解する人にも適切に外國を解せざる人にも適切に、博通旁達の學者にも欠くべからず、晩進獨學の士にも欠くべからずして、言語の學に志す者は言ふまでもなく、苟も言語に關する所ある學科に遊ぶ者の精讀せざるべからざる斬新の智識を與ふる所、恐らくは**廿世紀**の**劈頭に於ける語學界**の**奇書**として、天下の公評を博すべきものならむ。

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（後付の五）

(後付の六)

農業世界

第壹卷第六號（九月十日發行）

毎月一回十日發行　一册廿錢郵稅二錢

▲口繪

○葡萄と苹果（三色版刷）○英國馬種ハクニー（石版色刷）○萬里小路伯の家庭○東郷上村兩將と加茂農林學校○郷里に於ける松平侯爵○米國農家の副業○木曾の御料林○關東州の蠶業○蠶業改良高山社○清國保定府の農事試驗場

▲論說

●農業界の積弊を救濟すべし（佐藤博士）●水產養殖の普通を圖かれ（松原新之助）●韓國の耕地は果して有望乎（小林技師）

▲農界の人物

●熱心なる農夫的公卿華族……鹿野化骨

●蠶業改良の卒先者

▲農業

●麥田灌漑論（原農學士）●驅蟲劑に就て（桑名學士）●作物病害の傳播（西田農學士）●有益なる瑞典蕪菁（辻技師）●果樹の大栽培（恩田農學士）●臺灣の果實（藤井米八郎）●異花交配と結實（山田貞康）●家畜素人療治（篠崎獸醫正）●馬匹改良と牧草（秋原昌彥）外に三項

▲農家副業

●椎蕈栽培上の注意（三村林學士）●鐵砲百合栽培法（大島和輔）●椎蕈養成法（梅原寬重）

▲農政經濟

●農業評價論……豐田農學士

●肥料取締論……山崎傳七

▲家庭

●信州並木家の小作人待遇法（縦南子）●育兒の心得（松尾清香女史）●農家の料理（白菊女）

▲海外農事

●鴨綠江の森林（森美議）●滿洲の農業法（酒井親輔）●最近調査渡米問答（鳥賞兵太夫）

▲雜錄

●長良川の鵜飼（神江漁夫）●東京近縣農家の奇習（岩崎徂堂）●葉煙草の買上と農民（蓑作）

▲田園文學

●農家（小說）田山花袋●二百十日（秋湖生）

毎號本文二百四十頁彩色石版書二頁

光澤寫眞版四頁普通寫眞版四頁

日露戰史

毎編本文二百頁寫眞版二十四頁

正價一册參拾錢●郵稅一册參錢

第十三卷

日露戰史記者 岸上質軒君編

日本海大會戰 既成發行

▲題辭

◎大山元帥 ◎東郷大將 ◎伊東元帥 ◎上村中將

▲口繪

●東京市の凱旋艦隊歡迎●凱旋式當日の海軍諸將校●上村海軍中將及び旗艦●天氣晴朗なるも浪高し●日本海々戰敵艦降伏外に十三葉

第一編 海戰前記

第一章 露艦隊東航の前半程
第二章 露艦隊東航の後半程

第二編 海戰本紀

第一章 二日間の激戰
第二章 各艦の戰況
第三章 佐官以上の殊勳者
第四章 日本艦隊の組織
第五章 波羅的艦隊の末路
第六章 日本將校の海戰談

第三編 海戰後記

第一章 聯合艦隊の凱旋
第二章 觀艦式

附錄

▲日露海軍公報

補記

◎マハン大佐の海戰意見◎日本海々戰は卷狩◎露艦隊大敗の眞相◎東郷提督の戰術◎朝鮮海峽の海戰◎曠古の大勝等

●戰局地圖

●日本海大海戰々圖

東京 博文館 本町

女（後付の八）

文學士 久保天隨君著

（既刊）

日本歷史寶鑑

全一册洋裝菊判
總クロース特製
紙數千六百頁
正價金參圓
小包料三十錢

著者の博洽該實、殊に史學に精通し、獨創の所見に富むこと、世に皆すでに之を知る。本書は、主として日本歷史の參考に供せむが爲に、緻密なる注意を以て纂述せしものにして、はじめに綱目を擧げ、次に個條的に之を細述し、鉅細悉く網羅し、幽顯すべて捜り、筆を太古に起して、最近日露戰役に及び、治亂盛衰の外、人文史上の諸種現象、一として包括せざるなく、材料精確、引證該博、秩序整然として、筆力犀利。加ふるに、數種の索引を附して、檢出に便にしたれば、その使用如何によりては、又完全なる一個の歷史辭書たるべし。中等教育に關係ある者は固より論なく、苟くも國民たるものは、何人と雖も、一本を座右に備ふべく、眞に寶鑑の名に負かざる要册なり。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女學世界

（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）　第六卷第拾貳號　（明治卅九年九月五日發行　毎月一回五日發行）

（定價金貳拾錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊻
明治39年8月（第6巻第11号）、9月（第6巻第12号）

2008年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3385-7　C3321